

北陸自動車道

上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅱ

一之口遺跡西地区

1986

新潟県教育委員会

北陸自動車道

上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅱ

一之口遺跡西地区

1986

新潟県教育委員会

序

上越地方における古代遺跡の調査は、近年とみに活発である。頸城郡衙に關連するとみられる新井市栗原遺跡、越後国府の可能性を秘める上越市今池遺跡、越後國分寺説も唱えられている上越市本長者原廃寺などはその代表例である。

現在の遺跡調査は道路建設などの事由により実施されることも多いが、調査によって得られた成果はじつに大きなものがある。古代の越後について文献が語ることはごく少なく、地下に埋蔵される遺跡の調査は大きな意義をもつてゐる。

ここに報告する上越市春日・木田地区の発掘調査は、北陸自動車道建設に伴うものである。この四箇年にわたる大規模な調査によって、越後の古代史研究は、一步進んだといえる。本書におさめた一之口遺跡西地区では平安時代中期ごろの有力者層を含む集落が明らかとなり、宅地の周囲にひろがる畠を含めた景觀とそこに生活した人々の生活がよみがえるようである。

調査にあたって、上越市及び上越市教育委員会、並びに市民の方々に多大な御協力と御援助をいただき、日本道路公団には格別の御配慮を賜った。ここに深甚なる謝意を表するものである。

昭和60年5月

新潟県教育委員会

教育長 有磯邦男

例　　言

1. 本書は北陸自動車道の建設に伴う新潟県上越市春日・木田地区の発掘調査報告書の第2冊である。春日・木田地区には木田・池田・一之口・八反田・鉄砲町・高畠の6遺跡があり、昭和57年度から調査がはじまり、60年度に終了する。6遺跡のうち池田遺跡については第1冊（60年3月刊行）に報告し、これ以外は現在整理進行中である。今後整理が完了した遺跡から報告書を刊行する予定である。
2. 本書は春日・木田地区のうち上越市大字中屋敷・寺分・木田に所在する一之口遺跡のうちの西半部（西地区）の発掘調査報告書である。一之口遺跡は古墳時代集落を中心とする東地区と平安時代を中心とする西地区とで比較的明瞭に分けられる。東地区的整理はかなりの時間を要することと遺跡の内容を考慮して、まず西地区について報告することにした。
3. 発掘調査は新潟県が日本道路公団から受託し、新潟県教育委員会が主体となって実施した。一之口遺跡の調査は昭和57年度から59年度まで行った。調査体制は第I章に記した。
4. 出土遺物は一括して新潟県教育委員会が保管している。遺物は地区ごとに遺物台帳を作成して、とりあげた袋ごとにすべて一連番号を付し、それぞれの出土地点・層位・日付を記録した。遺物の註記は一之口遺跡の略記号「IC」に地区番号をつらね「IC2」のごとく表記した。遺構出土のものは遺構番号と一連番号を、包含層出土のものは一連番号のみを加えた。
5. 昭和59年度調査の2区・3区の遺構実測図はシン航空写真株式会社に委託した。土層断面図はこの限りではない。
6. プラント・オパール分析は宮崎大学農学部藤原宏志助教授に依頼した。
7. 本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。作成した図面のうち既製の地図を使用したものについては、それぞれの図にその出典を記した。
8. 遺構と遺物の実測図は原則として巻末の図版に一括した。土器はすべて一連番号であり、写真も同じである。実測図については図版巻頭の凡例を参照されたい。
9. 報告書は昭和59・60年度に作成し、坂井秀弥が担当した。この作業には、高橋保（遺物写真）、田辺早苗（遺構実測図・編集）が参加した。執筆分担は第II章2A寺崎裕助、同2B田海義正、第III章3坂井秀弥・高橋保・田辺早苗のほかはすべて坂井秀弥である。
10. 発掘調査から本書の作成にいたるまで、下記の方々から貴重な御教示を賜った。厚く御礼申し上げる。（敬称略　五十音順）
　　金子拓男・小島幸雄・齊藤孝正・齊藤道春・齊藤基生・佐藤庄一・田口昭二・植崎彰一・能登健・藤原宏志・前川要・山田成洋・吉岡康暢・新潟県立農業試験場

目 次

第 I 章 序 言	1
第 II 章 調査の概要	4
1. 調査地の位置と周辺の環境	4
2. 調査の方法と経過	5
A. 昭和57年度	6
B. 昭和58年度	8
C. 昭和59年度	9
3. プラント・オバール分析	16
第 III 章 遺 跡	20
1. 層 序	20
2. 概 観	22
3. 遺構各説	24
A. 平安時代	24
B. 古墳時代末期～奈良時代前期	39
第 IV 章 遺 物	40
1. 平 安 時 代	40
A. 土 器	40
B. その他の遺物	60
2. その他の時代	62
A. 古墳時代	62
B. 古墳時代末期・奈良時代前期	63
C. 中世・近世	66

第 V 章 まとめ	67
1. 平安時代中期の土器について	67
A. S E 153出土土器と S E 183出土土器	67
B. 土器の年代	68
C. 土師器甕・鍋について	71
2. 平安時代中期の遺跡	73
A. 建物・井戸・土坑	73
B. 貝状小溝	74
C. 一之口遺跡週辺の開発	76
3. 結語	78
引用・参考文献	79

図 版

図面

1. 造構実測図 (1 : 500)
2. 一之口遺跡発掘調査範囲図 (1 : 5000)
3. 造構実測図 1 (1 : 150) SD51
4. 造構実測図 2 (1 : 150) SK108・SK1・SD122・SD113・SE116
5. 造構実測図 3 (1 : 150)
6. 造構実測図 4 (1 : 150) SD103・SD104・杭列
7. 造構実測図 5 (1 : 150) SE107
8. 造構実測図 6 (1 : 150) SD109
9. 造構実測図 7 (1 : 150) SD101
10. 造構実測図 8 (1 : 150) SD142・SD144

11. 造構実測図9 (1:150) SB151-8・SK145・SE143・SE153
12. 造構実測図10 (1:150)
13. 造構実測図11 (1:150) SB152-4
14. 造構実測図12 (1:150) SK170・SK171
15. 造構実測図13 (1:150) SX184・SK177・SE195
16. 造構実測図14 (1:150) SK180・SE183・SK194
17. 造構実測図15 (1:150) SB185-12・13・SD188・SK179
18. 造構実測図16 (1:150)
19. 造構実測図17 (1:150)
20. 造物実測図 (土器1) SK201
21. 造物実測図 (土器2) SE183
22. 造物実測図 (土器3) SE153 SK201
23. 造物実測図 (土器4) SE107 SK191 SE143
24. 造物実測図 (土器5) SK145
25. 造物実測図 (土器6) SD188 SK179 SK194
26. 造物実測図 (土器7) SX184
27. 造物実測図 (土器8)
28. 造物実測図 (土器9)
29. 造物実測図 (土器10)
30. 造物実測図 (土器11)
31. 造物実測図 (土器・その他)
32. 造物実測図 (木器)
33. 造物実測図 (部材)

写 真

34. 春日・木田地区周辺空中写真
35. 造構 3区空中写真
36. 造構 2区空中写真
37. 造構 1. SD142・SD144付近空中写真 1. SB152・SB173・SX174
空中写真
38. 造構 1. SB185付近空中写真 2. SB185空中写真
39. 造構 1. 3区 SD103A・SD104A空中写真 2. 3区 SB124・SB125
SB126
40. 造構 1. 3区全景 2. 3区全景IV b層上面
41. 造構 1. 3区(57年度) 嵌状小溝b群 2. 2区(58年度) 嵌状小溝a群
3. SK 1 土層断面
42. 造構 1. SD103・SD104 2. SD103・SD104交差部 3. SD104A杭列
43. 造構 1. SD103・SD104交差部土層断面 2. SD104A土層断面 3. SD
101土層断面
44. 造構 1. SD142・SD144 2. SD142土層断面
45. 造構 1. 3区土層断面 2. 2区土層断面 3. 2区VI a層上面暗褐色土混入状況
46. 造構 1. SE153土層断面 2. SE153土器出土状況 3. SE153掘形
47. 造構 1. SE183掘形 2. SE183下部井戸枠 3. SE183上部土層断面
48. 造構 1. SX184 2. SX184 3. SX184
49. 造構 1. SB185(12)柱根・礎板 2. SB185(16)礎板 3. SB151(2)
柱根 4. SB152(4)土層断面 5. 3区ピット104礎板 6. SB187
(6)柱根・礎板 7. SX131(土器)出土状況 8. 土器(13D 3)出土状況
50. 造構 1. SB208 2. SB208
51. 造物(土器) SE183 SE153

52. 遺物（土器） SE153 SE107
53. 遺物（土器） SK191 SK145 SD188 SK179 SK194
54. 遺物（土器） SX184
55. 遺物（土器）
56. 遺物（土器） 1. SE183 2. SE107 3. SK191
57. 遺物（土器） 1. SK145 2. SD188 3. SD188
58. 遺物（土器） 1. SK179 2. 須恵器 3. 須恵器
59. 遺物（土器） 1. 須恵器 2. 須恵器 3. 須恵器
60. 遺物（土器） 1. 須恵器 2. 須恵器 3. 須恵器
61. 遺物（土器） 1. 土師器 2. 外面叩き目 (SE183・SE153・SK201・SK191・
SD188・SK194) 3. 内面叩き目(同上)
62. 遺物（土器） 1. 中世・近世 2. 中世・近世 3. 土師器
63. 遺物（土器） 1. 土師器 2. 灰釉陶器 (SK201・SK145・SK194) 3. 同上
(内面)
64. 遺物（土器・鉄製品・石製品・土製品） 1. 灰釉陶器 (SE183・SD188)
2. 同上 (内面) 3. 鉄製品 (SE116) 4. 石製品・羽口
65. 遺物（土器製作技法）
66. 遺物（土器製作技法）
67. 遺物（木製品） 1. 木製品 (SE153・SE116) 2. 木製品 SE117・SE107
3. 木製品 3 区 ピット104・SE195
68. 遺物（土器・土製品・部材） 1. 灰釉陶器 (91) 2. 土製品 3. 機椎製
品 (SE183) 4. SB151(2)柱根 5. SB185(15)柱根
6. SB185(1)柱根・礎板 7. SB185(12)柱根
69. 遺物（部材） 1. SB185(12)礎板 2. 同(13)礎板 3. 同(9)礎板 4. 同(10)
礎板 5. 同(13)柱根 6. SB187(6)柱根・礎板 7. 同(2)柱根
8. 同(7)礎板 9. SB185(16)礎板 10. 2 区 ピット41柱根
70. 遺物（部材） SD104杭部材 SE183井戸枠部材

挿 図

1. 頭城平野概要図	1
2. 春日・木田地区と周辺の遺跡分布図	2
3. 一之口遺跡西地区グリッド設定図	7
4. 調査風景（57年度・58年度）	8
5. 調査風景（59年度・空測）	11
6. 3区58年度調査区西端（14D 3）土層断面図	16
7. プラント・オパール分析による推定水田跡域	17
8. プラント・オパール分析グラフ(1)	18
9. プラント・オパール分析グラフ(2)	19
10. 土層柱状図	21
11. 遺構配置模式図	22
12. 平安時代中期土器の主要器種	41
13. S E 153・S E 183出土土師器杯法量分布図	43
14. S E 153出土土師器杯破損状況	44
15. 墨書き器・転用硯実測図	59
16. 器台実測図	65
17. 土師器杯・須恵器杯の変遷	69
18. 飲状小溝の検出例	75

表

1. 一之口遺跡発掘・整理作業	3
2. 春日・木田地区の発掘調査一覧	5
3. 59年度調査日程	10
4. 平安時代の遺構の構成	74

第Ⅰ章 序 言

北陸高速自動車道の建設に伴う新潟県上越市春日・木田地区の発掘調査は、昭和57年度にはじまり、昭和60年度に完了する予定である。春日・木田地区の遺跡は、東から木田遺跡・池田遺跡・一之口遺跡・八反田遺跡・鉄砲町遺跡・高畠遺跡の計6遺跡であり、その分布は東西約2.2kmに及ぶ（第2図）。発掘対象面積は約61,500m²で、昭和59年度までに全体の約80%の50,000m²が終了した。

春日・木田地区の遺跡は、昭和57年度の発掘調査であらたに確認されたものが多く、調査面積が大きいことに加えて、すでに自動車道の建設工事が着手されていたことから、発掘調査の実施が大きな問題となった。このため新潟県教育厅文化行政課は日本道路公团と再三にわたる協議を重ねた結果、工事日程に合わせて調査することで、両者の合意をみた。両者の協議は57年度以降、調査が進行するなかで生じたさまざまな問題についてもなされた。たとえば、調査地が沖積地であり、遺構面が何層にもわたって存在し、結果的に調査期間が長くなるということも58年度には大きな問題としてとりあげられた。

一之口遺跡は57年度の調査で新しく発見された。

遺跡の範囲は道路法線上の東西約500m以上で、発掘対象面積は約24,400m²であり、57年度から59年度にわたって調査された。調査は工事工程や春日・木田地区の他の遺跡の調査との関連もあって、全体を系統立てて発掘することはできず、遺跡をいくつかに地区割りし、さらに先行盛土部分を優先させるなどの措置をとった。幸い遺跡西半部は大半を59年度に連続して調査することができたうえに、遺構のあり方や遺跡の時期などで東半部と異なる状況であることが判明した。すなわち、遺構の分布密度が東半部と比較して希薄であり、時期は平安時代にほぼ集中し、遺構が何層にもわたって存在していない。このため、とりあえずこの西半部について報告することにした。なお一之口遺跡は全体を1～5の5区に分けた（図版1）が、西半部はこのうちの1区・2区・3区にあたり、こ



第1図 頸城平野概要図（神は第2図位置）

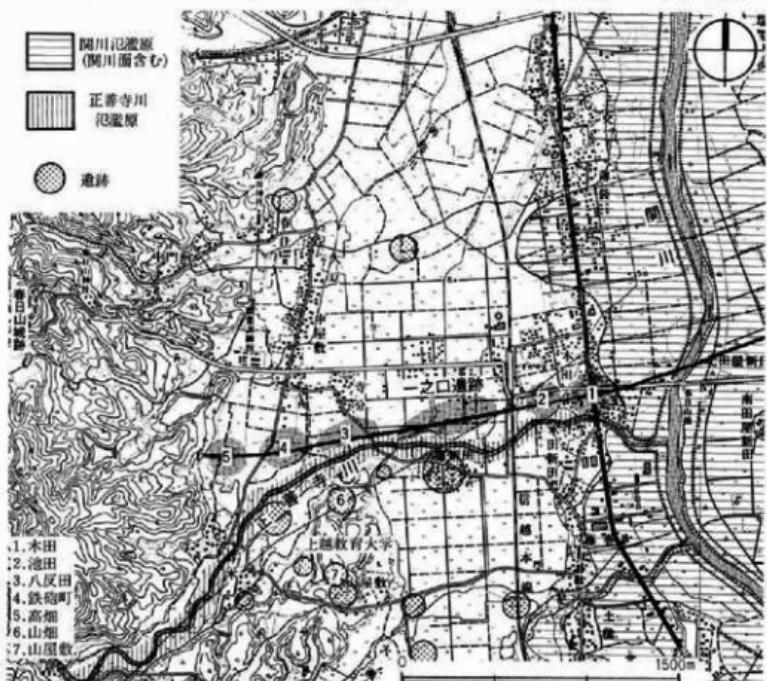
これら3つの地区を整理・報告するにあたって、「西地区」と呼称することにした。

調査体制

春日山地区的発掘調査は、前述のように工事工程を最優先させて実施したため、各遺跡ごとに個別の調査体制はとらず、各年度ごとに組織した。今回報告する一之口遺跡西地区の各年度の調査体制は以下のとおりである。なお調査主体は新潟県教育委員会（教育長 久間健二）である。

昭和57年度

總 括	新潟県教育庁文化行政課長	南 義昌
管 理	同 課長補佐	歌代 荘平
庶 務	庶務係主任	飯口 猛
	庶務係主事	若杉 幸三
調査指導	同 埋蔵文化財係長	金子 拓男
調査担当	同 文化財主事	横山 勝栄
調査員	同 学芸員	寺崎 卓助 田海 義正



第2図 春日・木田地区と周辺の遺跡分布図

1:25,000 高田西部（昭和48年）

1:25,000 高田東部（昭和50年）

昭和58年度

總括	新潟県教育庁文化行政課長	高橋 安
管理	同 課長補佐	歌代 荘平
庶務	同 庶務係主任	飯口 猛
	同 庶務係主事	高橋 幸治
調査指導	同 埋蔵文化財係長	中島 栄一
調査担当	同 文化財主事	木村 宗文
	同 学芸員	寺崎 卓助
調査員	同 学芸員	田海 義正
	同 書記員	高橋 勉

昭和59年度

總括	新潟県教育庁文化行政課長	高橋 安
管理	同 課長補佐	大越 敏夫
庶務	同 主事	高橋 幸治
調査指導	同 埋蔵文化財係長	中島 栄一
	同 文化財主事	岡本 郁栄
調査担当	同 学芸員	高橋 保
	同 学芸員	坂井 秀弥
調査員	同 文化財主事	石原 啓
	同 書記員	田辺 早苗

月 年度	4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3	備考
昭和 57年度	確認 ————— 西地区 —————	西地区1,300m ²
58年度	東地区 西地区 ————— ————— 東地区整理	西地区1,260m ² 東地区7,252m ²
59年度	西地区 ————— 西地区整理 西地区報告書作成 東5区 ————— 東4区 東地区整理	西地区9,437m ² 東地区6,640m ²
60年度	(稿了) (校正)	西地区報告書刊行

第1表 一之口遺跡発掘・整理作業

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査地の位置と周辺の環境

位置 上越市春日・木田地区は、新潟県西南部に展開する頸城平野（高田平野）の北西部、上杉謙信の居城として著名な春日山の東麓に位置する（第1図）。¹⁾頸城平野は関川をはじめとした河川によって形成された沖積平野である。春日・木田地区の南側をほぼ東西に流れる正善寺川は関川の支流で、春日山南方の谷から平野部に出る。周辺の地形は巨視的にみて、南西から北東方向にゆるく傾斜している。一之口遺跡から東側は、地形区分でいえば関川の氾濫原より一段高い「高田面」（沖積段丘高位面）にあたり、南側の正善寺川の氾濫原とも若干の段差で区切られている。この段差は一之口遺跡3区付近（図版1参照）で約1mであり、東側へいくにつれて低くなり、段差が不明瞭となる。一之口遺跡の標高は8.5~11.0mである。微視的な地勢は正善寺川の段丘崖縁辺部が高く、これより北側が低くなる傾向にあり、縁辺部分に畠が多く分布する。現在、遺跡の周辺は区画整理や宅地化が進行しているが、昭和30年代までは部分的に点在する畠をのぞけば、一面の水田地帯であった。なお、一之口遺跡西地区的地籍は大字木田字一之口、大字中屋敷字漆崎、大字寺分字ヨコマクリである。

周辺の環境と遺跡 春日・木田地区周辺の遺跡は、地形区分上の洪積段丘低位面と「高田面」上の自然堤防に多く分布している（第2図）。洪積段丘低位面では上越教育大学のキャンパスになっている、標高20~30mの若干の起伏をもつ段丘上に、縄文時代中期（前半～中葉）の中心的集落である山里敷遺跡と古墳時代後期の集落である山畠遺跡が存在する。両者とも昭和52年・53年に大学建設に伴って上越市教育委員会によって発掘調査された〔小島幸雄1979〕。

また、高田面よりわずかに高い藤新田・寺分の集落が立地する部分も洪積段丘面であり、とともに遺跡が分布している。このほか高田面上の自然堤防にはおおむね遺跡が分布する。これらの遺跡は昭和56年度の上越市教育委員会実施の分布調査と昭和58・59年度の春日・木田地区的調査時に実施した分布調査で確認されたもので、段丘上の遺跡をのぞくとほとんど古墳時代から平安時代・中世の遺跡である。とくに平安時代のものが多い。しかしながら、一之口遺跡の例からもわかるように、水田面にもかなり遺跡が存在することが予想され、今後さらに遺跡が増加するものと考えられる。また弥生時代・古墳時代の遺跡も発見される可能性が高い。

春日・木田地区的遺跡 今回の春日・木田地区的発掘調査で、これまでに得られた成果は第

1) 周辺の地理的・歴史的環境については、春日・木田地区の最初の報告書である「北陸自動車道上越市春日・木田地区遺跡発掘調査報告書Ⅰ」（新潟県教育委員会1985b、以下「春日・木田地区報告Ⅰ」と略す）に詳細な記述があるので、ここではごく簡略に述べるにとどめる。

2表のとおりである。八反田遺跡の段丘部分に縄文時代の遺構が検出されているが、これ以外は古墳時代以降のものが主体を占める。集落跡を中心におもなものをあげると、古墳時代前期～後期の一之口遺跡東地区、平安時代の一之口遺跡・八反田遺跡・高畠遺跡、中世の木田遺跡・八反田遺跡・高畠遺跡などがある。池田遺跡では中世～近世初頭の水田跡が検出された。全時期を通じてみると、ここで報告する一之口遺跡西地区と同じ平安時代中期の9世紀後半から10世紀のものがきわめて広範囲に分布することが注目される。春日・木田地区周辺においても当時期の遺跡がとくに多く、平安時代中期にそれまでとは異なった開発が広汎かつ活発におこなわれたことが推測される。なお耕地整理以前の字界図（中沢肇1966所載図参照）では春日・木田地区の南北約2.5km、東西約2kmほどの範囲に、一町方格にちかい地割が分布しており、条里地割の可能性も考えられ、古代の開発との関連が注目される。

2. 調査の方法と経過

一之口遺跡西地区は高速道路線の東西長約300m、南北幅約50mの範囲である（第3図）。南側は正善寺川とその氾濫原で一段低い。一之口遺跡西地区的地区割りは市道山麓線（飯・藤新田・春日山停車場線）と稻荷中江用水によって分けた。市道山麓線の西側を1区（約2,250m²）、市道山麓線と稻荷中江用水との間を2区（約4,650m²）、稻荷中江用水の東側から、つぎの農道までを3区（約5,030m²）とした。この地区割りは58年度に調査地内の排水を念頭に分けたものである。

当地の調査前の状況は畠・水田・果樹園・宅地となっていた。このうち、畠がもっとも広く、1区の全域と2区の北辺をのぞく部分、3区の北側に分布し、水田は2区の北辺に分布するの

遺跡名	調査面積 (年度)	概要	備考
木田	3,670m ² (57～59年度)	中世・近世 井戸約100基(大半が近世) 柱穴多數(掘立柱建物)	ごく一部60年度調査
池田	3,500m ² (58年度)	平安 畠 中世～近世 水田	『春日・木田地区報告Ⅰ』
一之口 (東地区)	8,940m ² (58～59年度)	古墳(前・中)土坑群(後)竪穴住居約30基 掘立柱建物数棟 平安 掘立柱建物数棟 井戸数基 墓没河川(旧正善寺川)	『春日・木田地区報告Ⅱ』 (11世紀一括土器略報)
八反田	12,510m ² (59～60年度)	縄文(前) 竪穴住居2基 平安 掘立柱建物 中世 溝 掘立柱建物 井戸約30数基 土坑	60年度調査分約3,000m ²
鉄砲町	9,320m ² (59～60年度)	平安 掘立柱建物 中世 井戸数基 土坑数基 柱穴	大半60年度調査
高畠	3,278m ² (58～59年度)	平安 掘立柱建物 竪穴住居2基 中世 井戸23基 掘立柱建物	60年度報告予定

第2表 春日・木田地区的発掘調査一覧(59年度分まで)

みである。3区の南側は果樹園となる。宅地は2区の北縁部にあり、この部分は水田面上に約0.5mほど盛土している。この宅地化は昭和40年頃にはじまり、調査地の北側の東西方向の道路はこの際敷設されたもので、排水溝、ガス・水道管が埋設されていた。3区には幅3mの東西方向の用水路が残っており、2区東端部には高さ約1mほどの高まりがみられた。

調査は57年度にはじまり、59年度に終了した。以下、各年度ごとに調査の方法と経過について述べておく。

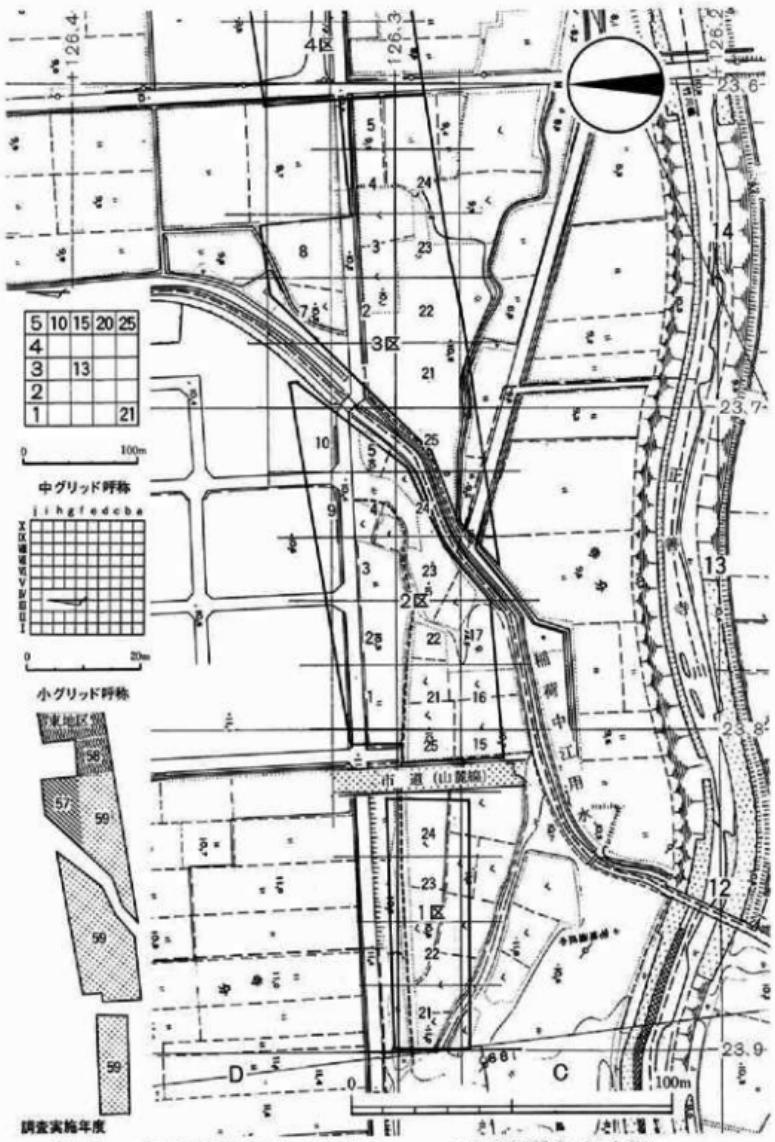
A. 昭和57年度

上越市春日・木田地区における北陸自動車道法線内の調査は、昭和56年の県教委と日本道路公団との協議に起因する。それらの一連の協議により、県教委は昭和57年8月23日から同年11月6日までを調査期間とし、法線内の微高地で土器散布の多い中屋敷地区の畠地一帯で発掘調査（本調査）を行い、同時に木田地区東端から春日山城の山地までの法線内全域の試掘を実施することとした。試掘調査は8月25日から人力と重機を併用して開始され、9月21日には係長を含めた現地での内部協議の結果、本調査は中屋敷地区の一之口遺跡（3区）14D1～4、6～9で実施することに決定し、その面積は約1,300m²であった。

グリッドの設定（第3図）春日・木田地区のグリッドは全遺跡に共通したものであり、57年度に設定した。グリッドは大・中・小の三種あり、大グリッドは100m、中グリッドは20m、小グリッドは2mを単位とする。方向と区割りは国土地理院の座標系第8系にのっとった。大グリッドは東西を算用数字（西→東）、南北をアルファベットの大文字（南→北）とし、両者を組み合せた呼称法（たとえば1A）、中グリッドは大グリッド内を25等分した20m四方を1から25に番付し、さらに小グリッドは東西をローマ数字、南北をアルファベット小文字で「1a」のように表示した。一之口遺跡3区付近の座標系は大グリッドの13列と14列の界線が-23.7、C列とD列の界線が+126.3である。57年度の調査地のグリッドは14D8、14D7にあたる。

発掘調査 I～IV層まではベルトコンベヤーを使用し、人力で排土（表土はぎ）し、IV層上面でジョレンかけを行い遺構を確認し、遺構掘り・写真撮影・実測の順で行い、遺物は小グリッド単位（2×2m）で取りあげた。また調査は東から西へと進め、実測は簡易通り方で1/20の図面を作成した。具体的な調査経過は下記のとおりである。

10月6日、14D7 I～II a～jと14D8 I～IV a～jより表土はぎを開始する。II層中より近世陶器、IV層中より土師器・須恵器の小破片が出土した。炭化物を含んだ灰黒色土を覆土にもつビットも検出され、それはIV層下部から掘り込まれていた。14日から遺構確認のためのジョレンかけ作業を開始した。その結果、IV層と同色の帶状あるいは溝状のラインが10本余り東西方向に走っていることが判明し、円形のビットでも土器片、木炭片を含むものとIV層と同色でシミ状をなすものに二分された。15日にはジョレンかけ作業が終了し、南北に走る溝、東西に走る溝、ビット・井戸などの遺構が確認された。19日、14D8より遺構掘りを開始する。南



第3圖 一之口遺跡西地區各主要遺物圖

日本道路公団作成 1 : 1,000
座標系第4種系 昭和48年測定

北に走る幅1m余りの溝かと思われたものは断面観察の結果溝でないことが判明し、14D 8・7で東西に走る幅20cm余りの溝は、断面がU字形を呈し、深さ5~10cmを測るが、遺物は出土しなかった。溝は深さ5~10cm余りの浅いものと、深さ10~19cm余りの深いものに二分され、深い溝は浅い溝を切っていることから浅いものより新しいと考えられるが、深い溝からは土師器片が出土していることから、いずれも古代の所産と考えられた。27日には造構掘りもほぼ終了した。南北に走る深い溝が2本、東西に走る浅い溝が20本余りが検出され、前者からは土師器片が多く出土したが、須恵器片も少量ながら出土した。後者からは須恵器の有台杯、土師器の杯が出土した。ピットも2点に集中し5基検出された。なかでも北東隅で検出されたピット群は、不完全ではあるが1間×2間、または2間×2間の掘立柱建物の可能性が大きい。柱穴は直径35~40cm、深さ約40cmで覆土から土師器の甕が出土しているものもみられた。

29日には造構実掘状態の写真撮影を終了し、11月1日からは造構実測に着手し、11月4日には調査を完了した。なお10月中旬以降、雨天の日が多く、排水に多くの時間を費やし、晴天の日でも現場状態が不良なため調査不能の日もあった。それゆえ、次年度以降の発掘調査の効率化には、排水処理が大きな課題と考えられた。

B. 昭和58年度

一之口遺跡3区は、当初昭和58年度の発掘対象に入っていたなかったが、工事工程との関係により急遽調査することになった。調査は6月8日に開始し、8月2日に終了した。

調査は造構面の数や遺物・造構のあり方を把握し、発掘方法及び調査日数を計画するために層序の確認をまず行った。その結果、第6図のような層序を確認した。このうち4層と6層は遺物包含層と考えられ、4層は平安時代を主体とする遺物が検出され、歛状小溝は同層を覆土としていることが判明した。この結果から3層までバック・ホーによる排土が可能と考え、4層上面に若干の余裕を残して排土した。排水は旧畠地を除外し、水田部にかかるよう「コ」の



第4図 調査風景（左：57年度 右：58年度）

字状に重機で素掘りの溝を掘り、砂利を埋め1ヶ所に集水枠を設け、ポンプで24時間排水する方法をとった。この排水溝の断面も観察し、調査区東側と南東側には4層がほとんど存在しないことを確認した。4層は59年度の層序のIV a層に、6層はIV b層に対応すると考えられる。

発掘調査は、調査員2~3名、作業員平均20名程度行った。東側水田部分は遺構数も極端に少なく、粘性の強い土のためジョレンかけも進まないことから重機を利用して遺構を検出した。

調査はIV a層から着手した。遺物のとりあげは、包含層出土のものについてはグリッド(2×2m)単位とした。遺構番号は遺構の種類にかかわらず通しナンバーを付した。

遺構は畠地として利用されていた若干高い部分に集中し、柵列・土坑・畠状小溝・ビットが検出された。調査区域東側の水田部分では、ほぼ南北に走る溝が検出されたことにとどまった。遺構は畠状小溝が土坑との切り合い関係からみて一番新しいと考えられる。土坑からは平安時代の土器が出土している。6層を排土したが、同層から全く遺物が検出されず、ビットが少數あったのみで時代の決定も困難であった。調査終了後の8月2日第6図の断面においてプラント・オパールの調査を行った。(第Ⅱ章3参照)

調査最終日、現在の地形図にも記載されている新しい用水路を重機で掘ったところ、座棺の座板や座布団・茶碗などが発見された。上部は既に重機によって破壊されていたが、用水路に埋葬した事情は興味を引く点である。

C. 昭和59年度(1・2・3区)

1) 全体計画

当初計画 昭和58年度の春日・木田地区の発掘調査が終了した後、59年度以降の調査日程について、文化行政課と公團とは再三にわたって協議した。その結果、春日・木田地区全体で、4班の調査体制をとり、60年度中にすべて終了することにした。¹⁾この班編成は調査員3名(当課職員)、作業員60名を1班とした。

一之口遺跡西地区については、3区と2区東側(13D 4・13C 24まで)のブレロード3先行盛土部分(稻荷中江用水路にかかるボックス構築のため)を6月1日からまず一班が、市道山麓線を跨ぐ橋脚(ブリッジA₁・A₂)建設部分を8月後半からほかの一班が、それぞれ調査する予定となっていた。前者は2区の残り部分を、後者は1区の残り部分をそれぞれ継続して調査し、前者は10月初旬に、後者は10月下旬に完了することになっていた。以上の計画にもとづ

1) この計画は58年度の実績をふまえて、これに57年度の確認調査の所見を勘案したうえで立案した。具体的にはもっとも遺構・遺物が多く、遺構面が3層以上にわたる一之口遺跡4・5区で、作業員1名の仕事量を0.6m²とし、遺構・遺物のもっとも少ない地区でこれを最高1.5m²として算出した。当地区は2・3区が1.3m²、1区が1.5m²とした。作業員の基準を土量ではなく、面積としたのは包含層以外はすべて重機排土が可能と考えたことによる。調査期間は各年度とも4月中旬から10月末までとし、この間の8月には3週間の休業期間(詳細分布調査、夏期講習休暇、ほかの確認調査にともなう休業)をとることにした。1ヶ月の稼働日数は土・日曜と雨による休業を考慮して16日とした。

き、6月1日から3区の調査に着手すべく、職員3名（坂井・高橋・田辺）が現地へ赴いた。作業員はすでに調査を開始していた2つの班で、現場周辺から約150名を募集しており、新たに作業員を確保するためには、なんらかの交通手段を講ずる必要があった。そのため、6月1日から板倉町・大潟町方面に作業員の通勤バスを出し、予定の作業員を確保した。

ところが6月からの一班のほかに、春日・木田地区の調査にもう一班加わる予定であったが、諸般の事情により2名しか確保できず、この時点で当初の計画変更を余儀なくされた。そのため、すでに調査にはいっていた3区・2区東側のプレ・ロード3に近い市道橋脚部の調査を8月後半まで待たずに7月から開始し、両地点を連続して調査することによって、調査員の不足を補うことにした。

2) 発掘作業の基本工程

春日・木田地区の発掘調査において、作業上のさまざまな点にかかわって、もっとも重要なことは、基本層序の把握である。調査地が沖積地であることに起因して同一地点に何層かにわたって造構面が存在することは、58年度の一之口遺跡東地区（4区）すでに確認されており、面的な発掘の前に基本層序とそれぞれの土層の時期や遺物の出土状況、造構の所在などについて、おおよそ把握することが、調査を進める上での大前提であることが認識されていた。これに加えて、58年度の池田遺跡で確認された水田遺構（中世～近世）がほかの遺跡でも存在する可能性が考えられた。これに対して、発掘にはいる前にプラント・オバールの調査をあらかじめ実施することにした。プラント・オバールの調査では層序を確認することが不可欠であり、この作業がそのまま基本層序の把握につながった。これを含めて、発掘作業の基本工程は次のとおりである。①プラント・オバール調査、②トレンチ調査、③重機排土、④包含層・造構発掘、⑤造構実測である。

プラント・オバール調査（次項参照） この分野の専門家である宮崎大学農学部藤原宏志助教授に依頼し、その指導により実施した。まず層序を確定するためにトレンチを設定し、その後10m方間に試料を採取する。トレンチはいずれも調査区をほぼ貫通する東西方向のグリッド界線に合わせて設定した。具体的には大グリッドのC列とD列の界線にし、幅2～3m、深さ

作業	月	5	6	7	8	備考
プラント・オバール		3区 ■■ 2区 ■■■■		1区 ■■		3区：4月上旬
発掘		3区 ■■■■■■■■ （3区層） 2区 ■■■■■■■■ トレンチ	（3区層） （3区層） （3区層）		（3区層） （3区層） 1区 ■■■■■■■■	
空測			3区 ●（3区層） 2区 ●（3区）		●（3区層） ●（3区）●（3区）	1区：荷包 送り方法

第3表 59年度調査日程

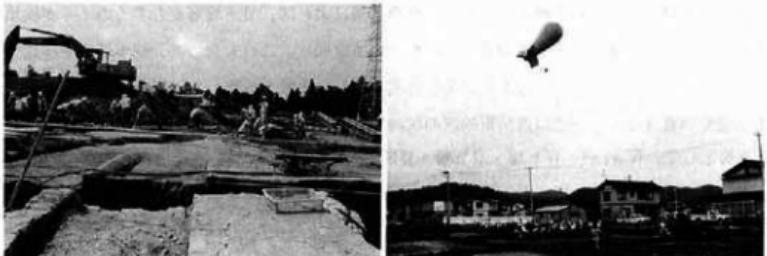
1.5~2.0mほどの規模で、その掘闢には重機（法バケット着装バック・ホー）を使用した。このトレンチでは試料を直接採取して、これ以外の10m方眼地点では重機により試掘坑を掘開するか、ボーリング棒により試料採取した。調査はプレ・ロード3部分を4月上旬に、2区残部を6月上旬に、1区を7月上旬に行った。その都度、結果の報告を受け、調査に反映させた。

トレンチ調査 プラント・オパール調査でおおよそ確認した土層を、さらに面的にそのひろがりや遺物の包含状況などを把握するため、中グリッドの界線に沿って、20m方眼に幅約80cmの試掘溝を設定し、発掘した。発掘溝は中グリッド界線をそのまま幅0.8~1mのアゼ(セクション・ベルト)として残すため、この分だけどちらかへずらした。この段階までで、遺物包含層と造構精査面を把握した。このトレンチはその後、そのまま排水溝として利用した。また、プラント・オパールの試料採取坑やガス水道管布設による擾乱溝もすべて掘り、土層観察に役立てた。

重機排土 中グリッド界線をアゼとして残し、遺物包含層以外はすべてバック・ホー（法バケット装着0.4m³）で掘り、運搬車（クローラー・ダンプ）を利用して、工事用道路側（法線南側）に排土を集め、適時発掘区以外へ排土を出した。排土搬出はすべて公團側の作業とした。このほかに公團側には表土除去と調査区内の排水とおよび調査区をめぐる安全フェンス設置をお願いした。

包含層・造構発掘 包含層は遺物の出土状況を考慮して人力と重機とを使い分けた。重機で発掘する場合は法バケットで約1cm単位で土を掬いだ。人力による発掘と造構発掘にはベルト・コンベアを使用した。包含層出土の遺物は一辺2mの小グリッド4マス分の4m方眼ごとにとりあげた。地区杭も4mごとに打った。造構発掘は適宜土層観察のためアゼを残すか、半裁し、1/10・1/20で土層断面図を作成したのち、完掘した。造構は検出順に通し番号を付し、建物・土坑・溝などの種別で分けなかった。種別ごとの記号は、おもにS A：槽・堀、S B：遺物、S D：溝、S E：井戸、S K：土杭、S X：その他、であり、番号は58年度分と重複しないように101番から付けた。造構番号のないピットで、遺物が出土したものについては、地区ごとに通し番号を付した。

造構実測 本年度の春日・木田地区の調査では造構実測を空中測量で行うことにして、シン航



第5図 調査風景 (左:59年度 右:空測)

空写真株式会社に委託した。当遺跡ではガス気球方式〔宮塚義人編1985〕をとり、発掘終了の都度、計4回実施した（第5図）。空測に先立って対空標式の打設は業者委託で、10m方眼とその対角線の交点に設置した。なお、グリッド設定にかかる杭の打設も業者委託とし、20mの中グリッドごと及び調査区端のグリッド界線に3寸角の杭を打った。1区については遺構が少なかったことから、空中測量ではなく、簡易造り方で実測した。空測後に補足調査をしたものについては1/40で平板実測した。

排水方法 調査地は沖積地であり、法線外では水田耕作がおこなわれており、発掘で掘り下げるところ地下水が湧出する状況であった。また降雨後もただちに作業できるように、調査区内の排水は調査に必須のものであった。これについては公團側に調査前に依頼した。排水方法は各地区の周囲をめぐる暗渠を掘削し、集水マスからポンプ・アップした。暗渠はバック・ホーで幅約50cm、深さ1.2~1.5mの溝を掘り、その底面にドレーン・ホースを入れたのち、溝内すべてに砂石を充填した。集水マスは各地区2ヶ所に設置し、3インチ200ボルトの電動ポンプで排水した。この暗渠以外にも調査に際して適宜小さな溝を掘った。

3) 調査経過

発掘調査は3区から開始し、次に2区を着手し、これと平行して1区を行った。このため、3区から調査の経過について述べてゆく。1・2・3区の発掘作業は6月1日に開始し、夏季休業前の8月10日にすべて終了した。実質的な作業日数は6月が13日、7月が15日、8月が8.5日の計36.5日で、作業員の延べ人数は約2,200人である。作業は土・日曜日と2週間の出張開始日の月曜日（2週間おき）を休業日とした。

3区 6月1日~8月8日

事前準備 6月1日から本格的な作業を開始するために、調査担当者（坂井）が5月23日に器材搬入とともに現地へ赴いた。これ以降5月31日まで、事前準備を行った。この間に、公團側が行った表土除去と排水用暗渠掘削に立ち合う一方、前年度の発掘終了部分になされていた先行盛土が未調査部分に6~7mのびていることが判明し、これを公團側に除去してもらった。この部分は地盤が最大数10cm沈下していた。当地区では4月にプラント・オパール調査（寺崎・鈴木調査員立ち合い）が終了しており、その結果によれば、VI・Ⅶ層から多くのイネが検出されており、水田遺構の可能性が考えられた（次項参照）。これも含めて、基本層序を確認するため、プラント・オパールのトレーナーを再度掘開し、土層を観察した。57年度・58年度の調査所見や調査進行中の一之口遺跡東地区的状況も参考にし、遺物包含層とその可能性が考えられる層として、IVa1層・IVb層・VIb層・Ⅶ層の計4層を想定し、精査する面として、IVa2層上面・IVb層上面・VIa層上面・VIc層上面・VIIa層上面の5つの面にし、各層を分層発掘することにした。このうち、遺物の出土状況とプラント・オパールの分析結果により、IVa2層上面とVIIa層上面の調査に重点をおいた。調査区南西側は正善寺川の氾濫原で、この部分は調査

が不要と判断された。今年度の調査地は57年度・58年度調査区と接しており、その調査によっておおよその遺跡の内容が予想されていた。それによれば時期は平安時代の9~10世紀で、掘立柱建物1棟と畠の跡と推定される「畠状小溝群」が検出されており、本年度の調査区内も同様の状況と考えられた。

IV a 2層上面の調査 実質的な発掘作業は6月5日からであり、この日より高橋・田辺両調査員が加わった。作業は北側のIV a 1層の除去からはじめた。遺物の出土状況は全体に希薄で造構も土坑・井戸などが北側に点在する程度であり、南側はほとんど遺物がみられなかった。北東側には掘立柱建物が検出され、58年度に検出された柱穴につながった。井戸はこの周辺に集中しており、ひとつの生活単位を形成しているものと推定された。ただしS B 124付近では柱穴が比較的集中しており、時期的に重複しているものと推定され、造構検出・発掘にも、やや時間を要した。西側の14C21と14D1には南北方向の大規模な落ち込みがあり、河川跡と考えられた(S D101)。これは4月のプラント・オバール調査でその存在が確認されていたもので、IV a 2層を切ってはいたが、深くて大きいことから、とりあえずプランの検出をし、覆土最上層を数10cm掘り下げることにとどめ、本格的な発掘はIV a層の調査完了後におくった。発掘に時間を要したのは南北溝(S D103・S D104)と東西溝(S D109)である。これはプラント・オバール調査のトレンチ断面で確認され、IV a 2層から掘り込みがみとめられ、平安時代以降のものかと考えられたが、出土遺物は微量ながら平安時代のものばかりであった。2本の溝は合流し、同時期のものとみられた。さらに東西溝のS D 109はS D 103とS D 104の交差部付近でこれと交わるものの、東側へは長くのびていないことから、これも同時期の一連のものであり、S D 103とS D 104の交差部に堰とみられる木杭列を勘案すると、一連の系統的な用水施設と考えられ、その重要性を認識した。

IV b層・VI b層の調査 IV a 2層上面の造構については6月21日に空測し、S E 107・S D 113などの造構の補足作業を残して、調査の主体を2地区に移した。IV b層以下の調査は重機が主体であり作業員を必要としないからである。補足作業と平行してIV a 2層を除去し、IV b層上面の精査にはいった。S D103・S D104に沿ってIV b層上に帯状のたかまり部がみられ、これとの関係からこれらの溝が平安時代より古くさかのぼる可能性も考えた。IV b層上面はほとんど平坦であり畦畔と考えられるたかまりもなく、水田としての造構を確認できなかつたため、統いてIV b層を除去し、IV a層上面を検出した。この層はほとんど遺物を含んでいなかつたが、14D 2から6世紀代とみられるほぼ完形の土師器杯と須恵器杯蓋天井部破片が検出され、IV b層の年代に示唆を与えた。同時に調査していた遺跡東端部の5区ではIV b層が古墳時代後期(6・7世紀)の包含層となっていたことと符合した。ただ、5区のIV b層は3区のIV b層より淡い色調であるという相違点はあった。VI a層上面ではIV b層のシミ状の小さな穴がわずかにみられたが、明確な造構はみられず、さらにVI b層上面までとVI c層上面までとに分けて発掘したが、いずれも造構は全く検出されなかつた。この段階で一時調査を中断した。それはIV a層のレベルがかな

り低く、排水状況がよくないうえに、梅雨期であり、調査条件がよくないと判断したことによる。

Ⅶ層上面の調査 梅雨明け後の7月下旬にⅦ層の調査を再開した。Ⅵc層とⅦa層は酸化土壌と環元土壌による色調の相違によって分離したものであり、土質自体はほとんど共通している。水田遺構の検出例の多くが、砂質の洪水堆積層や火山灰に覆われているが、ここではそうした状況はなく、その検出が容易ではないと思われた。ただⅦa層上面は水平ではなく、若干の起伏がみられ、このほかに畦畔とも考えられるたかまりは存在した。しかしながら慎重にⅦ層を追求したにもかかわらず、畦畔状のものとはならず、ほかでも水田遺構を明示するものはまったく検出されなかった。ただし、プラント・オパールの検出状況からみて遺構としてとらえられないながらも水田が存在した可能性は考えられたので、上面の起伏を空測した。これを8月8日に実施し、3区の調査を終えた。

2区 6月17日～8月10日

当地区の57年度の確認調査における所見は、西側の山麓線沿いに遺物が集中している以外は、遺物は総じて少なく、時期は須恵器をほとんど含まない平安時代というものであった。プラント・オパールの調査でも同様の傾向が見られた。6月上旬に実施したプラント・オパールでは、3区と同じく大グリッドのC列とD列の界線上に試掘溝を設定した。ただし遺物の包含が多い13D 1は溝とせず、試掘坑にとどめた。この断面観察により、もっとも視覚的に目立つⅣb層が東側13D 4までは存在せず、これより西側に存在するⅣb層も3区とはことなった状況であることが判明した。すなわち、Ⅳb層の上下の面とともに水平ではなくて凹凸が著しく、Ⅳb層中に上下の土層のブロックが混入しており、Ⅳb層形成以降に攪拌を受けたと推定された。Ⅳb層中にも平安時代の遺物（3区のⅣa 1層包含遺物と同時期）が多く含まれていることもその証左である。また、わずかではあるが古墳時代後期か奈良時代初頭のものと考えられるロクロ不使用の土師器も同一層から出土していることから、この時期の遺構の存在も想定されていた。遺構検出はⅣb層自体攪拌を受けており、これを除去しておこなうこととした。

調査は6月中旬のトレーニング調査にはじまり、7月上旬から本格的に開始した。発掘は東側から進めた。東端部では発掘前に性格不明の高まりが存在したが、これが洪水などによる堆積土と判明し、これを表土除去とともに重機排土した。まず13D 5・10では3区西端のS D 101のプランを確認し、この覆土上層を排土するにとどめた。この際S D 101に合流するような溝S D142を検出しこれを追求したところ、覆土が溝の基盤層となる土層と類似していることから、平面でのプラン確認が困難で隨時トレーニングを設定し、これによりプランを把握した。13D 4西半部から歓喜小溝が検出されはじめ、これに近接するかたちで掘立柱建物・井戸・土坑なども確認されたが、遺構相互が錯綜する状況ではなく、比較的単純に分布し、あまり時期幅がないものと考えられた。Ⅳb層上面にはⅣb層の暗褐色土のブロックが無数に点在し、歓喜小溝もプラン・底面ともに明確にならず、小さな凹凸が多くみられた。これについては意識的な遺構ではなく、Ⅳb層の上から何かが強く踏み込んだ結果によるものと判断され、牛馬などの足跡

とも考え、歓状小溝との関連も考慮された。

13D 1にはいると、古墳時代末期から奈良時代初頭にかけての遺物が比較的集中して出土した。13D 3からはIV a層上面にややはいり込む位置で古墳時代中期の土師器壺が出土し、当層の形成年代の一端が把握された。

13C 22西半部からはかなりの密度で歓状小溝が検出されはじめ、13C 21西端部から著しく土器が集中して出土した。この付近からは井戸・土坑とときわめて大規模な柱穴が検出され、大きな掘立柱建物の存在が確認された。これは当初柱痕のみを柱穴掘形と判断したほどのものであり、すでに発掘終了していた1区東端の建物と同一建物でないにしても、互いに関連した建物であることが考えられ、付近で灰釉陶器が比較的出土したことも考慮して、在地の有力者層の居宅と推定された。この建物は発掘区外へさらにのびていたが、当初調査区域外とされていた市道山麓線東側の荒れ地も調査区域に含め、統いて発掘した。調査区の拡張に際しては、公団・上越市と協議した。また、13D 1と12C 21の中グリッドのアゼを除去したところ、土師器の甕棺墓と考えられる遺構が検出された。

7月下旬に2区のプラント・オパール調査の結果が出て、IV層以下の調査は必要ないと判断され、公団側の希望により調査終了部分から、3回に分けて引き渡し、8月10日の夏季休業に入る前にすべて完了した。

1区 6月19日、7月20日～7月27日

当地区では確認調査の結果を受けて、調査範囲外はすべて高い盛土がなされていた。6月19日、2・3区の調査事情により、トレンチ調査をし、さらに7月上旬にプラント・オパール調査を実施した。主要トレンチは2区と同様に大グリッドのC列・D列の界線上にした。当地区の土層は2・3区と状況がやや異なっていた。調査区中央の12C 22・23ではIV b層が削平のために遺存しておらず、これが検出された調査区両端では、灰褐色を呈しており、2区の暗褐色の色調とは異なっていた。遺物はこの層中にみられたが量的に少なかった。本格的な調査は公団側の要請もあって、2区の調査に平行して7月20日から7月29日までに実施した。遺構は中央部では全くなく、東端部で平安時代の掘立柱建物・土坑・歓状小溝と西側では古墳時代末期から奈良時代前期の土坑が検出された。東側の掘立柱建物は柱穴が大きく、かなり大規模な建物が想定されたが、市道の下にのびており全容は確認されなかった。1区は時期的には2・3区と同一とみられ、遺構分布は特に濃密でないながら1区から3区まで東西300mの広範囲に遺跡がひろがっていることが判明した。当地区のプラント・オパール調査は2区同様Ⅴ層以下の発掘を必要としないものであった。遺構が全体に少なく、実測は空測ではなく簡易造り方で1/20で行った。

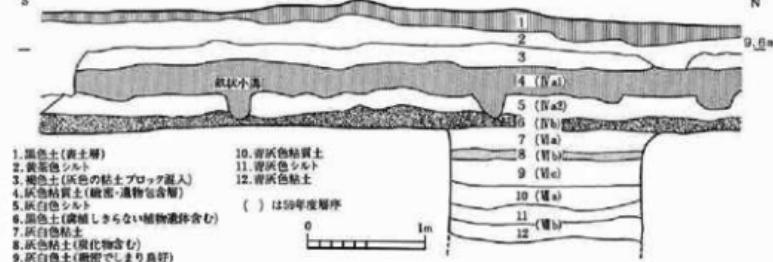
3. プラント・オパール分析

春日・木田地区の発掘調査で、プラント・オパール分析の契機となったのは、昭和58年度の池田遺跡における水田跡の発見である。この水田跡は中世から近世初頭のもので、洪水堆積による砂層が水田跡を覆っていたことから検出された。この際に水田跡の理化学的な資料を得るために、プラント・オパール分析を宮崎大学農学部藤原宏志助教授に依頼した。池田遺跡以外については、藤原助教授の助言により発掘に先行して、プラント・オパール分析を実施することとした。

一之口遺跡西地区のプラント・オパール分析にかかる調査は、昭和58年度1回、昭和59年度3回の計4回である。58年度は池田遺跡と同時の8月2日で、すでに発掘が進行していた3区西端の1地点について、試料採取した（第7図A点）。59年度は発掘調査の工程に合わせて4月（第1次）、6月（第2次）、7月（第3次）に実施した。試料は調査範囲のほぼ全城に対し、10m方眼で採取した。1次調査は3区と2区東端（13D5）、2次調査は2区の残り、3次調査は1区をそれぞれ対象にした。

¹⁾ 分析結果

58年度（第6・8図） 試料採取は14D3の1地点で、その土層断面は第6図のとおりである。これより第8図の分析結果を得た。1層から2層と4-1層（IVa1上層）にイネのピークが認められる。1-2層のピークは現在の水田によるものであり、4-1層のピークはその堆積時の水田によるものである。それより下層ではイネが検出されず、水田層と考えられる土層は認められなかった。全体に野草類のプラント・オパールも多く、8層（Vib層）でヨ



第6図 3区58年度調査区西端(14D3) 土層断面図

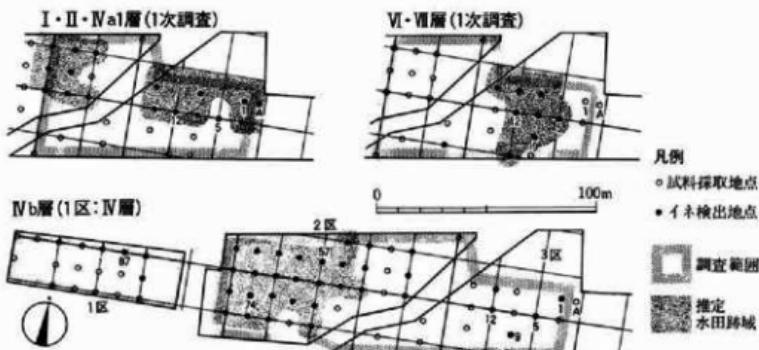
- 1) 以下の分析結果については藤原助教授によるコメントをほぼそのまま掲載した。ただし、註と（ ）内は別である。
- 2) 58年度調査と59年度調査では土層名が異なっている。58年度調査の4層は59年度のVib層にあたり、4-1層はその層のうちでも上層部分を示す。それぞれの調査の土層の対照は第6図に示した。

シのピークが認められた程度である。プラント・オパールの少なかった土層は洪水堆積物であろう。

59年度第1次 分析結果からⅠ・Ⅱ層およびⅥ・Ⅶ層の一部に水田跡が埋蔵されているか、あるいはその近傍に水田跡があると判断される区域が判明した。¹⁾Ⅳ層では数地点でイネが検出されたものの、検出地点にまとまりが認められず、同時代に同辺でイネが栽培されていたと推定されるが、水田跡域を特定するに至らなかった。Ⅵ・Ⅶ層は先史時代の堆積層である可能性が高く、ここに水田跡が埋蔵されているとすれば、北陸地方では現在のところ、もっとも古い水田跡ということになる。

59年度第2次 Ⅳ層においては計20地点から、イネのプラント・オパールが検出され、推定される水田跡域は第7図のとおりである。Ⅵ・Ⅶ層については2地点で検出されたが、水田跡の分布域を推定するのは困難である。

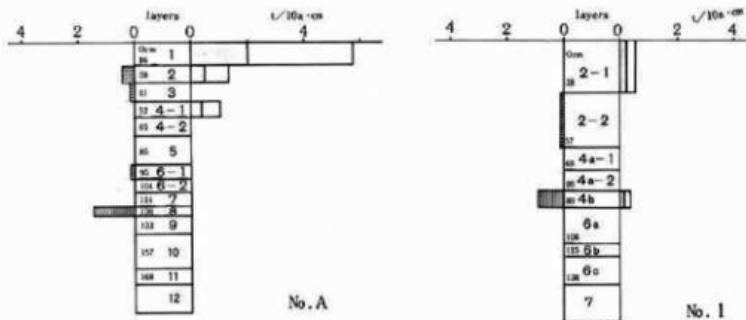
59年度第3次 Ⅳ・Ⅵ層からイネが検出されたが、それぞれ3地点・1地点のみで、水田跡域を特定することは困難である。



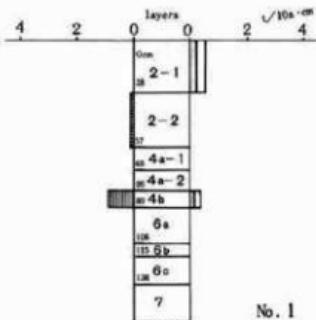
第7図 プラント・オパール分析による推定水田跡域

調査：宮崎大学藤原宏志助教授

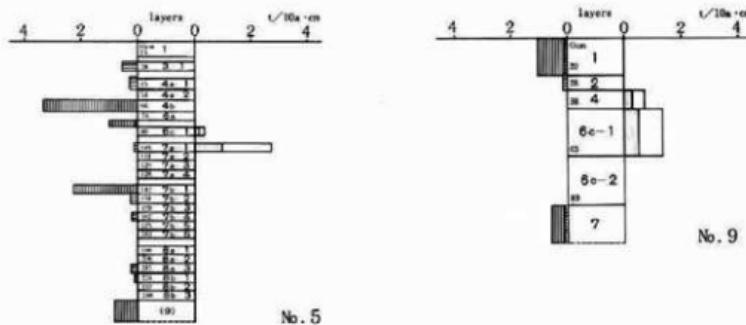
1) 59年度1次調査では視覚的にもっとも目立つ暗褐色土のIVb層を基本的に「IVb層」と認識し、IVb層とIVa2層との漸移層的なものを「IVa1層」とした。また奈良・平安時代の包含層であるIVa1層については識別していないため、これについての試料はI・II層に含まれている。したがって第7図の水田跡域の推定範囲のうち、1次調査にかかる3区と2区東端部については、I・II層のなかにIVa1層の試料が加わり、IV層はIVb層に限定して理解することができる。



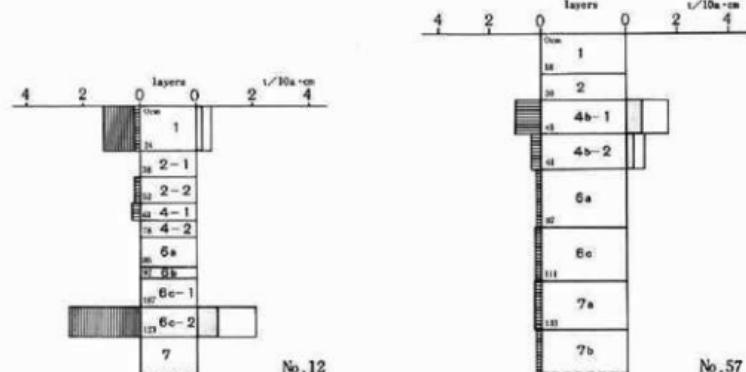
No. A



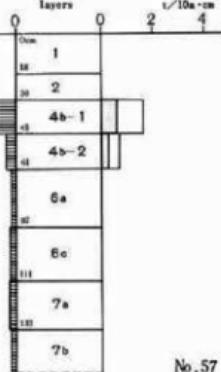
No. 1



No. 5

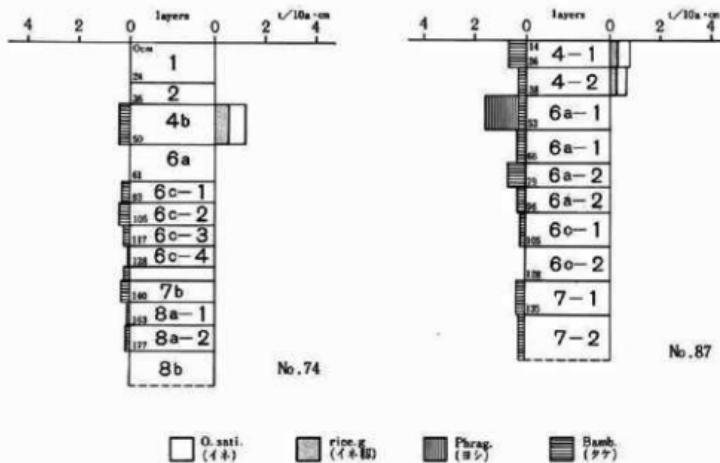


No. 12



No. 57

第8図 プラント・オパール分析グラフ(1)



第9図 プラント・オパール分析グラフ(2)

グラフの見方について

1. layers : 採取地点の土層模式図。() 内の数字は土層番号、左のみの小数字は表層からの深さをcmで表わしたもの。
2. O.sati. : *Oryza sativa*. 蔬栽培の地上乾物重。
3. rice.g : *Oryza sativa* の穀果(稈)乾物重。
4. Phrag. : *Phragmites communis*. ヨシの地上部乾物重。
5. Bamb. : *Bambusaceae*. タケ亜科の地上部乾物重。
- 各植物体重はそれぞれの植物により異なる珪酸体密度係数と土壤中から検出された各植物に由来するプラント・オパール密度をもとに算出されたものである。
- 水田跡が埋蔵されている土層ではO.sati. の値がピークを形成する場合が多い。土層の堆積状況により一概にいえないが、水田跡の層位はこのピークと一致するのが通例である。
- Phrag. (ヨシ)、Bamb. (タケ) の乾物量変遷はその地点における土壤水分状況の時代的変遷を知るうに役立つ。ヨシは比較的水分の多い湿った環境に生育し、タケ (ササ) は比較的乾燥した環境下で繁茂する。両者の消長をみると、その地点の乾湿変化を推定できる。

第Ⅲ章 遺 跡

1. 層 序

一之口遺跡西地区の発掘範囲は東西約300m、南北約50mで、標高8.5～11.0mを測り、地形は西から東へゆるく傾斜しているが、大きな起伏はなくおおむね平坦である。土層は基本的に水平堆積で、地形の傾きにおおむねそっている。基本層序はⅠ層～Ⅷ層で、必要に応じてさらに細分した。この層序は昭和57年、58年の調査成果をもとに、春日・木田地区の各遺跡に共通して設定したものであり、当地区では存在しない土層（Ⅴ層）がある一方、基本層序を混乱させないために、Ⅳ層・Ⅴ層・Ⅵ層を細分した。Ⅶ層は一之口遺跡東地区の5世紀代での古式土師器の包含層により、それぞれ設定したものである。

土層のあり方は第10図のとおりである。Ⅰ層は表土で、これを除くと、各地区に共通して存在する土層と存在しない土層があり、状況はまったく一致してはいない。1区は削平された部分が多く、3区では各層が比較的良好な状況で観察された。これは3区の標高が低く、流水などによる堆積が多いことに起因しよう。以下、Ⅱ層以下を説明する。

Ⅱ層 暗褐色を呈し、水田耕作のため酸化しており、砂をブロック状に含む。

Ⅲ層 暗灰褐色を呈する砂で、若干粘質を含む。基本層序と一致するか否かは不明である。

Ⅳa1層 Ⅳ層は57年度の調査で奈良・平安時代の遺物包含層として把握されたが、奈良・平安時代包含層と古墳時代後期の包含層に分離され、Ⅳa1・Ⅳa2・Ⅳbに分層される。暗灰褐色土で、奈良・平安時代の遺物包含層である。色調は暗褐色土のⅣb層と比較してかなり薄く、さほど目立たない。厚さは5～10数cmである。この層が明確に把握されるのは3区だけであり、1・2区ではみられない。

Ⅳa2層 Ⅳa1層とⅣb層の間に存在する無遺物層で、シルト粘土質が混入した淡褐色土である。数cmの厚さで、Ⅳb層との境は不明瞭で漸移層を形成するところもある。1・2区には存在しない。洪水堆積層と推定される。

Ⅳb層 暗褐色を呈しており、もっとも視覚的に識別しやすい土層である。粘質土で、厚さは3区で10～20cmである。Ⅶa層との境も不明瞭である。遺物は3区から須恵器杯蓋(144)・土師器杯(208)の2点が出土したのみで、包含量はごく少ない。これらの遺物からみて、Ⅳb層は古墳時代後期の6世紀代に形成されたものと考えられる。一之口遺跡東地区では古墳時代後期の竪穴住居群が検出されたが、Ⅳb層中から同時期の遺物が出てきており、両地区的状況は合致している。2区のⅣb層は3区のものと同質・同色であるが、土層の上面と下面とに著しい凹凸があり、Ⅳb層中に上下の土層のブロックが多く混入し、平安時代の遺物も多量に出土している(図版45-3)。したがって、2区では6世紀代に形

成されたⅣ b 層が平安時代に至って擾拌を受けたものと判断され、その原因として畝状小溝にみる畠の耕作などが想起される。2区東端部にはこの層はない。これはこの部分におけるⅣ b 層の高さが高く、後後に削平されたことによるものと思われる。1区では暗褐色のⅣ b 層ではなく、灰褐色の包含層がごく薄く存在したのみである。ただし、中央部は広く削平を受けておりⅣ層はまったく遺存しない。2区と3区の一部からプラント・オバールが検出された。

VII a 層 VII層はⅦ層青灰色粘土（グライ土）とⅦ層の間のもので、三層に分層される。VII a 層は黄褐色粘土で、無遺物層である。各地区にみられる。

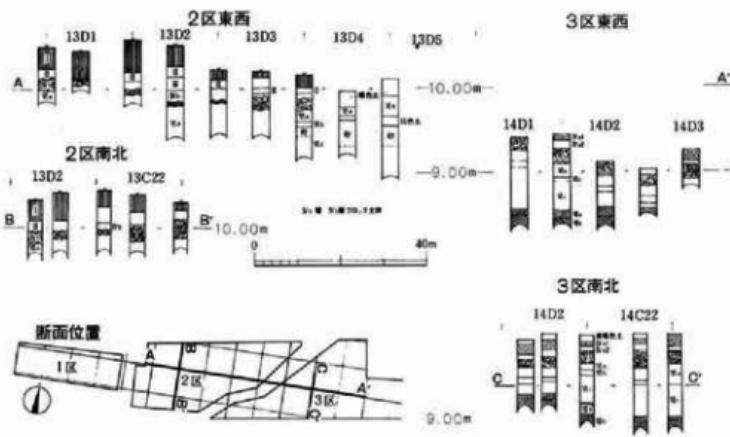
VII b 層 暗灰色粘質土で、VII層中では黒っぽいことで識別しやすい。厚さ数cmである。2区・1区では明瞭ではない。無遺物層である。

VII c 層 質・色などではVII a 層とほぼ同じである。無遺物層である。3区の14C22を中心におよそ10m四方にわたって検出された。

VII a 層 青灰色粘土層（グライ層）をVII層とした。VII a 層はVII層上位にあり、VII b 層よりは粘性が強く、空気に触れた時の酸化度がVII b 層より少ない。

VII b 層 VII a 層より若干粘性が弱い。VII c 層同様に3区のVII層上位からプラント・オバールが検出された。VII層はともに無遺物層である。

3区南西端は正善寺川の氾濫原であり、約1mの段差がある。この氾濫原の部分は平安時代以降に形成されたものであり、SD 101よりも新しく、土層もこれまで述べたものと異なる。



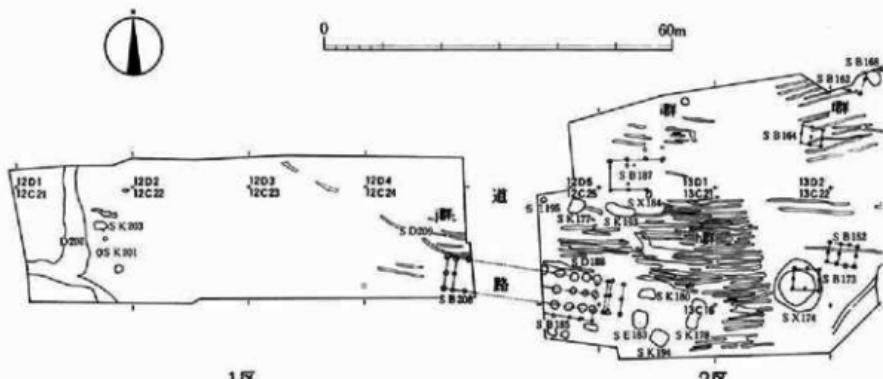
第10図 土層柱状図

2. 概 観

検出された遺構は古墳時代末期～奈良時代前半期と平安時代の二時期に大別される。古墳時代前・中期と中世・近世の遺物は若干出土しているが、これに伴う遺構は検出されていない。遺跡の主体は平安時代であり、古墳時代のほぼ全時期にわたる一之口遺跡東地区とはかなり状況が異なる。

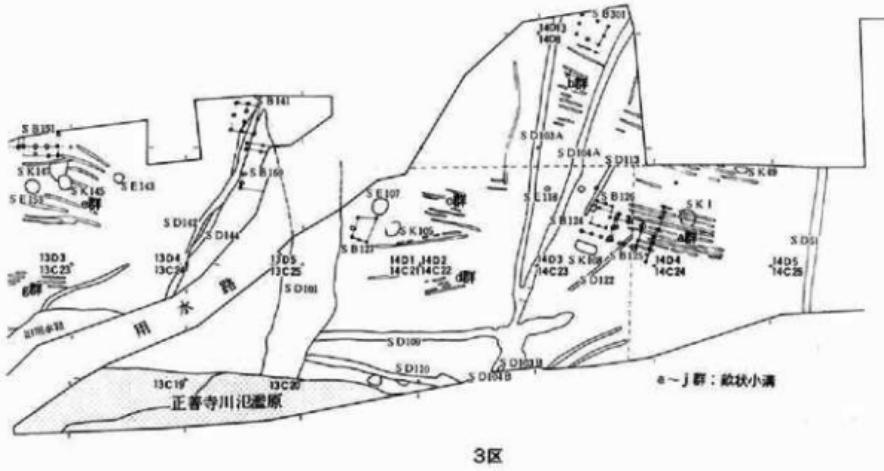
古墳時代末期～奈良時代の造構は掘立柱建物1棟と土坑・落ち込み敷基で、ごく少ない。1区の西側と2区の西端に造構が集中する。

平安時代の遺構は調査範囲のほぼ全域に分布する。検出された遺構は掘立柱建物10棟・井戸約10基・土坑・溝である。10棟の掘立柱建物のうち全容が把握されるものは約半数であるが、総柱建物はSB 185のみである。SB 185は柱振形が一辺1mをこえる大きな規模をもち、廊をもつ。これ以外では梁間2間で、桁行は2間・3間・5間である。掘立柱建物は集中して分布するのではなく、調査区内に分散している状況であり、あまり重複しない。井戸はSE 183をのぞいて円形の振形で素掘りのものである。土坑は苔塵穴と考えられるものが多い。井戸・土坑は掘立柱建物の周辺に存在し、互いに関連した遺構と推定され、掘立柱建物・井戸・土坑がひとつのまとまりをなすものと考えられる。このまとまりは全体で5つほどある。このうち2区西側から1区東端にかけては、大規模な掘立柱建物SB 185を中心とした有力なまとまりがある。この周辺では遺物がとくに集中し、多くの灰陶陶器が出土した。1区西端では明確な建物が確認されなかったが、土坑やピットが集中しており、建物が存在する可能性をもつ。



第11図 遊標配置模式図

溝は規模・形状など多様であり、それぞれ性格も異なるものと考えられるが、建物の雨落溝のほかに竈の歯の痕跡とみられる歯状小溝が広範囲にみられ、農業用水と推定される比較的規模の大きいものも数条検出された。歯状小溝は一定の範囲にあり、その方向や掘立柱建物との位置関係からみて、掘立柱建物を中心とする造構と併存するものもあると考えられ、これを含めた生活空間が想定される。これ以外の溝は幅約10mのS D 101を最大とし、幅数10cmから1mほどのものが数条ある。これらは調査区北側に存在したと推定される、水田への用水路と考えられる。遺物の出土量は相対的に少ないが、建物周辺に集中する傾向がある。とくにS B 185周辺は出土量が多い。出土土器には大きな時期幅ではなく、造構の重複も比較的少ないとことから、長期間にわたって生活が営まれたものではないと考えられる。平安時代前期の造構は3区東端にあり、中期の造構はこれ以外の1・2・3区に広汎にひろがる。なお、3区の調査は3ヶ年にわたり、調査者が同一でなかったこともあって、59年度に検出された造構と同一のものが57年度・58年度では確認されていないものがある。



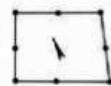
3. 造構各説

遺跡の主体をなす平安時代から述べる。記述の順序は造構の種別ごとに分けず、掘立柱建物（雨落溝を含む）・井戸・土坑についてはそれぞれのまとまりごとに、東側から記述し、溝・畝状小溝はまとめて述べることにする。最後に古墳末期から奈良時代前半の造構を述べる。

A 平安時代

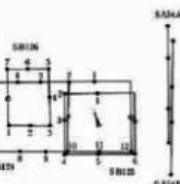
SB301 (図版5・41-1)

3区14D 8・13にある2間×2間の掘立柱建物である。南北は3.6m、東西は4.3・4.9mで東西の長さは北側が長く、やや歪んだ平面形の東西棟建物で、方位はN-65°-Wである。柱間寸法は南北がほぼ等間、東西は南側がほぼ等間であるが、北側は2.1m・2.8mである。柱掘形はややいびつながら、方形にちかい。大きさは不揃いである。柱痕跡は径10cmあまりである。



SB124 (図版4・39-2)

3区14D 3にある5間(9.2m)×2間(4.7m)の東西棟建物で、方位はN-74°-Wである。IVa2層で確認されたSB125の柱穴との切り合いからSB125より新しいことがわかる。柱間寸法は、桁行が西側より4間目が各々1.6mの他は、1.8mとほぼ等間となる。梁間は西妻で北より2.2m・2.5mとなるが、東妻では柱穴を確認できなかつた。また、西から3間目に間仕切りと考えられる東柱が存在する。柱掘形は方50cm前後であり大きくななく、埋土は暗褐色土でしまりは比較的よいが、柱痕跡は黒色土でしまりが弱く、径20~30cmである。



SB125 (図版4・39-2)

3区14D 3にある2間(4.3m)×2間(3.8m)の東西棟建物で、方位はN-83°-Wである。SB124と同様IVa2層で確認されたが、SB124との前後関係は前述のとおりである。柱間寸法は、桁行が2.2mと等間であるが、梁間は西妻で北より1.8m・2.0mなのに対し、東妻では、柱穴を確認できなかつた。柱掘形は70×50cm前後の方形で、SB124よりやや大きく、埋土は暗褐色土でしまりは比較的よいが、柱痕跡は確認できなかつた。

SB126 (図版4・39-2)

3区14D 3にある2間(3.9m)×2間(2.7m)の南北棟建物で、方位はN-20°-Eである。SB124と重複するが、上面のIVa2層で確認されており、SB124より後出のものであることがわかる。南北両側柱穴列の柱間寸法は1.4mの等間であるが、東西両側柱穴列は、西側では確認されず、東側では、やや外側に張り出して検出された。柱間寸法は1.9mの等間である。

柱掘形は、北側東西柱穴列の中柱が 0.6×0.4 m、ほかは径 30cm 前後と小さく、深さも平均 14cm と浅い。

ピット 104 は S B 126 の北にあり、柱穴と考えられるが、他との関連性は判明しなかった。ピットの北半部は攪乱溝で破壊されているが、平面形は方形を呈すると思われ、東西径 60cm・深さ 75cm を測る。Ⅳa1 層から切り込んでおり、上層に灰色土（厚さ約 15cm）、下層に暗灰色土（厚さ約 55cm）が堆積する。底面からは曲物の底板（図版 49-5）が出土し、これは柱の確板と考えられる。この確板の下には植物遺体が薄く堆積していた。

SA54A・B (図版 4)

3 区 14D 3・4、S B 124 東側にある 3 間の杭列である。S A54A は長さ 7.8 m、柱間寸法は北から 2.0 m・3.5 m・2.3 m で、方位は N-19°-E である。柱掘形は径 20~30cm の円形で、深さは 40cm 前後である。S A54B は S A54A とほぼ同じ位置にあり、長さ 9 m、柱間寸法は北から 3.0 m・2.5 m・3.5 m で、方位は N-20°-E である。柱掘形は S A54A とほぼ同じ大きさである。

SE116 (図版 4)

3 区 14D 3 にある素掘りの井戸で S D 113 により切られている。また S B 124・S B 126 と重複している。平面形は径約 1 m の円形で、掘形断面は U 字状を呈し、底面西側に半円状のテラスを有する。深さは 0.8 m を測る。埋土は 3 層とともに粘質土で、1・2 層はブロック状の堆積を示していることから、自然堆積とは考えられず、人為的に埋められた可能性が強い。内部より刀子（図版 31・64-3）、櫛の小破片・桜の木等（図版 B 2・67-1）が出土している。

SE117 (図版 4)

3 区 14D 3 にある素掘りの井戸で、S E 116 の北西約 4 m にある。面形は径約 1 m の円形で、掘形断面は U 字状を呈し、中央はやや深くなっている。深さは 70cm を測る。S E 116 と類似し、人為的に埋められたと考えられる。

SE118 (図版 5)

3 区 14D 3 にある素掘りの井戸で、S E 117 の北 5.5 m にある。平面形は径約 0.7 m の円形でやや小ぶりである。掘形断面は U 字状を呈し、S E 116・S E 117 と同様、人為的に埋められたと考えられる。出土遺物はない。

SK1 (図版 4・41-3)

3 区 14D 4 にある土坑である。平面形は 2.7×2.5 m の方形にちかいもので、深さ約 25 cm を測る。この土坑は鉢状小溝に切られる。覆土は黄色粘土と灰褐色粘土の混土のなかに薄い炭化層が 2~3 枚存在する。出土遺物は土師器を主体として比較的多い。器種は碗・甕・鍋などである。この土坑は S B 124 などと関連すると思われる。

SK49 (図版 4)

3 区 14D 4 にある土坑である。平面形は楕円形で、長軸約 2.3 m、短軸約 1 m で、深さ約 10m を

を測る。須恵器無台杯(124)が出土している。

SK108 (図版4)

3区14D 3、SB 124の南側に位置する土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸4.0m、短軸1.6mを測る。長軸の方向がSB 124と一致することから、SB 124に関連する遺構と考えられる。深さは20~50cmと一定していない。埋土は暗灰色土であるが、炭層をはさんでおり、土師器壺破片や須恵器片が検出された。

SB127 (図版7)

3区14D 1にある掘立柱建物である。IV b層上面で確認されたものであるが、IVa2層上面の遺構と考えられ、SE 107・SK 105などとの関連が想定される。確認面がIV b層上面であったため、検出された柱穴は深さ10cm未満とごく浅く、一部の柱穴は不明確であった。検出された柱穴は南北2間(3.4m)、東西2間(2.6m)であり、柱穴の残存状況からみて2間×2間の小規模な南北棟建物と推定される。建物の方位はN-71°Wである。柱掘形は一辺40cm前後の方形で、埋土は茶褐色土である。



SE107 (図版7)

3区14D 1のSB 127の北側にある井戸である。径2.5~2.8m、深さ2.3mの円形の掘形で井戸枠をもたない素掘りのものである。壁面の中ほどに段があり、これより下位は細くなる。最下層の砂層は井戸構築に近い時期に形成されたものと考えられ、この層から土師器杯(50・52)が出土している。これより上では薄い灰色土・灰色粘土層のほかはおむね黒っぽい灰色の土層で、中位から上位に炭化物を多く含む層が2~3枚存在する。とくに3層は炭化物からなっている。土器の多くは中位より上から出土している。最上層の暗灰色土層は包含層IVa1層と色・質ともにはほとんど同じ層である。

SK105 (図版7)

3区14D 1のSB 127の東側にある深い土坑である。径約2.5mほどの円形にちかい平面形で深さは約30cmである。壁面のあがりは明瞭である。覆土は上・中・下の3層で単純である。上層は淡黄灰色粘土・中層は炭化物を多く含む黒色土・下層は暗灰褐色土である。出土遺物は多くないが、中層を中心としてSE 107とほぼ同じ時期の土器が出土している。この南東側に隣接するSK 106はごく浅い落ち込みで、出土遺物はほとんどない。

SK114・SK115 (図版8)

ともに3区14C21南端にあるごく深い土坑である。深さは5cm前後で、覆土は褐色土である。ほとんど出土遺物はない。SK 115からほぼ完形の土師器杯(185)が出土している。

SX131 (図版6・49-7)

3区14C22・23、界線上から土師器大形壺(203)が1個体横たわった状態で出土した。壺は地山(IVa2層)に若干くい込む位置にあるが、掘形は明確ではない。出土状況からみて壺棺墓などの可能性がある。

SB141 (図版10・37-1)

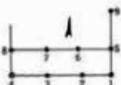
2区13D10、SD 101の西側にある南北2間(4.8 m)×東西2間(4.1 m)の掘立柱建物で、方位はN-10°-Eである。建物中央には南北に並ぶ東柱かと思われる柱穴2基がある。柱間寸法は、東西方向の柱列が2.05 m等間、南北方向の柱列が北側2.2 m・南側2.6 m、建物中央の柱列が両端1.3 m等間、中央2.2 mを測る。柱掘形は、柱穴1~7がほぼ方形を呈し、一辺40~65 cm、柱穴8・9が円形あるいは楕円形を呈し、径40~65 cmで、深さ約50 cmを測る。いくつかの柱穴で径30 cm位の柱痕が認められ、建物中央の柱穴の柱痕跡はこれより小ぶりである。掘形埋土は黒褐色土中に地山ブロックを含み、版築状を呈する。柱穴はすべて深く、しっかりしたものであった。SD 142・SD 144と重複しており、SD 144より新しく、SD 142より古い。

SB169 (図版10)

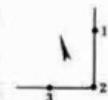
2区東端、13D5に位置する掘立柱建物で、方位はN-8°-Eである。東側はSD 221と現排水溝により存在しない。身舎は南北3間(5.0 m)で、南北各1間(北1.2 m・南0.8 m)の廊を有する。柱穴3は現排水溝に切られ、存在しない。柱掘形は、身舎の柱穴がほぼ方形を呈し、一辺40~65 cm、廊の柱穴は円形を呈し、径30~40 cmを測る。掘形埋土は黒褐色土中に若干の地山ブロックを含み、身舎柱穴は版築状を呈していた。この建物はSD 142を切っている。

**SB151** (図版11)

2区13D3・8にある掘立柱建物で、調査区外にのびており全容は不明である。東西3間(5.9 m)、南北2間以上である。南北方向の柱間寸法は2.4 mで、東西の柱間寸法(1.95 m)より長い。柱間寸法からすると、東西棟の可能性が考えられる。建物の方位はほとんど東西方位にそっている。柱掘形は一辺50~70 cmの方形で、深さ約50 cmである。埋土は黒褐色土と灰白色土が互層となる。柱穴はIVa層を切り込んでいるのが確認された。南側には廊かと思われる柱穴が存在するが、西側が不揃いである。廊の出は1.5 mで、東側1間の柱間寸法は1.7 mである。この柱掘形はやや小さいが、方形で柱根が遺存している例がある(図版49-3)。これは径23 cmの円形の柱で約50 cm遺存していた。建物南側の東西溝SD 148はS B 151の雨落溝の可能性がある。長さ約7 m・幅約50 cm・深さ約20 cmである。

**SB162** (図版12)

2区13D3にある掘立柱建物で、大半は調査区外にのびる。東西・南北両方向ともそれぞれ1間が確認されたにとどまる。柱間寸法は東西2.0 m、南北2.7 mで、東西棟建物の可能性が考えられる。建物の方位はN-72°-Wである。柱掘形は方形にちかく、一辺40~50 cmである。



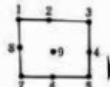
SB168 (図版12)

2区13D 8、S B 151 西方にある掘立柱建物である。東西1間の柱が検出されたのみで、ほとんどは調査区外へのびる。柱間寸法は約2~1m、柱掘形は方形にちかく、一辺40~50cmである。



SB164 (図版12)

2区13D 2 にある 2間(約3.6m)×2間(約2.8m)の東西棟掘立柱建物で、方位はN-80-Wである。柱掘形は径20~45cmの円形あるいは梢円形で、柱根がわずかに遺存していた。柱間寸法は等間ではない。柱根は径8cmほどである。掘形埋土は暗褐色土で、地山土とは異なる。



SE143 (図版11)

2区13D 4 にあり、ほかの遺構とは少し離れて存在する素掘りの井戸である。北側上面は現排水溝によって擾乱されていたが、平面形はほぼ円形で、径約180cm、深さ165cmを測り、底面中央は少し凹んでいた。6層黒灰色粘土は埋め土、5層黒色土中からは植物遺体に混って杯を中心とした土器がまとめて出土した。本井戸はS E 153同様、井戸を放棄する際に、ある程度埋めた後、土器を意図的に一括投棄したと考えられる。

SE153 (図版11・46)

2区13D 3、S B 151 の南側にある素掘りの井戸である。掘形は径2.5mの円形、深さ1.85mである。最下層に使用時に形成されたと考えられる黒灰色土・暗灰色砂・淡黒灰色土(8~9)があり、それより上は埋め土と考えられる。このなかの中位に炭化物を多量に含む層が2層、間層をはさんで存在する。これより下層は黒色土と灰色粘土とブロックが混入した土で、人為的な埋め土と考えられる。炭化物を多く含む層から青串2点と多量の土器が出土した(図版46-2)。土師器の甕や杯・須恵器長頭瓶口頭部などであるが、これらの土器には意図的に欠損されたものが含まれている(第14図)。こうした状況からみると、井戸の中ほどまで1回で埋め、その時点で青串と打欠いた土器を投入し、火を焚いたものと推定され、井戸を放棄する際の祭祀が復原される。

SK145 (図版11)

2区13D 3、S K 147 と北側で重複する土坑である。北側は現排水溝によって擾乱をうけているが、平面形は方形を呈し、現南北長2.1m、東西長2.05m、深さ約20cmを測る。底面はほぼ平らで、底面直上には4~8cmの厚さで炭化層が堆積する。この炭化層を中心に、土師器杯・甕等、土器がまとめて出土している。本土坑はS K 147・S D 149(鉢状小溝)と重複しており、これらより古いものである。

SK147 (図版11)

2区13D 3、S B 151 の南にある土坑である。北側でS D 148と重複し、途中現排水溝によって擾乱をうけ、南側でS K 145と重複する。平面形は卵形を呈し、現長軸3.4m、短軸3.05

m・深さ約20cmを測り、底面は中央に向けて緩く傾斜する。覆土は黒灰色粘土で褐色土ブロックを多く含む。本土坑はSK 145の上面を切り、SD 148に切られている。

SK154 (図版12)

2区13D 3、SB 151の西にある土坑である。平面形は瓢形を呈し、長軸265cm・短軸北側2.1m、南側1.55m、深さ約10cmを測る。覆土は黒褐色粘質土で、中央やや西寄りのほぼ底面直上で、須恵器小壺を出土している。南側でSD 157(鉢状小溝)と重複し、これより古いものである。

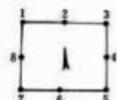
SB152 (図版13・37-2)

2区13C 23にある3間(4.9m)×2間(3.4m-3.65m)の東西棟掘立柱建物である。建物方位はN-82°-Wである。西側1間目の棟通りに間仕切りかと思われる柱穴が存在する。柱間寸法は梁間がほぼ等間であるが、桁行は西側1間が1.9m、東側2間は1.4~1.6mである。柱掘形は方形で一辺50~70cm、深さ30~40cmである。掘形埋土は黒褐色土と地山とほぼ同じ土が互層となる。柱痕跡は径約10cm(図版49-4)、一ヶ所に柱根が遺存していた。



SB173 (図版13・37-2)

2区13C 22、SB 152の西側にある2間(2.4m)×2間(3.7m)の東西棟掘立柱建物である。SX 174の覆土を切っている。建物方位はN-86°-Wである。南辺の中間の柱穴は柱筋が一致する。柱間寸法は桁行、梁間ともそれぞれほぼ等間である。柱掘形はおおむね方形であり、一辺30~50cm、深さ10~25cmで、埋土は黄褐色土である。



SX174 (図版13・37-2)

2区13C 22にある円形に溝がめぐら造構で、「円形周溝造構」と呼称する。溝に囲まれた部分は径6m前後の円形である。溝の幅は平均1mほどであるが、広いところで1.7m、狭いところで0.5mである。深さは10~30cmと浅く、たちあがりは不明瞭である。覆土は暗褐色土で、出土遺物は、平安時代の土師器数点が出土しているのみである。

SK175 (図版13)

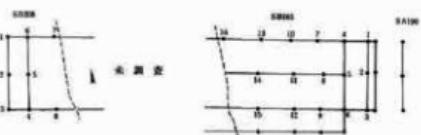
2区13C 22にある梢円形の土坑である。長軸約3m・短軸約1.2m、深さは浅く、覆土は暗褐色土で、出土遺物はない。

SB185 付SA190・SD188・SD189 (図版16・17・38・49-1・2)

2区西端の13C 16-21、12C 20-25にある大規模な掘立柱建物である。この付近は柱穴と考えられるピットが数多く集中し、調査区の西端にあたることから、建物の復原は不確定の要素が残る。また、道路をはさんだ1区東端には、SB 185と柱筋が一致する建物SB 208が存在し、両者は同一の建物でないにしても互いに関連した同時存在の建物と考えられる。

建物は総柱の身舎に南と東の2面に廻をもち、方位はN-82°-Wである。身舎部分の柱穴は

廟の柱穴より大きく、一辺1~1.5mのほぼ方形で、深さ1~1.2mとかなり大規模である。この大きさの柱穴が東西4間、南北2間が検出された。東西方向は、



柱穴がさらに続く。したがって、一応東西棟建物と考えられ、身舎は梁間2間、桁行4間以上である。柱間寸法は梁間が等間で2.7m、桁行は等間ではなく、東から3間が2.1m、4間目が3.0mであり、東から3間分とこれより西側は別の建物の可能性もある。掘形埋土は、地山ブロックを多く含む暗褐色土で、柱底跡は径約25cmである。柱根が遺存している例が4つある(1・12・13・15)。15は長さ約75cmにわたって遺存している。柱根のほかに礎板が据えられている例もある(12)。これは厚さ約1cmの薄い板で、柱の圧力で割れている。この柱穴にはもう一つの礎板が検出された。この礎板は17×25cmの方形にちかい板で厚さ2.0cmである。後者の中央には柱の圧痕がみられる。このような柱根と礎板の出土状況からみると、建物の建て替えがあったものと推定される。ただ、埋土の状況からは明確な柱穴の切り合いは観察しえなかった。東柱の柱穴は小さく、東側1間目は棟通りの柱筋に一致しない位置にある。身舎の東端の柱筋には柱穴をつなぐ溝がある。この溝は幅30~40cm、深さ約30cmで、埋土は固くしまった茶褐色土である。

廟と考えられる柱穴は東側2列、2間ずつがある。これは建て替えによるものと考えられる。柱掘形は不整形で、深さ約60cmである。廟の出はそれぞれ2.0m、2.5mであり、柱間寸法はほぼ等間である。この柱穴よりさらに2.5mの間隔をおいて2間の柱穴が存在する(SA190)。これについてはSB185の廟と考えることも可能であるが、SB185の東側の目隠塀と考えておく。柱掘形は方形にちかく深さ60~80cmである。

南側の廟は出が1.8mで、3間検出された。柱間寸法は身舎にほぼ一致する。柱掘形は一辺40~50cmの方形で深さ約20cmである。

建物の北側に雨落溝と考えられる溝SD188がある。これは幅0.4~1.4m、深さ30cm、長さ8.8mである。溝の下層は炭化層で、その上に暗灰褐色土層が覆っている。出土遺物は多く、上層からほとんど出土した。土器は煮沸形態・供膳形態が主体で、この建物で使用されたものと推定される。

ピット41はSB185の南にあり、2基以上のピットが重複していたが、判然とはしない。東側の最深部より柱根が出土し、柱穴であることが判明したが、他との関係は不明である。

SE183 (図版16・47)

2区13C16、SB185東方にある井戸枠をもつ唯一の井戸である。掘形は東西2.6m、南北2.9mの方形の平面形で、深さ2.0mである。井戸には方形に井戸枠が組まれている。井戸枠は板材でつくられているが、ほとんど遺存しておらず、細かな構造は不明である。遺存する板材は幅6~10cm、厚さ約1cmであり、長いもので残存長135cmである。一部遺存していたもの

は立った状態で出土しており、こうした板を何枚か立てて井戸枠としたものと考えられる。遺存してはいないが、これらの縦板を内側から支持する木枠が存在したものと思われる。井戸枠の大きさは下端で一辺約1mで、上方にむかってやや開き、上端では約1.3mである。井戸枠内の最下層には1cm大位の小礫を10cm前後の厚さで密に敷く。この礫層内には細かな植物質繊維や木炭の小片が含まれていた。この礫層は濾過の機能をもつと推定される。この礫層下より須恵器杯(11)が、礫層内より土師器杯(2・6・9)が出土した。礫層の上には厚さ約15cmの黒色土があり、この黒色土は、使用時に形成されたものと推定され、トチ・モモなどの果物や穀物類(イネ)、雑草類などの種子が多く検出された。

掘形埋土は黄灰色粘土(地山土)と黒色土のブロックが混じったもので、比較的固くなっている。この下層部分は環元化し、青灰色となっている。埋土の上面は中央がくぼみ、この部分に黒灰色土がみられる。井戸内には掘形埋土に似た埋め土が充満しており、この上層部には、ワラ状の植物纖維などが多く出土し、植物纖維で編んだ円形の敷物が検出された(図版68)。土器などの遺物が多く出土したのは最上層の黒灰色土と井戸内の埋め土上面層である。井戸の東側をのぞく3面にはコの字状にめぐる小さな溝がある。これは幅25~40cm、深さ10cm前後である。排水溝など、井戸と関連した施設と考えられる。

SB208 (図版17・50)

1区12C24にある東西棟建物で、方位はN-82°-Wである。西側に廊をもつが全容は明らかでない。身舎は桁行1間確認されたのみで柱間寸法は2.1m、梁間は西妻で2間の2.7m等間である。廊の出は1.5mである。柱痕跡は身舎・廊共ほぼ同規模の方形で一辺50~60cm、深さ50~60cmである。柱痕跡は径20cmぐらいである。建物方位と柱筋は2区西端にあるSB185とほぼ一致しており同一建物か、別建物でも相互に関連したものと考えられる。

SE195 (図版15)

2区12C25、SK177の西側にある素掘りの井戸である。平面形は歪んだ円形を呈し、径約90cm・深さ約155cmを測り、小ぶりな割に深いものである。側壁は崩落のため内鴻しており、底面中央は一段凹む。覆土は、4層黒褐色土が植物遺体を多量に含み、曲物の底板が出土した。5層淡灰褐色土は側壁の崩落土と考えられ、若干の植物遺体を含む。6層暗灰色粘土も植物遺体を含み、井戸使用時に溜った土であろう。

SK177 (図版15)

2区12C25の北東に位置する。平面形隅丸方形で、断面U字形となる。南北2.5m、東西2.2mで、深さは確認面から70cmである。IV b層を切って掘られており、埋土はIV b層とほぼ同じ暗黒色土である。出土遺物はあまりなく土師器杯片他である。

SK178 (図版16)

2区13C16付近にある長方形の浅い土坑である。長軸530cm・短軸北側295cm・南側180cm・深さ約20cmである。底面は凹凸が著しく、南側に凹み、南壁には低い段を有する。覆土はIV

b層類似の黒褐色土中にⅥa層のブロックを含む。

SK180・SK181 (図版16)

2区13C21、S E 183の北側にある浅い土坑である。SK 180はプラン検出時1基の土坑と考え調査を進めたが、断面観察により、北側と南側の2基の土坑が重複し、南側が古いことが判明した。北側の土坑は平面形ほぼ方形で、長軸275cm・短軸160cm・深さ20~25cmを測り、東側に張り出した小土坑を有する。北側には炭化層があり、その下に暗褐色土(3層)が土坑全体に堆積していた。東側小土坑中も暗褐色土(3層)が充満しており、この中から土師器杯が出土した。この土坑の周辺は細かな凹凸が認められる。

南側の土坑は、不正形で、長軸210cm、短軸115cm、深さ15~25cmを測り、底面は凹凸が著しい。暗褐色土中より土器がまとめて出土した。

SK 181はこのSK 180の南西に重複してある。平面形は不整円形で径110~120cm、深さ14cmを測る。覆土はSK 180南側と似ているが、検出がこれより困難であったことを考えるとSK 181はSK 180より古い可能性が考えられる。

SK176・SK182・SK186 (図版16)

2区13C21、SK 180の東にある土坑である。SK 176は不正楕円形を呈し、長軸110cm、短軸90cm、深さ約10cmを測り、土器が一括出土している。SK 182は楕円形を呈し、長軸170cm、短軸125cm、深さ85cmを測り、覆土上層で土器が出土している。SK 186も楕円形を呈し、長軸85cm、短軸70cmを測る。覆土はSK 180と同一の暗褐色土であり、SK 182・SK 186とSK 180は上面ではつながって観察された。

SK170 (図版14)

2区13D1、調査範囲北端にある不正円形の浅い土坑である。径125cm、深さ20cmを測る。遺物は暗褐色土の下から若干出土している。

SK171 (図版14)

2区13D1、SK 171の南にある長方形の土坑である。長軸1.2m・短軸0.9m・深さ80cmを測る。土坑の東側は一段低く、凹凸を有する。覆土は3層淡褐色土がグライ化しており、当初井戸かと考えた。また、柱穴かとも考えたが、本遺跡では本土坑位の深さの井戸ではなく、また関係する柱穴もないことから土坑とした。

SK191 (図版16)

2区13C16、S E 183の東側にある不整形の土坑である。長軸約2.5m、短軸約1.5m、深さ5~10cmであるが、北西~西側の壁は不鮮明であった。覆土は暗褐色土中にⅥa層のブロックを含み、接するSD 192と極似する。本土坑はSD 192よりやや凹み、土師器細片が密集して出土したことから土坑とした。近接するSE 183の覆土上層は黒灰色土で鮮明であり、SK 191はこれより古い可能性がある。

SK193 (図版15)

2区13C21、S B 187の南にある浅い土坑である。楕円形を呈し、長軸5.1m、短軸1.8m、深さ5~10cmを測る。底面は凹凸が著しい。覆土は畝状小溝と類似し、黒褐色土(IV b層)中にVI a層ブロックを含むが、これとの切り合いで古いようにも見うけられる。

SK194 (図版16)

2区13C16、S E 183の南東に位置する方形の土坑である。東西3.1m・南北2.6m・深さ約35cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は南側が少し高く、ほぼ平らである。覆土中に2枚の炭化層が認められる。この間層(4層)は埋め土と考えられる。遺物は炭化層を中心に出土している。接するSD 192や南側に接する浅い造構の覆土とSK 194の覆土上層とはほぼ同一であった。

SK179 (図版16)

2区12C20、S B 185の南東にある長方形の土坑である。長軸2.4m・短軸1.1m・深さ約45cmである。炭化層は北東部を中心にはば全体に堆積しており、この上には灰層が認められた。遺物は炭化層を中心まとめて出土している。SD 198との重複関係は不明である。

SK196 (図版15)

2区12C25、調査範囲西端にある方形の土坑である。調査範囲の隅にあり、全形を知り得ない。南北2m、東西150cm、深さ15cmを測り、南側に段を有する。

SK199・SK200 (図版16)

2区12C2、S B 185の南にある土坑である。SK 199は不整円形を呈し、径約125cm、深さ20cmで、中央が一段凹む。SK 200は不整形で長軸1.7m、短軸1.1m、深さ20cmを測る。覆土はともにIV b層類似の黒褐色土である。

SK201 (図版19)

1区12D2にある土坑で、長軸1.2m、短軸0.8mの不整形で深さは約30cmである。埋土は、下面是炭層があり、上面は炭片を含む黄褐色土である。出土遺物は、灰釉・須恵器・土師器片である。埋土の状況から、人為的に埋められた可能性が強い。

SD209 (図版18)

1区12Cから12D3にかけて北西方向に延びる溝で、途中切れている部分もあるが、連続していたものと思われる。きっちとした掘り方をしておらず、幅は約50cm、深さ10~20cmの断面U字形である。

SK251・SK252 (図版16)

2区13C16、調査範囲南端にある土坑である。調査範囲の隅にあるため、全形は知り得ない。ともに覆土中に炭化層を有する。

SX184 (図版15・48)

13C21、S B 187の南東隅にある土坑で、土師器大形甌3個体、杯1個体を埋納する壺棺墓

と考えられる。南側は排水溝により遺存しない。平面形は不整梢円形と推定され、現長軸96cm・短軸70cm・深さ25cmを測る。底面には段を有する。覆土は暗灰白褐色土中に細かな炭化物・灰土粒を含み、酸化しており非常にしまっている。底面から少し浮いた状態で甕3個体と杯一個体が出土した。甕は2個体を同一方向に重ね、もう一個体を逆方向に口縁部を合せて横たえてあり、この東側に杯が置かれていた。

SD51 (図版3)

3区東端の14D 5・14C 25にある南北方向の溝である。南北25mにわたって検出され、南北両端は調査区外へのびる。溝はほぼ直線的で、方位はN-6°-Eである。上端幅1~1.5m、深さ50~60cmである。底面は水平であり、たちあがりは明瞭である。覆土の最下層と上層は微砂層であり、中層はIV b層の流入土を含むと考えられる黒っぽい粘質土である。出土遺物はほとんどないが、SD 103・SD 104などと同一層位にあり、これらと同時期の所産と考えられる。規模もSD 103・SD 104とほぼ同様で、SD 103とほとんど同じ方位であり、約50mの間隔で平行関係にある。溝の機能も共通すると考えられる。

SD101 (図版9・43-3)

3区西端・2区東端にある南北方向の大規模な溝である。発掘調査時はこれを自然河川と考えたが、きわめて直線的であること、方位がSD 103などとほぼ一致することなどから人工的な溝と考えるに至った。この溝については大グリッドのC・D界上で断面を確認し、すべては発掘しなかった。3区においては溝はほとんど直線的であり、上端は幅9m前後、深さ約1.6mである。方位はN-10°-12°-Eである。2区では西側の上端のみ検出されたが、これからすると溝はゆるく西側に曲がり、幅も太くなる。溝の覆土上層にはIV a1層が存在しておらず、この溝はIV a1層が形成された時期以降には機能していたと考えられる。溝の壁は直線的でなく、段をもつ。西側はこれがとくに顯著で3つの段がみとめられる。覆土は下半が砂礫層と砂層の互層であり、上半はシルトである。東西両側の上端から壁面にかけてはIV a1層あるいはIV b層の流れ込みと思われる土層がみられる。出土遺物はごく少なく、土師器細片がわずかに出土した。この溝の覆土は1~3cm大の礫を含むことからみて、洪水などにより一時的に埋没したものと推測されるが、こうした状況は、これより約200m東方の一之口遺跡東地区で検出された旧正善寺川と基本的に一致している。この旧正善寺川は最上層の覆土と遺物からみて、11世紀中葉~後半には流量のごく少ない浅い淀みとして残っていたものの、その下のシルト層と砂礫層からは10世紀を下限とした遺物しか出ていないことから、この時期にほとんどが埋没したものと考えられる。したがって同じシルト層・砂礫層をもつSD 101についても旧正善寺川と同時に10世紀頃に埋没したことが想定される。この溝の機能は明確ではないが大規模な農業用水の可能性が強い。なおこの溝は正善寺川の氾濫原によって切られており、溝が埋没したのちに正善寺川の浸食を受けて現在の段が形成されたものと考えられる。SD 101の西側に幅2~3m・深さ30cm前後の深い溝がある。この部分の覆土はSD 101最上層と同一でIV b層を切って

いる。この溝は南側でひろがって、正善寺川の氾濫原との段差縁辺にいたる。これによって S D 101 との間に島状の高まりが形成される。

S D 103・S D 104・S D 109 (図版5・6・8・42・43)

3区にある3本の溝で、いずれも同時に存在したものでありそれぞれ互いに関連した機能を有するものである。S D 103・S D 104は南北方向、S D 109は東西方向で、3本は1点において交差する。S D 103・S D 104は昭和59年度に検出されたもので、57年度にはS D 104の東側上端がごく小さな溝として確認されていたが未確認であった。この部分のプランは59年度にすでに工事盛土されていたところに2箇所ずつ試掘坑を設定し、確認した。

3本の溝はそれぞれほぼ共通した規模で、ほとんど直線的である。これらは調査区南端の14C22において交差する。交差する地点から西側に東西方向のS D 109 A、北側に南北方向のS D 104 A・S D 103 A、東側にS D 109 B、南側にS D 103 B・S D 104 Bが位置する。S D 109 Bは交差部より長さ9m東で途切れる。交差部より北側2~3mで、S D 104 AとS D 103 Aは分かれれる。2本の溝の方向と接点の状況からみて、S D 104 Aが主流で、S D 103 Aはこれから分岐するようである。この接点に3列の杭列がある。S D 103 AはS D 104 Aの底面レベルより一段高くなっている。これより南から北にむかってごくわずか傾斜する。S D 104 Aも同じ傾斜をなす。S D 104 Aは幅1.2~1.5m・深さ1m前後であり、S D 103 Aはこれよりやや小さく幅1~1.2m・深さ70~80cmである。覆土は両者とも夾雜物をほとんど含まない砂層で下層は青灰色となる。S D 103は上部が浅く広くなっている。部分的に幅約5mになる。溝の方位はS D 103 Aが約N-8°-E、S D 104 Aが約N-16°-Eである。覆土は奈良・平安時代包含層のIVa1層を切るように存在している。しかし、溝内出土の遺物が少量ながら10世紀を下限とすることや、一部の平安時代の建物・鉢状小溝など(S B 301・b群)との切り合い関係が推定されることから、平安時代中期には溝が存在したものと考えられる。また、夾雜物をほとんど含まない砂の覆土を一時的な洪水堆積と考え、前述のS D 101の同様、旧正善寺川と同時の埋没を想定すれば、10世紀のうちに完全に埋まって機能を停止したものと推定される。

杭列は分岐したS D 104の部分(杭1~5)と合流部(杭7~17)の2ヶ所に認められ、ともに流れに直交する方向で並んでいる。このほか、この付近に杭6・18・19が点在する。杭はほぼ垂直に打ち込まれ、杭4・5が丸木、ほかは角材及び板材である。杭の頂部は腐食しており、検出部分は短く、中には若干溝底面を掘り回めて検出されたものもある。打ち込まれた深さには差違があり、深いものは1m近く打ち込まれていた。杭の長さは10~120cmで、先端は斜めに削って尖らせたものと、ほとんど手を加えていないものとがある。これらの杭列はその位置からみて、溝S D 104 Aの水位を上昇させ、S D 103 Aに水を導く堰と考えられる。

堤状高まりは3区14D2・3、14C22・23で、S D 104に沿って検出された。幅1.0~1.4m・高さ10~15cmの扁平な高まりである。これは灰白色粘土中に淡褐色土(IVa2層)が若干混入し、IVa2層と極似するが、IVa層と比べ粘性が強く、堅くしまっている。この造構は、溝に

浅く広い溝縁のある部分では判然としないが、Ⅳa2層にほかよりも多く灰白色粘土を含んでおり、本来存在したことが推定される。また、Ⅳa2層と似ているため、発掘調査時に一部削平してしまった部分もある。この堤状高まりはSD 104との位置関係からみて、これに伴う可能性も想定されるが、そうした場合、溝の掘削時期が平安時代を巡ることも考えられ、57年度調査で確認していない鉢状小溝b群との切り合い関係はなかったと考えざるを得ない。

SD 109 Aは幅1~1.5m・深さ50~60cmである。ほぼ直線的で、方位はほとんど東西から偏航しない。溝は西から東にむかってわずかに傾斜する。覆土は上層に砂・下層に粘質土・最下層に粗砂となり、両側の壁際は流れ込みによる土がみられる。遺物はほとんど出土していない。最上層の砂はSD 101の最上層とはほとんど同一で、切り合い関係はみられず、同時に機能していたものと考えられる。SD 101をはさんだ西側の延長線上にSD 109 Aとみられる溝が存在しないことも、これを裏付けると思われる。(SD 103 B・SD 104 B)交差部の南側の2本の溝は幅にかなりの差があり、西側のSD 104 Bは幅約1m、東側のSD 103 Bは幅約3.5mである。SD 104 Bは交差部北側のSD 104 Aと一直線上に位置し、規模もほぼ同じである。

SD110 (図版8)

3区南端14D21にある東西溝である。規模はSD 109とほとんど同じであり、幅1~1.2m・深さ60cm前後である。方位は約N-80°-Wである。覆土もおおむねSD 109と同じである。調査区南端の溝延長上は幅が広くなる。この部分の覆土も溝と同一である。SD 101との切り合い関係はSD 109同様みられない。

SD113 (図版4)

3区14D 3に位置するN-27°-Eの溝で、Ⅳa層あるいはⅣa2層から切り込む。幅60~70cm・深さ20~30cmを測る。覆土はⅣa1層類似の暗灰色土・Ⅳa2層類似の灰白色砂・Ⅳb層類似の黒褐色土等がレンズ状に堆積しており、平面確認は覆土が周辺の基本土層と類似していたため困難をきたした。これと切り合うS E 116より新しく、ピット103より古い。

SD122・SD123 (図版4・6)

3区14D 3、14C23にある深い溝である。Ⅳa層から切り込んでおり、SD 122はN-45°-55°-Eでのび、幅約55cm・深さ約15cmを測る。SD 123はN-25°-Eでのび、幅約40cm・深さ約20cmを測る。SD 123は14C23Ⅳ iでSD 122に合流する。覆土はともに上層が灰白色砂(Ⅳa2層)で、下層はSD 122が暗灰色粘土・黄茶色砂、SD 123が灰色砂である。SD 122はSD 128より新しく、S B 124・S B 125より古い。

SD120・SD121 (図版6)

3区14C23、発掘区の南端にある深い溝である。この周辺には、Ⅳa層が存在せず、溝はⅥa層から掘り込んでいる。SD 120は幅40~80cm・深さ20cmを測る。SD 121は幅2.8~3.2m・縁辺の深さ10cm、中央の溝幅40~80cm、深さ30cmを測る。覆土はともに灰白色砂である。

SD128 (図版6)

3区14C23にあり、ほぼ東西にのびる浅い溝である。この周辺もIV b層が存在せず、溝はVI a層から掘り込んでいる。幅50~90cm・深さ約25cmを測り、14C23IV fで幅約150cmと広がり、深さ約10cmと浅くなつて消滅する。覆土は暗灰色土で、途中にレンズ状に堆積する茶褐色の腐植土層を有する。西側をSD122に切られており、東側ではSD109と切り合っているが、SD109との新旧関係は不明であった。

SD129 (図版5)

3区14D3・SD104の西側にあたり、ほぼ南北にのびる浅い溝である。IV b層から掘り込んでおり、幅約70cm・深さ約20cmを測る。覆土は灰褐色砂である。SD104にともなう堤状造構と接して存在するが、これとの関係は不明であった。

SD102 (図版7)

3区14D1・SE107付近にあり、N-40°~60°-Eでのびる浅い溝である。幅60~75cm・深さ15cmを測り、覆土は淡青色砂である。IV a層より上から切り込んでおり、重複するSE107・SB127より新しく、本遺跡では最も新しい時期に属する造構である。

SD142・SD144 (図版10・44)

SD142とSD144は2区13C24・25、13D5・10のほぼ同じ場所にN-15°~25°-Eでのびる南北溝である。SD144は幅90~150cm、深さ100~115cm、SD142は幅100~140cm、深さ80~100cmを測り、ともに底面は緩く北へ傾斜する。SD144はVI b層から掘り込んでおり、覆土は砂・シルトを基本とする。SD142はSD144埋没後、VI a層から掘り込んでおり、覆土は砂・シルトを基本とし、下層へいくに従って砂のきめが荒くなる。しかし、これらの溝周辺のみIV b層の堆積が認められず、本来の切り込み面がIV b層の可能性が残る。

両溝はSB141・SB169と重複しており、SB141は柱穴3・9がSD144を掘り込み、柱穴1と北東隅の柱穴がSD142に切られている。SB169は柱穴1・2がSD142を掘り込んでいる。このことからSD144-SB141-SD142-SB169の順序が認められる。またSD101との関係は今回不明であった。

歛状小溝 (第11図)

「歛状小溝」とは幅数10cm・深さ数cmから10cm前後の小さな溝が1m前後の間隔で平行に並んで群をなす造構をいう。こうした造構は、春日・木田地区の池田遺跡〔鈴木俊成1985〕、上越市今池遺跡・子安遺跡〔新潟県教育委員会1984〕でも検出されており、鬼の歛の痕跡と考えられている。当地区ではこの種の造溝が広い範囲にわたって検出された。溝の方向はほとんどが東西で、その方位と分布状況から、ほぼ10の群に分けられる。ここではこれらをa~j群と呼称する。溝の方位はおおよそ次の3つに分類され、それぞれほぼ同様の方位の建物が存在する。

- ① ほとんど東西方向 (N-90°-E) のもの (g・h・i・j群)
- ② 東西から南へ10度偏東 (N-約80°-W) するもの (a・b・c・e群)
- ③ ②とは逆に東西から北へ10度偏東 (N-約80°-E) するもの (d・f群)

このうち e 群・ f 群については同一群内にやや方向が異なるものを含む。溝の覆土は 3 区では IVa2 層とほとんど同じであり、 2 区では IVb 層が主体を占める。出土遺物は少ない。以下それぞれの群について述べる。

a 群 3 区 14D 4 の S B 124 の東側を中心に分布する。幅 20~30cm の溝が 10 条以上平行しており、西側の端はそろっている。この北側にも不明瞭ながら、同じ方向の溝が存在する。方位は N-約 73°-W であり、 S B 124 · S B 125 とほぼ同じ方位のこの溝は SK 1 を切っており、 S B 124 · S B 125 の柱穴と切り合い関係はみられないが、重複する位置にある。 S B 124 付近は建物の建て替えがみられ、新しい時期の建物とこの畝状小溝が併存したことも考えられる。この地点の IVa1 層上位からプラント・オバールが検出されている。

b 群 3 区 14D 8 の S B 301 の南側、 S D 103 A · S D 104 A にはさまれた位置にある。長いもので 7m 、短いもので 2m ほどで、約 1m 間隔に 10 条以上ならぶ。方位は N-72° ~ 74°-W である。この方向は建物 S B 301 とほぼ同じである。 S B 127 · S E 107 · S K 105 の遺構群と関係する可能性もある。なお、調査時には S D 103 A · S D 104 A は未確認であったため、畝状小溝との切り合い関係が存在したか否かは不明といわざるを得ない。しかも、畝状小溝が 2 本の溝にびつたり挟まれて存在するという位置関係は、畝状小溝 b 群が、 S D 103 A · S D 104 A に切られた可能性を示唆しているとも考えられる。

c 群 3 区 14D 2 にある。約 1m 間隔で 8 条ほど存在する。長いもので約 8m で東西両端はそろっていないが、確認時にやや掘り過ぎたこともあります、元来そろっていたものと考えられる。

d 群 3 区の C 群の南側に分布する。 C 群と方位が異なり、 N- 約 82°-E である。長いもので約 16m あり、東西の両端は不揃いで間隔もあまり一定していない。この付近にはこれと関連すると考えられる建物などの遺構はみられない。

e 群 2 区 13D 3 · 4 にある。太いものは幅 50cm で、約 10 条存在する。東西両端はそろっておらず、間隔・方位など一定していない。方位は南側は偏角が小さく N- 約 84°-W 、北側は大きく最大 N-72°-W である。間隔は 1.5 ~ 2.0m である。方位は S B 162 とほぼ同じである。西側の f 群との間に南北方位の同一規模の溝があるが、これとの切り合関係は明確ではない。なおこのうちの 2 条は 2 ~ 2.5m 間隔で平行していることが注目される。この付近には地山に小さな黒色土ブロックがはいり込んで斑点状を呈す(図版 45-3)。これは牛などの足が強くふんばることによってできたものと考えられる。同様のものは f 群・ h 群の周辺でもみられた。

f 群 2 区 13D 2 · 3 、 e 群の西側にある。方位は N- 約 75°-E で北側の 5 条ほどはとくにそろっている。この部分では間隔は約 1m で、これより南側では 1.5m ほどで、方位が異なるものが交錯している。方位の異なるものは東西からの偏角が小さく、ほぼ東西方向に一致するものもある。これについては f 群の南側に分布する g 群などとの関連が考えられる。南北方位の溝が数条存在するが、東西方向の溝との切り合い関係は明確ではない。 e 群・ f 群とも方向をやや異にするものが重複しているのは、これに近接する S B 151 · S B 162 · S B 168 の建

物の方位が一定していることと関係することも考えられる。.

g群 2区13D23にある。長さ2~5mの短かいもので、間隔70~80cmで4条ならんでいる。方位はほぼ東西(N-90°-E)である。この西側に長さ12~14mの2本の平行した溝がある。これらも同じ方向である。またS B 152と重複する位置にも東西方向の長さ15mの溝がある。以上3本の溝は畠状小溝と異なる性格と考えられる。

h群 2区南側端、S B 185の周囲にあるもので、もっとも密に溝が存在する。溝はS B 185とその東側の井戸・土坑群とは重複せず、この北側から東側にかけて閉むようにして分布する。したがって建物・井戸・土坑との関連が想定され、同時に併存したものと考えられる。溝の東端はほぼ一直線にそろっており、明確な溝群の範囲が把握される。それぞれの溝は輪郭が不明瞭で底面が水平でなく小さな凹凸が多い。

S B 185の北側は長さ12mほどの溝が6条ほど、ほぼ東西方向(N-90°-E)にならんでおり、間隔は0.5mほどである。これらはS E 183やS K 180などの土坑群の北側の溝群と連続せず若干の空間がある。一部2本の溝が重複して太くなっているものもあり、2時期のものが重なったことが推測される。このことはほかの部分でも同様である。井戸・土坑群の北側の溝は長さ約20mの長いもので、重複して太くなっているものが多い。この東部分はあまり重複しておらず、溝の間隔は約1mである。方位は西側がN-約85°-Wであり、東側はほぼ東西方向にそろっている。土坑群の東側は長さ7~8mで、方位はほぼ東西である。南側は溝の長さが長くなり、調査区南側にさらに連続して存在するものとみられる。

i群 2区のh群の北側に数条みられるもので、方位はほぼ東西方向(N-90°-E)である。この周辺は地山が黒色土ブロックによって著しく斑点状をなして、遺構の検出が困難な状況であったため多少N b層を厚く除去した。そのため溝が若干削平されたことも考えられる。

j群 1区東端、S B 208の周囲にある。方位はほぼ東西方向(N-90°-E)で、間隔1~1.5mで10条ちかく存在する。S B 208とは重複せず、これと併存したと思われる。

B. 古墳時代末期・奈良時代前期

SB187 (図版14・15・49-6)

2区13D1にある建物であるが、柱穴の配置に不明確な点がある。東西方向の柱穴は1間(3m)、3間(9m)、2間(6.5m)の3列があり、それぞれの柱穴例の間隔は2.0m、5.0mで位置は南北でほぼ一致する。平安時代の建物と比べて柱間寸法が長い。柱掘形は方形ではなく、径50~70cm・深さ40~90cmである。柱根が3本遺存しており、いずれも礎板が伴なっていた。柱根は径約10cmで断面は方形にちかい。土師器(196・197・204)が出土した。

SK165 (図版14)

2区13D1・2にあるごく浅い落ち込みで、土器は少量出土した。覆土は暗褐色土である。

第IV章 遺物

一之口遺跡西地区の出土遺物は平安時代のものが大半であり、このほかにいくつかの時期のものが少量含まれている。平安時代を除くと、弥生時代末から古墳時代初頭、古墳時代中、後期、古墳時代末期から奈良時代前期、中世、近世の各時期にわたる。このなかでは古墳時代末期から奈良時代前半のものがやまとまっているほかは、ごく少量にすぎない。ここではまず主体をなす平安時代について述べたのち、これ以外についてとりあげることにする。

1. 平安時代

A. 土器

平安時代の土器には須恵器・土師器・灰釉陶器がある。土師器には器面に炭素を吸着させて黒色処理する黒色土師器（いわゆる黒色土器）もある。全体の出土量はコンテナ約20箱である。このうち土師器が大半を占めており、須恵器は少なく、灰釉陶器はさらに少ない。

土器は包含層のほかに、井戸・土坑・溝などの遺構から比較的まとまって出土している例があり、これらをまず述べることにする。これに該当するものはSE 153・SE 183・SE 107・SK 188・SK 145の出土土器である。これらについてはすべての器種を網羅すべく実測した。次に、遺構出土の土器でも遺存状況があまりよくなく、代表的なものについて実測したものは、SK 201・SK 191・SK 194・SE 143・SK 179の出土土器である。これは実測図の土器がそのままその遺構出土の土器全体の構成を反映してはいない。以上の遺構出土土器を補うために、他の遺構と包含層出土の土器を必要に応じてとりあげた。

土器の時期は平安時代のすべてにわたるものではなく、初頭から前半にかけてのものである。このなかでもほぼ2時期に大別できるようであり、ひとつは8世紀末葉から9世紀前半であり、もうひとつは9世紀後半から10世紀のものである。¹⁾量的には後者のものが大半であり、遺構出土のおもなものはすべてこの時期に該当する。これまで当期の一括土器として把握される資料はほとんどなかったことから、平安時代の土器編年上とくに注目される。

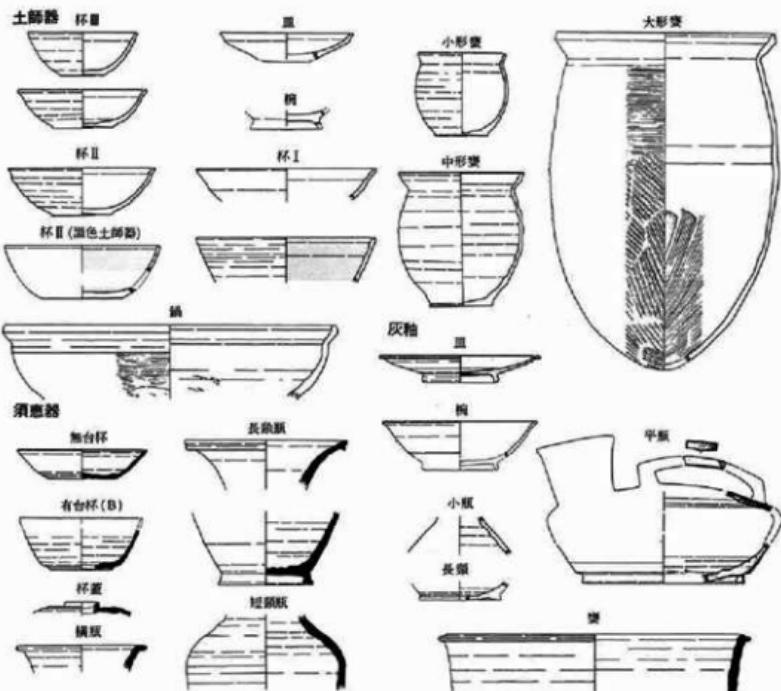
以下、須恵器・土師器・灰釉陶器に分けて、簡略に概観する。

須恵器 供膳形態と貯蔵形態があり、器種は無台杯・有台杯・杯蓋・短頸壺・壺蓋・長頸瓶

1) ここで述べる土器編年とその年代観については、当遺跡と同じ頃平野に所在する上越市今池遺跡群の土器編年（坂井秀介1984、以下「今池編年」と略す）に従うこととする。8世紀末葉から9世紀前半は今池編年のIV・V期、9世紀後半から10世紀はVI・VII期にあたる。VI・VII期については第V章で若干の検討を加えたい。なお、本書ではこうした土器様相の変化を考慮して、9世紀後半から10世紀を便宜的に平安時代「中期」とするが、これは文献史学における時期区分との整合性を意図してはいない。

小瓶・横瓶・甕などがある。「無台杯」は高台をもたない杯であり、これをもつものを「有台杯」とした。有台杯には身の浅いタイプ（図版27-124～127など）と身の深いタイプ（図版27-132）の二つの器種がある。身の浅いタイプを「有台杯A」、身の深いタイプを「有台杯B」とする。須恵器の供膳形態が多いのは9世紀前半頃までと考えられる。

杯類の底部切り離し技法には、ヘラ切りと糸切りのふたつの技法が存在する。糸切りはすべて回転糸切りで、静止糸切りはない。¹⁾両技法の時期的な消長は、ヘラ切りから糸切りへという単純なものではなく、併存するものと考えられる〔坂井秀弥1984〕。この背景にはそれぞれ異なる須恵器工人の系譜があるものと想定され、両者の工人組織が交流・融合することなく共存していたものと考えられる。



第12図 平安時代中期土器の主要器種

1:6

1) 以下、土師器を含めて単に「糸切り」と表記するが、すべて回転糸切りを意味する。

2) 具体的には、ヘラ切り技法は陶色窯を中心とする畿内系の系譜であり、糸切り技法は猿投窯を中心とする東海地方の系譜と推定される。北陸地方は基本的に畿内系であり、東海系の技法がみられるのは越後南部の頬城平野から越後中部南半に限られているようである。なお、両者の系譜は本格的に須恵器生産が開始される7世紀末葉から8世紀初頭〔坂井秀弥1983a〕から存在し、糸切り技法が消失する9世紀後半まで続くものとみられる（P64注1参照）。

貯蔵形態の多くは全体の器形を知りうるものがほとんどない。

土師器 供膳形態と煮沸形態がある。いずれもロクロを使用したものであり、ロクロを使わないもの（非ロクロ）は平安時代の土師器はない。供膳形態には無台の「杯」これに高台を付した「碗」、身の浅い「皿」がある。9世紀後半以降、供膳形態の主体は土師器が占めており、これらのうちの杯は量的にもっとも多い。杯は法量によってほぼ大・中・小の3器種に分類される。ここでは大きいものから「杯Ⅰ」・「杯Ⅱ」・「杯Ⅲ」とする。もっと多いのは口径11~13cm前後の小形の杯Ⅲであり、口径15cm前後の中形の杯Ⅱはこれに次ぐ量があり、口径18cm以上の大形の杯Ⅰはごく少ない。黒色土師器の器種もほぼこれに対応するものと思われる。調整は底面が回転糸切り無調整、ほかはロクロナデするものが大半であり、ごく少量底面以外をヘラ磨きするものがある。黒色土師器の黒色処理部分はヘラ磨きされ、底面はロクロ削りされるものもある。杯の成形は、土器の遺存状況や断面の観察からみて、粘土塊から挽き出したものではなく、体部は粘土紐を巻き上げて一次成形したのち、ロクロ回転を利用して形を整えたものと推定される。皿は少ないと、いずれも折縁の形態をとる。

煮沸形態は壺・鍋の2器種ある。壺は法量によってほぼ大・中・小の3器種に分類される。小形と中形の壺は回転糸切り無調整の平底で、ほかはロクロナデで、一次成形は杯と同じく粘土紐巻き上げである。大形壺は長胴で丸底であり、体部下半に叩き目をもつ。小形・中形の壺はほとんどのものが、外面全体と口縁部内面にススと炭化物が付着しており、体部内面には、これがみられない。口縁部の形態には「A形態」と「B形態」の二者がある。一般的なのはA形態で、口縁端部が上方へつまあげられて外傾する面をもつ。B形態はごく少数例（96・194・203）で、A形態とは異なり、外面が肥厚して下辺に稜をもつ。両者は胎土・色調・焼成も異なる。

鍋は法量による器種分化が明瞭ではなく、口径30cm以上の大形品ばかりである。口縁部の形態は大形壺と類似し、これと区別しがたいものもある。丸底で、外面に壺と同じ叩き目をもつ。壺と同様に口縁部が「B形態」のものがある。

出土した土師器の多くは、もろくて、器面が剝離・磨滅しており、遺存状況は不良であるが、井戸の下位から出土したものは硬質の焼成状況を保っている。したがって、地中の埋藏状況によって土器の質が変化すると考えられ、個々の焼成状況は記さないことにする。

灰陶器 量的には多くはない。碗・皿類がほとんどであるが、小瓶・平瓶・長頸瓶などもある。ほとんどは美濃窯産の製品であり、光ヶ丘1号窯式期〔田口昭二1983〕のものが多い。出土量としては県内で上越市下新町遺跡〔新潟県教育委員会1984〕に次ぐ。

1) 形態は須恵器の「杯」とは明瞭に異なる。すなわち、土師器の「杯」は須恵器のものより身が深く、口径に対して底径が小さいという差があり、器種としては別であると考えられる。しかし、「杯」と「碗」の明確な分類基準がなく、かつての器種分類〔坂井秀弥1984〕に準拠した。

1) S E 153出土土器 (図版21・30・51・52・56・61)

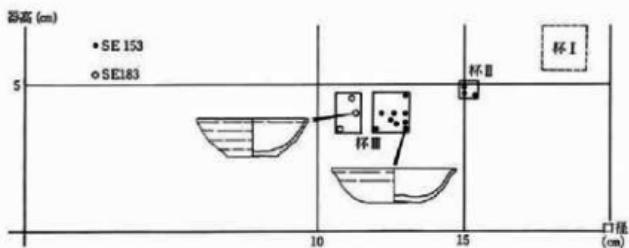
S E 153は2区13D 3に所在する井戸で、井戸を廃棄した際の埋土内からおもに出土した。土器は須恵器の長頸瓶1点と甕体部破片をのぞいて、すべて土師器である。土師器杯は遺存状況の良好なものが多く、一括土器として貴重な資料である。

土師器

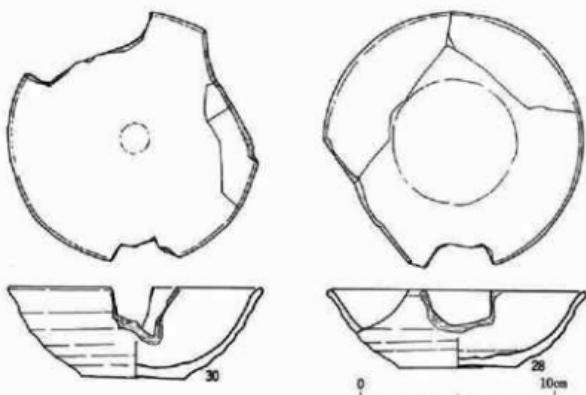
杯・皿・甕がある。固化したもの以外に、杯約10個体と叩き目をもつ大形甕か鍋の体部破片1点、及び叩き目のない破片2点がある。黒色土師器はみられない。

杯 (22~34) 法量から小形の杯Ⅲ (22~30) と中形の杯Ⅱ (31~33) に分けられる (第13図)。いずれも底面糸切り無調整、ほかはロクロナデである。杯Ⅲは口径12~13cm、器高3.5~4.6cm、底径5.3~6.0cmである。径高指数 (器高 / 口径 × 100) をみると30が35以上となるほかは、28~33の間におさまる。器形はほとんど共通しているが、若干の差により2種類に分けられるようである。ひとつは22~28のタイプ、もう一方は29~30のタイプである。かりに前者を「a類」、後者を「b類」とする。a類は相対的にb類よりも身が浅く、底部から体部は丸味をもって腰が張る形態をとる。口縁部はロクロナデによって短く外反し、口縁部外面下辺とこれに対応する内面にはロクロナデによって生じた稜が明瞭に観察される。これに対してb類は相対的に身が深く、口縁部はあまり外反しないものである。手法はともに共通しており、ロクロナデは内面のほうが外面より相対的に丁寧であり、器面が平滑に仕上げられている。ただし、23の内面はロクロナデか、あるいは調整に使用した工具などの痕跡かと思われる細かな凹凸や条線様のものがみられる。

24・25は口縁部の一端に片口のような部分をもつ。24は口縁端部をヘラ状のもので、えぐつようになっており、25はこれより大きく、親指の頭で外側に引き出したようである。27は口縁部の一部内外面に炭化状のものが付着しており (図版65)、灯火器などに利用された可能性がある。また、28・30の口縁部の欠損状況 (第14図) は、意図的な破損が想起され、井戸廃棄の際の祭祀との関連が考慮される。30は内外面にススのような黒色の付着物がみられるが、使用した際に付着したものかどうかは不明である。



第13図 S E 153・S E 183出土土器杯法量分布図



第14図 S E 153出土土師器杯破損状況

杯Ⅱは口径15cm前後、器高4.6～4.9cm、底径6.0～6.2cmで、径高指数約30である。32・33はほぼ同一の法量と器形・調整である。31は体部のひらきが直線的であるのに対して、32・33は丸味をもっており、口縁部は外反する。器壁は比較的均一で薄く、杯Ⅲと差はない。杯Ⅳと同様に内面のほうが外面より器面がなめらかである。

皿(34) 杯に比して量はごく少なく、このほかに1点あるのみである。口径約13cmで、器高は2.5～3.0cmほどと推定される。口縁部は上方へ屈折し、わずかに外反する。全体の器形を知りうる例はないが、平底で高台をもたないものと推測される。それは身のひらきがごく大きい底部(86・183など)が、杯のものとは考えられることと高台をもつ底部は皿とは考えられない体部のたちあがり角度であることから類推される。このような口縁が上方に屈折する形態は東海地方の須恵器や灰釉陶器の折縁皿に類似し、これを意識したものと考えられる。内外面ともロクロナデで、底面は糸切り無調整と推定される。

甕(36・37・39) 36・37は全体をほぼ残すが、39は大形甕の体部破片である。小形ないしは中形の36・37は調整は共通しており、底面が糸切り無調整でなかはロクロナデである。36は口径9.0cm、器高8.5cm、底径5.3cmである。口縁部は短く直線的にくの字に外反する。ロクロナデは内面が丁寧で、底部が渦巻状にナデられるほかは器面がなめらかで、外面には若干の凹凸がみられる。外面と口縁部内面にスス・炭化物が付着する。とくに口縁部内面には炭化物の付着が著しく、器肉も黒色に変色している。36より大きい37は口径12.8cm、器高13.7cm、底径6.5cmで、中形甕にあたると思われる。口縁部はくの字状に外反するが、外面下辺が肥厚し、この部分が段をなしている。体部下端はくびれる。体部外面のロクロナデの凹凸は大きい。39は外面に平行叩き目、内面に円形のあて具痕がわずかに残る大形甕の体部破片である。

須恵器

長頸瓶 (38) 口縁部は水平に外反し、端部は上下にのびる。上方へのつまみあげは鋭く、その側面はくぼむ、外面はきれいでロクロナデされるが、内面はラセン状のロクロナデ痕が明瞭に残る。体部破片はまったくないほか、口縁の一部を欠損する。頸部と体部の接合部にあたる破損部は意図的に割ったような状況を呈している。

甕 (209) 体部破片で外面は平行叩き目とカキ目、内面は同じ内文あて具痕である。

2) S E 183 出土土器 (図版20・51・56・61・64)

S E 183 は2区13C16に位置する井戸枠をもつ井戸である。土器は最上層の井戸枠内と掘形の区別のない部分から多く出土し、全体の7~8割がこれにあたる。しかし、これらの土器のうち土師器は遺存状況が不良であり、逆に下層出土土師器は良好な遺存状況である。そのため土師器は下層出土のものを中心で実測し、これにない器種は上層出土土器から実測した。10・12~14・17・19~21が最上層出土で、ほかは下層出土である。土器様相は各層とも共通するところが多い。土器の大半は土師器で、ほかに須恵器若干と灰釉陶器1点がある。

土師器

杯・甕・鍋がある、杯には黒色土師器もある。

杯 (1~9) 7~9は黒色土師器である。法量からみて、中形の杯II (4・9) とこれより小さい杯III (1~3) に分けられる。8は体部小破片のため不明である。

杯IIIは口径11cm前後、器高3.5~4.5cm、底径4.5~5.5cmほどである。1・2は体部下半がくびれるのに対し、3は丸味をもち、身が若干深い。S E 153出土の杯IIIと比較すると、法量はやや小さく、形態を異にするものが多い(第13図)。当例の径高指数は33~40で、S E 153出土例よりは相対的に身が深い形態であることがわかる。また、当例は口縁部の外反度が小さく、口縁部外面下辺の稜はS E 153出土例ほど目立たない。S E 153出土例のうちa類のほうがより違いが明瞭である。調整は底部糸切り無調整、ほかはロクロナデであり、内面はこれが丁寧で凹凸をほとんど残さない。2の外面はとくに凹凸が顕著である。

底部のみ遺存する5・6・7は大きさからみて、杯IIIと考えられる。7の黒色土師器は底部の糸切り痕をそのまま残す。

杯IIは口径15.0cm、器高5.5cm前後で、9もほぼ同じ大きさと推定される。底径は4が7.0cm、9が7.6cmであり、5cm前後の杯IIIとは区別される。4は底部糸切り無調整のほかは、ロクロナデのうちに内面と口縁部外面にヘラ磨きを加える。ヘラ磨きは口縁部内外面が横方向、内面下半が放射状の方向であるが、暗文のような手法はみられない。ただし、ヘラ磨きは器面上にまんべんなく施すものではなく、ロクロナデの部分を残しており、口縁部外面はロクロナデの凹凸もそのまま残る。9は内面にヘラ磨きを施し、底面は一方向のヘラ削り、体部下端の底部との境をロクロ削りする。この土器の内面は明瞭に黑色処理したような状況ではなく、ススが付着したようなものであるが、火を受けたような痕跡がみられることと、底部と体部下端の

ヘラ削りの調整技法は黒色土師器に特有なことから、黒色処理したものが火を受けて、炭素が消失したものと判断される。

8は内外面に黒色処理とヘラ磨きを施す例である。内外面とも黒色処理するものはほかに18の1点しかない。ヘラ磨きは内面が放射状に、外面が横方向であり、内面はとくに丁寧に施されている。

甕 (15~19) 法量からみて、大・中・小のほぼ三者に分けられる。

16は口径8.0cmの小形甕である。体部から口縁部はくの字状に外反し、短くわずかに内湾する。内外面ともロクロナデで、底部は糸切りの平底と考えられる。17は口径13.0cmで、体部からゆるくくの字状に直線的に外反する。内外面ロクロナデである。18は底径9.4cmで、底面は糸切り無調整で、ほかはロクロナデで、内面はその凹凸が目立つ。全体に器壁が厚く、中形甕でも大きめのものと推定される。19は小破片のため法量が明確ではないが、口径20cm前後の大形甕と推定される。くの字状に外反した口縁端部は短く屈折して上方へつまみあげられ、その外側はくぼむ。口縁部内面下半と体部上端はカキ目、ほかはロクロナデである。全体の器形はS X 184出土の甕と同一で、底部は丸く、長胴形の体部下半に叩き目を残すものと推定される。体部の破片の15はこの種の大形甕のものであり、外面は平行叩き目、内面はカキ目と一部にあて具のようななつかかな円形のくぼみがみられる。外面は厚くススが付着する。

鍋 (20・21) 20は口径27cm、推定高10.5cmほどである。底部は丸く、体部から口縁部はゆるく短く外反する。口縁端部は上方へつまみあげられ、形態は大形甕19と共通する。体部にはロクロナデの凹凸が目立ち、この凸部のみにカキ目が施される。外面の体部から底部にかけては平行叩き目、内面は口縁端部をのぞいてカキ目である。外面の叩き目に対応する内面部分はあて具痕と思われるくぼみがみられるが、器面が剥離しているため不明である。口縁部内面から外面にかけてススが付着する。21は口径約34cmの大形品である。口縁端部は肥厚し、内側上方へ巻き込むようにつまみあげられる。器面は剥離しているが、内外面ともロクロナデのようである。

須恵器

須恵器は土師器と比較して著しく少ない。無台杯・有台杯・杯蓋があるが、甕・瓶類などは1点も含まれていない。

無台杯 (11・12) 2点とも法量・器形とも共通する。口径13cm前後、器高約3cm、底径7cm前後である。土師器の杯に比して、身が浅く、口径に対して底径が大きく、形態は異なる。

体部のひらきは大きく、ほとんど直線的で、口縁部も外反しない。底面はヘラ切りでかるくナデられ、ほかはロクロナデである。器壁は底部を含めて全体に薄い。内面の底部と体部の境はくぼみ、その内側は器壁が厚く盛りあがっている。11の口縁部内面はロクロナデでくぼみが明瞭である。11は内外面ともスス状のものが付着し、黒くなっている。

有台杯 (13) 底部を欠くが、大きさからみて、有台杯と考えられる。口径16.5cmで、体部

のひらきは大きく、口縁部はわずかに外反する。内外面ともロクロナデの凹凸がみられるが、内面がとくに著しい。

杯蓋 (10) つまみは中央部が大きくくぼみ、輪状のようである。天井部は水平で、体部にかけてわずかに屈折する。天井部内面周縁は器壁が厚く盛りあがり、その内外がくぼむ。これは無台杯の特徴と同様であり、器壁が全体に薄いことも共通している。つまみは天井部の中央を浅くえぐり込んで貼り付けている。天井部と体部との境はロクロ削りするようであり、ほかはロクロナデである。内面はよく磨滅する。

灰釉陶器

14の1点のみである。平瓶であるが、SE 183から出土したものは底部から体部の破片のみであり、天井部と提梁はそれぞれSB 185柱穴・SK 194から出土したものである。底部から体部の破片は全体の1/4を残し、高台をもつ。底部は中央が高台接地面より突き出すべく垂れ下がり、高台はその周縁部に外端接地面より角高台が貼り付けられている。体部下半はロクロ削りで、底面はナデが施されている。体部内面はロクロナデで、器面の凹凸が大きく、底部内面は粗雑にナデられているのみである。提梁は幅広で断面は長方形を呈す。全面をヘラできれいに整形するが、下面是平滑ではなく、中央に稜をもつ。全面に釉がかかるが、自然釉かどうか不明である。天井部破片には厚く淡緑色の釉がかかる。

3) SE 107 出土土器 (図版22・52・56)

土器の大半が上層から出土しており、図化したもののうち50・52のみが下層出土である。須恵器は2個体の小破片が含まれているだけである。1点は包含層出土の短頸壺(164)と同一個体で、もう1点は奈良時代前半と考えられる大ぶりの杯蓋縁部破片である。

土師器

杯・甕・鍋がある。

杯 (47~54) 大形の杯I (54) と小形の杯III (47~52) がある。底部遺存例のうち中形の杯IIと推定されるものが2~3点ある。杯IIIのうち52は形態・調整技法がやや特異であり、47~51は一般的なものである。47~51は口径11.4~13.0cmで、器高は底部まで遺存する50・51が3.8・3.7cmである。このうち50が相対的にやや小さく、口縁部がややたちあがり気味で外反しないなど、形態上もことなっている。法量からすれば、50はSE 183出土杯IIIに類似する。ほかのものは口縁部がわずかに外反し、51の径高指數29はSE 153出土杯IIIに相当する。48の口縁部外面下辺にロクロナデによる明瞭な稜が生じているのはSE 153例と同様である。一方、52は口径13.3cm、器高5.1cm、底径4.5cmで、身がとくに深く(径高指數39)、口径に対する底径の比率が約1/3とかなり小さい。これは底面糸切り無調整で、ほかをロクロナデしたのちに、内面と口縁部外面をヘラ磨きを施している。ヘラ磨きは横方向である。外面は伏せた状態で4~5回に分けてヘラ磨きしている。50・52は胎土・色調が共通しており、出土地点も同じ

である。同一時期のものとして考えられる。47と53は内外面ともススのような黒色の付着物がみられる。とくに内面は均一に黒くなっている。

大形の杯I（54）は口径18.4cmである。内外面ロクロナデで、口縁部外面下辺に明瞭な棱をもつ。外面に粘土紐の接合痕がみられる。

甕（55・56） 55・56は中形甕である。55の口縁部は体部からくの字状に外反し、ゆるく上方へ屈折してたちあがり、端部はつまみあげられている。これによって、外端部に凹線状のくぼみがみられる。底部は径6.5cmの糸切り無調整で、中央があがる。内面下端はロクロナデによる凹凸が大きい。外面から口縁部内面にかけてススが付着する。56もほぼ同じ大きさの底部である。ほかに大形甕と考えられる叩き目をもつ破片が存在する。なお、懐かと考えられる把手の小破片があるが、これは胎土が粗雑で、砂粒を多く含んでおり、非ロクロの土器であることから、奈良時代前半のものと推定される。

鍋（57・58） 57は器壁が厚いつくりで、小破片であるが、鍋と推定される。口縁部は短く直線的にひらき、端部は上方へつまみあげられる。外面の口縁部と体部との境は凹線状となる。

58は上層から出土したにもかかわらず、硬質のものである。口縁部はわずかに内湾気味にひらき、端部は上方へつまみあげられる。体部外面上半には粗いカキ目、下半はヘラ削りで、わずかに平行叩き目と思われる痕跡がみられる。この叩き目に対応する体部内面下半にはあて具痕と思われるものもみられる。

4) SK 145 出土土器（図版23・53・57・63）

須恵器2点、灰釉陶器2点のほかはすべて土師器である。土師器の遺存状況は不良である。

土師器

杯（69・70） 小形の杯IIIで、口径12cm前後、器高3.6～4.0cm、底径5.0～5.3cm、径高指数30～33である。体部は若干丸味をもち、口縁部はほとんど外反しない。

皿（71） 口径13.8cm、推定高約3cmである。底部は遺存しない。口縁部は明瞭に上方へ屈折し、やや外反する折縁の形態をとる。大きさはSE 153出土の34とはほぼ同じである。

甕（75～78） 75は口径13.0cmの中形甕で、口縁部はゆるく内湾気味である。口縁部内面から外面にススが付着する。76は口縁部を欠失するが小形甕と推定される。底部は糸切りで、体部外面下半はロクロ削りする。77は口径21.8cmの大形甕で、口縁端部は面をもつが、上方へのつまみあげはゆるい。内外面ロクロナデである。78は体部上半と底部のみ遺存するもので、外面は上半がカキ目、下半から底部が平行叩き目、叩き目に対応する内面が円形のあて具痕が残る。外面には厚くススが付着する。

鍋（79） 体部外面下半は凹凸の小さい平行叩き目で、ほかはロクロナデである。口縁部は外上方へ直線的にひらき、端部はロクロナデによって外側に広い面をもつ。

須恵器

無台杯1点のみである。口径12.2cm、器高3.0cmで、底面はヘラ切り、ほかはロクロナデである。底部内面の周縁は器壁が厚くなり、その外側がくぼむ。

灰釉陶器

楕の破片が2点ある。同一個体の可能性もあるが、口縁部破片はごく小さく不明確である。

73の高台はいわゆる三ヶ月高台で、外端部を面とりし、この上が肥厚し、内面がくぼむ。内面に刷毛塗りによる施釉がみられる。内外面ともロクロナデである。74は口縁部で、端部は外方へつまみ出される。内外面ともに施釉される。

5) S D 188 出土土器（図版24・25・53・56・57・61・64）

S D 188はS B 185の北側の雨落溝で、遺物の出土量は比較的多い。土師器が大半で、須恵器若干と灰釉陶器2点を含む。土師器は遺存状況が不良である。

土師器

杯・皿・甕・鍋がある。このほかに器種不明なものが2点ある。このうち1点は製塙土器の可能性もあるが、ここに含めておく。

杯（80～85・87） 法量からみて、小形の杯Ⅲ（80～84）と杯Ⅱ（87）がある。87は黒色土師器である。大形の杯Ⅰは破片でも明確ではない。

杯Ⅲ（80～84）は口径11.0～12.6cm、器高3.5～3.9cm、底径4.9～6.0cmである。このうち80はやや小ぶりで、器高がやや高く（径高指数35）、底径が小さいなど、ほかのものとはやや形態が異なる。ほかのもの（81～83）はいずれも径高指数約30で、底径も80よりは大きい。法量からいえば、80はS E 183出土土器の杯Ⅲ、81～83はS E 153の杯Ⅲと類似する。ただし、81・82は口縁部外面にロクロナデによって生じる稜線がS E 153出土杯Ⅲ（22～28）ほど明瞭ではなく、83のみ口縁部がわずかに外反するものの、81・82は外反せず、口縁部内面にロクロナデのわずかなくぼみがみられる。

杯Ⅱは全形を残すものがない。85は底径6.5cmで、器壁が厚いことから杯Ⅱと考えられる。87は内面を黒色処理する。遺存状況が不良なため、調整が不明瞭なところもあるが、底面の糸切り痕は観察される。

皿（86・90） 90は口径約18cmで、S E 153出土例（34）・S K 145（7）よりはかなり大きい。口縁部は外側上方へ短く折れ、外反する。86は底部のみ遺存するが、大きさや胎土などは90と類似し、同一個体の可能性がある。底径5.7cmで、底面はくぼみ、糸切り痕を残す。内面中央は親指の指頭ほどの大きさで円形にくぼむ。

甕（95・96・101） 95は小破片であるが、大形甕の口縁部である。口縁端部は短く屈折してたちあがり、この外側が凹線状にくぼむ。96は口縁部B形態の小破片で、法量は不明瞭である。口縁部は直線的にひらき、端部は丸くおさまる。口縁部外面下辺は肥厚し、稜をもつ。胎土に小砂粒を多く含み、焼成はごく堅い。表面は磨滅しているが、内外面ともロクロナデと考え

られる。101は底径6.2cmの中形甕の底部で、底面は糸切り無調整、ほかはロクロナデで、内面中央は渦巻状にくぼむ。

鍋（98～100・103・104） 98・99は口径約30cmで、形態は両者ほぼ同じである。口縁端部はつまみあげられて、外側に面をもつ、99は端部内側に浅く凹線状にくぼむ。99は体部下半には平行叩き目がかすかに残る。ほかはロクロナデである。叩き目はロクロナデのあとに施されている。100は口径約35cmで、口縁部がやや短く、端部は丸くおさまる。体部の器壁は厚く、外面をヘラ削りする。103は口径約33cmで、口縁部の形態や胎土が甕（96）と類似し、直線的にひらき、長さはやや長い、口縁部外面下端はくぼみ、その下は強いロクロナデによって突部が生じている。胎土は2～3mm大の小礫が多く、焼成は堅い。内外面ともロクロナデである。104は大形で体部から口縁部の屈折度が若干大きい。内外面ともロクロナデである。

その他（97・107） 97は体部が遺存しておらず、全体の器形は不明であり、類例も乏しいが、大形の台付鉢と想定される。台は端部で外方にわずかにひらき、体部は平底のものであろう。胎土は杯などと同様に精良である。台は内外面ロクロナデで、ほかは器面があれどおり、不明である。102は器種不明であるが、強く火を受けた痕があり、尖底の製塙土器の可能性も考えられる。外面は指頭圧痕で、内面は刷毛目の起点のような条線がかすかに残る。胎土は砂粒を多く含んでおり、焼成は堅く、ほかの土師器より重い。製塙土器とすれば、尖底の製塙土器は奈良時代には消失するとされること〔岸本雅敏1983〕から、古墳時代末から奈良時代初頭の土器に伴うものと考えられる。

須恵器

有台杯（88） 1点のみ存在する。身の深い有台杯Bである。高台はごく低く、外端接地である。底面はヘラ切りと思われる。器壁は全体に薄く、内外面ともロクロナデの小さな凹凸がある。

無台杯（89） 口縁部の小破片1点のみである。器壁は薄く、口縁部内面がかすかにくぼむ。S E 183出土の11と同じタイプと考えられる。

甕（93・94） 93は器壁が薄く小形であり、壺の可能性がある。外面は平行叩き目で、内面のあて具痕はナデで消される。つくりはよい。94は大甕の体部破片で、外面は平行叩き目、内面は同心円文のあて具痕があるが、両面とも叩き目、あて具の凹凸はごく小さく、ナデられているものと考えられる。

灰釉陶器

皿（91） 口縁部の一端を欠くのみである。口径16.7cm、器高2.8cm、高台径7.4cmである。口縁部は短く外下方へ屈折し、端部は丸くなる。高台は外下端が面取りされ、内側はこれにともなってわずかにくぼむ、体部中位から底部はロクロ削りで、高台貼り付け部と口縁部外面から内面中央部までロクロナデである。外面はまったく釉がみられず、内面中央は径約7.5cmの円形部分をのぞいて淡緑灰色の釉がみられる。この釉は施釉ではなく、自然釉と考えられ、内

面中央の無釉部分は高台径に一致することから、重ね焼きによって釉がかからなかったとみられる。なお、内面中央には重ねた時の高台の圧痕がかすかに観察される(図版68-1)。

小瓶 (92) 口縁部下端から体部にかけての破片で、外面に厚く淡黄緑色の釉がかかる。内面上半はロクロナデで、下半はエゴテと思われる工具痕が残る。

6) SK 201 出土土器 (図版21・61・63)

土師器 (40・43・46) 40は底径 6.5 cm で、中形の杯Ⅱの可能性がある。43は口径 12.2 cm の中形甕で、口縁部は内湾してたちあがり、端部は丸くなる。底部は底径 7.0 cm で、器壁が厚い。口縁部内面から外面に炭化物が付着し、土器の器肉まで黒色を呈している。46は鍋で、口縁部と体部との境は不明瞭で、ほとんど直線的であり、端部は上方へつまみあげられている。内外面ともロクロナデである。

須恵器 (44・45) いずれも甕の体部破片である。44は外面が格子叩き目、内面が平行文あて具痕、45は外面が平行叩き目、内面が同心円あて具痕である。

灰釉陶器 (41・42) 41は甕の口縁部で、端部は外下方に短く外反する。この一部は若干の垂みがみられる。内面と外面上半に刷毛塗りで、施釉する。内面は器面がなめらかであるが、外面上半部はロクロナデの凹凸がよく残り、下半部はロクロ削りである。42はやや浅めの甕と考えられる。体部内外面を刷毛塗りで施釉する。高台は外端部を面取りし、これに伴って内側がくぼむ。外面は遺存部全面ロクロ削りである。

7) SK 191 出土土器 (図版22・53・56・61)

SK 191 からは土師器が多量に出土し、一括土器として把握されるものの、遺存状況が不良なため、ここでは代表的なものを実測したにすぎない。SK 191 出土土器は、大半が土師器の杯であるという器種構成の特徴をもつ。土師器の杯以外では甕 (62) と大形甕の破片 1 個体と須恵器の無台杯 1 点、甕の破片 1 点のみが含まれる。

土師器 (59~62) 杯は底部の遺存例からみて、底径 6 ~ 7 cm のもの 2 個体とこれ以下のもの 30 個体以上が存在すると推定される。59は口径 13.7 cm 、器高 5.1 cm 、底径 5.2 cm で、杯Ⅲでもやや大きい。径高指数 37 で身は深く、底径は口径に対して小さい。口縁部は外反せず、器壁は全体にやや厚い。60は口径 11.8 cm 、器高 4.2 cm 、底径 5.6 cm で、59 よりひとまわり小さい。体部下半が若干くびれ、腰がわずかに張る。口縁部は体部から直線的に開き外反しない。底部内面周縁部がロクロナデでくぼむ。

61 は内面黒色処理の大形の杯Ⅰである。口径 18.5 cm 、器高は 8 cm ほどと推定される。体部から口縁部のひらきの角度は、通常の杯に比してたちあがっており、口縁部はまったく外反しない。口縁部内面は横方向のヘラ磨きと黒色処理がなされているが、ロクロナデで生じた口縁部内面のくぼみはそのまま残る。外面はロクロナデであるが、上半部は小さな凹凸が顕著である。

62は口径約12cmの中形甕でも小さいものと考えられる。口縁部はくの字状にひらき、ゆるく屈折して短く直立する。口縁部内面上半は炭化物が付着する。

須恵器（63・64） 63はヘラ切りと考えられる無台杯である。器壁は薄く、口縁部内面がくぼむ。64は甕体部の破片で、外面は格子叩き目の上に一部カキ目、内面は平行文と重弧文状のあて具痕である。器壁は薄い。

8) S E 143 出土土器（図版22）

土師器の杯（65～67）・甕（68）のはかの器種はなく、須恵器は1点もない。土師器には外面平行叩き目の大形甕と思われる破片が1点ある。65のみ下層出土で、ほかは上層出土である。

土師器（65～68） 65は口径12.2cm、器高3.5cm、底径5.8cmで、径高指數29であり、身がやや浅い形態である。体部の腰はやや張り、口縁部は外反し、その外面に稜をもつ、S E 153出土土器の杯Ⅲと同一である。66は口径14.8cm、器高5.6cm、底径5.6cmの中形の杯Ⅱである。体部は丸味をもたず、口縁部は外反しない。67は内面黒色処理する杯で、底面と外面下半をクロ削りするが、底面には糸切り痕がわずかに残る。68は内面にロクロナデの凹凸がそのまま残ることとたちあがりの角度からみて、中形甕の底部と考えられる。底面は糸切りであるが、剝離した面にも糸切り痕がみとめられる（図版65）。これは底部粘土柱成形〔服部敬史・福田健司1979〕によって生じた可能性も考えられる。

9) S K 179 出土土器（図版25・53・57・58）

須恵器の無台杯の小破片1点があるのみで、ほかはすべて土師器である。図化した器種のはかに中形甕底部と大形甕体部の破片がある。

土師器（105～110） 105は口径12.1cm、器高3.3cm、底径6.0cmで、身がかなり浅く（径高指數27）、底径は口径の約1/2で大きい。この形態は須恵器無台杯にちかい。体部下半は丸味をもってたちあがり、口縁部はわずかに外反する。106は内面黒色処理の椀である。この器種はとくに少ないが、なかでも黒色土師器のものは当例以外にない。高台は器壁が薄く、比較的小さい。外方へひらき、端部は丸くおさまる。底面は高台接合部内側がくぼむ。

107は口径約18cmの甕口縁部で端部は上方へつまみあげられる。109は口縁部と体部が区別できない、やや特異な形態である。端部は内側に鋭く屈折する。外面はロクロナデの凹凸が著しいが、内面はなめらかである。110は口径約40cmにちかい大形の鍋である。体部上半は丸味をもたず、口縁部は肥厚し、端部が上方へつまみあげられる。体部外面下半は凹凸の大きい平行叩き目、内面はカキ目である。108は大きな平底をもつ器種で、火を受けており、鍋かと推定される。底面と体部外面はヘラ削りで、内面はロクロナデである。

10) S K 194 出土土器（図版25・53・57・61・63）

土師器が大半で、図示した以外では須恵器無台杯2点、長頸瓶1点、灰釉陶器碗1点がある。

土師器は杯が30点以上、大形甕・鍋が数個体あると推定される。

土師器（111・112） 111は口径12.2cm、器高4.1cm、底径5.4cmである。体部はやや丸味をもち、口縁部は若干外反する。112は高台をもつ椀である。器面があれていますが、底部内面はヘラ磨きと思われる。

須恵器（115・116） ともに變体部の破片である。115は外面が格子叩き目、内面は同心円文あて具痕である。外面の叩き目は凹凸が大きく、器面はざらついた感触である。116は外面が平行叩き目、内面が平行文あて具痕とみられるが、明瞭ではない。外面はナデによりなめらかになっている。

灰釉陶器（113～114） 113はほぼ直立する高台で、外下端をゆるく面取りするが、外端部は肥厚しない。器壁は全体に薄い。内外面ともロクロナデで、内面中央の径約5.5cmの円形部分をのぞく内面に淡緑色の釉がかかるか、自然釉と思われる。114は皿の体部から口縁部で、口縁端部は外反する。内面から口縁部外面はロクロナデで、体部外面はロクロ削りである。内面に淡黄緑色の釉がかかる。外面は無釉で一部自然釉がかかる。

11) S X 184 出土土器（図版26・54）

S X 184は2区13C21で検出された斐棺墓であり、3個体の大形甕と杯1個が出土した。

大形甕は完形品の出土例がごく少なく、貴重な資料である。

杯（117） 口径16.0cm、器高5.2cm、底径6.6cmの中形の杯Ⅱである。S E 153出土の杯Ⅱと比較すると若干大きい。腰がくびれ、口縁部は外反しない。器面は剥離して調整不明であるが、底面糸切り無調整、ほかはロクロナデと思われる。

甕（118～120） 3点のうち119は排水溝掘削により欠損する。3点ともほぼ同じ大きさと形であり、口径20～22.5cm、器高約35cmである。体部は長胴で、底部は丸い。体部最大径は中位のやや上方に位置し、口径よりわずかに大きい。口縁部は短く、くの字状に外反し、端部が上方へつまみあげられて外側に外傾する面をもつ。この面はわずかに凹線状になる。器壁は全体にほとんど一定であり、とくに厚くなる部分はない。口縁部と体部の端と120の底部が若干薄くなる程度である。体部上半は外面カキ目、内面ロクロナデであり、下半は外面平行叩き目となるが、内面は119が同心円文あて具痕であるのに対し、118・120はハケ目である。120は円形のくぼみもみられる。平行叩き目の細かい条線は叩き原体の木目かとも思われる。底部には2×3cmほどの範囲の小さな黒斑がみられる。ススや二次焼成など、実際に煮沸具として利用された明確な痕跡はみられない。

12) その他の遺構、包含層出土土器

これまで述べてきた土器は比較的まとまった遺構出土のものであり、ここではこれ以外の遺構出土土器と包含層出土土器をまとめて述べる。平安時代のものは大別して2時期ある。ひと

つはこれまで述べた遺構出土土器とほぼ同じ平安時代「中期」(今池編年VI・VII期、9世紀後半～10世紀)のものであり、もう一方はこれより古い平安時代「前期」(今池編年IV・V期、8世紀末葉～9世紀前半)¹⁾のものである。平安時代前期の土器は3区東端の58年度調査区にほぼ集中している。以下、前期・中期と述べるのは、それぞれここで言う平安時代前期・平安時代中期を示すものである。須恵器はこれらの時期差を比較的明確にとらえられるが、一括して器種ごとにとりあげることにする。包含層出土のものは層位をとくに記さないが、3区はIVa層、1・2区はIVa層・IVb層出土である。

須恵器 (図版27・28・30・53～55・58～61)

無台杯 (121～126) 底部切り離し技法は糸切りとヘラ切りがある。121のみが糸切り技法ではかはヘラ切り技法である。糸切りの無台杯はきわめて少数である。121～123が前期、125～126が中期にあたる。124はこの中間に位置する。121は底径6.0cmで底面糸切り無調整のほかはロクロナデである。底部内面はとくに平滑である。淡黄灰色を呈し、やや軟質である。1区SK215出土、前期のものである。

底部ヘラ切りの122～126は形態・手法によってほぼ三者に分けられ、それで時期を異にすると考えられる。122・123は底部から体部の境が丸味をもっており、口縁部はわずかに外反する。器壁は相対的に厚い。123は口径12.4cm、器高3.5cmである。122は3区14D4、123は3区SK108出土である。124は口径12.2cm、器高3.1cmで123よりは身が浅い。体部のひらきは122・123よりは大きく、器壁は薄い。ロクロナデの凹凸が比較的大きい。一之口3区SK49出土、125・126は口径12cm前後、器高3cm前後で、大きさ・形態は124に類似するが、さらに器壁が薄く、底部はほぼ水平である。125は焼成がとくに軟質であり灰白色を呈する。125は2区SK180出土、126は2区13C21出土である。以上のヘラ切りの無台杯は、122・123が前期、125・126が中期、124はこの中間の時期にあたるものと考えられる。122・123は今池編年のIV期、124はV期でも古い様相を呈すると考えられる。

有台杯 (127～135) 底部の切り離し技法は無台杯と同じく、糸切りとヘラ切りがある。128・130は糸切り痕、127・133・134はヘラ切り痕が残っている。129・131はヘラ削り(ロクロ削り)がなされているが、底面のロクロ削りは糸切りのものに特有であり、体部と底部の境が丸味をもたず、角張ることと、体部から口縁部が直線的であるという形態は糸切りのものの特徴と考えられる。127～131が前期、132～135が中期と考えられる。

ヘラ切りの127は口径10.6cm、器高3.6cmである。底部から体部は丸味をもっており、口縁部は外反する。底部内面の周縁は器壁が厚く盛りあがり、その外側はくぼんでいる。高台は比較的幅広の角高台で、接地面はロクロナデでくぼむ。底面にはヘラ切りの渦巻状の痕跡が明瞭に残り、ほかはロクロナデである。内面の全面に厚く自然釉がかかり、重ね焼きによる焼成時

1) ここでの平安時代の時期区分は、土器様相の変化による便宜的なものである。P40註1)参照。

に、最上の位置にあったことがわかる。3区14C25出土。

128～131は127とほぼ同時期かやや下る時期の糸切りのものである。このうち、131は大きさや底部の器壁の厚さなどからみて、身の深い有台杯Bと推定される。身の浅い有台杯Aの3点（128～130）はいずれも手法の形態が異なっている。128は129・130に比して底部から体部の境が丸く、ヘラ切りのものに類似する。ただし口縁部は外反しない。底部は中央が若干あがり、高台は外方が張り出し、内端接地となる。体部外面にはカキ目状の条線がみられ、調整に際してカキ目原体と同じものを外面にあてたものと思われる。内面は全体になめらかで、127にみられるような底部周縁の盛りあがりはみられない。底部の高台内側には墨痕がみられるが、さほど磨滅していない。3区14D4・S D51出土。129は底面全面がロクロ削りされており（図版66）、底部から体部は角張って直線的にたちあがる。底部内面は平滑であり、体部との境は丸くなく、変化点が明瞭である。130は底部の高台貼り付け部分がロクロ削りされ、底部と体部外面を面取りするようになっており、高台貼り付け部と底面には段があり、その内側には糸切り痕が残る（図版66）。2区12C25出土。131は底部のみ遺存する有台杯Bで口径15cm、器高6.5cmほどと推定される。底面全面がロクロ削りで、内面はロクロナデで平滑である。高台は低く外端接地で、接地面がロクロナデされ、内側に広いはみ出しがみられる。3区14C23出土。

132は口径14cmで、底部を欠くが、身の深い有台杯Bであり、底部は133・134などのようにヘラ切りで、高台は低いものと推定される。内外面はロクロナデによる凹凸がとくに大きい。2区SK147出土。133・134は高台がごく低く、堆部の調整が丁寧でなく、外端接地である。底面にヘラ切り痕が残る。体部のひらきは大きい。133は2区13D3歛状小溝、134は2区12C25出土。135は高台のつくりが丁寧で、明瞭な端面をもち、133・134より古い要素がある。底面はロクロナデで不明であるが、若干の凹凸からみるとヘラ切りと考えられる。

杯蓋（136～138・152） 136は口径12.8cm、器高2.3cmで、有台杯Aの129・130などのタイプに伴うものと考えられる。器高が低く扁平である。縁部は鋭く下方に屈折し、端部は外側にひき出される。天井部は広くロクロ削りされ、内面はなめらかにロクロナデされる。この種の杯蓋は杯類と同じ製作技法によるものと想定され、内面のなめらかさや、天井部のロクロ削り、さらには屈折部の鋭さは、杯類のうちでも糸切りのものと共通する。

137の縁端部は肥厚するのみで、下方への屈折は明瞭でない。天井部はSE183出土の10のようなものになろう。器壁はごく薄く、無台杯（125・126）などとの共通点があり、胎土・焼成も類似する。2区13C16出土。138は縁端部が短かく下方に屈折する点で137と異なり、焼成も若干堅い。縁部外面から内面が黒っぽくなってしまっており、杯の上に倒位に置かれて焼成されたことがわかる。137よりは古い様相がうかがえ、前期に属すると考えられる。3区14D3SK108付近出土。152は大ぶりで、端部が欠失しており、時期が不明であるが、つまり中央がくぼむこと、器壁が相対的に薄いこと、天井部が水平で体部とは段をもつこと、胎土・焼成・

器面などの点が中期のものに類似する。内面に墨痕があり、若干磨滅する。

短頸壺（156～158・167） 156は短頸壺に伴う蓋である。比較的大きく、天井部から縁部は明瞭な角をもって下方へ屈折し、直線的に端部にいたり、端部はわずかに外延し、やや尖り気味におさまる。内外面ロクロナデで、全体につくりはよい。3区14C23出土。

157・158は体部上半から口縁部下端部である。ともに内外面ロクロナデで、157の内面上端にはかすかなシボリ痕がみられる。157は1区12C23、158は2区SB151柱穴出土。

167は体部肩に把手などの刺離痕がある。これから判断すると、環状ではなく角状の把手と考えられるが判然としない。内面上端はロクロナデ、その下がカキ目であるが、下位はロクロ回転を利用してい（ハケ目）。外面下半はロクロ削りで、上半はロクロナデである。高台をもつと推定される。焼成はやや軟質である。3区14D1のSE107付近出土で、SE107からも同一個体と推定される破片がある。

長頸瓶（148・159～165） 148は小ぶりで、口縁部は大きくひらき、端部は短く上方内側へ鋭く屈折する。3区14C21SK114付近出土。159～161は比較的大形で、大きくひらく口縁端部は下端が丁寧にロクロナデされており、上方へのつまみあげは明瞭ではない。こうした形態は148と比較すれば新しい要素と考えられ、これらは確実に中期に下るものと思われる。3点とも2区西端のSB185周辺から出土している。

体部から底部が遺存する162～165のうち、162・164は底面にかすかな糸切り痕が残り、163はヘラ切り痕を残す。162～164の高台は外方へふんばり、165はやや内側にはいる。16163・164は高い高台で、いずれも外端接地である。163は高台がとくに高く、器壁も相対的に厚く、つくりがよい。164は3区SB124付近、ほかは2区SB185付近出土である。胎土、焼成からみると、160と163は同一個体の可能性もある。

小形壺・瓶（145・147・151） 小形の壺・瓶類を一括するもので、器種はそれぞれ異なっている。145は口径7cmのごく小さい口頸部で、施釉陶器の小瓶に類する器種と推定される。口縁端部は外側に面をもち、その下端は沈線状の段をもつ。2区13D2出土。147は口径7.5cmの直立する短かい口縁部をもつ。小形の壺と考えられる。3区SB142付近出土。151は口頸部を欠失するが、体部は完存する。肩の張る体部で、底部に低い高台をもつ。高台は内端接地で、接地面はロクロナデでわずかにくぼむ。底面はヘラ切り痕と思われる若干の凹凸がみられるが、丁寧にナデ調整される。体部下半はロクロ削り、上半はロクロナデで、自然釉が厚くかかる。体部内側は十分な観察が不能であり、断面は一部推定線である。2区SK154出土。

横瓶（149） 口縁部しか遺存していないが、形態・大きさからみて横瓶と推定される。口縁端部は外側に水平に屈折し、端部は丸くおさまる。2区SB185出土。

甕（166・168～170・210～215） 168・169は大きさが異なるが、形態・手法は類似する。ほとんど直線的にたちあがる口縁部で端部は面をもち外下方にひき出される。この形態・手法は長頸瓶（159～161）と同一である。内外面ともロクロナデである。168は2区SB

152柱穴、169は2区12C25出土である。170は大形で口縁部のひらきが大きく、肥厚し外面は有段状となる。端部は168・169と同様に外下方にひき出される。内面のナデはロクロ回転を利用していない。2区13C16出土。

166は平底の底部で、器種は壺・甕の両者が考えられる。外面にはかすかに叩き目が残るが、丁寧にナデがなされている。内面はロクロナデで、底面はナデである。体部外面下端はヘラ削りと思われる器面のめくれがみられる。焼成はきわめて硬質である。2区13C21出土。

210～215は体部破片である。外面の叩き目と内面のあて具の文様は多様である。210は外面平行、内面同心円で、内面は凹凸が少なく、ナデられていると思われる。1区出土。211は外面平行、内面は円形の明瞭なくぼみがあり、木目かと思われる条線様のものがみられる。2区13C16出土。212は外面平行、内面平行で、2区13D2出土。213は外面平行、内面ハケ目と一部同心円のようなあて具痕がみられる。あて具痕がハケ目に先行する。1区12C21出土。

214は外面平行、内面ナデである。長方形の長辺にあたる断面は磨滅しており研磨具として利用したと思われる。2区12C25出土。215は外面格子、内面平行である。外面は叩き目でざらついた器面である。2区出土。

土師器（図版29・54・55・61）

杯（184～189） 184は口径12.4cm、器高3.7cm、底径6.8cmの杯Ⅲである。径高指数は30でS E 153出土杯Ⅲとほぼ同じで、身はやや浅いが、底径は口径の1/2以上でかなり大きく、S E 153出土例とは異なる。これは平安前期の糸切りの須恵器無台杯に類似する。体部は丸味をもち、口縁部はわずかに外反する。底面糸切り無調整、ほかはロクロナデで、内面中央に小さな渦巻状の指頭痕がある。外面はロクロナデの凹凸がある。形態の特徴からみると、S E 153出土の杯よりは相対的に古様を呈しており、平安前期に溯る可能性が考えられる。3区14D4ピット45出土。

185は口径12.2cm、器高3.5cm、底径5.5cmで、径高指数29はS E 153出土杯Ⅲ（22～28）に共通する。口縁部の外反はゆるい。3区SK115出土。186は大きくひらき、腰が張る体部で、皿と考えられる。内面中央はゆるくくぼむ。2区12C25出土。

187・188は黒色土師器である。187は大きさからみて杯Ⅲであり、内外面ともヘラ磨きと黒色処理をする。188は口径16cm前後、器高5cmほどの杯Ⅱである。体部下半から底面はロクロ削りである。ともに2区12C25出土。

189は口径約20cmの大形の杯Ⅰである。口縁部は外反し、外面はロクロナデの凹凸が大きい。2区SD189出土。

橈（191～193） 無台の杯に比して有台の橈は量的にごく少ない。191は高い高台で外方へふんばる。底面中央が小さく突出する。2区13C21出土。192は高台が低い。焼成堅緻。2区13D5表土出土。193は器形が判然としないが、高い台をもつ皿とも考えられる。底面は中央がくぼむ。ロクロナデである。2区13D3・4出土。

甕（190・194・195・199・200・202・203） 190は口径約20cmの大形甕で、くの字状に外反した口縁部は端部で上方へつまみあげられ、外傾した面をもつ。体部外面と口縁部内面がカキ目、ほかはロクロナデである。1区SK215出土。194は口径約27cmの大形品である。口縁部は「B形態」で外面下辺に棱をもち、端部が外側に肥厚する。内面の口縁部と体部の境は明瞭な棱をもつ。器面は剥離しているが、ロクロナデと思われる。2区SD148出土。195は内面黒色処理したもので、器種は明確ではないが、斐か鍋のいずれかであろう。器面剥離のため調整不明であるが、内面にはロクロナデによる凹凸がある。

199は口縁端部に広い面をもち、外面下辺に段をもつ。胎土は砂粒を多く含む。出土地点からすると平安前期に遡る可能性が強く、200と胎土・焼成など類似し、外来系の可能性が考えられる。200は底径約9cmで、ほかの中形甕より大きい。体部下端はくぼまず、丸味をもっている。内面はロクロナデ、外面上半はカキ目、下半は斜方向の下から上へのヘラ削りである。形態と体部下半のヘラ削り技法はほかに類似がなく、胎土・焼成の点からも「B形態」のものと同様に北信濃系と考えておく。ともに3区15C25出土。

203は3区14C22・23界線上から出土した大形甕で、完形で横たわった状態で出土した。口径約23cm、器高約33cmである。口縁部は外面が肥厚し、わずかに有段状となる「B形態」である。体部は大形甕（119）などとほぼ同じ長さで、形状も類似する。器壁の厚さはほとんど一定しているが内面下半に若干の凹凸がある。口縁部から体部上半内外面はロクロナデで、体部下半外面は平行叩き目、内面は剥離のため不明確であるが、明確なあて具痕はみられない。体部下半に大きな黒斑がみられるが使用に伴うスス、二次焼成は明確にはみられない。出土状況からみて、甕棺墓の可能性もある。淡褐色を呈し、胎土に砂粒が少ないなど、ほかの「B形態」のものとは異なり、体部の形態も在地のものと共通する。

202は壺ではなく、櫃・鉢などの器種が考えられる。内外面ロクロナデである。2区SK251出土。この土器の時期は不明確であるが、SK251出土土器は平安時代のものである。

灰釉陶器（図版28・63・64）

榠（172・173・175・176・179） 172は口径15.6cm、口縁端部は外反する。外面下半はロクロ削りで、外面と内面底部以外に刷毛塗りで淡黄緑色の施釉をする。1区ピット10出土。173は口径約13cm小形の榠である。器壁がごく薄く、口縁端部は比較的長く外反する。内外面ロクロナデで、内面と口縁部外面に釉がかかるが、自然釉と思われる。2区SB185柱穴出土。175・176は底部のみ遺存するものであるが、体部のたちあがりから榠と考えられる。175は高台が低く、断面が三角形にちかい。外端部を面取する。内面中央に重ね焼きによると思われる、円形の圧痕がみられる。外面はロクロケズリ、内面はロクロナデで、施釉はみられない。2区13C21出土。176は高台が比較的高いが、外端部を面取りする手法はみられる。外面ロクロケズリ、内面ナデで、施釉部分はない。2区12C25出土。179は高台がやや高くて薄く、端部は丸くおさまる。身の器壁も薄い。体部外面にはロクロ削りによると思われる棱が明瞭であ

る。体部外面には軸が剥離した痕とみられる黄色に変色した部分がみられる。これが施釉痕とすると刷毛塗りと考えられる。高台内側に中央にはわずかに糸切り痕が残りうすく墨痕がみられる。ほかのものよりやや新しい要素がみられる。2区13C21出土。

■ (174・177・178) 174は口径17.3cm、器高3.8cmの大形でやや身の深い皿である。全体に器壁が厚く、口縁端部は外反する。高台も厚く外側が肥厚する、外面下半がロクロ削り、ほかはロクロナデで、軸は底部中央をのぞく内面と外面上半に刷毛塗りで施す。内面は濃く淡緑色で、外面は光沢をもつて發色しない。胎土はきわめて精良で、焼成はごく堅緻であり、178と形態、手法とも同様であることから、両者同一個体の可能性をもつ。2区13C16出土。178は2区12C25出土。177は高台接地面が比較的明瞭であり、内端接地となる。外面ロクロ削りがなされる。施釉は刷毛塗りで、内面は外周を丁寧に施釉した後に中央に一方向にあらく塗る。内面には重ね焼きによる高台の付着痕が残り、高台接地面にも釉がわずかに付着する。2区12C25出土。高台の形態、施釉方法からみると、177が相対的に古いと考えられる。

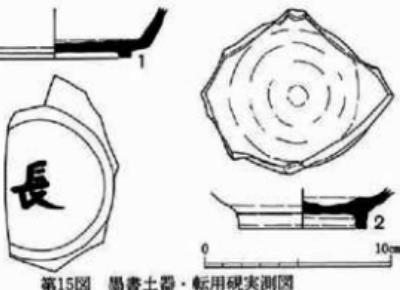
蓋 (180) 口径10.5cmで小ぶりである。小形の短頸蓋の蓋と見えられる、縁部は明瞭に下方に屈折し、端部は丸い。天井部は軸で調整が不明瞭なもの、ロクロ削りと考えられ、内面はロクロナデである。天井部と縁部外面に淡緑色の軸が厚くかかる。これは自然軸とも思われるが、内面周縁部には弧状に釉の付着がみられ、身とともに焼成されたと考えられる。白灰色を呈するが、胎土は比較的粗く、白色の小粒子を多く含み、ほかの灰釉陶器と一見して区別され、美濃窯ではなく猿投窯の製品で、いわゆる「原始灰釉陶」〔齊藤孝正1982〕とも考えられる。時期はK-14窯期を測ると思われる。いずれにしろ在地産の須恵器ではなくて、ごく類例に乏しいものである。

小瓶 (181・182) 181は口縁部小破片である。端部は肥厚し、外反し水平にのびる。上面に自然軸と思われる軸がかかる。2区12C25出土。182は糸切り無調整の底部で、内面はロクロナデの凹凸が大きく、中央は渦巻状となる。軸は剥離しているが、外面下端に溜りがみられ、一部表面がコバルト・ブルーに発色する。底面には重ね焼きの付着物がある。2区12C25出土。

長頸瓶 (183) 高台はごく低く、蛇ノ目状のものである。底部の器壁が薄い。2区13D1出土。

13) 特殊土器

硯 (第15図2・図版66) 円面硯などではなく、須恵器の杯・蓋などの転用硯が数点ある。図は須恵器の高台をもつ底部を意図的に打ち欠いて、硯として利用したものと考えられる。高台の



第15図 磨書土器・転用硯実測図

内側に墨痕を残す。この部分の磨滅は著しくない。底部はヘラ切り痕を残す。身の深い有台杯Bと考えられ、133・134よりは古いものと思われる。2区SB152柱穴出土。

墨書き器（第15図1・図版66） 量的にごく少なく、図示したもの以外には土師器に判読不能のものが2・3点あるのみである。図は須恵器有台杯の底部中央に墨書きしたもので、字は一字で「長」と読める。有台杯は底部糸切りのちロクロ削りと推定され、時期は平安前期である。3区14D14出土で、SB124などの建物の居住者と関連する可能性が考えられる。

B. その他の遺物

1) 木製品（図版32・67~70）

簀車（1・2） ともに2区の井戸SE153を放棄する際に使用したものと考えられる。2点とも短冊形薄板の下方を尖らし、上端を主頭状にかたどったもので、側邊上部に一对の切りかけを施したものである。黒崎直の分類ではB₁類にあたる〔黒崎直1976〕。1は長さ13.5cm、最大幅3.5cm、厚さ0.3cmである。下方の尖った部分は10.5cmあり全長の2/3以上を占める。切りかけ部は一方しか遺存しないが、3箇所みられる。2は1と同じ長さ、厚さで、幅は2.0cmと狭い。尖った部分の長さも1と同様長い。切りかけ部は両方遺存しており片側2箇所である。1・2ともに材は針葉樹である。

紡錘車（3） 3区の井戸SE116から出土したもので、紡茎は長さ14.5cm、最大径0.8cm、紡輪は径5.4~5.9cm、厚さ0.5cmである。紡輪は図の下方を尖らせ、上方は徐々に細くなるように削っている。下方から約5cmの位置に紡茎が固定されていたと考えられる。紡輪の中央の孔は0.7×0.4cmほどの楕円形を呈する。

櫛（5） SE117出土の漆器である。口径13.5cm、器高約6cmで、土師器の杯Ⅲより身がかなり深い。底部は剥離しており不明であるが、底径は6.5cmである。

曲物（6~8） 6は柾目を利用した底板である。平面形は径21.0~19.7cmで、正円ではなく、楕円である。厚さ0.8~0.9cmで、一箇所、木目にそって割れている。両面・側面の整形は丁寧であり、側面は若干の法をつける。周縁の側面には側板を固定した木釘孔があり、木釘が遺存するものもある（図の網目）。木釘の間隔はすべて一定しておらず、図の右下の約1/4に多い。しかし、おむね2方向の対角線上に位置しており、木目の方向を避けている。材は針葉樹である。3区14D3ピット104の柱穴礎板として使用されていた。

7は径16cm前後と推定される柾目を使用した円形の板で、厚さ0.8cmである。両面・側面は丁寧に整形してある。側面には木釘孔かと思われるものが2つあるが明瞭ではない。一方の面が黒ずんでいるSE107出土。

8は2区の井戸SE195出土の柾目を使用した蓋板で、木の皮のとじ孔がある。径約18cm、

厚さ0.6cmで、周縁部の約1cmを薄くしている。この部分に側板の押圧痕が溝状にみられる部分があり、これからすると側板は厚さ0.2cmほどと推定される。とじ孔は3箇所遺存するが、位置関係から全体で4箇所と考えられる。

その他(4) 用途不明の棒で、上方は折れている。側面と下端は刃物で整形する。材は広葉樹ではないかと推定される。

織機製品(図版68) 2区の井戸S E 183から出土した円形の敷物がある。これは径約35cmで、藁でつくられている。

部材(図版33)

杭(1) S D 104の堰と考えられる杭列の1本である。地中深く打ち込まれていたため長く遺存したと考えられる。幅約6cm、厚さ約3cm、残存長約95cmである。側面はきれいに調整され、先端は片刃状に尖る。これ以外の杭は比較的浅く打ち込まれており、残存長は長くない。棒状の杭以外に厚い板を利用したもの(図版70-4)もある。

柱根(2・3) 2はS B 185出土の太い柱根である。径は約25cm、残存長約35cmである。柱の断面は扇形をなし、年輪からみて丸太を4等分に分割したものと考えられる。割った2つの面は平らで、もう一方の面は丸味をそのまま残している。平らな面はわずかに手斧による割り痕が残る。底面は手斧で平らにし、粗く面取りしている。

3はS B 151の廻の柱根である。断面は丸味をもつ10×12cmの長方形をなし、残存長約53cmである。

礎板(7・8・9) いずれもS B 185のものである。7は約25.5cm×約12cm、厚さ約4.5cmの長方形の板目の板で、9と材質・厚さなどが類似することから、同じ原材であると思われる。図の上端部は切断したものであり、左側の角に鋸とノミで柄がつくられていることから、元来は建物の板材などであったと推定される。下端面は折れた痕があり、調整してはいない。

8は約25cm×16cm、厚さ約2cmの長方形の板目の板で、中央に2つの孔が穿たれており、なんらかの建築材を転用したものと推定される。図の下端面は鋸などで切断したもので、上端面はノミで粗く割れ口をつくったのちに折ったものである。下端面には幅1.5cmほどの柄とみられる凹部があり、この部分は黒く風化している。9は7と同じ原材を使用したと推定される板目の板で、長辺約28.5cm、短辺約21cm、厚さ約5cmである。短辺両面は手斧で丸く整形・面取りされている。

10は2区ピット37の礎板である。図の上方は良く遺存しているが、下端は朽ちて細くなる。下端幅約21cm、厚さ約4cm、残存長約45cmの板目板である。上端面は両側面から手斧で面取りする。

2) 鉄製品(図版31-4・64)

S E 116から出土した小刀で、遺存状況は良好である。残存長21cmで、先端を欠く。柄の部

分には植物質の巻き物がわずかに残存する。この部分に径0.3cmの円形の孔がある。

3) 土製品 (図版31-3・64)

S E 153 から出土した轆の羽口である。先端の外径約4cm、内径は約2cmで、外側は黒色の溶着物がみられ、ほかの部分は強い熱を受けている。外面は指頭圧痕がみられる。周辺で小鍛治の作業をしたものと推定され、鉛滓が少量ながら出土している。

4) 石製品 (図版31-5・6・64)

明確に石製品と認められたものはごく少ないが、火を受けた石や擦痕がみられる石は多少出土している。これらの石のなかには掘立柱建物の竈などに使用されたものもあると推定される。

5・6は砥石である。5は長方体を呈し、両端を欠く。両面とも擦痕があるが、図の表・裏両面はそれぞれ方向が異っている。図の表面は長辺と同じ方向で、裏面はこれに直交する方向であり、ともによく磨滅している。側面には切り出した時の傷が残り、その中央はくぼんでおり、磨滅していない。裏面をのぞく三つの面にはスス状の黒い付着物があり、裏面にはこれがみられない。このことは使用の過程で一回放棄されてススなどが付着した後に、再度利用したためかもしれない。石質は凝灰岩である。3区14D1出土。

6は砂岩の自然石を利用したもので、使用により、磨滅して面をもっている。2区出土。

2. その他の時代

A. 古墳時代 (図版27・30・55・58)

ここでは弥生時代末から古墳時代後期前半の6世紀までのものをとりあげる、7世紀と考えられるものは次項の奈良時代前期に含めることにする。出土層位は平安時代の遺物とは異なりVI層である。

高杯 (207) 口縁部に円形浮文の装飾をもつ大形の高杯である。底部から体部は屈折してちあがり、口縁部は外反し、さらに短くたちあがって受口状となる。体部下端と口縁部外面には2個一对の円形浮文が貼り付けられる。円形浮文は竹管による押圧がなされる。全体の1/8の遺存部では各一对が残るだけで、全体の数は不明である。口縁端部にはヘラによる刻み目がある。器面があれており、調整は判然としないが、内面は横ナデで、外面はヘラ磨きかと思われる。内面は黒褐色、外面は淡褐色を呈する。脚部は棒状有段の形態と考えられる。県内では類例のないものであるが、畿内第V様式末から庄内式期に併行するものと考えられる。3区14C25出土。

壺 (205) わずかに有段口縁をなす壺である。口縁部下半が肥厚し、わずかに有段状とな

るが、内面はまったく段はない。外面の段は粘土の貼り付け痕をとどめ、丁寧に整形されてもおらず、器面調整も粗い。体部は外面ナデ、内面指頭圧痕、口縁部は内外面横ナデで、体部内面上端まで及ぶ。頸部外面にはハケ目がみられる。小礫を多く含み、淡緑色を呈する。有段口縁壺としては新しい傾向が著しく、5世紀中葉頃と推定される。2区13D3のⅥa層上部からまとまって出土した。

杯 (208) 口径13.2cm、器高5.3cmのほぼ完形の土師器である。底部はやや丸く、底部と体部の境は不明瞭で、丸味をもってたちあがり、口縁部は大きく外反する。遺存状況が不良で調整は不分明であるが、内面の体部から底部はヘラ磨きである。外面に黒斑がみられる。内面は黒色処理されていない。この器種は古墳時代後期に成立するもので、これはそのうちでも古い様相をとどめていると考えられ、出土地点からも須恵器杯蓋 (144) などほぼ同じ時期と推定される。6世紀前半から中葉と考えておく。3区14D2Ⅳb層出土。

杯蓋 (144) 天井部から体部上端の1/3を残す。口径13.5cm、器高約4cmほどと推定される。天井部外面は左回転のロクロ削りが丁寧に施され、体部外面から天井部内面はロクロナデである。胎土は小砂粒を含むが、精良であり、色調は青灰色、焼成堅緻である。この須恵器の色調はほかのものと明瞭に区別できる。陶邑TK10型式にはほぼ比定されるものと推され、6世紀前半～中葉と考えられる。3区14D2Ⅳb層出土。

B. 古墳時代末期・奈良時代前期

1) 土器

当時期のものは2区西側と1区西側にほぼ集中しており、出土量はややまとまっている。須恵器は底部ヘラ切りのものばかりで、糸切りのものではなく、土師器は非ロクロ成形のものばかりである。時期はかなり幅をもっていると考えられる。

須恵器 (図版27・55)

無台杯 (142) 比較的小形で、口径10cm前後と推定される。底部は水平でなく、やや丸く体部との境は比較的明瞭である。内面と体部下端はロクロナデで、底面はヘラ切りのちナデである。胎土は白色粒子を多く含み、白灰色を呈し、焼成堅緻である。この杯身にはかえりのついた宝珠つまみをもつ蓋をともなうものと考えられ、7世紀中葉から後半に比定されよう。2区13D1出土。

有台杯 (139～141) 139は高台が器体の大きさに比して小さい断面方形で、低く幅が狭い。胎土は杯蓋 (155) などと類似し、淡灰色を呈し、焼成堅緻である。140は大ぶりで高台は接地面が丁寧にロクロナデされ、内端部が鋭い稜をなす。底面はヘラ切りで、ナデを加えるが、板状の圧痕が残る。内面はロクロナデである。141は口径14cm、器高5cmで、身はやや深い。体部から口縁部は直線的で、ひらきが大きい。高台は底部と体部の境付近に貼り付けられ、

外方へ強くふんばり、端部は面をもたず、丸くおさまる。底面はヘラ削りの後に粗くロクロ削りし、ほかはロクロナデである。底部内面は器面がなめらかで、凹凸がほとんどない。こうした特徴は140と対照的であり、両者の技術系譜が相違していることが想定される。¹⁾ 底面には「十」のヘラ記号がみられる。以上3点は2区13D2出土。

杯蓋（143・153～155） 143は杯身の可能性もあるが、杯身としてはやや大きいこと、体部のひらきが大きいことなどから杯蓋と考えられる。天井部と体部の境は明瞭で、体部はひらき気味である。天井部外面はヘラ切りのちナデで、ほかはロクロナデである。天井部内面周縁は器壁が厚く、もりあがる。胎土に白色粒子を含み、淡褐色を呈する。焼成堅緻。これにともなう杯身はたちあがりと受部をもったタイプと考えられ、飛鳥Ⅰ期〔西弘海1978〕に比定されよう。2区13D2出土。

155は内面にかえりをもつ。小破片であるが、口径20cmにちかい大形の杯蓋である。かえりの先端は縁端部と同じ高さで、比較的鋭い。胎土に白色粒子を多く含み、淡灰色で焼成堅緻である。色調・胎土などは142などに類似する。

153は口径17cm、器高3.2cm、天井部から縁部はなだらかで段はなく、縁部は短かく内側に折れ、端部は丸くおさまる。つまみは大形・扁平である。器壁が全体に厚く、天井部内面周縁にはもりあがりがみられる。天井部外面ロクロ削り、ほかロクロナデで、内面中央にナデを加える。胎土に数mm大の隙を含む。3区SD3出土。154は天井部が水平で、縁部にかけて屈曲し、端部は下方に短かく折れる。天井部外面はヘラ切りのちロクロナデ、天井部と体部の境をロクロ削りする。ほかはロクロナデである。天井部内面はよく磨滅する。胎土精良で、焼成堅緻、白灰色を呈する、153より後出の要素をもつ。1区12D3出土。

短頸壺（146・150） 150は口縁部しかない。口縁端部は面をもつ。口縁部下端に把手の剝離痕がみられる。把手は断面円形の環状のものと思われる。2区13C21出土。

146は蓋のつまみで、短頸壺のものとは断定できない。つまみの宝珠は2段のごくめずらしいもので、つくりがたいへんよい。暗灰色で、焼成堅緻である。2区13D2出土。

壺（171） 大形壺の口縁破片である。口縁端部は外傾する広い面をもち、その上端が上方へつまみあげられる。外面は突帯状の段をもち、その下に櫛描波状文を配す。調整は丁寧である。

1) 平安時代初期の須恵器に、畿内（陶邑）系と東海（猿投）系の二つの技術系譜が存在することはすでに述べた（P41注2）が、7世紀末から8世紀前半の須恵器にも同様の二つの技術系譜を考えられる。すなわち平城京S D1900出土土器〔奈良国立文化財研究所1978〕、愛知県岩崎41号窯・高藏町2号窯〔横崎彰一・斎藤孝正1983〕出土の須恵器などの比較から、140は畿内、141は東海にそれぞれの技術系譜の出自が求められる。このことは同時期の新井市柴原遺跡出土須恵器〔坂井秀弥1982・1983b・高橋勉1984〕からもうかがうことができ、須恵器生産の本格的な開始期（7世紀末葉前後）に畿内系と東海系という二つの異なる技術内容をもった工人が招来されたものと推察される。ただし、畿内と東海から直接というのではなく、東海系の技術系譜にある東山道の信濃（たとえば長野県豊野町山ノ神窯・篠沢洪1972）畿内系の技術系譜にある北陸道の越中など、隣接する地域からの可能性も考えられる。

る。

器台（第16図） 57年度の確認調査で、3区14D 5から出土したものである。器種は不明であるが、器台の可能性が強い。

内面には、突帯がめぐりその上部を強く横ナデする。この上方にはほぼ垂直方向に円形の穿孔がある。外側には断面V字状の鋭い沈線が配され、その下には形状不明の穿孔がある。内外面ともロクロナデである。胎土精良で、焼成堅密で、内面の突帯より下と外面の上方の穿孔部付近より下は黒灰色を呈する。ほかはわずかに茶色かった灰色である。こうした色調を呈するものはほかに類例がなく、搬入品とみられる。時期も不明といわざるを得ないが、出土層位や出土地点からすると7世紀末から8世紀前半頃と考えられる。

土師器（図版29-196・197・198・201・30-204・61）

甕・鉢などの煮沸形態がある。いずれも非ロクロ成形で胎土に小礫を多く含み、平安時代の土師器と明瞭にことなる。196は口径13cmの鉢の口縁部である。口縁部内外面が横ナデで、ほかはナデと思われる。外面にススが付着する。2区S B 187柱穴出土。197もS B 187柱穴出土で、196の底部の可能性が強い。198はぶ厚い平底の底部である。器種は甕と壺の両方が考えられるが、明瞭な二次形成とススが付着していないこと、とくに厚い器壁であることからみて壺の可能性が強い。204は口径30cmをこえる大形品で、外面にススが付着することから、瓶ではなく器種は鉢と考えられる。口縁部内外面は横ナデで、体部外面は縦方向、内面は横方向のハケ目である。内面には粘土帶の痕跡をとどめる。S B 187出土。201は瓶かと思われるものである。下端部が内側に短かく屈折するものか。外面横ナデと思われる。ススの付着はない。

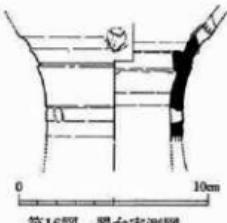
2区12C25出土。

土製品（図版62・68）

206は器種不明の土製品である。筒状の形態をとるものと推定され、破片の上下も不明であるが、図の下の端は広い面をもち、その内側はヘラで粗く面が調整される。その上部が縦方向のハケ目で、内面は粘土帶の痕跡をそのまま残したり、横方向のハケ目を施す。用途は明確ではないが、容器とは考えられず、竈などに使用されたものとも考えられる。2区SK 172出土。

（図版31-1）は円柱形の土製支脚である。手すくねで指頭圧痕がみられる。二次焼成を受ける。竈穴住居の竈に使用されたものと考えられる。1区12C21出土。

（図版31-2）は、平らなところに突起をもつもので器形不明である。胎土は緻密で焼成堅密であり、二次焼成を受けたものと考えられる。胎土・色調などは、口縁部「B形態」のものに類似する。表面は指頭圧痕である。2区12C25出土。



第16図 器台実測図

2) 部材 (図版33・69)

いずれも S B 187 の部材である。4は径約25cmの丸太材を2分割した柱である。残存長は約37cmである。下端は平らな半割面と丸い面から面取りするように先端を尖らせる。これは丸い面のほうが丁寧におこなわれている。

5・6は礎板である。5は幅約15cm、長さ約23cm、厚さ約5cmの長方形の板目の板である。図の下端面は平らに調整するが、上端面は手斧で粗く斜方向に削るのみである。6は幅12~13cm、長さ約27cm、厚さ約4cmの板で、2条の溝をもつ。建築材を転用した可能性も考えられる。

C. 中世、近世 (図版31・62)

瓦質土器 (216) 口縁4cmにちかい大形品で、表面は炭素が吸着し、光沢ある黒色を呈する。内湾する口縁部上面は広い面をなし、外側に2条の突帯をめぐらし、その間に雷文を配する。突帯は沈線を施して貼り付け、雷文はスタンプの押圧である。内外面横ナデである。体部下半はないが、低い器形で、火舍と考えられる。

珠洲系陶器 (217・218・220・221) 217は口縁端部が内傾する広い面をもち、そこに櫛掃波状文を配す描鉢である。内面の描目は密に施す。内外面の横ナデは粗雑である。吉岡編年〔吉岡康輔1982〕のVI期、15世紀後半に比定される。2区13D5出土。218は小形の鉢で、片口の端がわずかに残る。端部は水平な面をもつ。胎土精良で調整はよい。IV期に比定される。2区13D10出土。

220・221は体部破片である。220は2区13D2、221は3区14D3出土である。

越前焼 (219) 描鉢の底部である。描目は10本1単位で密に施す。2区13D5出土。

陶器 (222~225) 222は褐釉の皿で底部の内外面に焼成時の付着物がある。223は16世紀頃の瀬戸・美濃系天目茶碗の底部で、内面に褐釉がかかる。高台は削り出しだある。

唐津焼 (224・225) 224は内面に焼成時の砂目が残り、黒灰色の釉がかかる。唐津II期〔大橋康二1984〕である。225は外面から高台内側に白灰色の釉がかかり、ごくわずかに絵柄がみられる。唐津I~II期(16世紀末~17世紀前半)である。

第V章 まとめ

1. 平安時代中期の土器

一之口遺跡西地区の出土土器の主体をなすのは平安時代中期の土器であり、井戸をはじめ当時期の良好な一括土器が得られた。頬城平野の奈良・平安時代の土器については、上越市今池遺跡群の資料によりおおよその編年を示した〔坂井秀弥1984〕が、今池遺跡群では平安時代中期の一括土器ではなく、当時期の土器様相はいまひとつ明確ではなかった。したがって、ここで検出された資料は貴重であり、これをもとに平安時代中期の土器について検討しよう。

A. SE 153 出土土器と SE 183 出土土器

一括土器のうち質量ともに良好なのは、SE 153 と SE 183 の出土土器である。両者の土器はほとんど共通した様相を呈している。器種は土師器の杯・甕・鍋と須恵器の杯類で、量的には土師器が大半を占める。甕・鍋の煮沸形態が土師器であるのはいうまでもないが、供膳形態においても土師器が主体をなすのは9世紀後半以降の平安時代中期土器の特徴といえる。¹⁾

当時期の土器でもっとも量的に目立つのは土師器の杯である。これはロクロ成形で底部回転糸切りの平底という単純な器形であり、一見したところ形態や手法にはほとんど顕著な差異は見い出すことはできない。しかし、SE 153 出土土器と SE 183 出土土器を比較すると、法量や手法に微妙な差異がある（第13図）。土師器の杯は法量からみて大・中・小の3器種（杯I・杯II・杯III）が存在する。いまもっとも量的に多い杯IIIについて両者の法量をみると、SE 153 は口径12~13cm、器高3.5~4.6cmで、径高指数（器高/口径×100）は1点をのぞいて28~33、SE 183 は口径11cm前後、器高3.5~4.5cmで、径高指数33~40である。器高は両者ともほぼ同じであるのに対し、口径はSE 183のはうがやや小さく、形態上SE 183 出土土器が相対的に身が深いことがわかる。口径と底径の比率は底径が口径の1/2をやや下回る程度であり、両者に明確な相違はない。

次に体部のたらあがりから口縁部にかけての形態であるが、SE 153 出土杯は体部に丸味をもち、口縁部が比較的明瞭に短く外反するのに対して、SE 183 出土杯は体部から口縁部にかけてほとんど直線的であり、口縁部は明瞭には外反しない。SE 153 出土杯は口縁部が外反するのに伴って、口縁部外面下辺に棱が形成されており、製作段階において口縁部がとくに丁寧

1) 今池遺跡群の成果によれば、I~V期の奈良時代から平安時代前期（9世紀前半~中葉）までは、供膳形態はほとんど須恵器であり、平安時代中期とは須恵器・土師器の量的な比率がまったく逆転している。この変化は「律令的土器様式」が崩壊し、それにかわる新しい土器様式が成立したことを如実に示すものである。

にロクロナデ調整されていることがうかがえる。このことについては杯Ⅲよりひとまわり大きい杯Ⅱについても同様である。

以上のようにS E 153とS E 183の土師器杯は、法量と形態上の差異があり、これが時間差に起因することが推察される。両者の相対年代はS E 153出土杯がS E 183出土杯よりも古いと考えられる。その理由として、第1に口縁部の調整に象徴されるようにS E 153出土杯のほうが、製作工程上手数をかけた手法がみられること、第2にS E 153出土杯の形態が糸切りの須恵器杯にちかいことがあげられる。元来、土師器の杯は9世紀後半に須恵器の杯が激減するとともに、これを補うかたちで急増するものであり、両者は器種としては同一のものとみなされる。したがって、土師器杯は、須恵器杯の形態に近似した身の浅いものが相対的に古く、時期が下るとともに身が深くなる傾向が看取されるようと思われる。このような観点からするとここでとりあげた一括土器のうちS E 107・S E 143・S K 145出土土器はS E 153出土土器に類するものが主体で、ほかはS E 183出土土器に類するものが多い。

S E 153出土杯よりさらに古いものとして、184の土師器杯をあげることができる。これは口径12.4cm、器高3.7cm、底径6.8cmで、径高指数はS E 153出土杯とほぼ同じであるが、底径が口径に対して1/2以上であり、底部がとくに広い。この形態は9世紀前半頃の糸切りの須恵器（今池編年V期）とほとんどかわりない。この杯は3区東端から出土しており、この周辺で9世紀前半頃の須恵器が比較的集中して出土しており、平安時代中期を中心とする西地区のなかでは相対的に古いものが多い。こうした点からみて、この土師器杯は須恵器の杯類がまだ量産されている段階、9世紀前半から中葉頃のものと考えておきたい。ちなみに、今池編年V期の指標資料S D 201一括土器では、供膳形態における須恵器と土師器の比率は5対1ないしは4対1程度で須恵器が多い。

B. 土器の年代

当地区の土器を代表するS E 153土器とS E 183土器は、前述したように今池編年のVI期・VII期、実年代でおおよそ9世紀後半から10世紀に比定される。今池編年のVII期（9世紀後半）の指標資料は今池遺跡S D 3最下層（Ⅳ層）出土土器であり、VII期（9世紀末～10世紀）は子安遺跡・下新町遺跡の出土土器で一括土器ではない。このためVII期の器種構成などは不明確な点があり、VII期の資料と同等に比較することはできない。しかし、大局的な傾向として、VII期にはVII期を特徴づけた須恵器無台杯がごく少くなり、供膳形態が土師器によってほとんど占められることが指摘される。

このような土器の編年観からすると、S E 153土器とS E 183土器はVII期よりもVIII期の様相に近似していると考えられる。以下、VIII期の今池S D 3土器と当地区的S E 153土器・S E 183土器とを比較検討し、いくつかの点から、今池S D 3土器が相対的に古くとらえられることを示そう。

今池遺跡 S D 3 最下層出土土器（今池 S D 3 土器と略す）は、大規模な溝から出土したもので 400 ~ 500 個体を数えるが、出土層位は短期間に形成されたと考えられる砂利層である。器種は多様であり、須恵器の有台杯・無台杯・杯蓋・長頸瓶・短頸壺・甕・横瓶、土師器の杯・椀・皿・鍋・甕などがある。量的に多いのは供膳形態の土師器杯と須恵器杯類、煮沸形態の土師器甕である。供膳形態における須恵器と土師器の数量比率は 1 対 4 ないしは 1 対 3 程度で、供膳形態の 75~80% は土師器によって占められている。これに対し、S E 153 土器には須恵器の杯類はみられず、S E 183 土器には無台杯 3 ~ 4 個体、有台杯 1 個体があるものの供膳形態のなかでは 10% 以下の割合にすぎない。ほかの一括土器についても同じ状況である。こうした供膳形態における須恵器と土師器の比率の相違が第 1 点として指摘される。すなわち、須恵器の杯類が時代とともに減少するという傾向からみれば、S E 153 土器・S E 183 土器よりも今池 S D 3 土器は古い様相をもつといえる。

第 2 に、今池 S D 3 土器には須恵器の供膳形態の器種として、無台杯のほかに有台杯が一定量含まれることがあげられる。しかも、身の浅い有台杯 A が多いことが注目される。元来身の浅い有台杯 A は 8 世紀から 9 世紀前半までは有台杯のなかでは主流をなすものであり、古い要素をもつものである。S E 183 土器には有台杯 A はまったくみられず、身の深い有台杯 B か椀かと考えられるもの（13）があり、これとほぼ同じ時期とみられる S D 188 の 88 は有台杯 B であり、ほかにも有台杯 A はみられない。したがって、有台杯 A は VI 期を最後として消失する器

	土師器杯	須恵器無台杯	須恵器有台杯 A	有台杯 B	灰陶陶器
(今池 V)					
今池 VI (SD3)					(K-14)
一之口西 SE153					
一之口西 SE183					K-90
(下新町)					

第17図 土師器杯・須恵器杯の変遷 (1 : 6)

種とみられ、これを含む今池SD3土器が相対的に古いことがうかがえる。・

第3に須恵器杯類の底部切り離しの糸切り技法の有無が指摘できる。糸切り技法は今池Ⅲ期（8世紀後半）には出現し、V期（9世紀前半～中葉）において無台杯・有台杯とともにヘラ切り技法を圧倒するが、VI期になってヘラ切り技法の無台杯が再び増加し、糸切り技法が減少する。SE153・SE183土器をはじめとする当地区の一括土器には糸切り技法の杯類はまったくみられない。これはVI期の傾向が顕著となり、糸切り技法が消失した結果と考えられる。

第4には須恵器の無台杯と有台杯の形態上の相違があげられる。今池SD3土器・SE183土器の無台杯はともに身の浅い形態で、胎土・焼成・色調などの特徴や法量はほぼ共通しており、同一の技術系譜下にあることがうかがえる。しかし、形態は体部のたちあがりの角度に象徴される差異がある。体部のたちあがりの角度は底径と口径の比率を表わす「底径指数」（底径／口径×100）によって示すことができる。今池SD3土器は14個体で59～70であり、SE183土器は2個体で53・58であり、明確な差がみられる。すなわち、今池SD3土器のほうが、口径に対し底径が大きく、体部のひらきが小さいことがわかる。また、相対的に今池SD3土器のほうが底面がくぼむ傾向があり、器壁も若干厚い。須恵器の無台杯については、新しくなるとともに器形が「杯」というよりは「皿」にちかくなり、軽量化する傾向がうかがえる。一方、有台杯も体部のたちあがり角度については、無台杯と同様にひらく傾向がみられる。今池SD3出土のものとSD188の88、遺構外の132・133を比較すれば、これは明瞭にとらえられ、器形は「杯」よりも「碗」にちかくなる。そして高台については、断面方形のものから、接地面が丸くなり、両側面が底面にそのままつらなるように変化し、調整が粗くなつたことがうかがえる。

第5に、須恵器長頸瓶はSE153の38との比較から、新しくなると頸部が太くなる傾向がみられる。遺構外の159～161はさらに新しい傾向がみられ、端部のつまみあげは明確ではなくなっており、胴部は長くなるものと考えられる。

以上の点からみて、SE153土器とSE183土器は若干の年代差があるものの、今池SD3土器よりも新しく、今池編年ではVI期に相当する。これ以外の土器についてもほぼ同じ年代が考えられる。ところで、今池編年のVI期は子安遺跡と下新町遺跡とで主体となる時期が異なり、前者をその前半、後者をその後半と考えた。それは主として灰釉陶器の共伴関係が、子安遺跡は光ヶ丘1号窯式、下新町遺跡は大原2号窯式とみたことによるが、土師器杯の形態・特徴もこれを裏付けている。一之口遺跡の西地区の灰釉陶器のうち主体となる碗皿類は、いずれも美濃産で、1、2点をのぞけばすべて光ヶ丘1号窯式である。¹⁾ SD188土器・SK145土器の灰釉陶器はいずれも光ヶ丘1号窯式であり、灰釉陶器との共伴関係からみれば、当地区的主体をなす土器はVI期のなかでも前半の時期に比定される。土師器杯の形態・特徴も後半期の下新町遺跡とは異っている。VI期はかつて灰釉陶器の年代観を参考にして9世紀末から10世紀代とし

1) 光ヶ丘1号窯式といわれる岐阜県多治見市北丘14号窯〔橋崎彰一ほか1981〕に類似するものが多い。

た。ここでは平城宮・平安京の資料を積極的に援用した年代観〔前川要1984〕を考慮に入れて、S E 153 土器と S E 183 土器の年代を9世紀第4四半紀から、10世紀初頭～前半と考えておく。

C. 土師器甕・鍋について

平安中期の煮沸形態には甕と鍋がある。鍋は甕よりも量的には少ないが、基本的な器種として定着しているのは北陸地方に共通している。甕は大きさから大、中、小のほぼ3種に分けられる。形態、手法は大形甕と中・小形甕とでかなりちがう。大形甕は長胴で丸底の形態であり、胴部下半の内外面はあて具痕と叩き目がみられる。中・小形甕は底部回転糸切り無調整の平底で、ほかはロクロナデ調整である。鍋は口径30cm前後の大形品がほとんどであり、身の浅い半球体の形態で手法は大形甕に類似する。

口縁部の形態も大形甕と中・小形甕とは異っている。大形甕の口縁部形態はA形態とB形態の二つに大別される。A形態は一般的な形態でくの字状に外反した端部が上方へつまみあげられその外側が外傾する面をなす。外側の面はわずかにゆるくくぼみ、かすかに回線様となるものが多く、上端へのつまみあげが顕著で短かくたちあがるものもある(95)。これに対し、B形態はごく少數ではあるが、端部が上方へつまみあげられずに面をもつか、単純に丸くおさまり、口縁部下辺が肥厚して綾をもつものである(96・194・203)。鍋の口縁部形態もおむねこれと共にし、A形態が多く、B形態は1点のみ確認される(103)。両者は口縁部の形態ばかりではなく、胎土・焼成も明確に相違している。A形態は胎土が精良でほとんど砂粒を含まず、軟質なのに対し、B形態は砂粒を多く含み硬質な焼成である。焼成状況は埋蔵状況によっても異なるが、同一条件下のものを比較したうえでも同様である。A形態はいうまでもなく在地のものであり、B形態は外来系とみることができる。B形態は北陸地方にはみられず、北信濃に見い出すことができる。たとえば長野県飯山市北町遺跡〔高橋桂1982〕、同長者清水遺跡〔高橋桂¹¹1985〕、長野市県町遺跡〔笛沢浩1982〕などにほぼ同時期と推察される平安中期の例がある。したがって、B形態の甕の出自は北信濃に求めることが可能であろう。ただ、北信濃そのものではなく、若干の相違はみとめられる。北信濃のものはここにみる在地系のものと比較してやや胴部が短いが、203などはかなり長胴であり、胎土も在地ものに類似している。

この種の甕は頬城平野では当資料のほかに上越市子安遺跡〔新潟県教育委員会1984 図版73-56〕、同下新町遺跡〔同 図版64-144〕などで散見される。したがって頬城平野では在地系の甕の中に少量の北信濃系が含まれるのが一般的な方とみることができよう。頬城平野は南東側の関田山脈を介して北信濃と接する地理的関係にあり、前述した律令期の須恵器における東海系のあり方も信濃との関連を想起させるし、灰釉陶器の流通も生産地との関連から信

1) 長野市立博物館や飯山市教育委員会で実見した土器の胎土は、ここでいうB形態のものに類似する。

濃を介したものと考えられる〔坂井秀弥1982〕。また奈良・平安期以外の時期についても両地域の交流はうかがうことができ、頸城平野の地域は越後の中でも信濃との関係が密接であることが推察される。¹¹⁾ なお、魚沼地方の六日町金屋遺跡〔山本肇1985〕では北信濃系のものがむしろ主流をなし、羽釜もかなり出土していることから、魚沼地方は頸城平野の地域とも異った文化圏として把握される。¹²⁾

以上、土師器大形壺の口縁形態から、北信濃系の土器が抽出されたが、中・小形壺においては大形壺のA形態に類似する口縁端部つまみあげのタイプはS E 107出土の55など少ない。SK 191出土の62は、55ほど顕著ではないがつまみあげられている。これ以外では内湾するもの(16・43・75)、ほとんど直線的なもの(36)、外面下辺が肥厚するもの(37)などである。外面下辺が肥厚するものは大形壺のB形態にやや類似し、北信濃系の可能性も考えられる。内湾するもの、直線的なものの出自は不明ではあるが、北陸地方にはあまりみられない反面、北信濃で類似例があることから、一応北信濃系と考えておく。

一方、A形態とした在地系の壺は全体の形態や製作技法が北陸地方中西部(越前～越中)と共通している。しかし、口縁端部のつくりは必ずしもまったく同じではない。北陸地方中西部において、当地区の土器とほぼ同時期とみられるのは吉岡編年〔吉岡康輔1983〕の第Ⅳ2期(給分小袋窯期)である。この時期の土師器の壺は口縁端部が短く上方内側に屈折してたちあがるものである。これに対し当地方のA形態にはこうした例はSD 188出土の95などわずかしかみられず、例外的である。同じ地域にある今池遺跡群でも同様である。当地区の一般的なA形態は、今池遺跡群の資料をみると、8世紀末から9世紀前半のものとほとんど共通しており、口縁部はあまり時期的に変化しないものと推定される。8世紀末から9世紀前半の時期については北陸地方中西部と共通していることから、9世紀後半以降に両地域の差が出てきたと考えられる。なおこの地域色は越後のなかでも頸城平野を中心とする地域についてであり、越後全城が同じであったかどうかは検討を要する。ただ少ない資料からうかがう限り、北陸地方中西部のものに類似したタイプは当地方よりも越後中部・北東部に多いと思われる。

このように北陸地方における越後・頸城の地域色は土師器の壺・鍋の口縁部形態から、うかがうことが可能であるが、このほかに、土師器・須恵器とも椀皿類がごく少ないという器種構成上の相違もこれを示していよう。なお土師器の折縁皿は高台をもたないものが多いと推定されるが、こうしたものは北陸地方中西部ではあまりみられない。

1) 弥生末から古墳初期の北陸東北部系の土器は北信濃にかなり分布し〔坂井秀弥1985a〕、中世の珠洲系陶器も同様である〔高橋桂1985〕。

2) 魚沼地方と北信濃は信濃川(千曲川)を介した直接的な交流が想定される。魚沼地方における北信濃系の要素の主体的なあり方は、弥生中期(中部高地系櫛描文)にはすでにみられるようである。

2. 平安時代中期の遺跡

A. 建物・井戸・土坑

一之口遺跡西地区で検出された遺構は、ほとんどが平安時代中期のものである。この時期の遺構は東西約300mにわたる調査範囲のほぼ全域に分布している。しかし、遺構の重複は比較的少なく、遺跡の存続時間は長くはないといわれる。このことは前述したように出土土器からもうかがえ、3地区東端部に平安前期（8世紀末葉～9世紀中葉）の土器が比較的集中する以外は、ほとんど9世紀末から10世紀初頭・前半のものである。

遺構は掘立柱建物・井戸・土坑など直接居住生活に関係するものと、畠と推定される畝状小溝・灌漑用水と推定される溝など農業生産に関連するものとがある。

掘立柱建物は10数棟検出されたが、このうち約半数は調査区間に位置していたり、遺構などの重複によって全容は不明であり、建物の復原に問題を残すものもいくつかある。建物は東西棟建物が多く、正方形の平面形のものはない。総柱建物はSB185の1棟のみで、廂を有するものは、SB185・SB151・SB169の3棟である。建物の周辺からはおむね土器が比較的集中して出土しており、これらの建物の多くが、倉庫などの貯蔵施設ではなく、居住施設であることが想定される。唯一の総柱建物であるSB185についても同様である。このことは、建物の近くに井戸や土坑（芥塵穴）が存在する場合が多く、これらが生活に密着した施設であることからもうかがえる。

遺構の分布からある程度のまとまりを抽出すると第4表のように把握され、このなかで明確に建物と井戸・土坑が伴うものは①3区のSB124などとSE117・SK108など、②3区のSB127とSE107・SK105、③2区のSB151などとSE153・SK145など、④2区・1区のSB185・SB208とSE183・SK191など、である。それぞれのまとまりは、なんらかのひとつの生活単位であったと考えられる。SB124やSB151を中心とする単位は建物の数や重複関係などからみて、1～2回の建物の建て替えがなされる期間は継続して営なされたものと推定される。SB185も2つの柱痕跡からみて建て替えが考えられる。

ところでこれらの単位は土器や建物の方位からみて、すべて同時に営なされたものではなく、若干の前後関係がうかがえる。まず、井戸SE153と井戸SE183の出土土器からみて、それぞれに伴う建物に若干の時間差が存したものと考えられる。SE183に伴う建物はほぼSB185に限定することが可能であるが、SE153に伴う建物はSB151・SB168・SB162などが近接して存在するため、にわかに限定できない。しかし、このうちのどれかがSE153に伴うことは確実視され、この単位がSE183に伴う単位より先行して形成されたものと推定される。

一方、建物方位は2棟がほぼ東西方位に一致するほかは、いずれも東偏するが、それぞれは

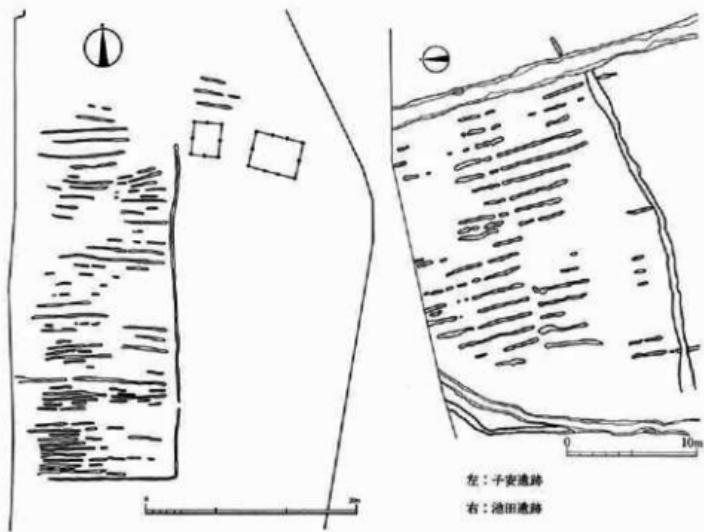
建物(間数、棟方向、方位、その他)	井戸・土坑	歴史小溝
S B301(2×2、東西、N-65°-W)		b 群
S B124(2×5、東西、N-76°-W)		
S B125(2×2、東西、N-83°-W)	S E 113・S E 117・S E 118・S K 1・ S K 49・S K 108	a 群
S B126(2×2、南北、N-20°-E)		
S B127(2×2?、南北?、N-71°-W)	S E 107・S K 105	c 群
S B141(2×2、南北、N-10°-E)		
S B169(—、—、N-8°-E、廻)		
S B151(×3、—、N-0°-E、廻)		
S B162(2×?、—、N-72°-W)	S E 143・S E 153	e 群
S B168(2×?、—、—)	S K 145・S K 147・S K 154	f 群
S B164(2×2、東西、N-80°-W)		
S B152(2×3、東西、N-82°-W)		
S B173(2×2、東西、N-86°-W)		
S B185(3×4以上、東西、N-82°-W、廻)	S E 183・S E 195・S K 180・S K 178	h 群
S B208(—、東西、N-82°-W)	S K 194・S K 179・S K 199・S K 200	

第4表 平安時代の遺構の構成

すべて同じ方位ではない。方位からの偏向が大きいものは3区の建物と2区のS B 162であり、3区の建物が相対的に偏向度が大きい。当地区の建物配置は近接して多くの建物が存在するような状況ではなく、同時期の建物相互が同一の方位であるとは即断できないことも考えられる。しかし、建物方位はこれに伴うとみられる歴史小溝と同一方位にあり、これがある程度の範囲を占めることを勘案すれば、一定の土地区分が存在し、これに建物方位が規制されることも想定され、同一時期の建物方位はほぼ同じとも考えられよう。3区は出土土器に相対的に若干古い様相があり、土器からみて、井戸 S E 183 より古いと考えられる井戸 S E 153 は、位置関係からみて偏向角18度のS B 162に伴う可能性が考えられる。同一方位の建物が同時期に存在したと考えれば、偏向角16度以上のものが、当地区的なかでは古い可能性が指摘される。

B. 歴史小溝

歴史小溝は細くて浅い溝が平行して並んで群をなしている遺構である。一条の歴史小溝は幅数10cm、深さ数cmから10cm程度で、約1m間隔で平行し方形の一定の範囲内に存在する。これらの分布はおおむね建物に近接し、建物や井戸・土坑と重複しないことからみて、建物と同時期のものと考えられる。歴史小溝の方位が近接する建物の方位とほぼ一致することもその証左である。こうした遺構は春日・木田地区の池田遺跡〔鈴木俊成1985〕、同じ頃域平野に所在する上



第18図 飴状小溝の検出例

越市今池遺跡・子安遺跡〔新潟県教育委員会1984〕でもみられる。今池遺跡・子安遺跡では同時に存在した建物が近接して存在し、池田遺跡では建物が検出されていないが、遺物の出土状況からみて調査区外に近接して住居が存在する可能性が高い。時期は今池遺跡が9世紀前半を中心とする時期、池田遺跡と子安遺跡が当地区とほぼ同じ9世紀後半から10世紀前半である。

この造構の性格は明確に決定する根拠を欠いているものの、畠と考えている。畠の造構は群馬県下で多数検出されている〔能登健1983〕。時期は多様で、弥生時代末から古墳時代初頭、古墳時代後期、平安時代と近世のものがある。古墳時代後期の高崎市芦田貝戸遺跡では約1mの幅で飴がありその間に幅約20cmの溝が介在している。ほかの例でもおおむねこれと同じあり方で、ここでいう飴状小溝との類似性が指摘される。平行した小さな溝は飴間の溝の痕跡であり、飴の高まりはのちに削平されたと推測される。畠の造成は近世の資料からみて「畑地を打ちなしし飴幅を決めて水籠を張って打ったのち、筋きりで筋をつけ飴で土をかきわけて飴をつくる」〔秋山高志ほか編1979〕ものと推測され、その結果飴の間の溝は直線で、ある程度の深さをもつことになる。飴状小溝の検出例はいずれも当時水田化されていたとは考えられない立地をしている。住居に近接して存在することは、そこが居住に適した条件、すなわち畠として利用しうる土地であることを示唆する。

畠とした場合、作物が問題である。プラント・オパール分析によれば飴状小溝を覆う土層からはイネが検出されており、これを積極的に評価するならば、陸稻という見方もなされよう。しかしこれ以外の分析は実施しておらず、考古学的知見からは栽培作物については明確に断定する資料はないため、可能性を指摘するにとどめておく。

以上のように、畠状小溝を畠跡と考え、これが住居などの建物に近接して存在したとするならば、平安時代には宅地内の空地を利用して、畠をつくっていた事例の存在が知られる。もっとも典型的な S B185 を中心とする部分についてみると、大規模な東西棟建物の東側に井戸と土坑からなる空間があり、建物とこの空間をとりまくように一面に畠がつくられている。検出された範囲で畠の面積は約500 m²（約0.5段）である。畠と建物を含めた土地は東西約60m、南北25m以上、面積約1500m²（約1.5段）以上である。畠の周縁部には溝や柵など建物と畠からなる空間を区画する施設がないため、S B185 と畠の範囲がひとつの宅地をなすとは即断できない。畠の東側にある2棟の建物 S B169・S B173 は建物の方位が S B185 と同じかこれに近く、主屋の S B185 に付随する副屋など互いに関連するものかもしれない。そうした場合、この宅地はさらに広いものとなる。S B185 は規模が大きく搬入品である灰釉陶器を多く所有していたことからみてかなりの有力者の居宅と推定される。S B185 の宅地は調査区南側にさらにひろがっていたとみられ、少なくとも 2 段以上の宅地をなしていたものと推定される。

ところで、このような建物とこれに付随する畠の例は、さきにあげた新潟県の3例のほかにもいくつかある。たとえば石川県寺家遺跡〔小島芳孝1984〕、山形県城輪柵周辺の沼田遺跡〔佐藤庄一ほか1984〕、新青渡遺跡〔佐藤庄一ほか1980〕、地正面遺跡〔佐藤庄一ほか1982〕、茅針谷地遺跡〔川崎利夫ほか1981〕、静岡県川合遺跡〔静岡県埋蔵文化財研究所1985〕などがあげられる。これらはいずれも平安時代初期から中期のものであり、新潟県内の3例と同時期であることが注目される。

一般に建物とこれに付随する畠は、文献史学から「園宅地」と呼ばれている〔戸田芳実1967〕。弘仁10年（819）の「近江国坂田郡大原郷長解」によれば、家に接して畠地二段が存在し、これらが溝と大道、あるいは垣で仕切られていたことが知られるが。さきにあげた遺跡例はこのような「園宅地」の実例ではないかと思われ、今後、こうした視点からこれらの遺跡を考察する必要がある。

C. 一之口遺跡周辺の開発

西地区の調査成果からみると、9世紀後半から10世紀前半にかけて、東西約300mにわたる範囲に、建物・井戸を中心とする居住施設がまとまりをなして散在し、これと付随して畠が存在する景観が復原された。この地点は現在南に正善寺川の氾濫原をひかえ、これと1mほどの比高をもつ微高地であり、調査前は畠が比較的卓越していた。正善寺川の流路は一之口遺跡東地区的調査によって、変動していることが判明している〔新潟県教育委員会1985a〕が、平安初期から中期にかけての流路は現在のものとほぼ同じかどうかは不明で、往時の西地区的詳細な地形環境も明確ではない。しかしながら、古墳時代後期から平安中期までの生活面とほぼ一致

1) 10世紀中葉以前の標準的百姓の家地（宅地）の面積は1段前後とされる〔金田章裕1971〕。

するIV b層とVI a層の状況は、現地表面とほとんど同じ傾斜を示すことから、地勢はさほど変化していないものと判断される。住居と畠が営なまれるという土地利用からすれば、この地が地下水位の低い微高地であることが知られる。このことは、古墳時代後期にかなりの規模の集落が存在した一之口遺跡東地区についても同様であり、今回の調査対象である自動車道法線がそのまま東西にのびる微高地にあたっているとも考えられる。

一之口遺跡東地区では奈良時代末から平安時代初期頃とみられる掘立柱建物が数棟検出されており、ここに生活した人々が平安中期になって西地区に進出・定着した可能性が考えられる。9世紀後半から10世紀代の遺物と遺構は今回の春日・木田地区のすべての遺跡で検出されており、一之口遺跡に限らず、この時期は微高地に入々が進出し、宅地や畠地の造成を展開したことと想定される。遺跡のあり方からすれば、春日・木田地区についてはこの時期がひとつの大画期といえる。

微高地上の開発に対して、水田開発はどうであろうか。一之口遺跡西地区で検出された大溝S D 101とこれに関連する何条かの溝は、この点とくに注目される。S D 101は幅10mもの大きな規模をもつ溝で、これから取水したとみられる幅約1mの東西方向の溝が2条あり（S D 109・S D 110）、さらにこれから北側へ向う同規模の溝（S D 103・S D 104）がある。このうちS D 103はS D 104から分れ、分歧点に水位調節の機能をもつと推定される堰がある。溝の掘削時期は不明な点があるものの、層位や出土土器からみて平安中期に機能していたことはまちがいない。このような溝は水田の用水路とみてよいであろう。用水の供給源は正善寺川と考えられ、微高地を横断して一之口遺跡の北方にひろがる水田に水を供給したものと推察される。大規模なS D 101は正善寺川北岸一帯の幹線水路で、これより派生する多数の溝によってきめ細かく用水路網が設定され、これによって広範囲に水田経営がなされていたものと考えられる。一之口遺跡の周辺は広い沖積段丘面で、用水の便さえあれば、かなり生産性の高い水田に変貌したであろう。この付近には1町方格にちかい南北方向の条里的な地割が分布しており、漠然とではあるが、中世以前に水田開発がおこなわれたことがうかがえる。一之口遺跡で検出された溝はほぼ東西方向であり、建物と畠の方位もこれと同様であり、広い範囲にわたって東西南北を基本とした土地区画が存在した可能性も考えられる。このように考えると、神護景雲元年（767）作成といわれる「東大寺領越前国守庄絵図」〔弥永貞三1966〕にみるような土地景観、すなわち自然堤防上に宅地と畠地があり、その後背地に水田がひろがるという土地景観が当地域でも確認されるのである。いずれにしろ、かりにこのような開発が平安初期から中期にかけて達成されたとすれば、前述した微高地上の開発とあわせて、この時期を開発史上の大画期として評価することができる。顕城平野に限らず、越後全境を概観すると9世紀から10世紀の遺跡がきわめて多いように感じられるのは、こうした背景と関連するのかもしれない。

1) ただし、全面的に水田化されるのは中世・近世の開発を経てからであろう。とくに調査地を貫通する福井中江用水の開削（近世後期）はその決定的要因と考えられる。

2) 広大な低湿地をひけえた中頸城郡顕城村においても同様である〔坂井秀弥1985b〕。

3. 結 語

最後に一之口遺跡西地区の調査成果をまとめておく。調査地は平野部の微高地に立地し、調査範囲は東西約300m、南北50m前後である。遺跡の時期は平安時代が主体を占める。平安時代以前は古墳時代末期から奈良時代前期にかけての遺構が若干存在するほかは、古墳時代・中世・近世の遺物がごくわずか出土しているにすぎない。

遺跡の中心をなす時期は平安時代でも9世紀後半から10世紀前半であり、掘立柱建物と井戸・土坑がセットになった居住区が数単位散在し、その周辺に畠がつくられている。建物のなかには一辺1m以上もある巨大な柱掘形をもつ大規模なものがあり、この周辺から搬入品である灰釉陶器が集中して出土しており、一般農民層ではない有力者層の居宅が想定される。居住区に接して畠が付随するのは、文献史学でいう「園宅地」と考えられ、考古学的資料として把握される貴重な例として注目される。当遺跡周辺では、発掘調査や分布調査の成果から、9世紀後半から10世紀代の遺跡が多く確認されており、微高地上にはここで検出された居住区と畠が広汎に展開していたことが推定される。一方、水田の用水とみられる溝も大規模なものを持ち、いくつか検出されており、微高地ばかりでなく低地の開発も活発におこなわれ、生産力が拡大したことが推察される。

出土遺物はほとんどが土器で、このほかに木製品・鉄製品・石製品がある。平安時代中期の土器は大半が土師器で、須恵器は少ない。灰釉陶器は20点ちかく出土している。ほとんど美濃産で光ヶ丘1号窯期(K-90)である。井戸・土坑からはいくつか良好な一括土器が得られ、今池遺跡群における奈良・平安時代土器編年(8~10世紀、I~IV期)のIV期前半の資料が充実した。これによると当時期の土器でもっとも普遍的な土器である土師器杯も形態・手法に変化があることがわかる。また、土師器の大形甕には在地系のほかに北信濃の影響によるとみられる口縁形態と胎土をもつものがわずかながらみとめられた。他方、在地系の甕は北陸地方の中西部と口縁部のつくりが若干異なっており越後・頸城の地域色が抽出される。木製品のなかでは井戸から出土した齊串2点が注目される。これは井戸を廻る際の祭祀に伴うものと推定され、同時に投棄されている土器などとともに、井戸祭祀の一端が把握された。

以上、簡略に述べたが北陸自動車道に伴う春日・木田地区的発掘調査はなお未了であり(昭和60年7月に終了予定)、これまでの3年間の調査資料も整理があまり進んでいない。そのため遺跡からみた当地域の歴史は、今後整理が進んだ段階で再検討をする部分があろうかと思われる。それらはすべて将来にゆだねたい。

(昭和60年4月了)

引用・参考文献

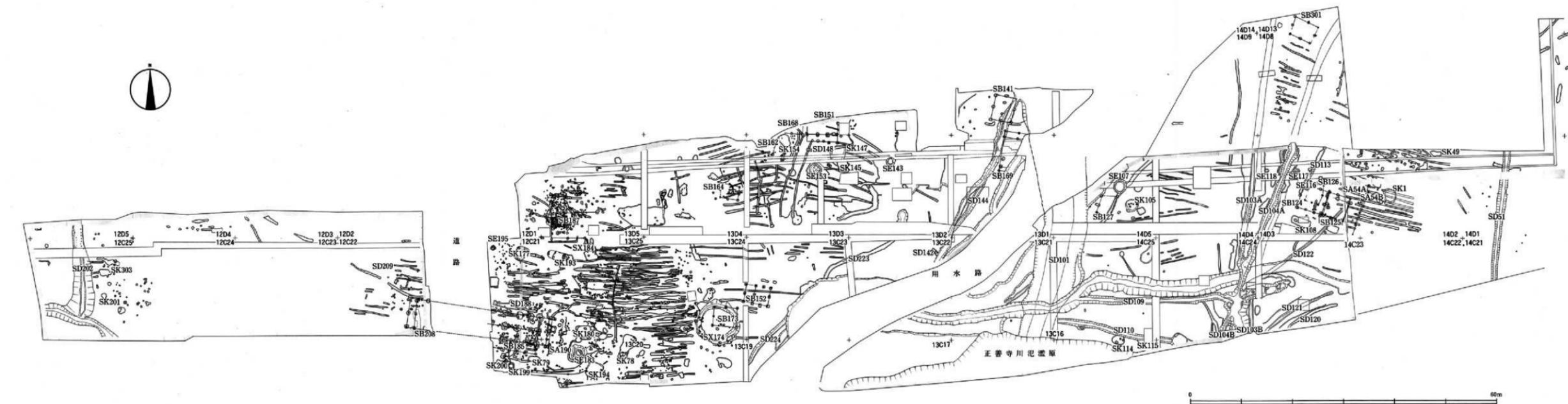
- 秋山高志ほか編 1979 「図解農民生活史事典」 柏書房
- 大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布」「国内出土の肥前陶磁」 佐賀県立九州陶磁文化館
- 龜田隆之・大石直正 1965 「古代の産業(二)・農業」 豊田武編 「産業史」 I 体系日本史叢書10 山川出版社
- 川崎利夫・野尻侃・安部実 1981 「芽針谷地遺跡」 山形県埋蔵文化財調査報告書第49集
- 岸本雅敏 1983 「富山県における土器製造の成立と展開」「北陸の考古学」 石川考古学研究会々誌 26 石川考古学研究会
- 金田章裕 1971 「奈良・平安期の村落形態について」「史林」 54-1
- 黒崎直 1976 「畜串考」「古代研究」 10 元興寺仏教民俗資料研究所
- 小島芳孝・荒木孝平 1984 「寺家」 羽咋市教育委員会
- 小島幸雄 1979 「岩木地区遺跡群発掘調査報告書」 上越市教育委員会
- 坂井秀弥 1982a 「栗原遺跡4次・5次発掘調査概報」 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1982b 「越後の灰釉陶器」「信濃」 34-4 信濃史学会
- 坂井秀弥 1983a 「越後ににおける7・8世紀の土器様相と画期」「信濃」 35-4
- 坂井秀弥 1983b 「栗原遺跡6次発掘調査概報」 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1984 「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器について」「上新バイパス関係遺跡発掘調査報告」 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1985a 「越後ににおける弥生後期の覚書」「新潟県史研究」 17 新潟県
- 坂井秀弥 1985b 「頸城平野古代・中世開発史の一考察—頸城村を中心にして—」「新潟史学」 18 新潟史学会
- 斎藤孝正 1982 「猿投窓における灰釉陶の展開」「考古学ジャーナル」 211 ニューサイエンス社
- 筆沢 浩ほか 1972 「上水内地方の考古学的調査」「上水内郡誌」 歴史編
- 筆沢 浩 1982 「県町遺跡」「長野県史」 考古資料編 主要遺跡(北・東信) 長野県史刊行会
- 佐藤庄一・野尻侃・安部実 1980 「地正面遺跡」「農林事業関係遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財報告書第51集
- 佐藤庄一・安部実 1984 「新青渡遺跡第2次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第79集
- 佐藤庄一・野尻侃 1984 「沼田遺跡」 山形県埋蔵文化財調査報告書第78集
- 静岡県埋蔵文化財研究所 1985 「静清バイパス(川合地区)発掘調査概要」 7(孔版)
- 鈴木俊成 1985 「池田遺跡」「北陸自動車道上越市春日・本田地区発掘調査報告書I」 新潟県教育委員会
- 高橋 勉 1984 「栗原遺跡第7次・第8次発掘調査報告書」 新井市教育委員会
- 高橋 桂 1982 「北町遺跡」「長野県史」 考古資料編 主要遺跡(北・東信) 長野県史刊行会
- 高橋 桂・望月静雄 1985 「長者清水・水の沢遺跡」 飯山市教育委員会
- 田口昭二 1983 「美濃焼」「考古学ライブライアリ-17」 ニューサイエンス社
- 田村 孝・小野和之 1980 「芦田貝戸遺跡II」「高崎市教育委員会
- 戸田芳実 1967 「律令制下の『宅』の変動」「日本領主制成立史の研究」 岩波書店
- 中沢 肇 1966 「高田市文化財調査報告書第8集」
- 橋崎彰一・齊藤孝正 1983 「愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告」 愛知県教育委員会
- 橋崎彰一・田口昭二・齊藤孝正ほか 1981 「北丘」「多治見市教育委員会
- 新潟県教育委員会 1984 「上新バイパス関係遺跡発掘調査報告」

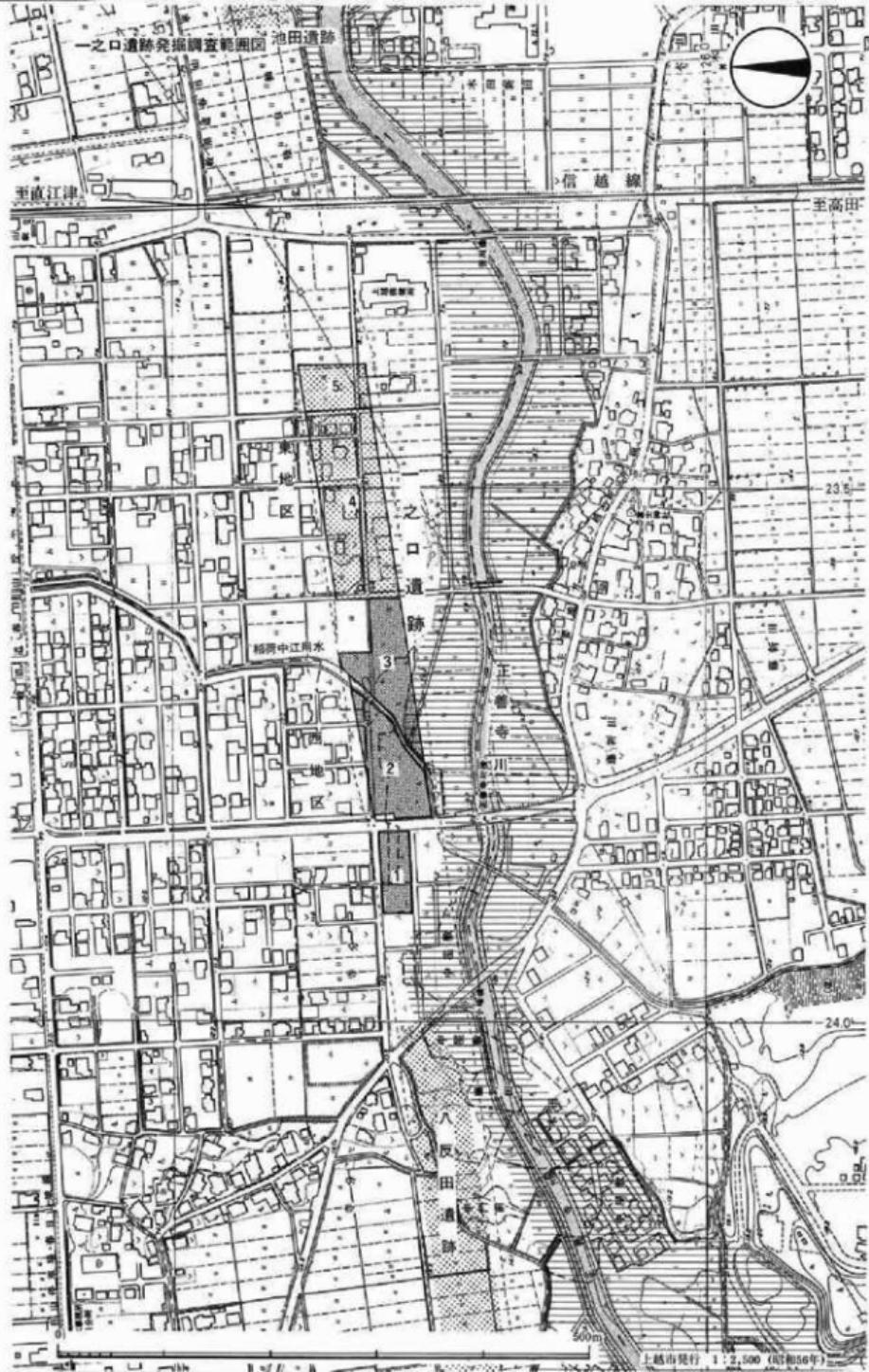
- 新潟県教育委員会 1985a 「北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅰ」
- 新潟県教育委員会 1985b 「新潟県埋蔵文化財調査だより」 1
- 西 弘海 1978 「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』 奈良国立文化財研究所
- 沼山源喜治 1981 「土師器合口甕棺墓について」『考古学雑誌』66-4 日本考古学会
- 能登 健 1983 「群馬県下における埋没田畠調査の現状と課題」『群馬県史研究』17
- 服部敬史・福田健司 1979 「南多摩窯址群出土の須恵器とその編年」『神奈川考古』6 神奈川考古同人会
- 前川 要 1984 「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』
Ⅲ 瀬戸市歴史民俗資料館
- 宮塚義人編 1985 「写真測量の技法」 考古学ライブラリー-31 ニューサイエンス社
- 弥永貞三 1962 「律令的土地所有」『岩波講座日本歴史』3 岩波書店
- 弥永貞三 1966 「奈良時代の貴族と農民」 至文堂
- 山本巖・北村亮・田辺早苗ほか 1985 「金屋遺跡」 新潟県教育委員会
- 吉岡康暢 1982 「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」『庄内考古学』18 庄内考古学会
- 吉岡康暢 1983 「奈良・平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』 松任市教育委員会・石川考古学研究会
- 奈良国立文化財研究所 1978 「平城宮発掘調査報告Ⅸ」

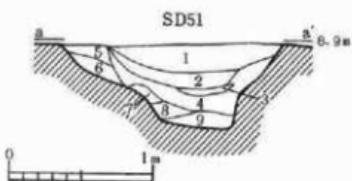
図 版

凡 例

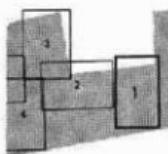
1. 造構はすべて一連番号を付し、建物(SB)、櫛・塀(SA)、井戸(SE)、土坑(SK)、その他(SX)などで分類した。
2. 造構実測図は1:500と1:150の2種作成した。1:150の図は右頁に、これに関係する造構実測図は左頁に掲載した。
3. 造構実測図の平面図の網目は調査に際して掘削した排水溝を示す。
4. 土器はすべて一連番号を付し、写真もこれにしたがった。土器の種別によって断面の表示を、土師器(白ぬき)・須恵器(黒)・灰釉陶器(網目)のとおりに区別した。中世・近世は珠州・越前焼(黒)、瓦質土器(網目)、瀬戸・美濃・唐津焼(斜線)である。土師器・灰釉陶器は黒色処理・施釉範囲に網目をかけた。
5. 口径復原がやや困難なものについては中心線と外形線を離して表示した。

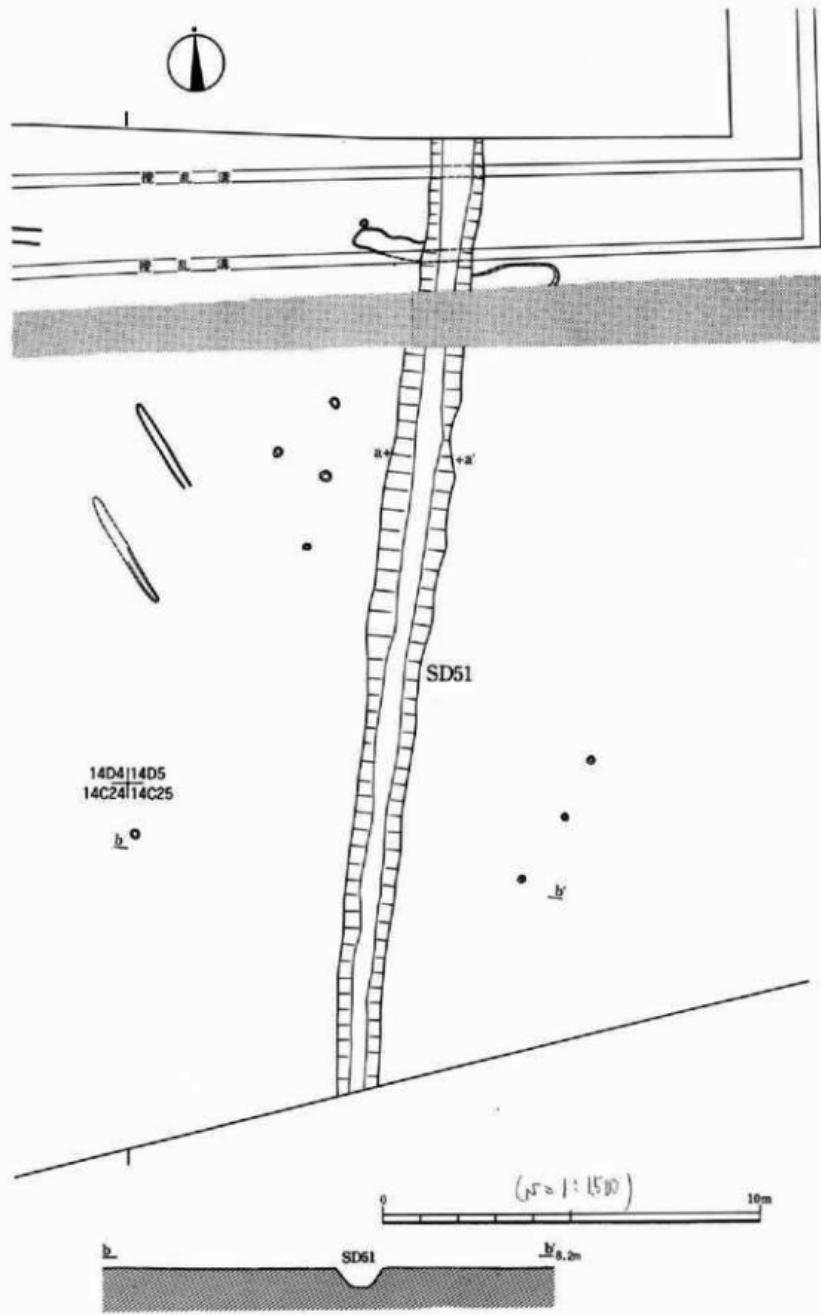


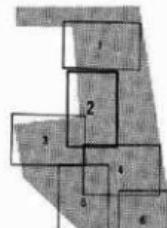
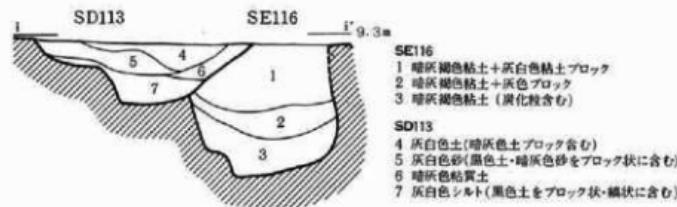
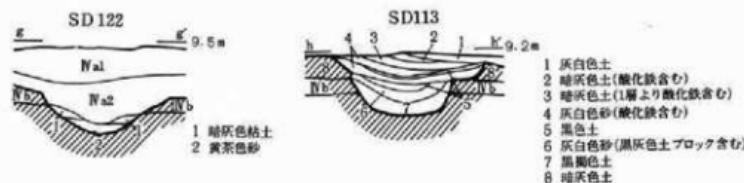
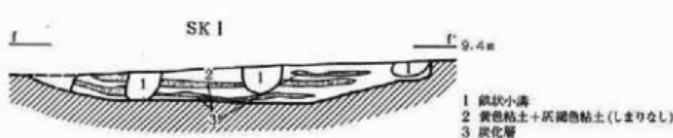


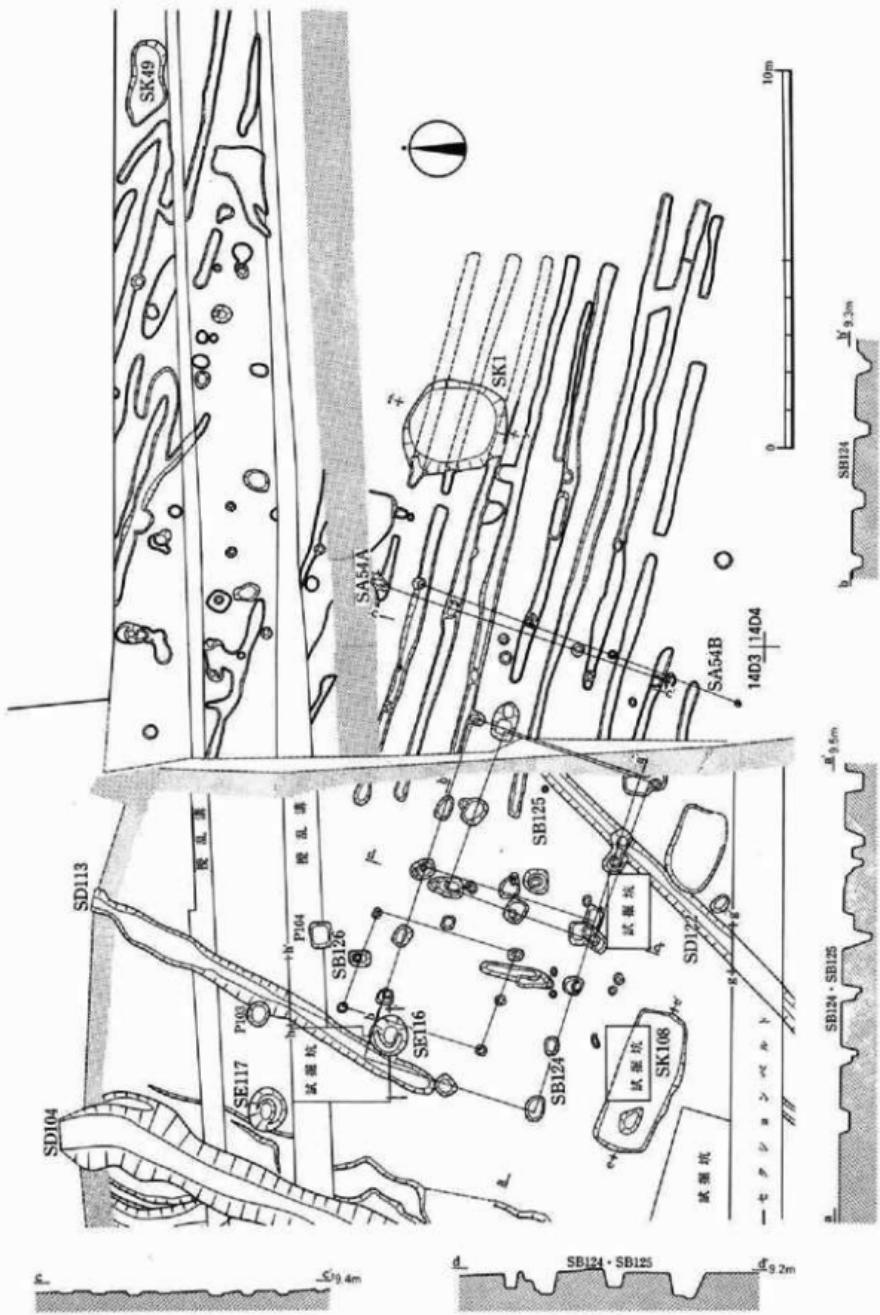


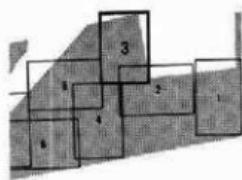
- 1 深褐色砂
- 2 灰色シルト(炭化物粒少量含む)
- 3 青灰色砂(粒子細かい)
- 4 喙状魚粘質土(2・8層混土、炭化物粒少量含む)
- 5 黑褐色土(しまりよし、炭化物粒少量含む)
- 6 砂白色シルト(2層に粗粒、2層に比べ粘性なし)
- 7 喙状白色シルト(6層と同質、やや暗い色調)
- 8 黑褐色粘土(粒子細かく、粘性強)
- 9 青灰色砂(粘質土の混入若干あり)

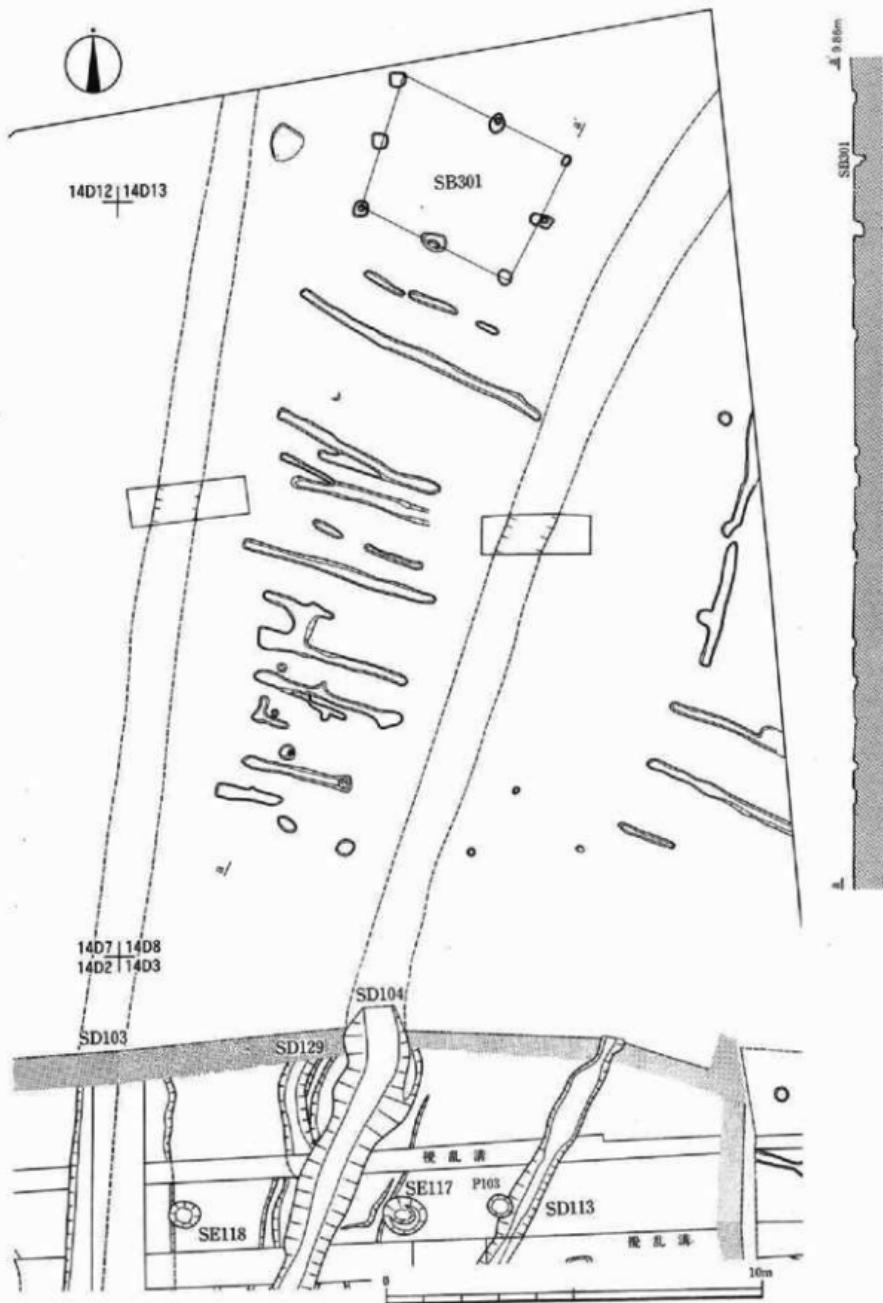


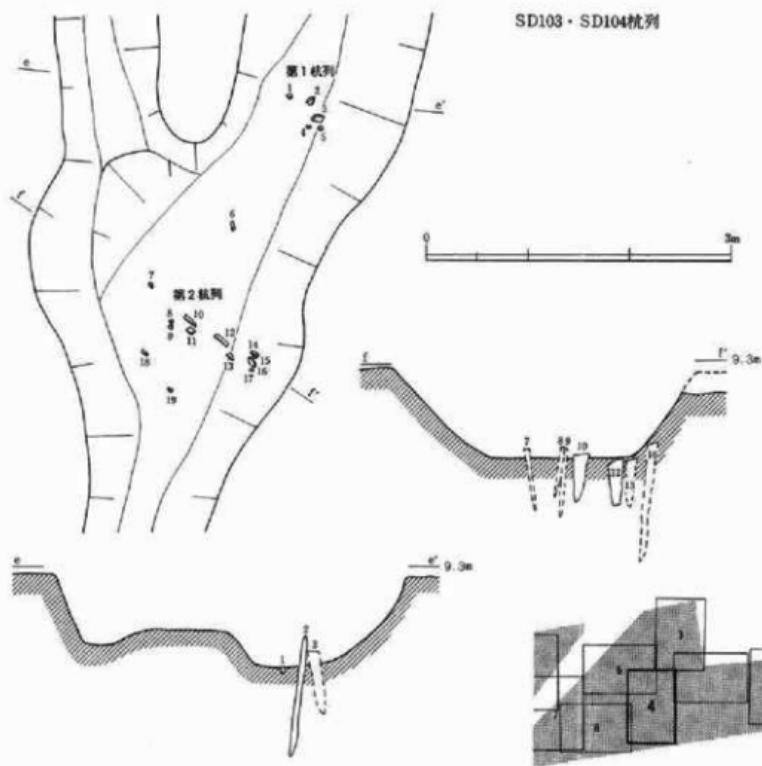
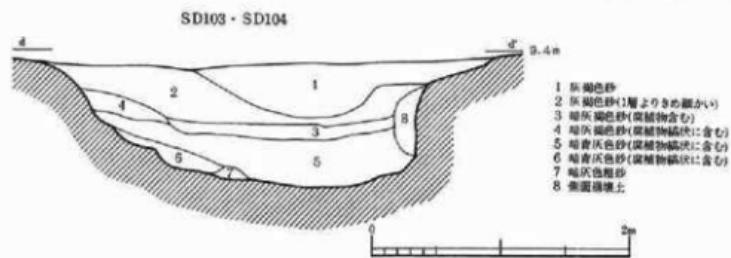


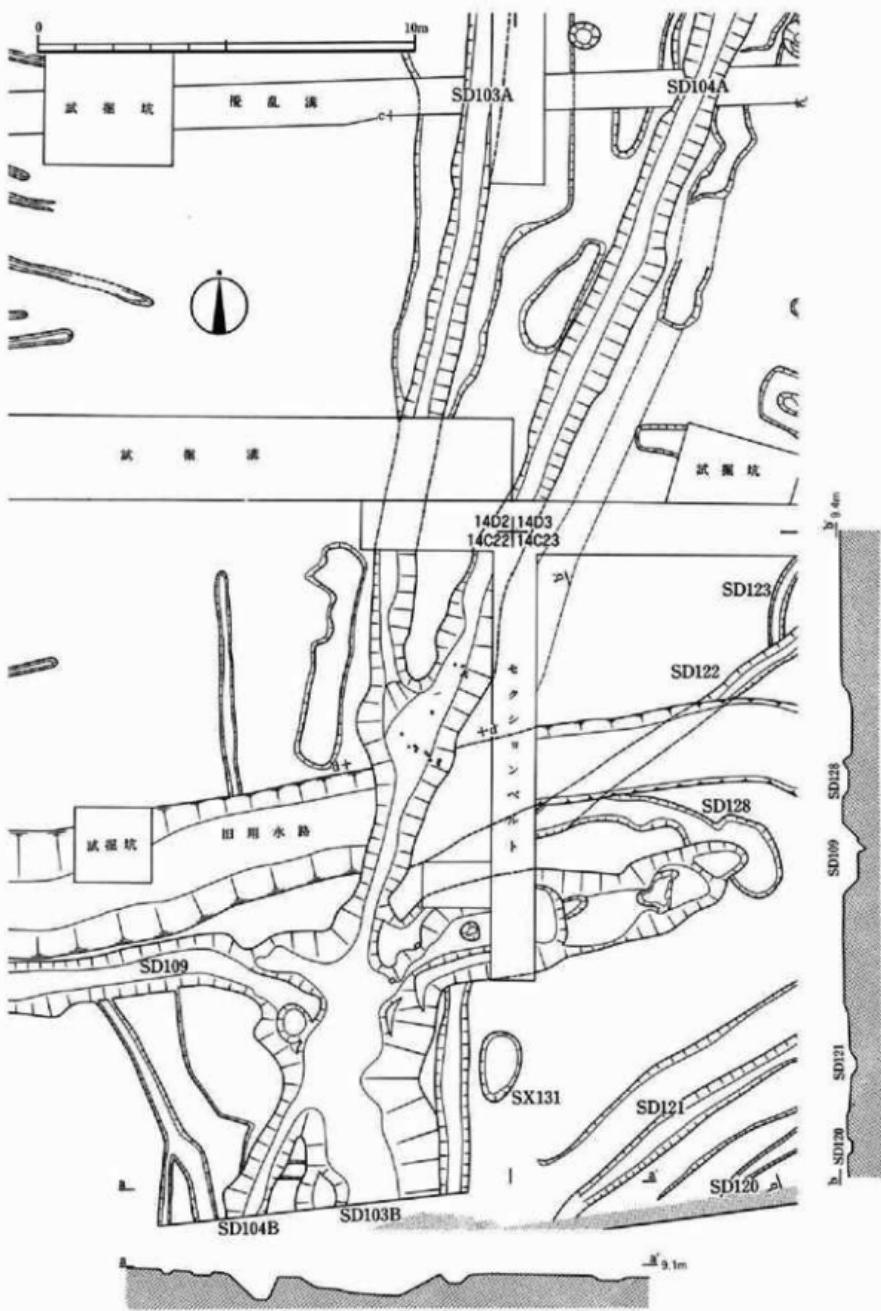


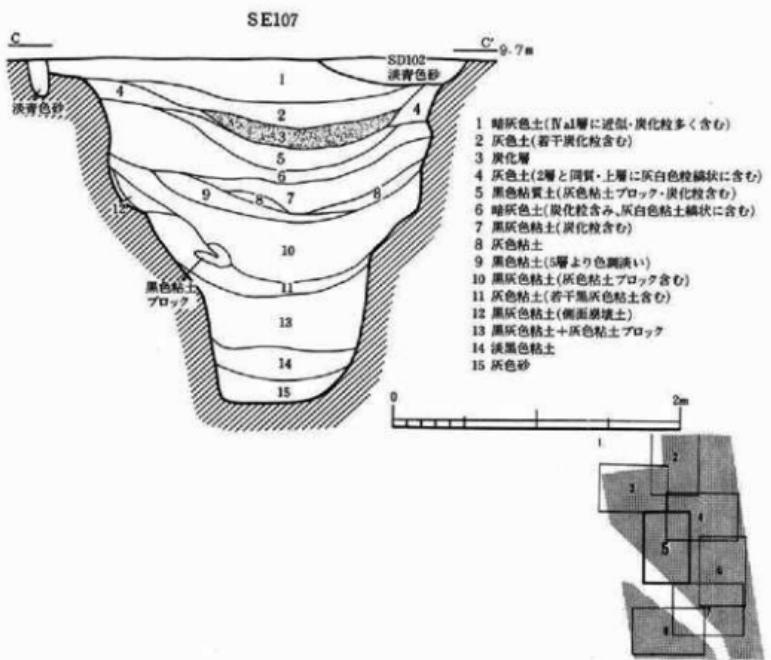


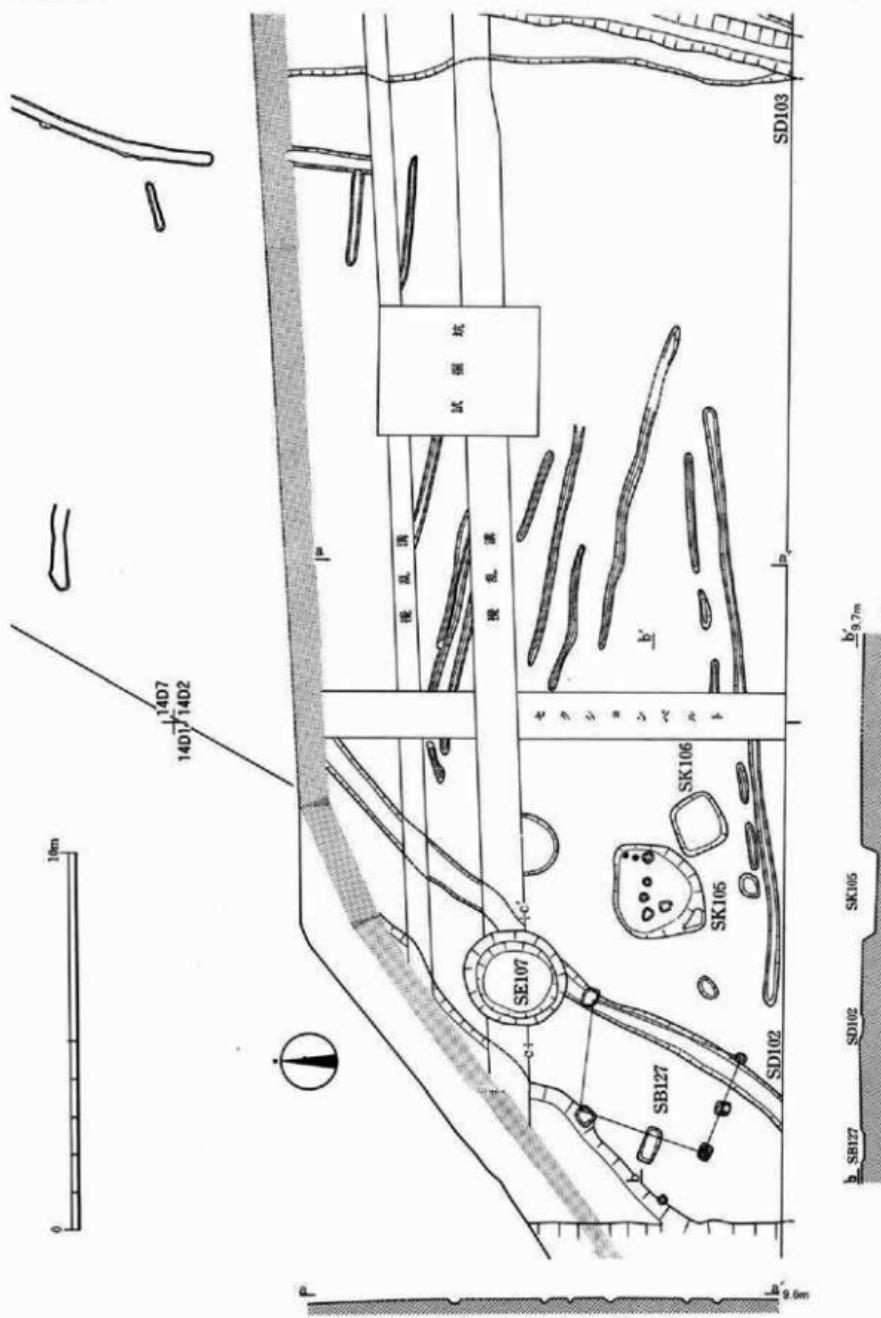


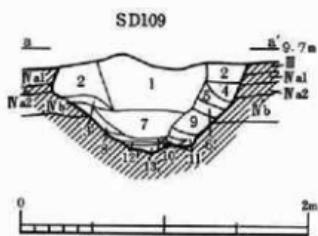




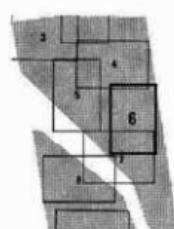


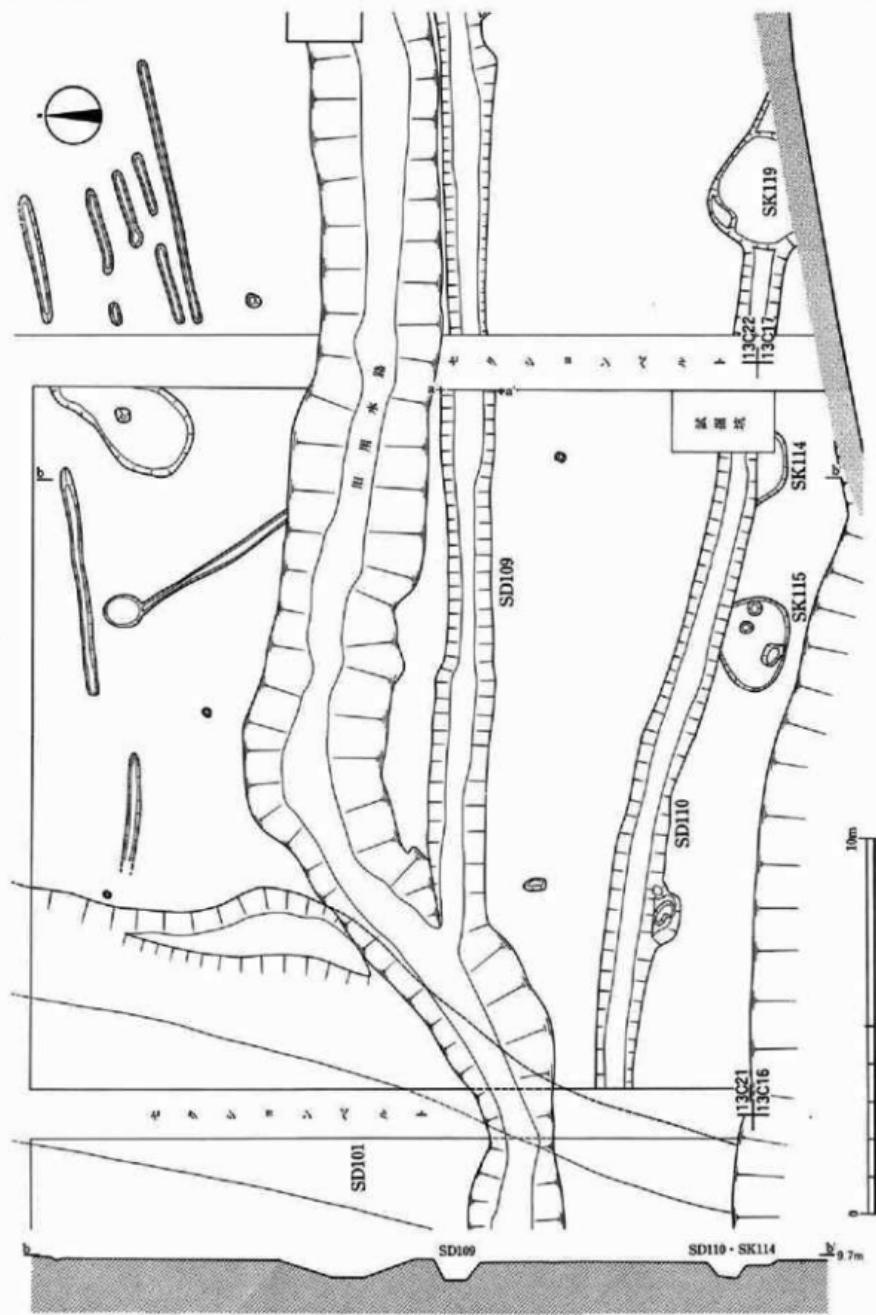




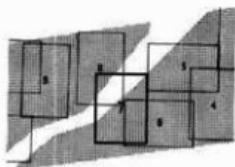
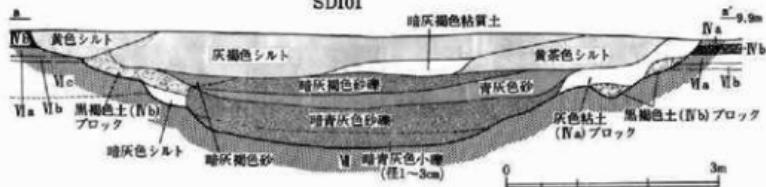


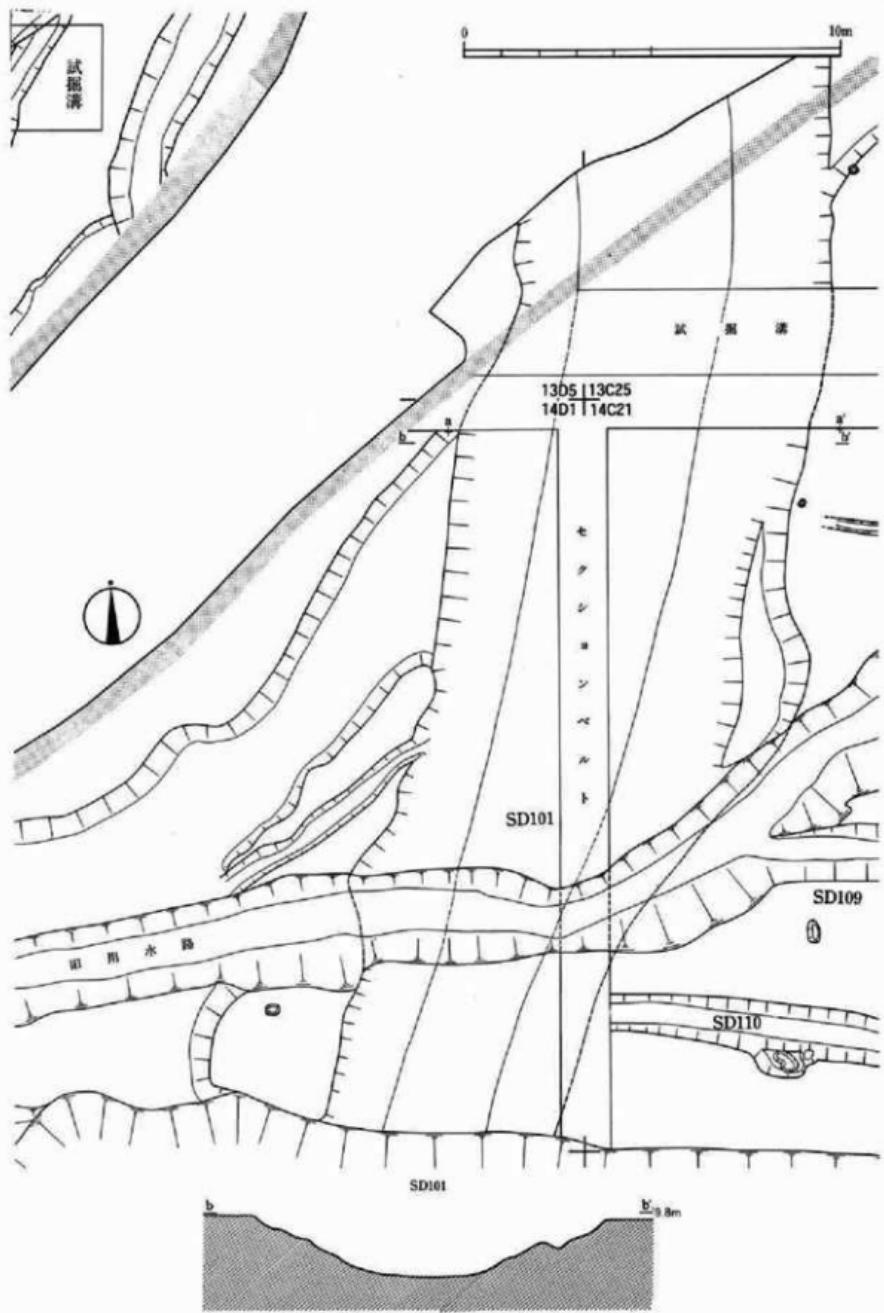
1 灰色砂	8 灰色砂
2 黑褐色土	9 淡黑灰色土
3 黄色砂	10 喙灰色砂
4 黄色土	11 灰白色砂
5 暗灰色土	12 灰色砂
6 灰白色粘质土	13 黑褐色粗砂
7 灰色粘质土	

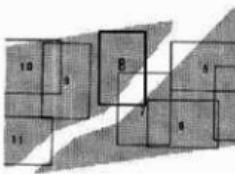
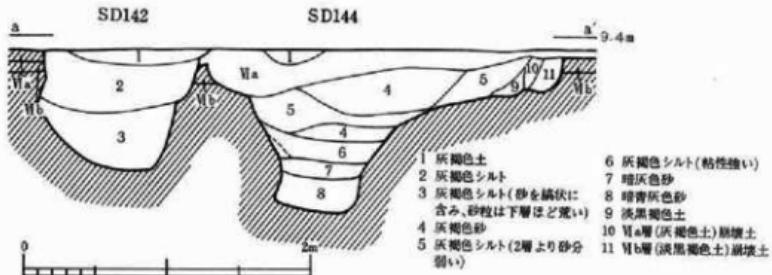
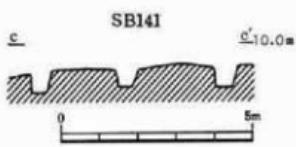


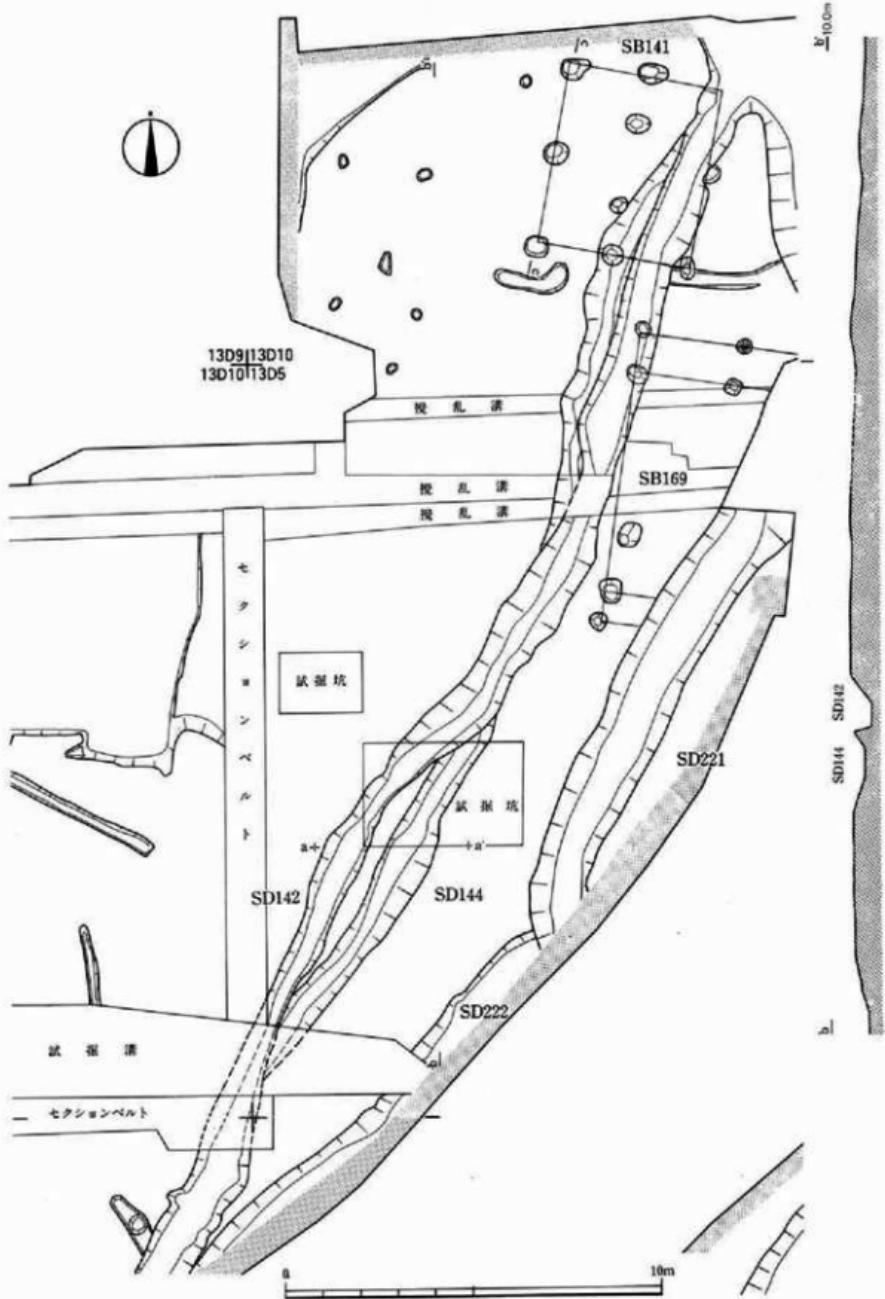


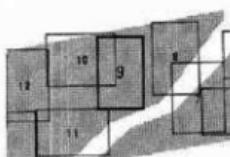
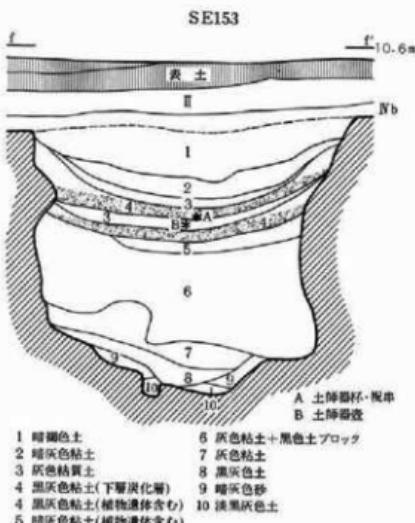
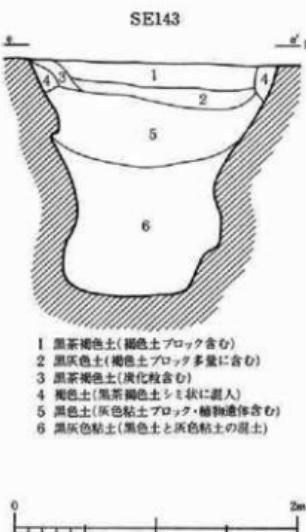
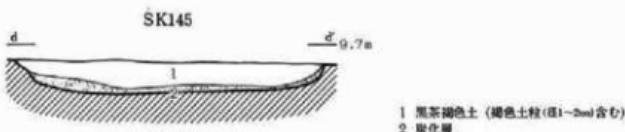
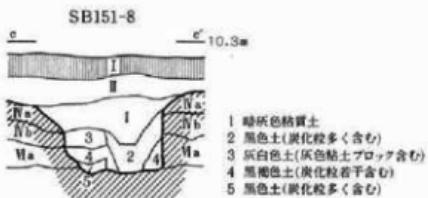
SD101

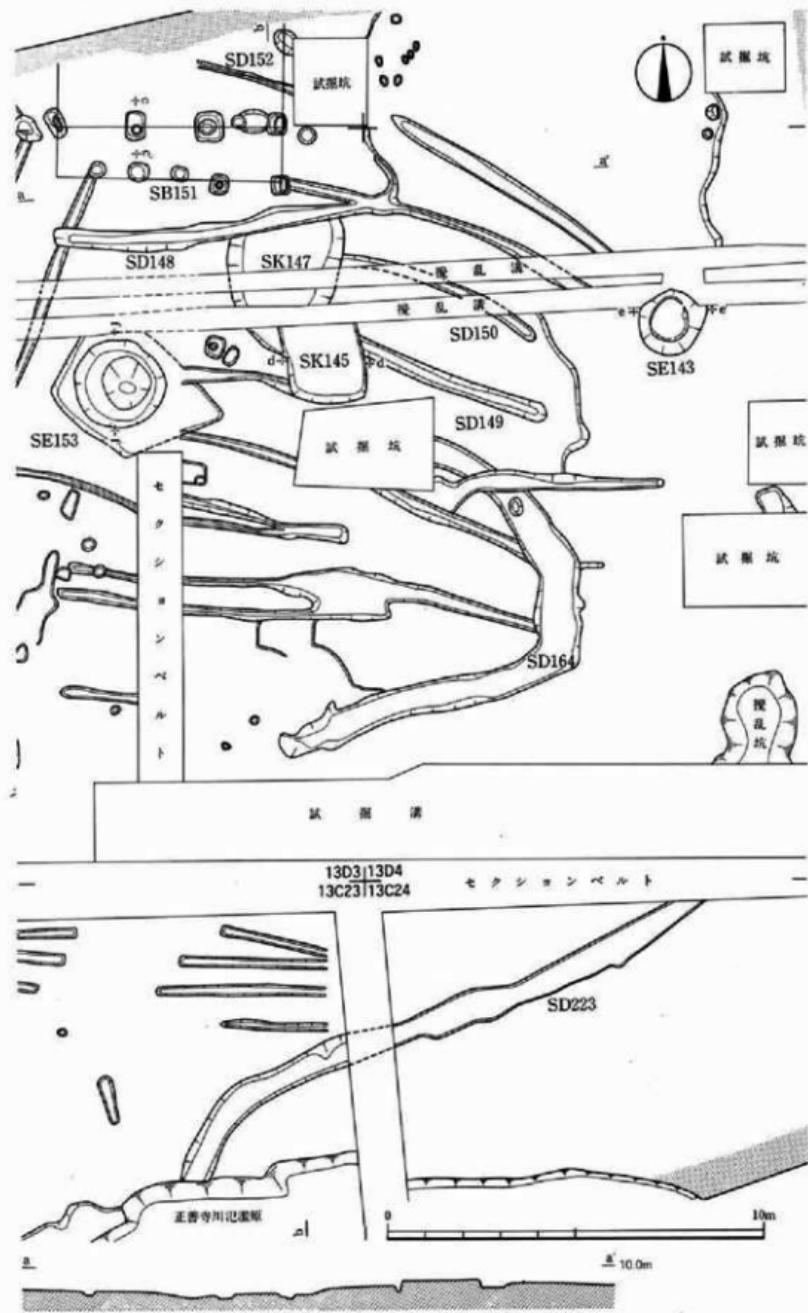


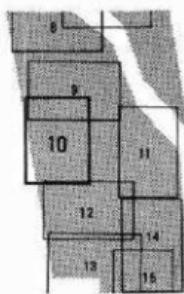
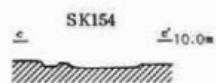


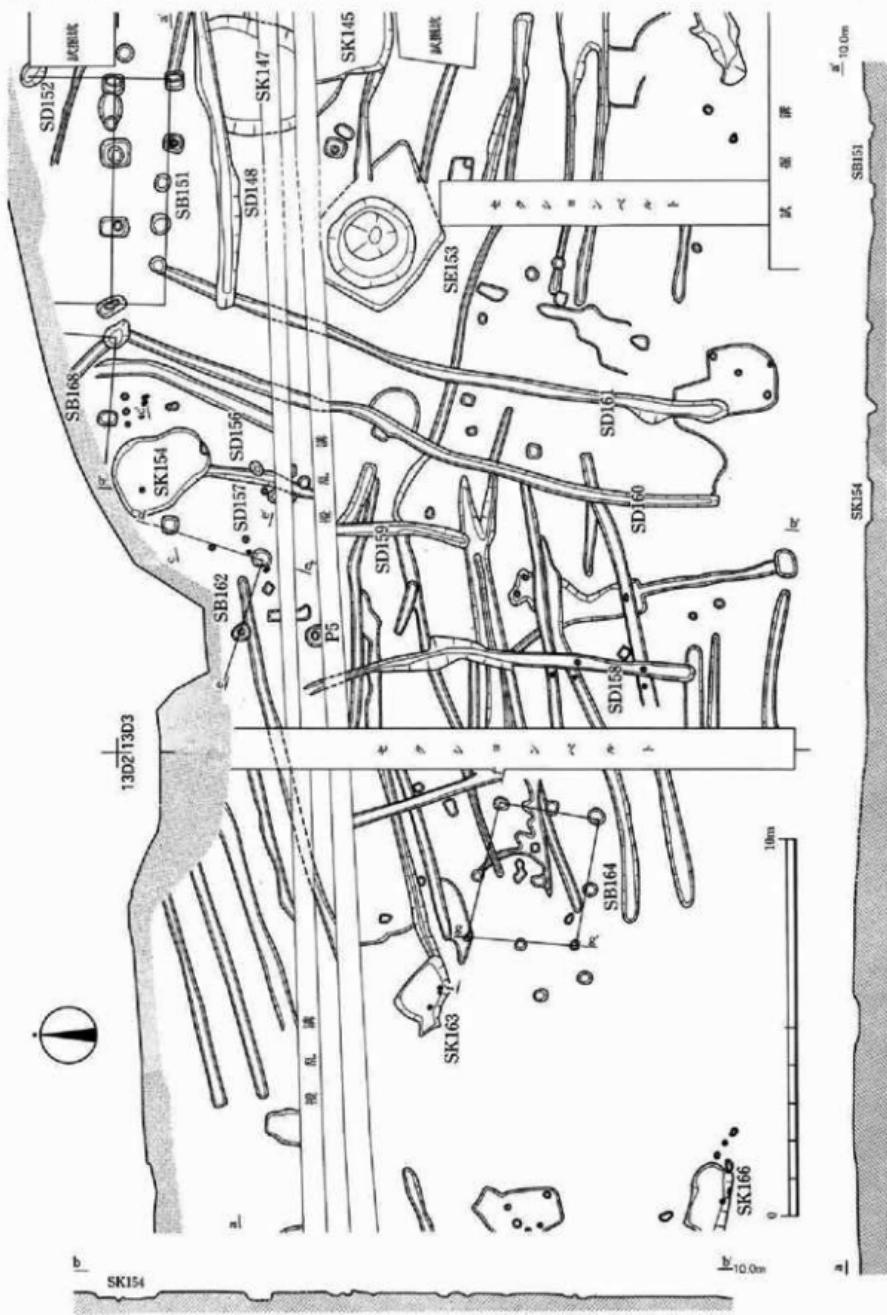


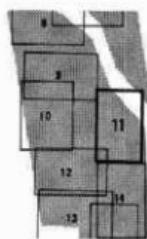


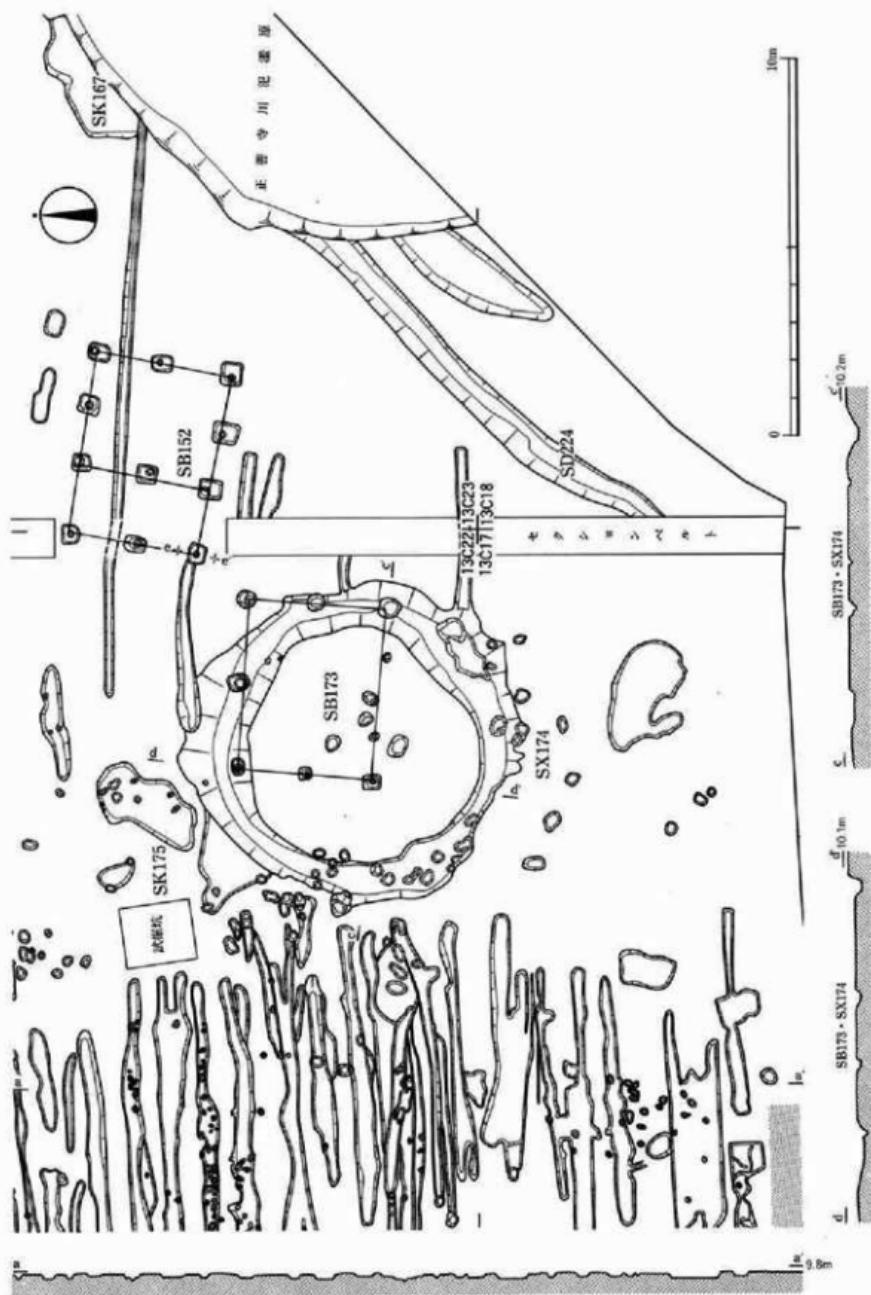


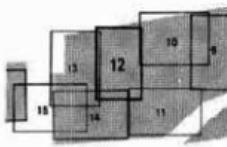
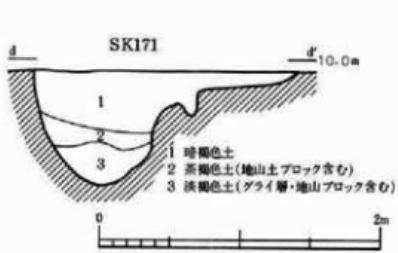
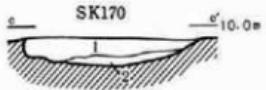


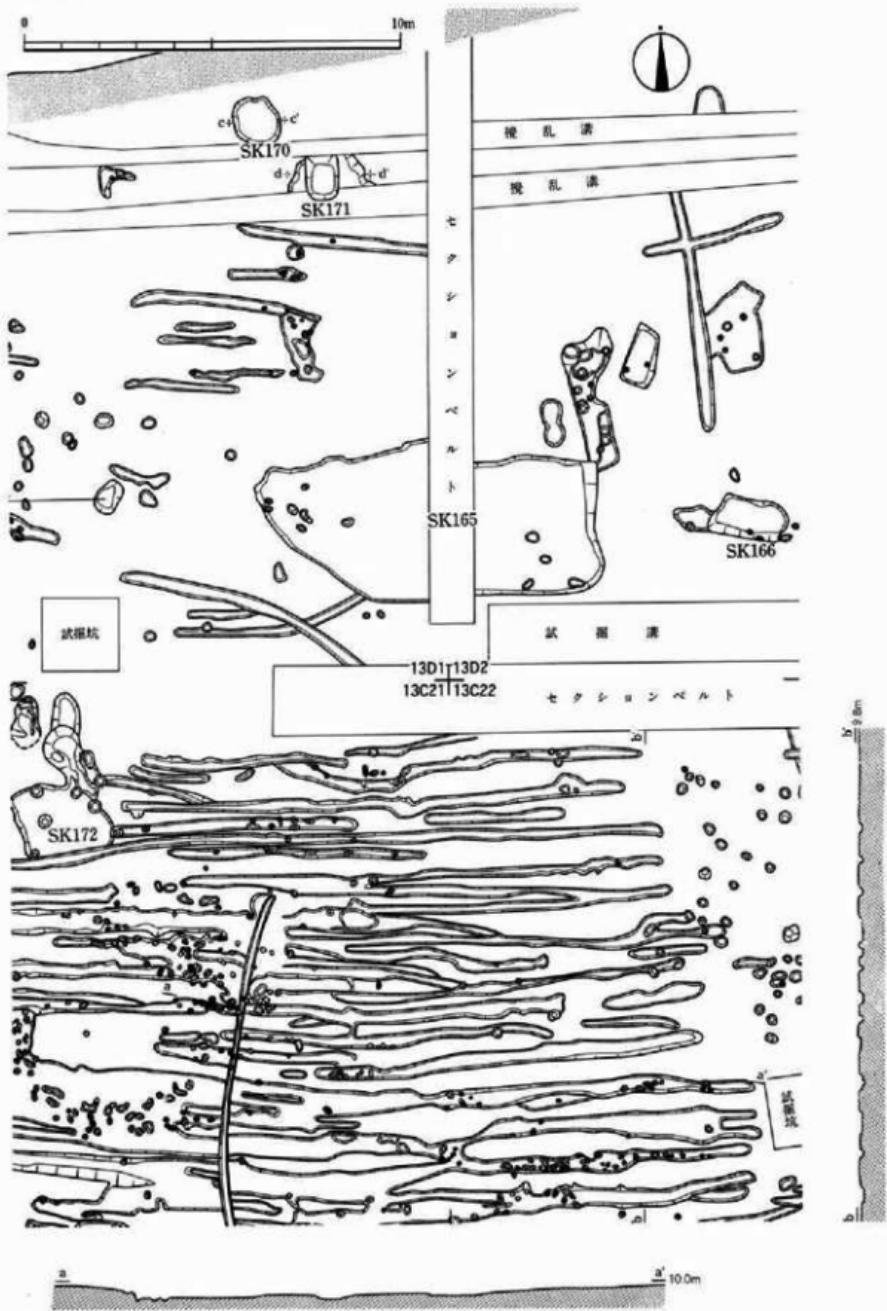


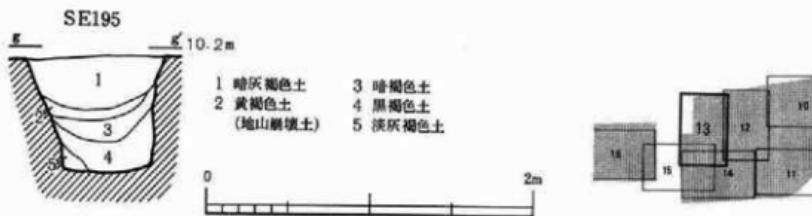
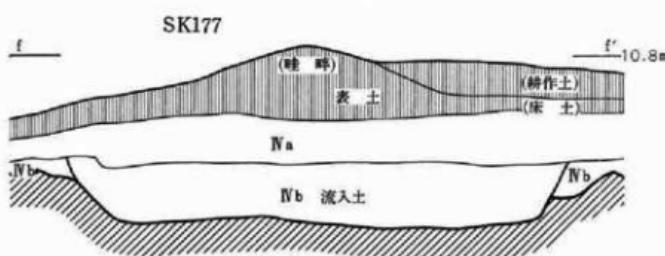
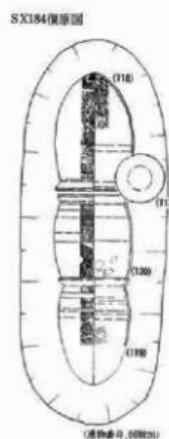
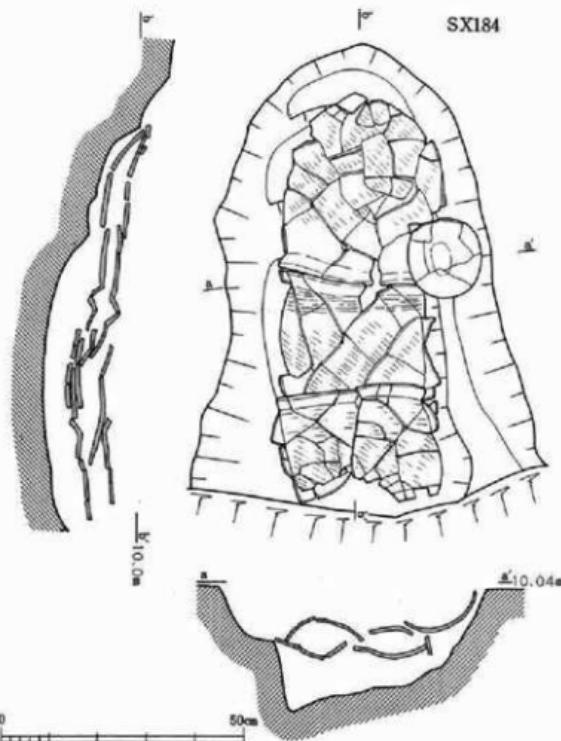


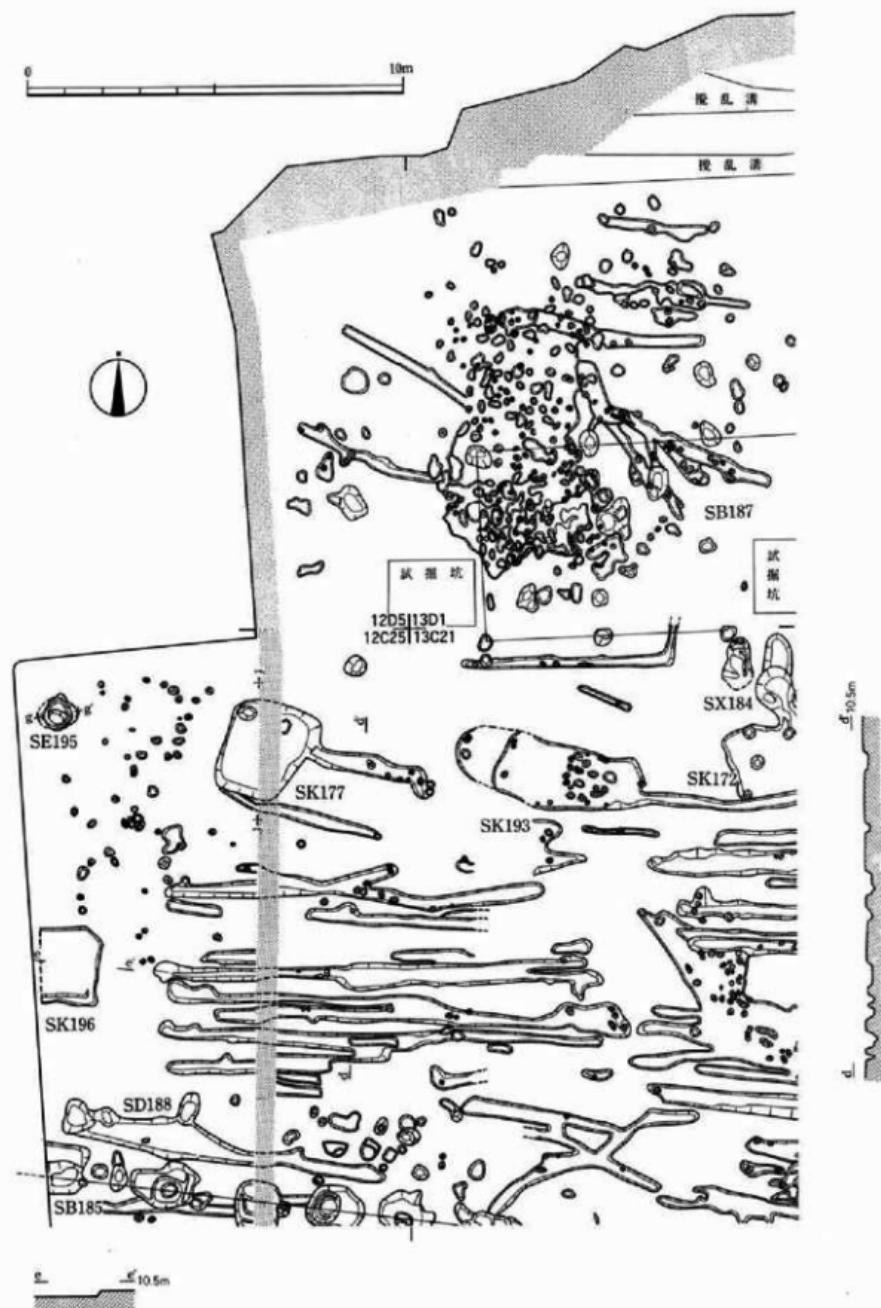


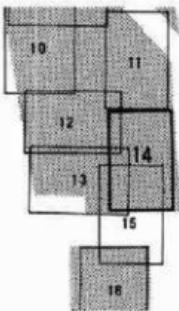
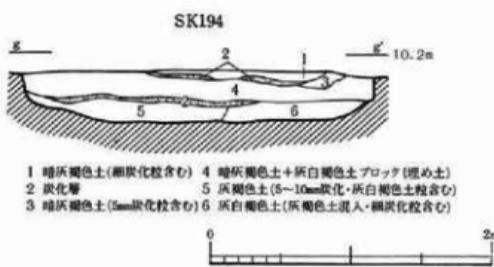
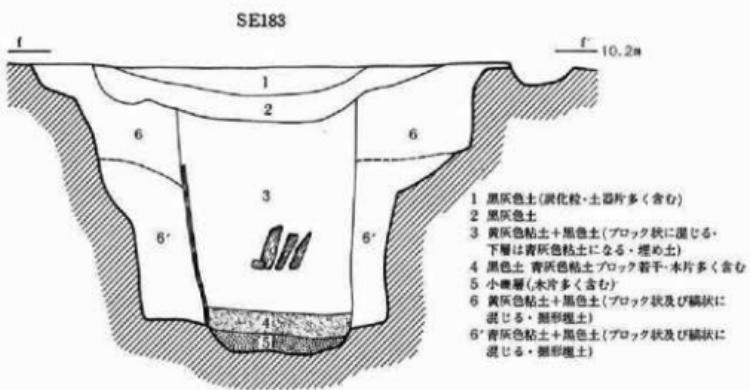
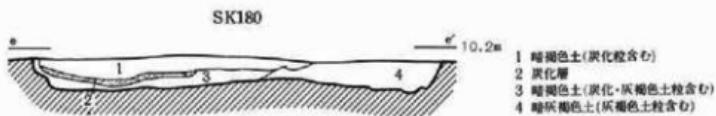
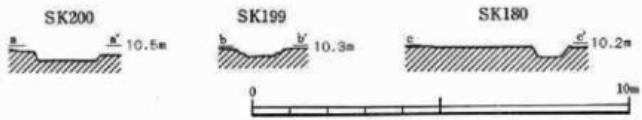


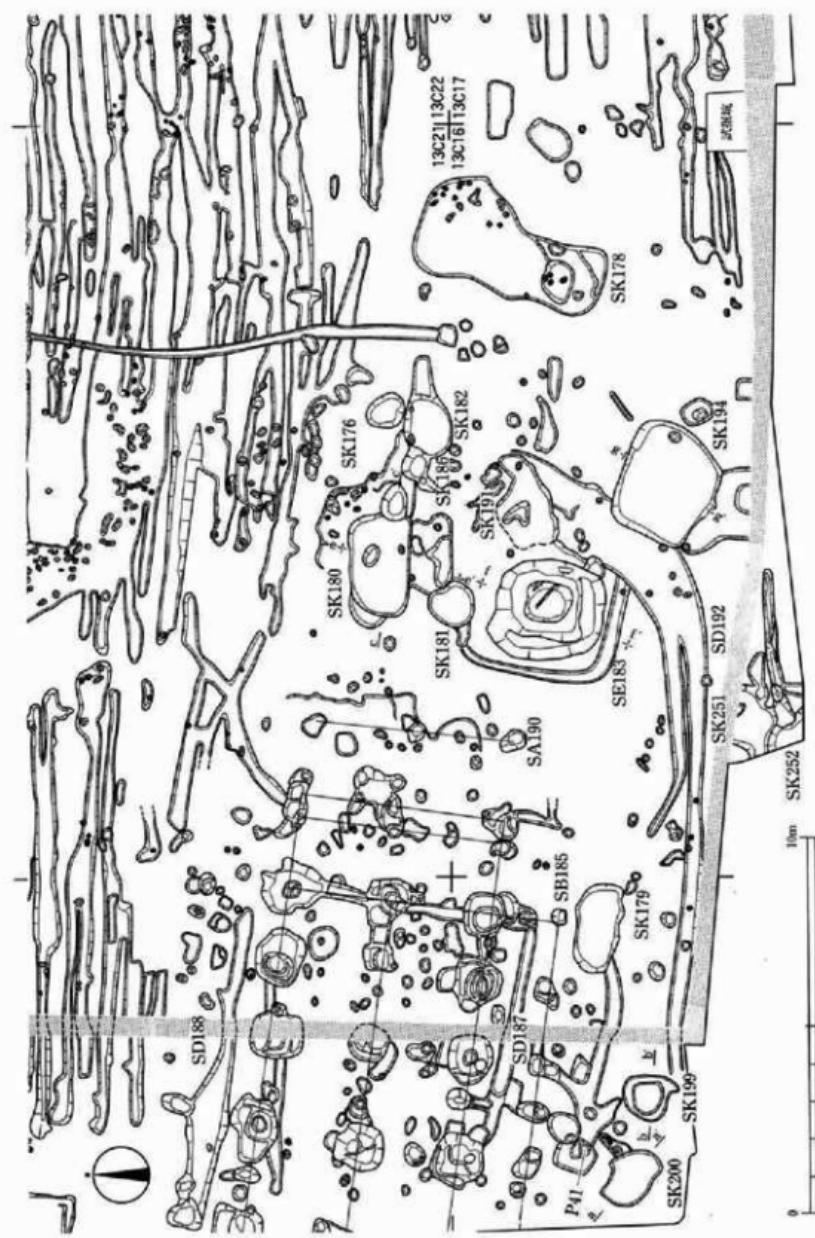


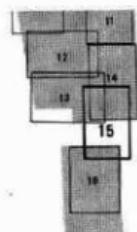
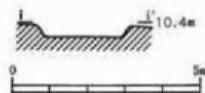
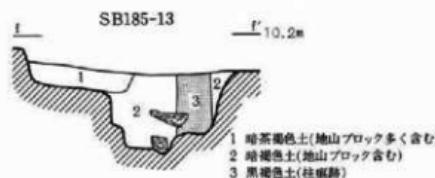
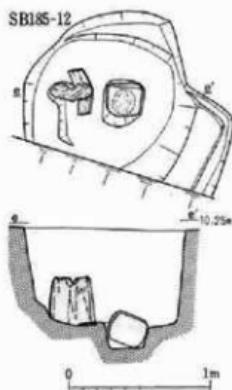




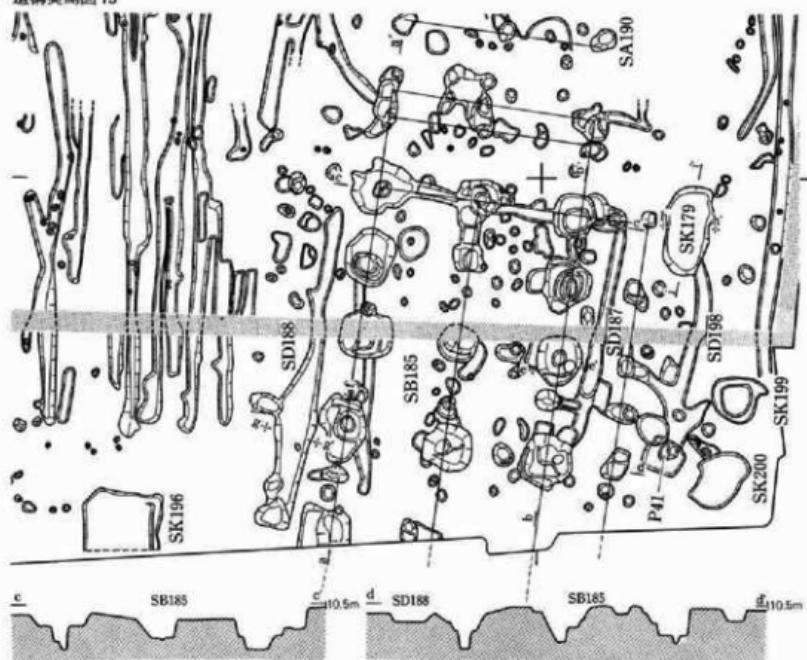




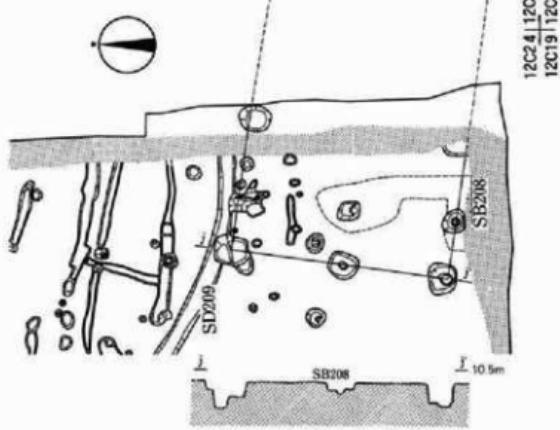


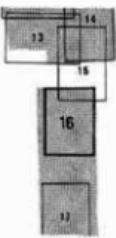


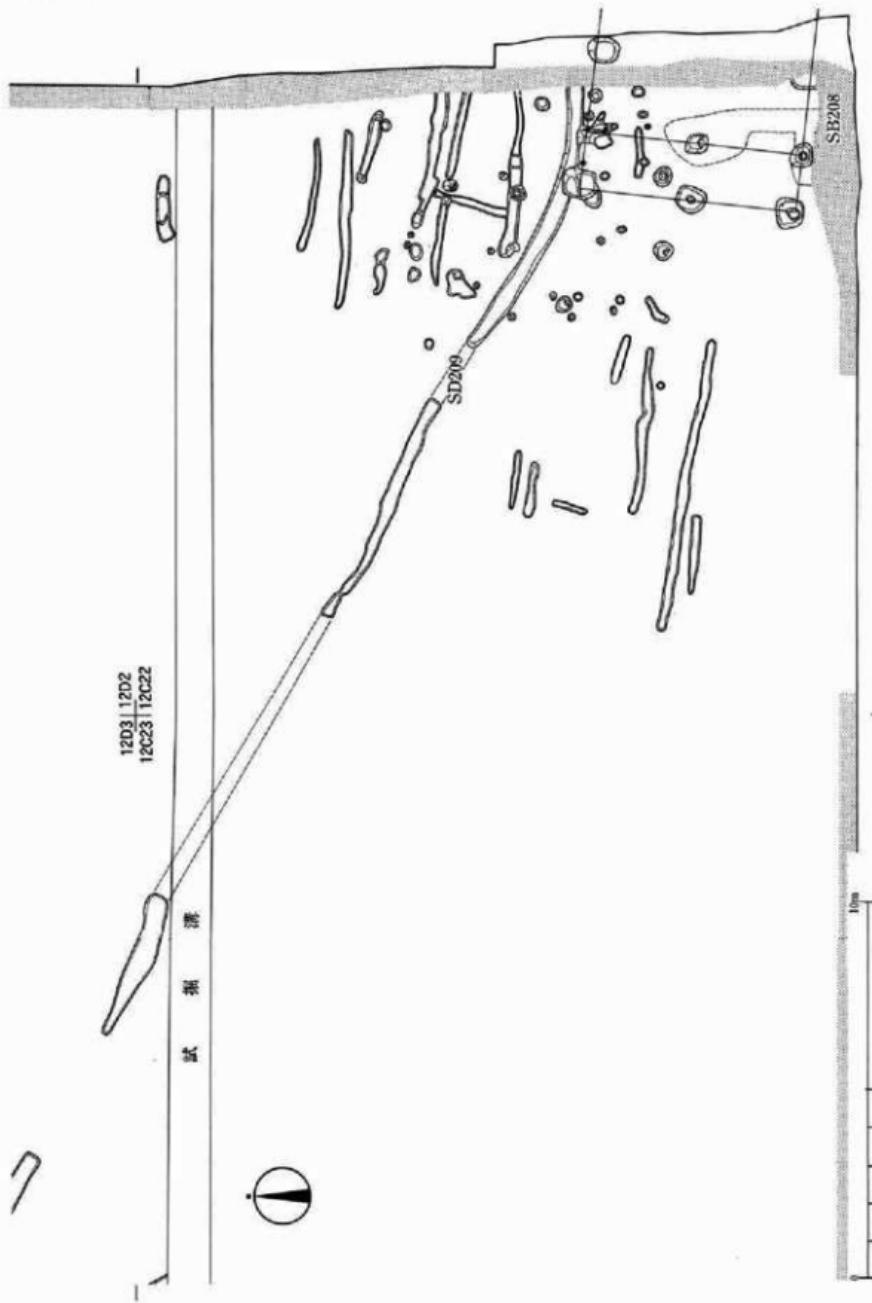
造構実測図 15

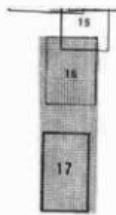


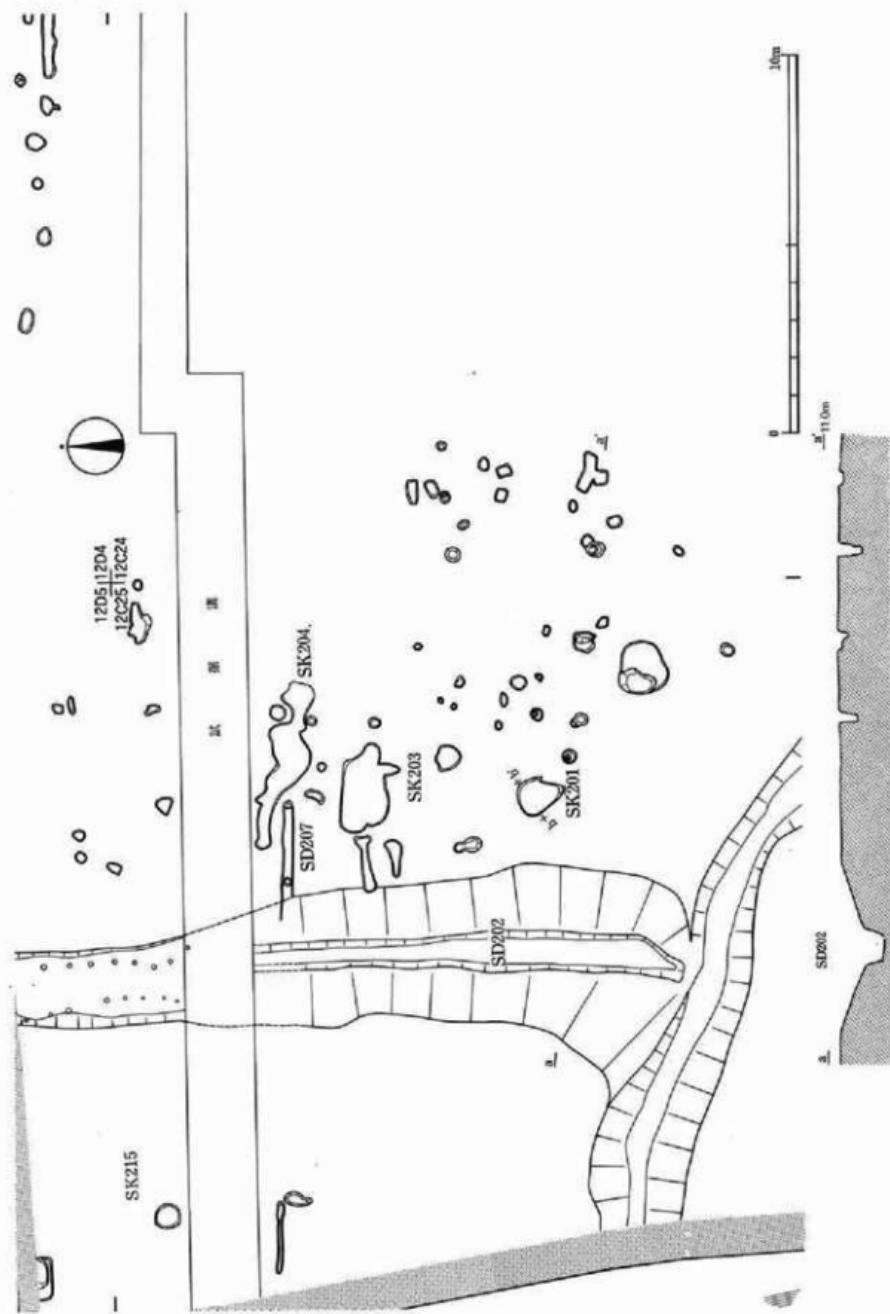
図版 17



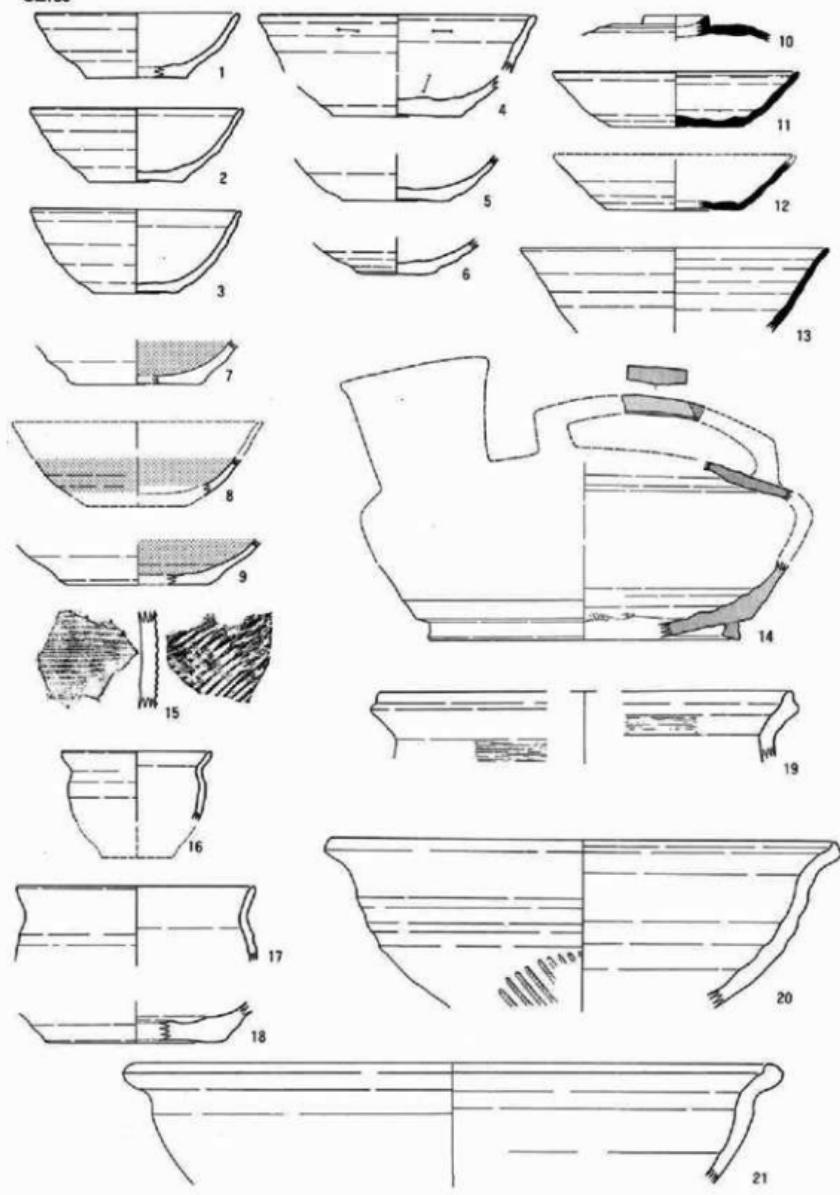






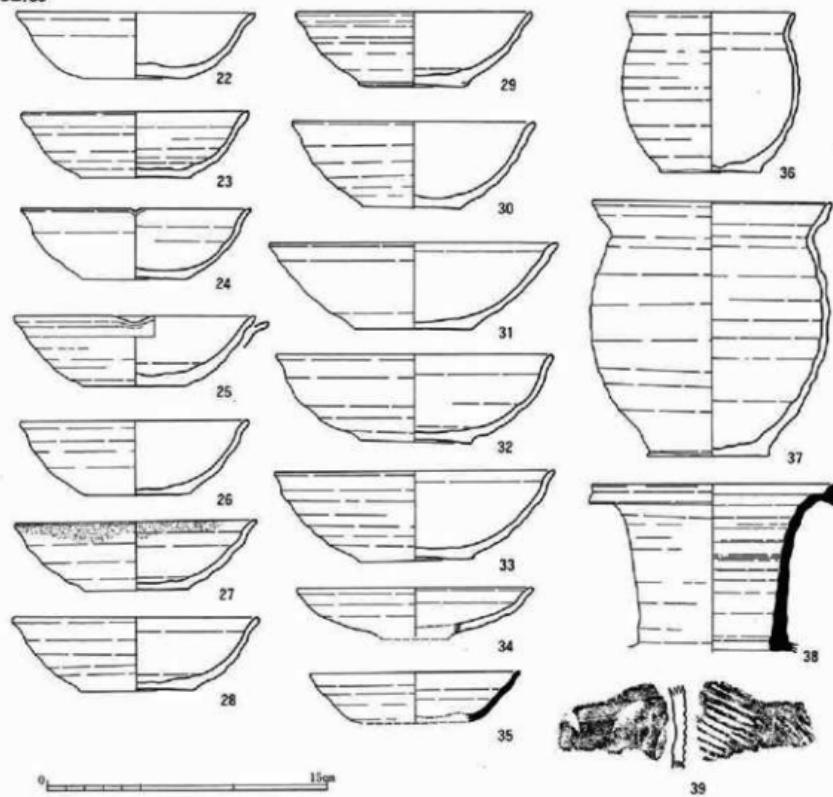


SE183

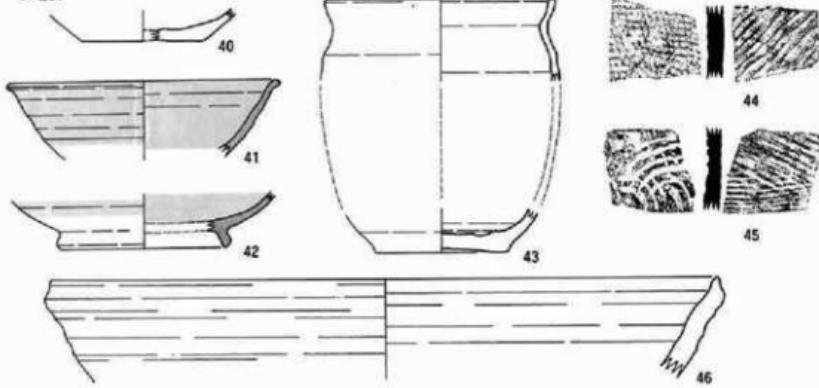


0 15cm
7·8·9 黑色土器 14 灰釉陶器

SE153

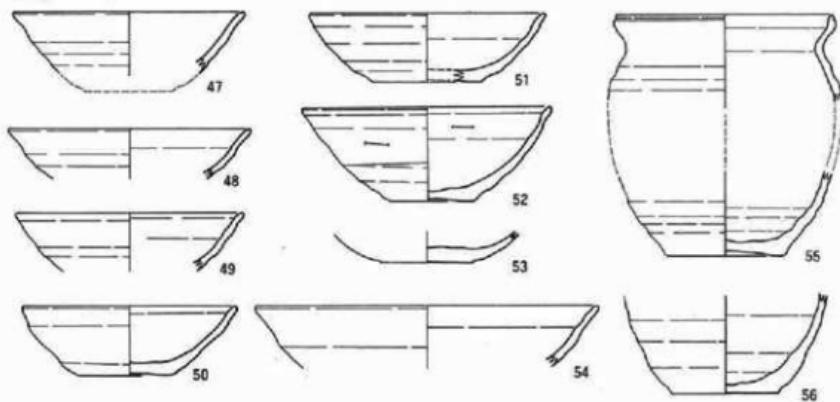


SK201



41-42 灰釉陶器

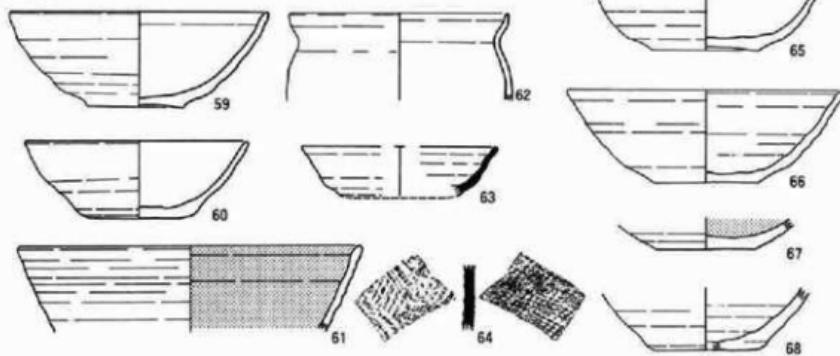
SE107



0 15cm

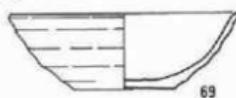
SE143

SK191

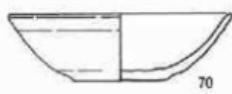


61-67 黒色土師器

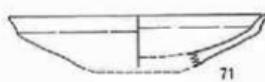
SK145



69



70



71



72



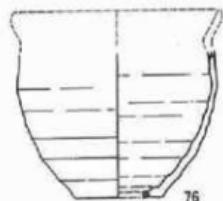
73



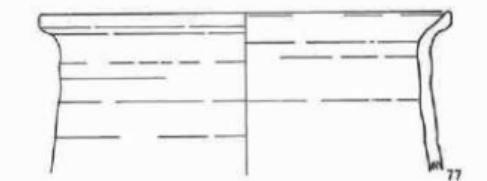
74



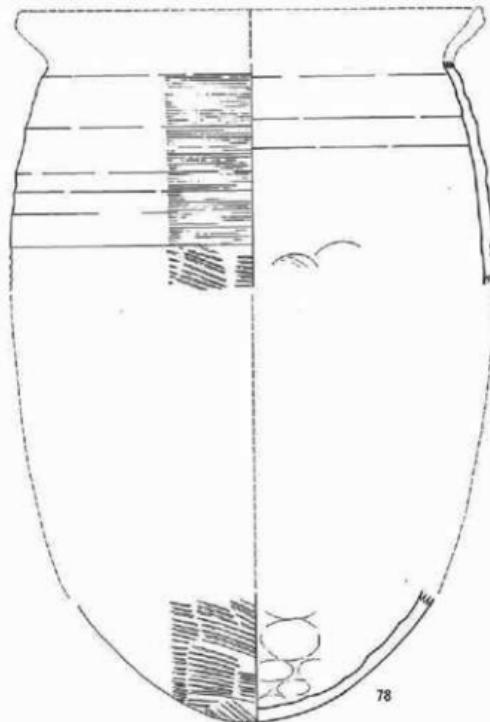
75



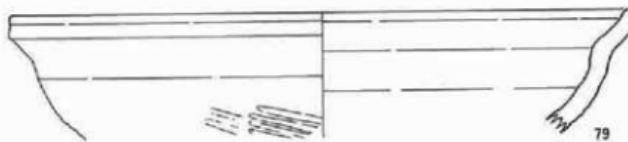
76



77



78

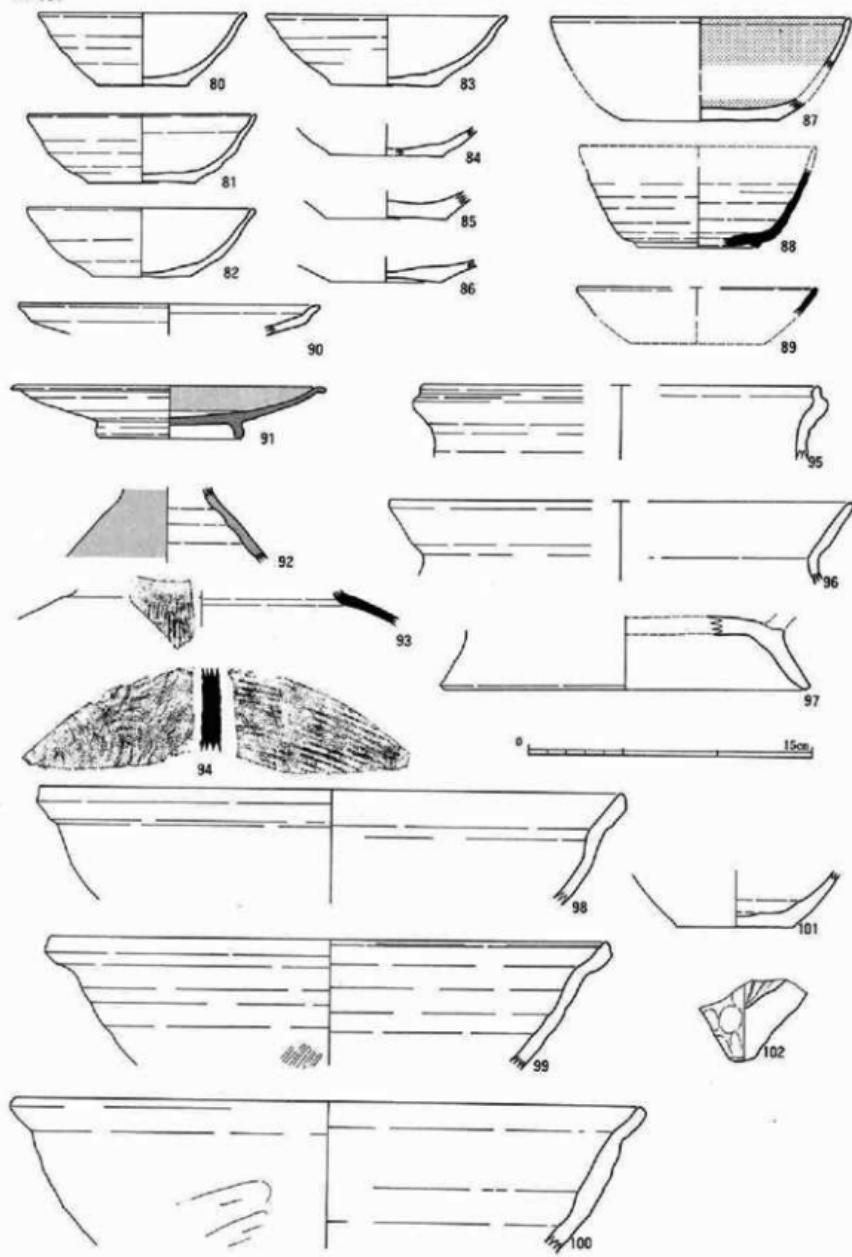


79



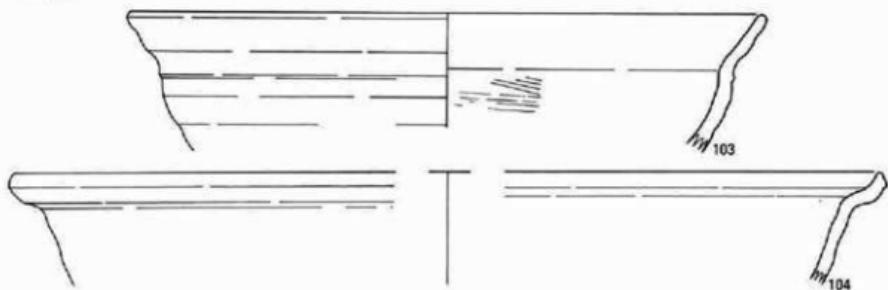
73-74 灰釉陶器

SD188

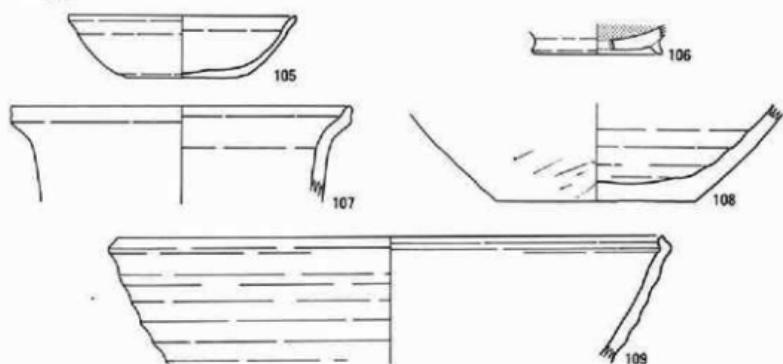


87 黒色土師器 91-92 灰釉陶器

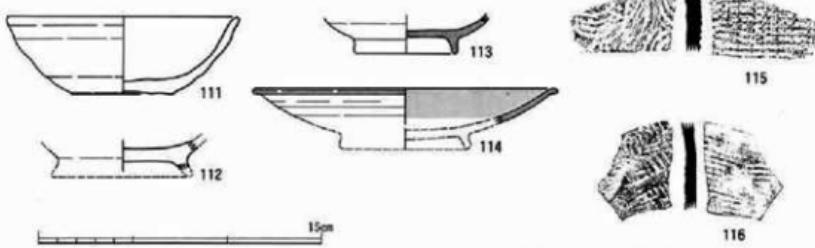
SD188



SK179

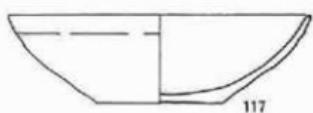


SK194

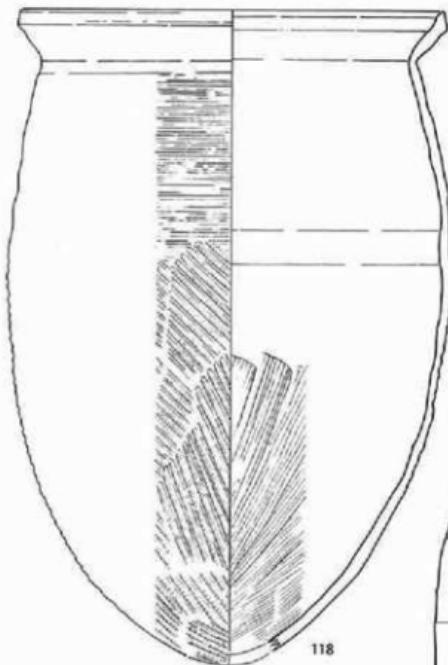


106 黒色土器 113-114 灰釉陶器

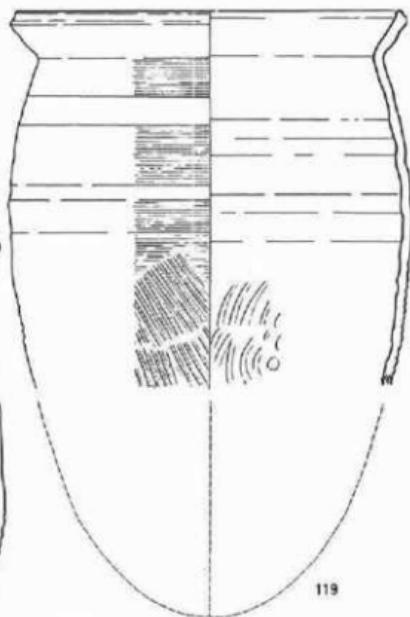
SX184



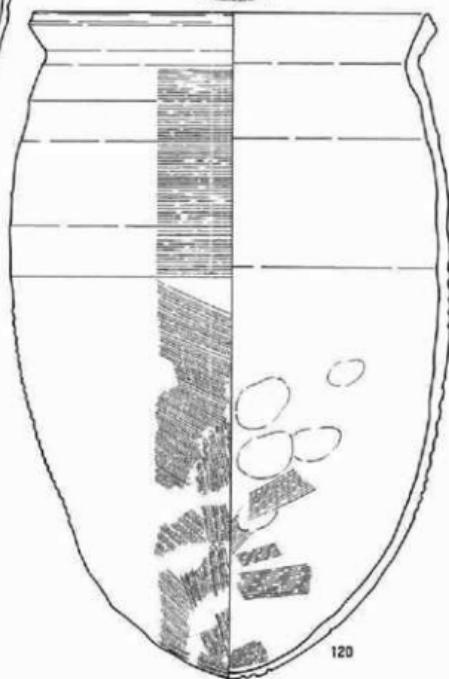
117



118

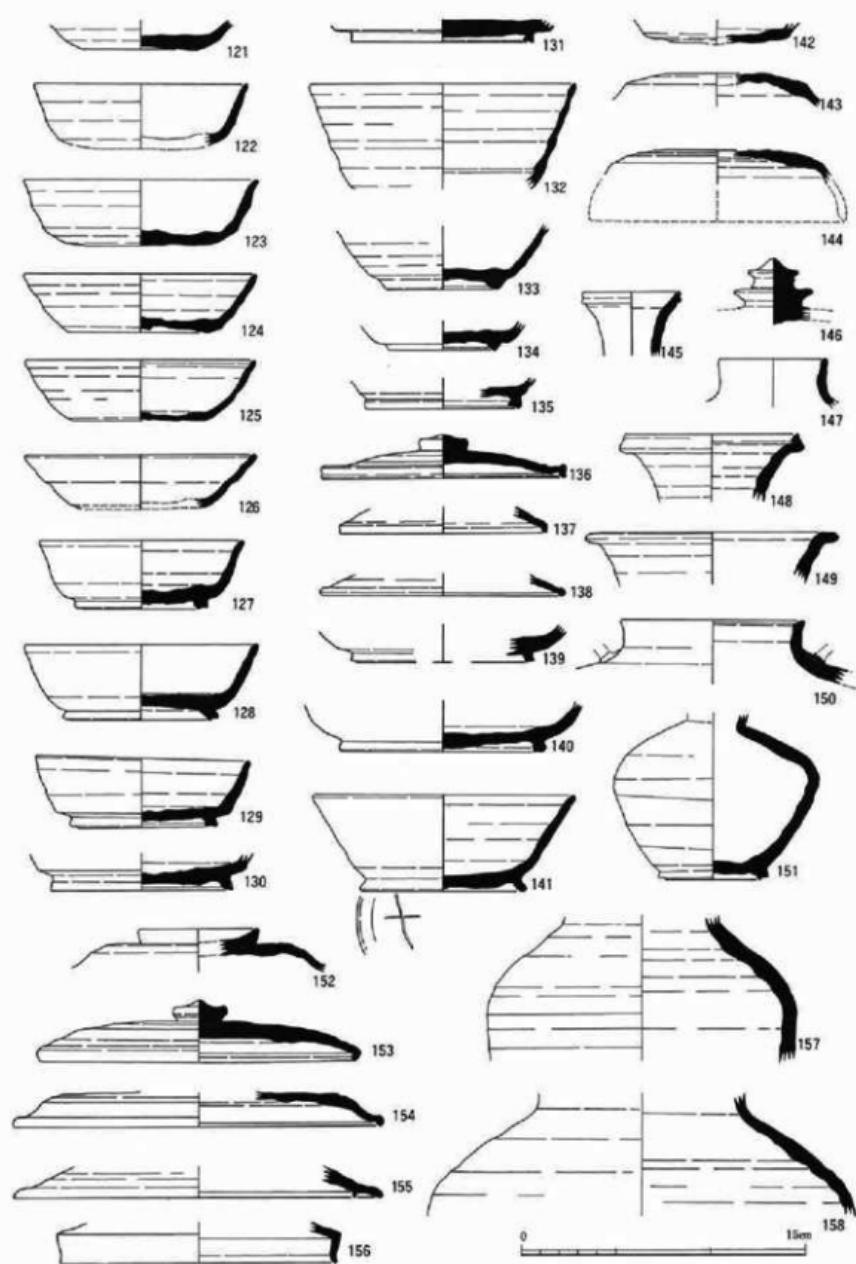


119

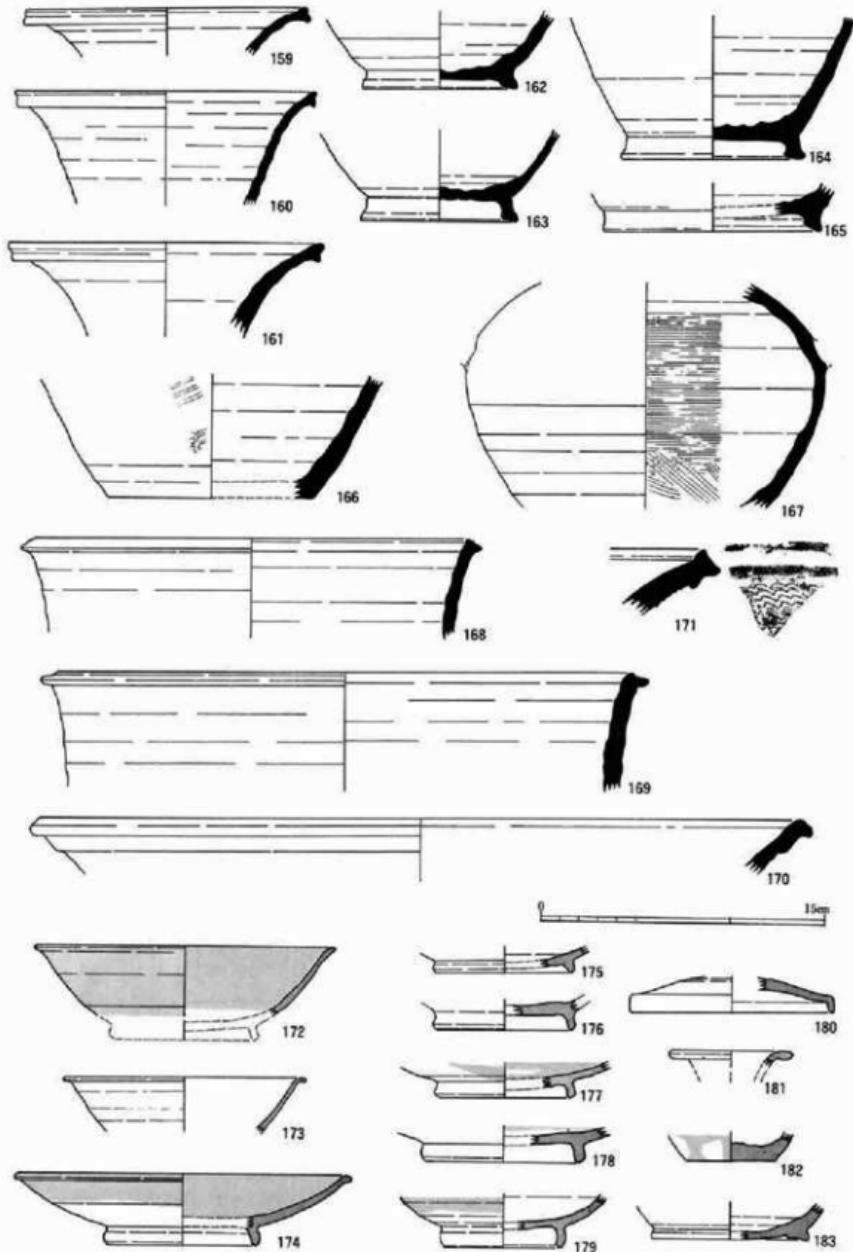


120

0 15cm

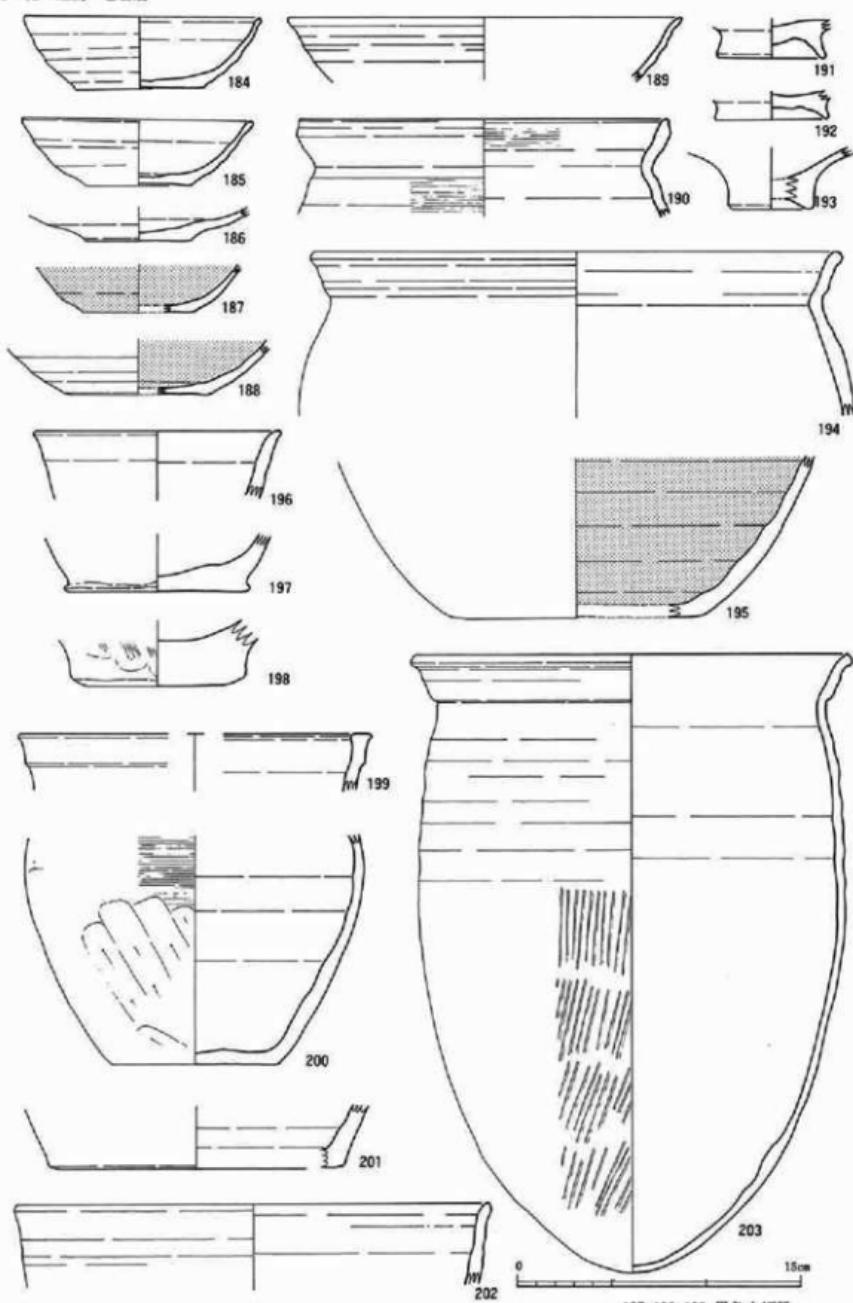


その他の遺構・包含層



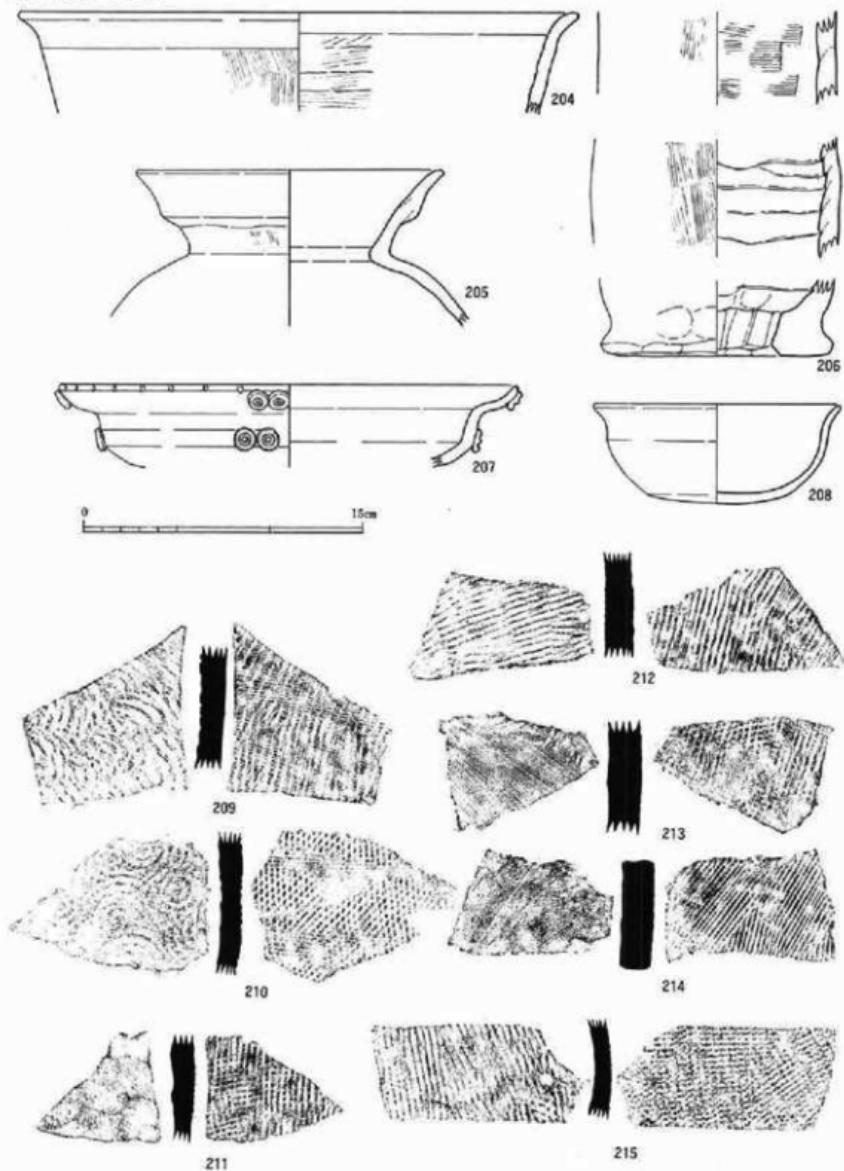
172~183 扇形陶器

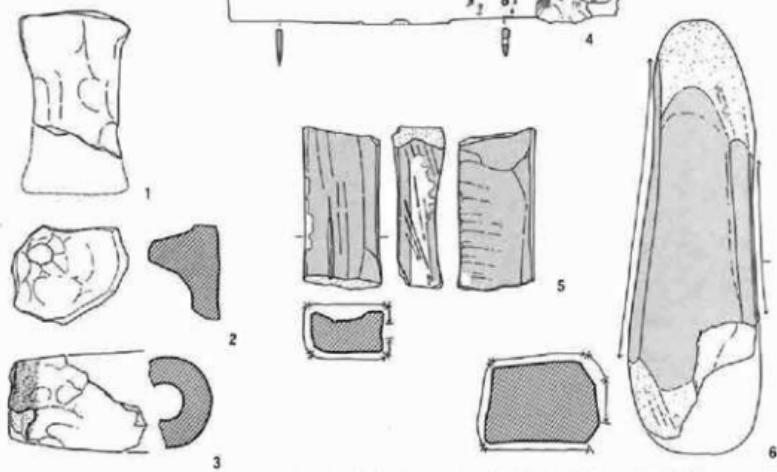
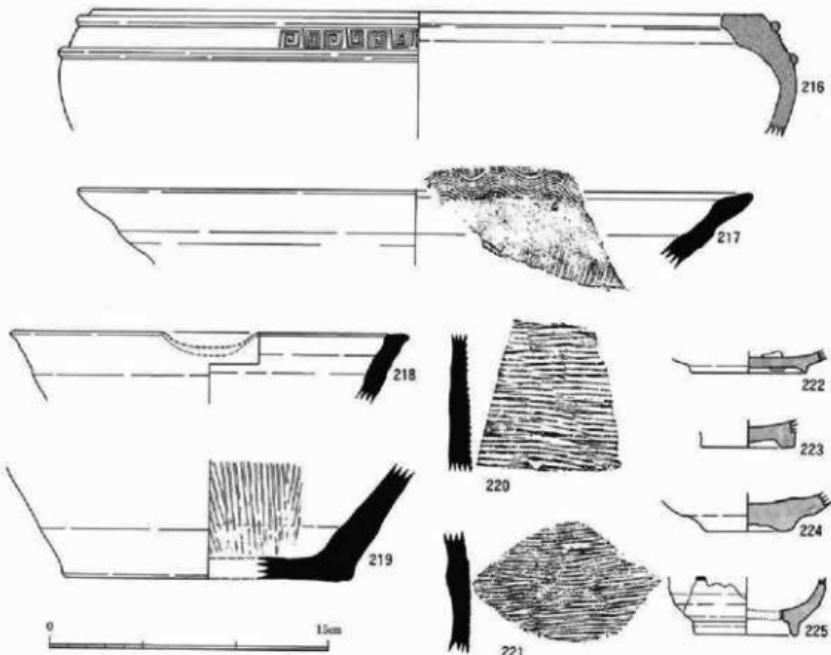
その他の遺構・包含層



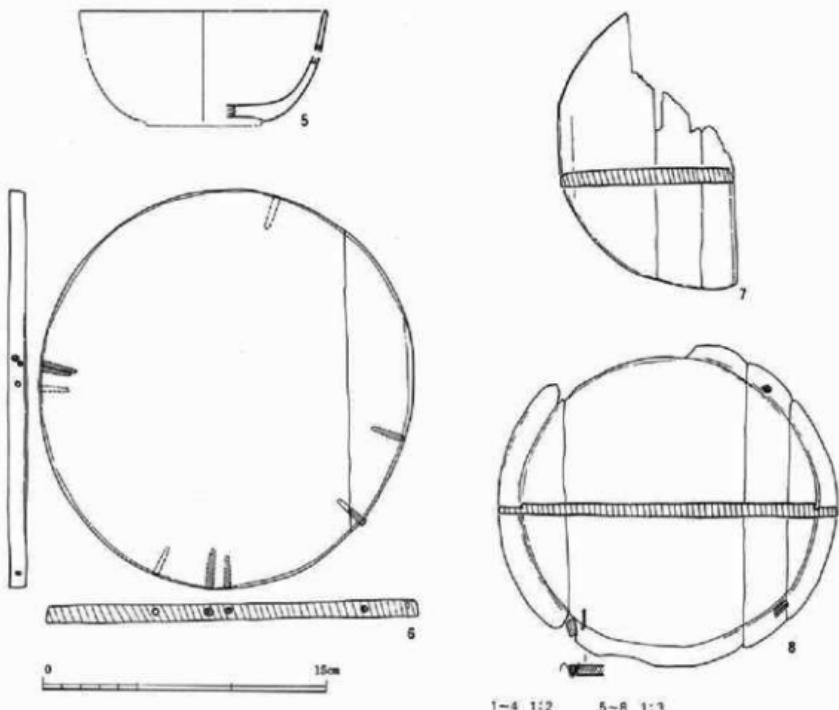
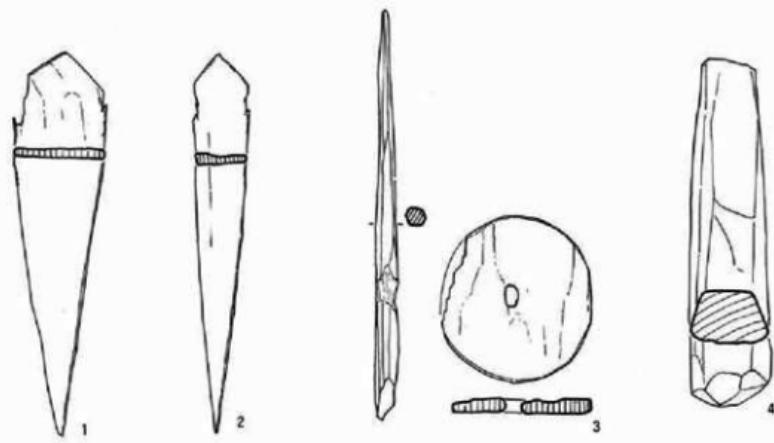
187・188・195 黒色土師器

その他の遺構・包含層

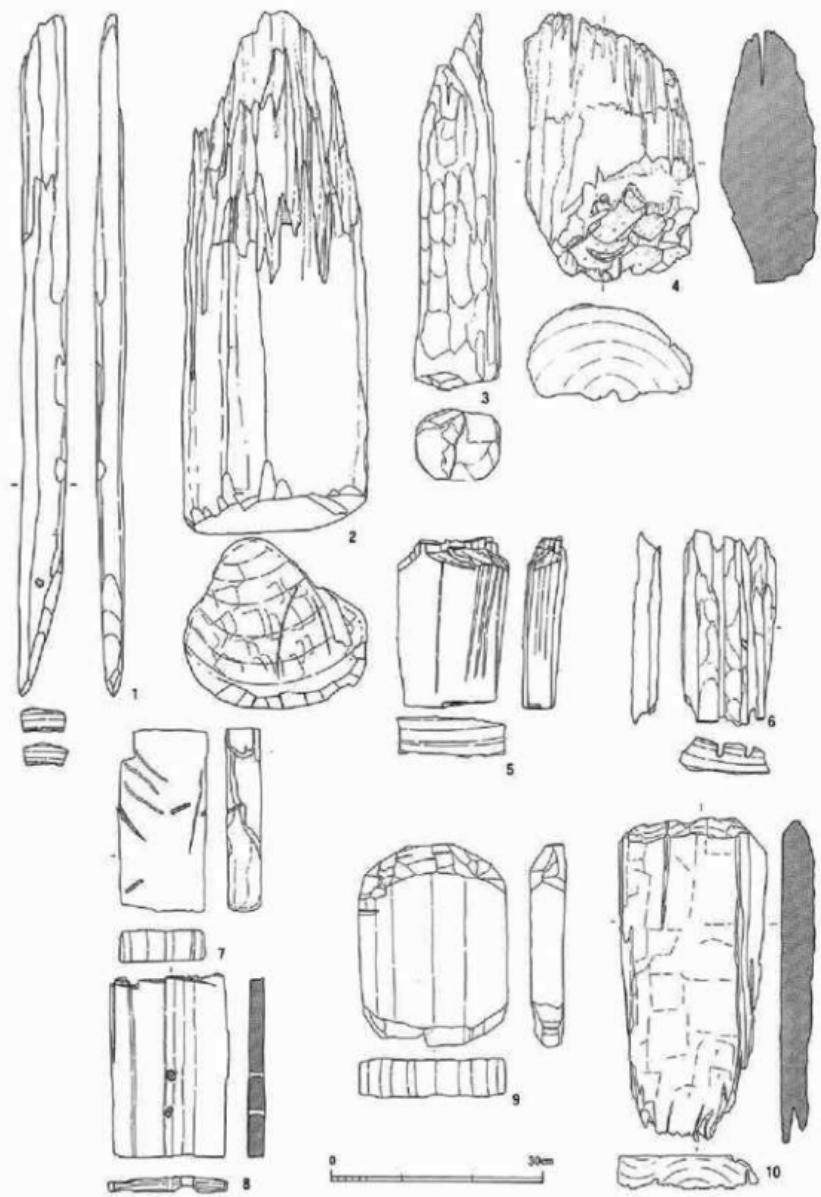




216~225 中世・近世 1~3 土製品 4 鉄製品 5~6 石製品



1-4 1:2 5-8 1:3



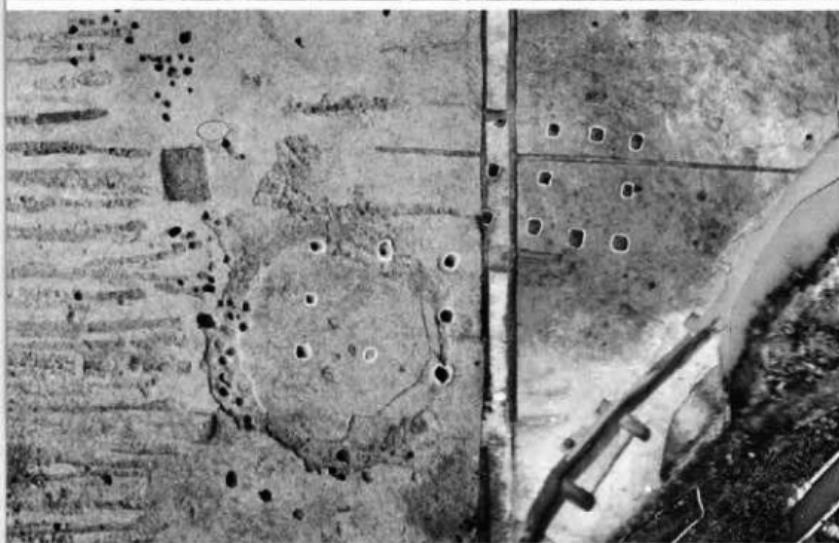
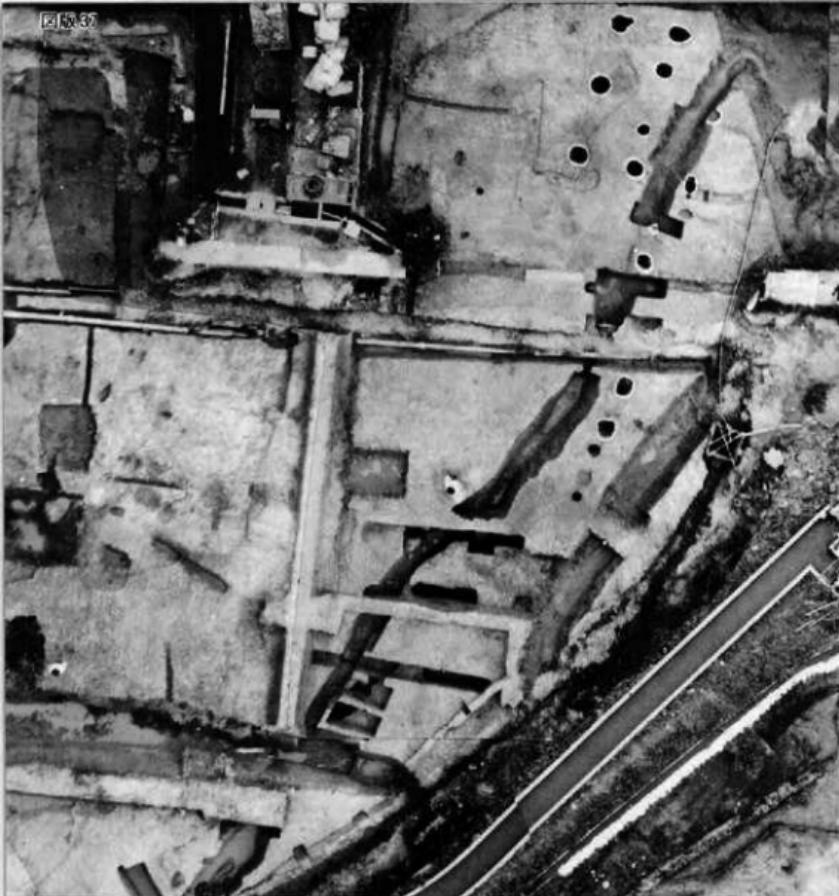
1 SD104杭 2 SB185柱根 3 SB151柱根 4 SB187柱根
5-6 SB187櫛板 7-9 SB185櫛板 10 2区ビット37櫛板





3 区
空中写真
(左が北)







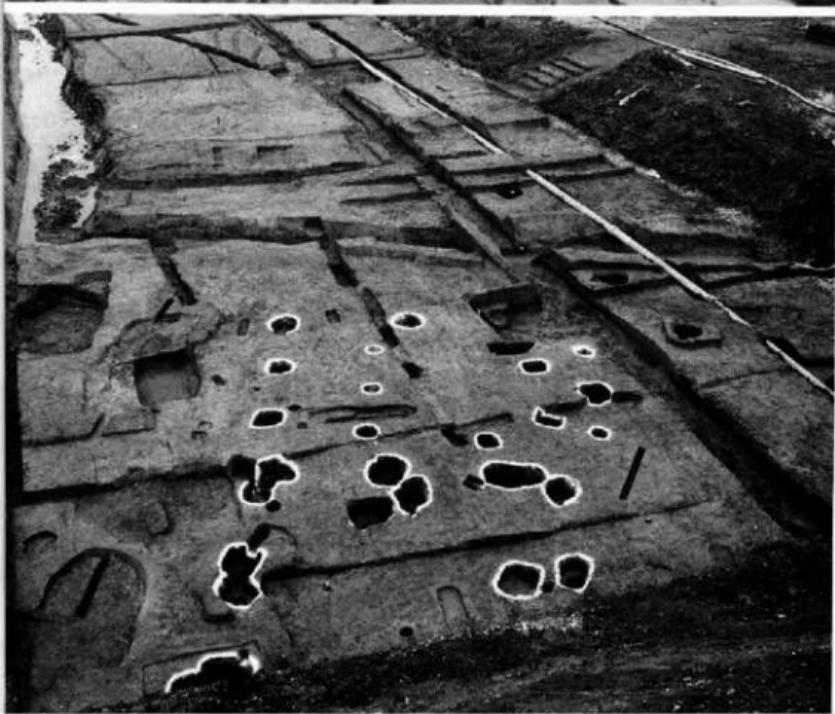
1. SB185 付近
空中写真
(上が北)



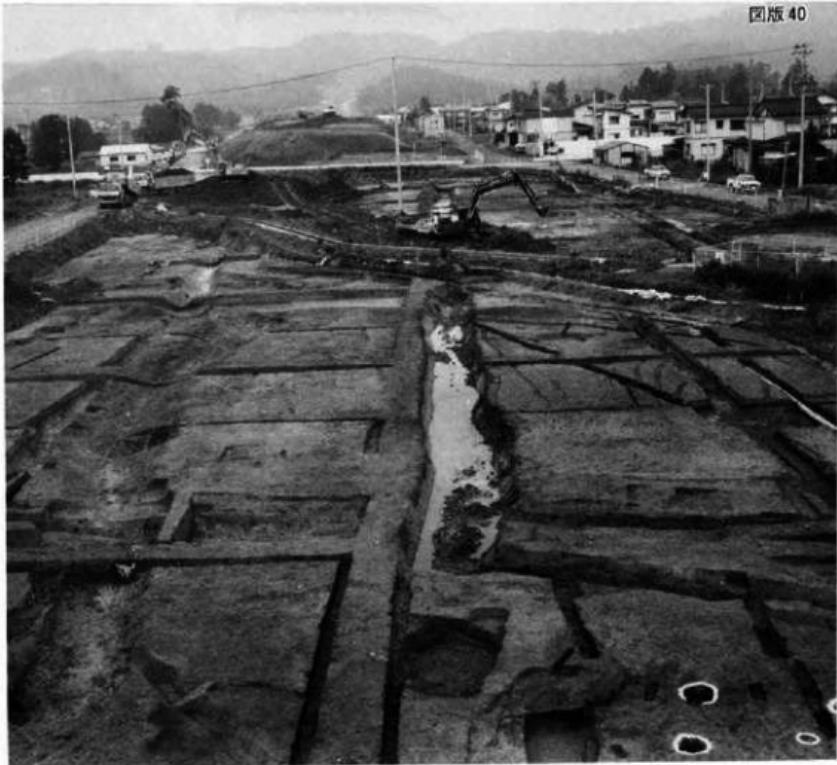
2. SB185
空中写真
(上が北)



1. 3区
SD103A
SD104A
空中写真
(上が北)



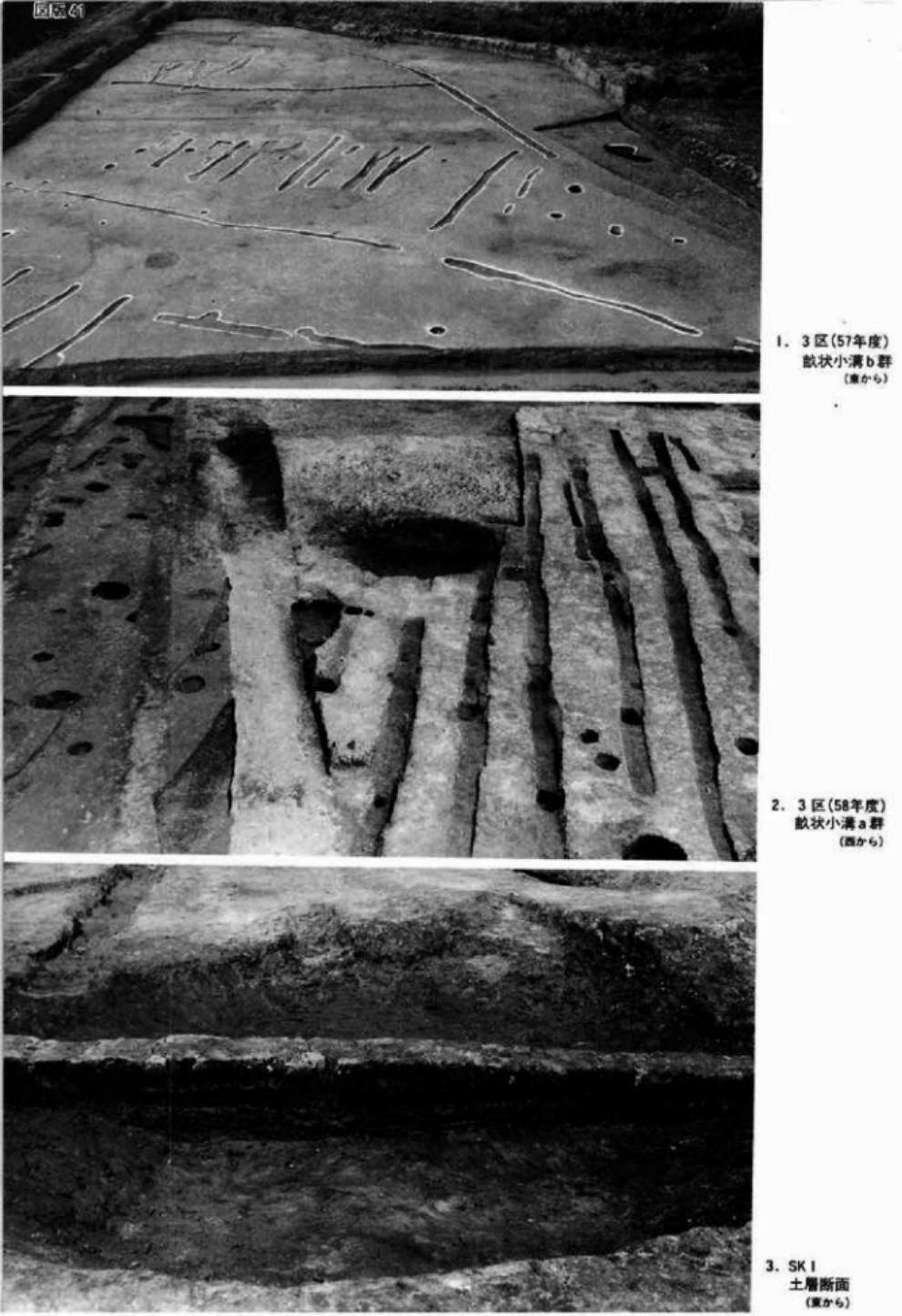
2. 3区
SB124
SB125
SB126
(西より)



1. 3区全景
(西から)



2. 3区全景
IVb層上面
(東北から)



1. 3区(57年度)
鉢状小溝b群
(東から)

2. 3区(58年度)
鉢状小溝a群
(西から)

3. SK I
土層断面
(東から)



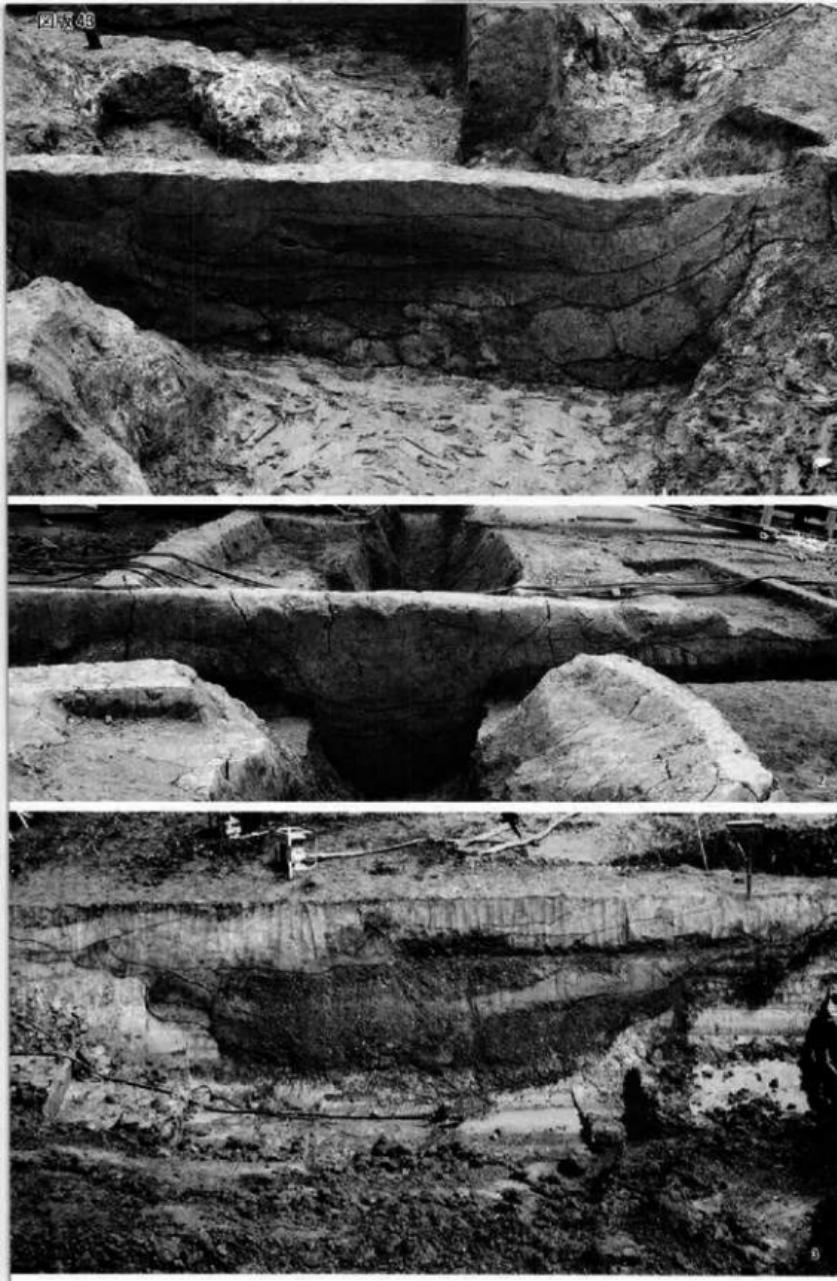
1. SD103
SD104
(北から)



2. SD103
SD104
交差部
(南から)



3. SD104A
杭列
(南から)



1. SD103
SD104
交差部土層断面
(南から)

2. SD104A
土層断面
(北から)

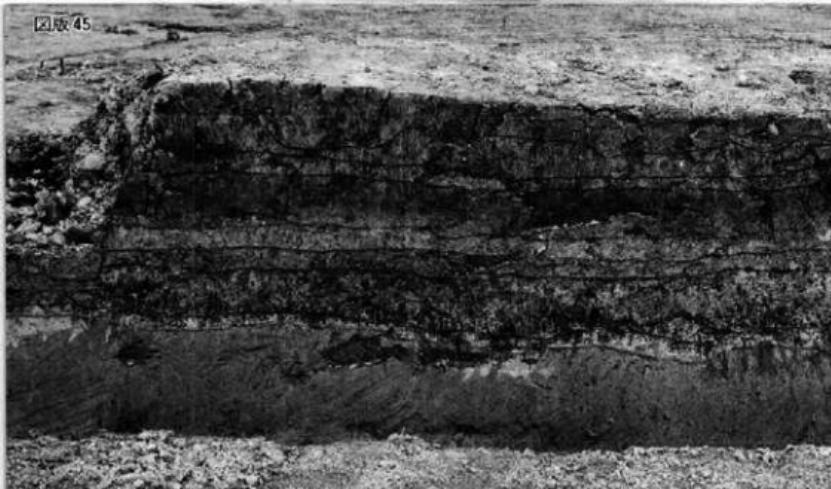
3. SD101
土層断面
(南から)



1. SD142・SD144 (南より)



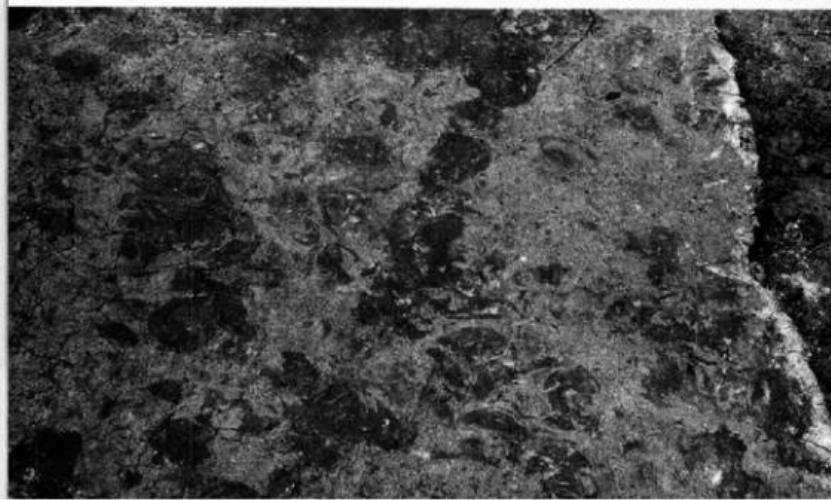
2. SD142 土層断面



1. 3 区
土层断面



2. 2 区
土层断面
(東西)



3. 2 区
Vla 层上面
暗褐色土混入状况

1. SE153
土層断面
(西から)



2. 同上
土器出土状況
(西から)



3. 同上
振形
(南から)





1. SE183
撮影
(東から)



2. 同上
下部井戸枠
(西から)



3. 同上
上部土層断面
(西から)

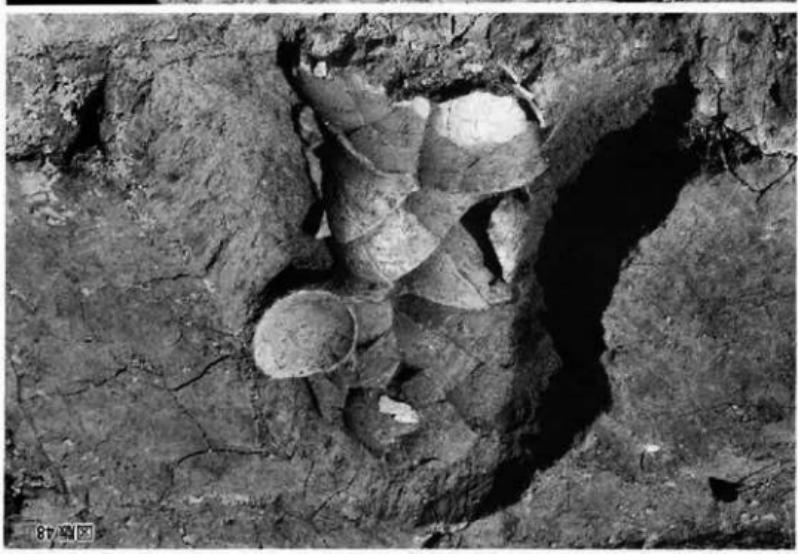
3. 圖上
〔圖六六〕

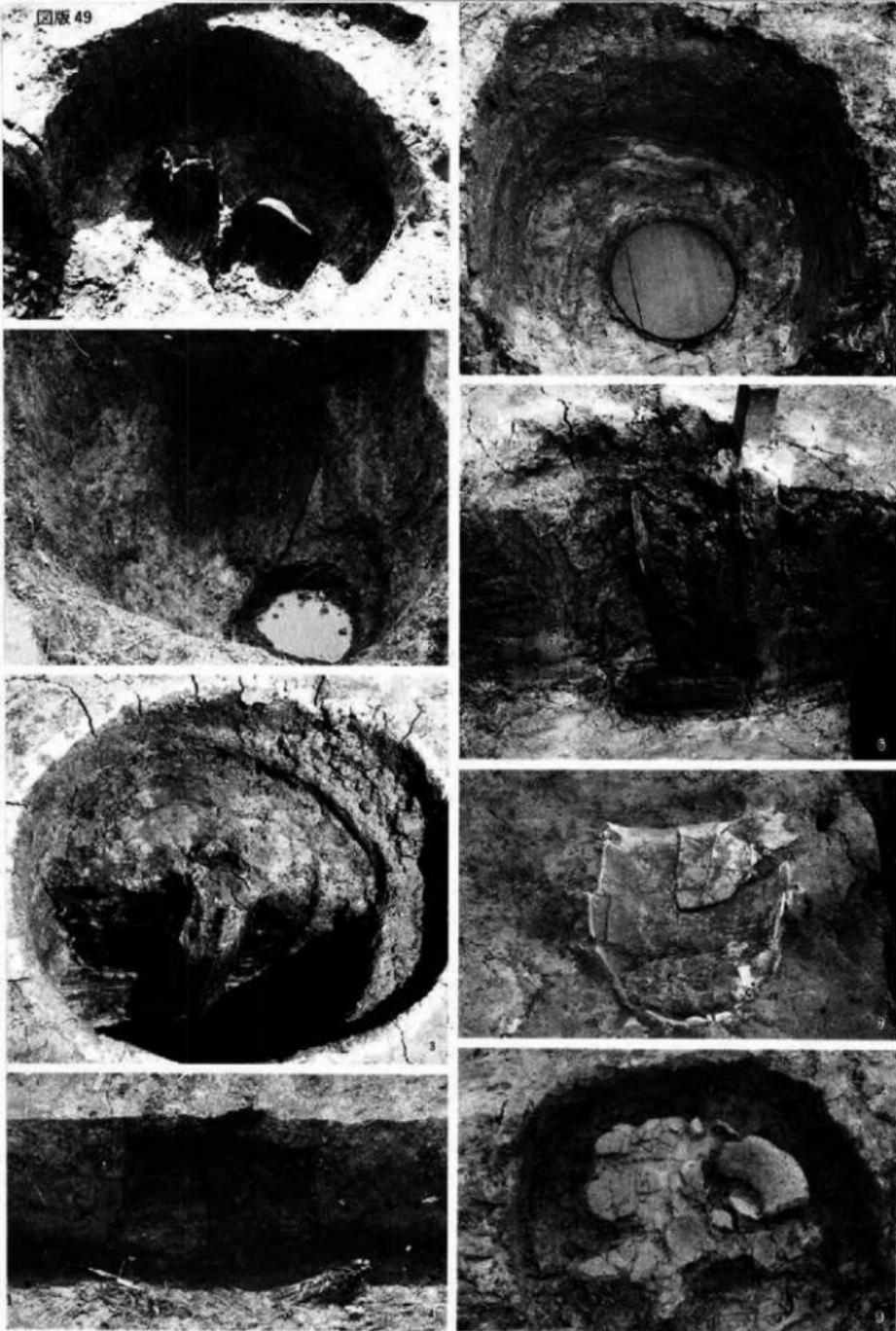


2. 圖上
〔圖六七〕



1. 圖上
〔圖六八〕





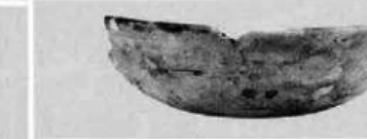
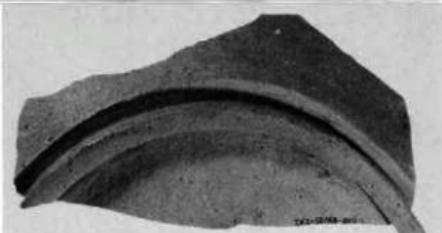
1. SB185(2)柱根・礎板 2. SB185(6)礎板 3. SB151(2)柱根 4. SB152(4)土層断面
5. 3区ピット104礎板 6. SB187(6)柱根・礎板 7. SX131(土器203)出土状況 8. 土器(205)出土状況



1. SB208
(南から)



2. SB208
(西から)



1~14

SE183

22~30

SE153

(1:2)



32



33



34



35



36



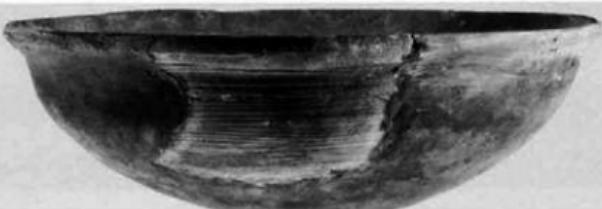
37



38



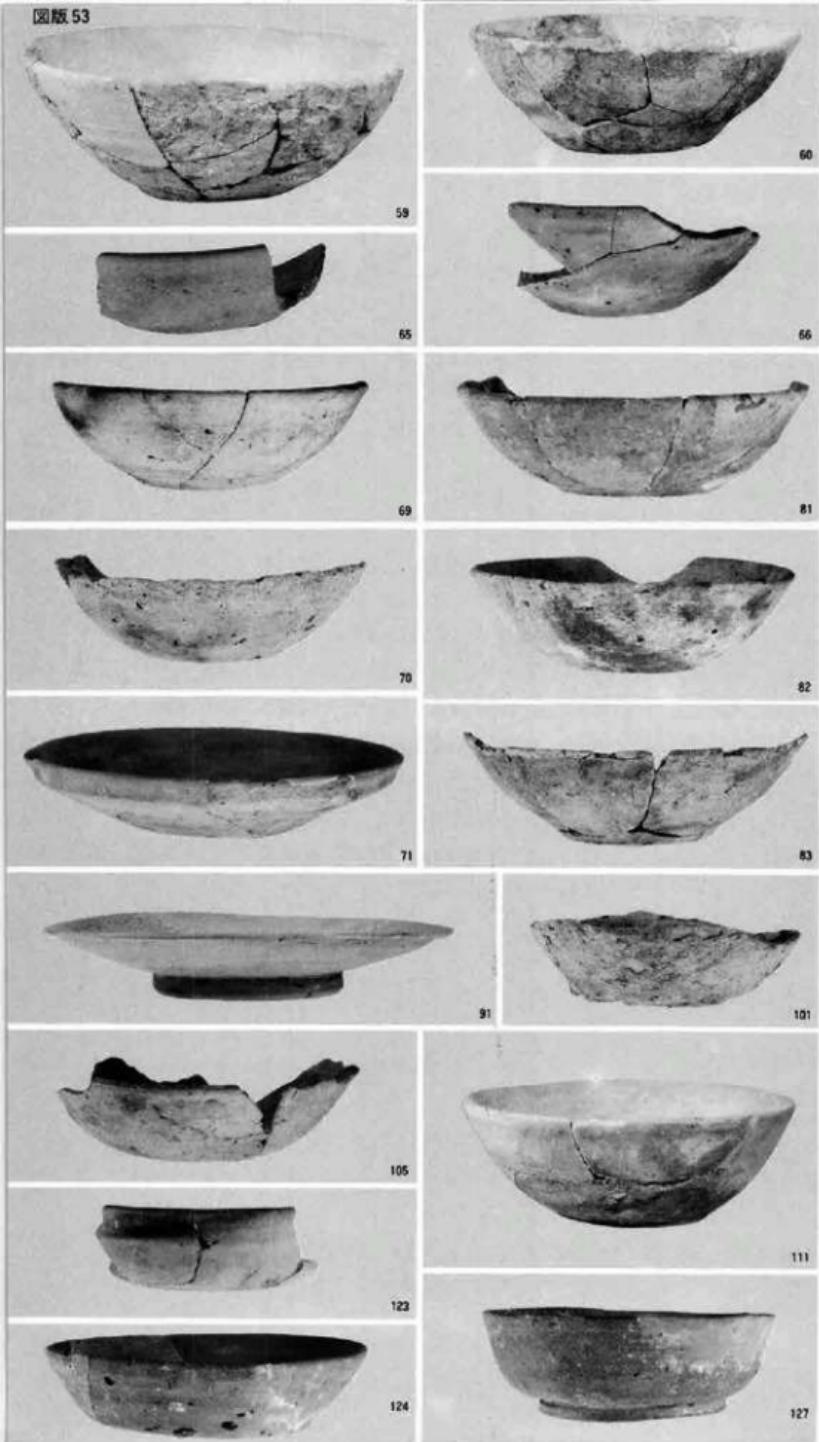
39



40

32-38
SE15350-58
SE107

(1:2)

59-66
SK19169-71
SK14581-101
SD188105
SK179111
SK194

(1:2)

127



118



119



120



121



117



128



133



129



136

117~120
SX184

117 3:8
118~120·203 1:4
128~136 1:2



141



151



146



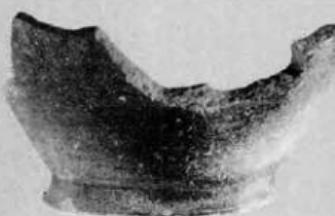
146



153



163



154



164



200



185



205

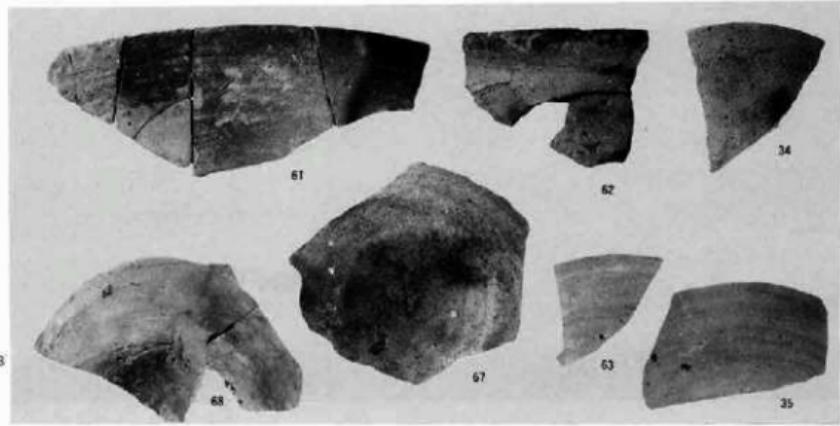
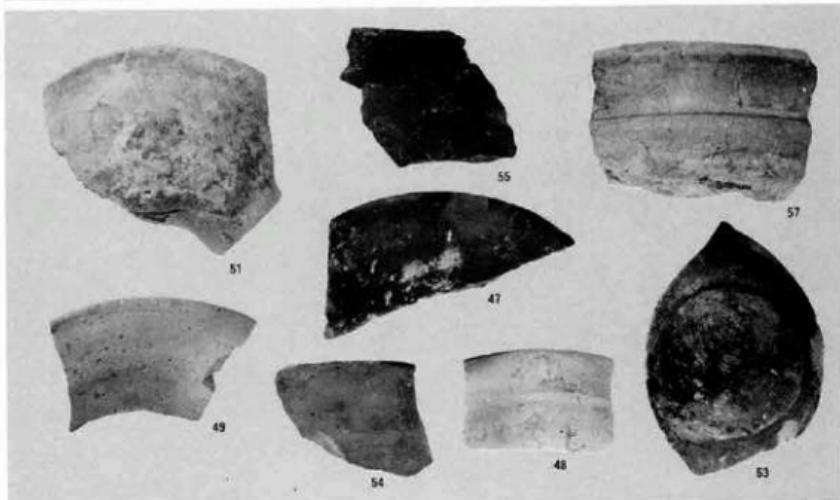
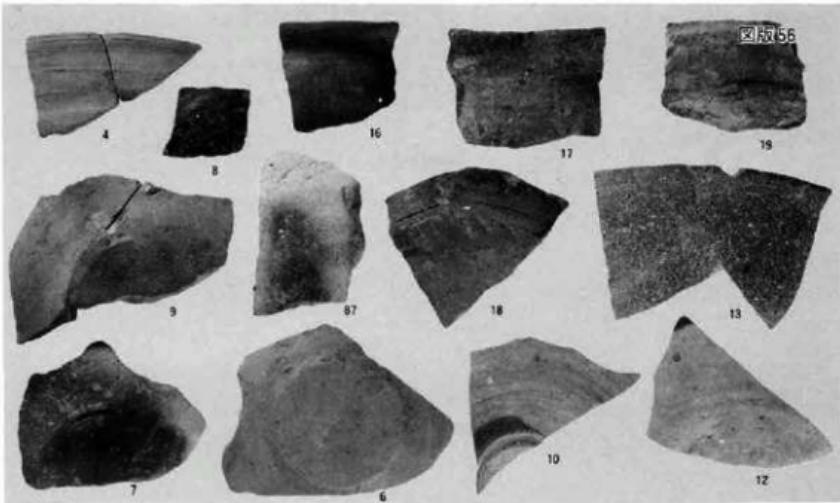


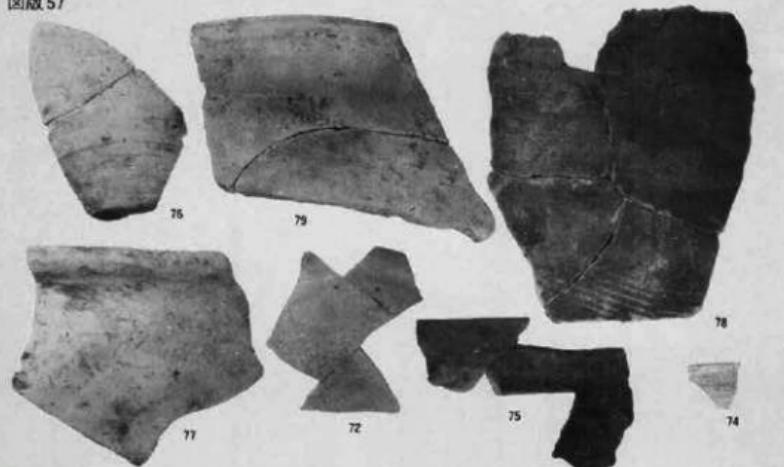
207



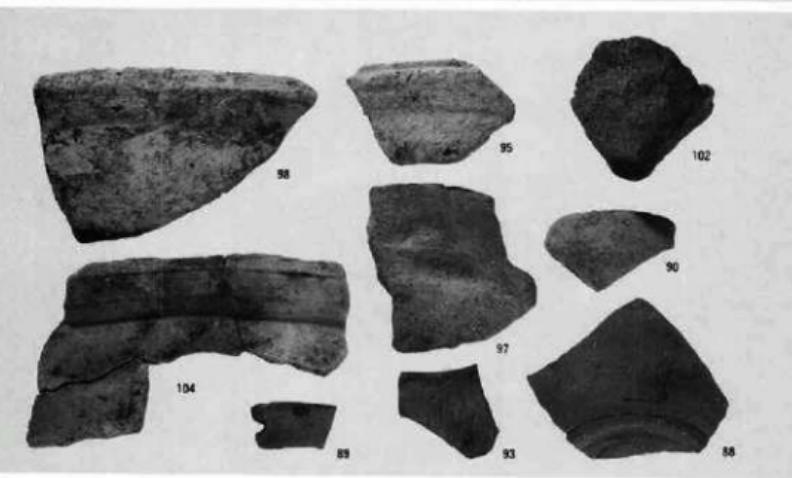
208

146 2:3
200-205 1:3
ほか 1:2

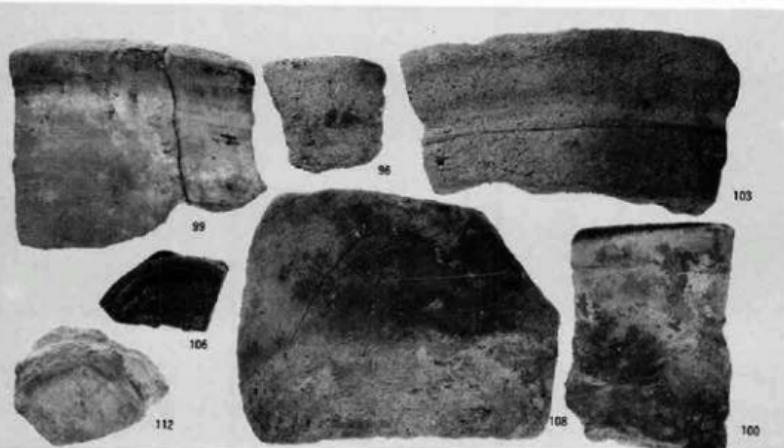




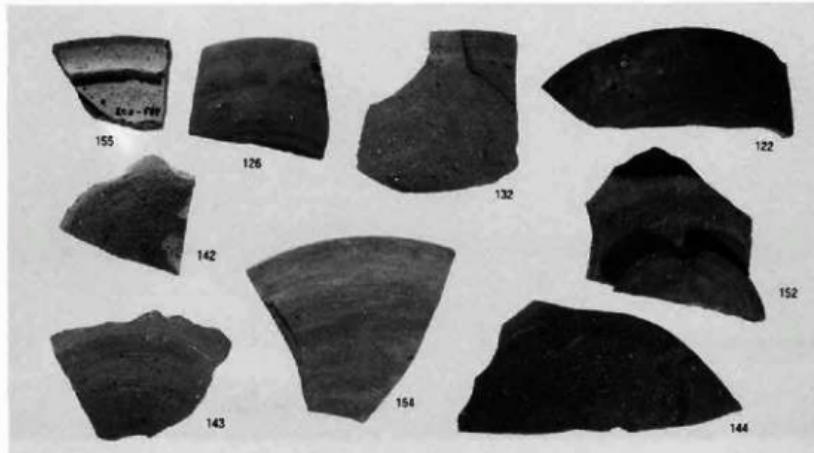
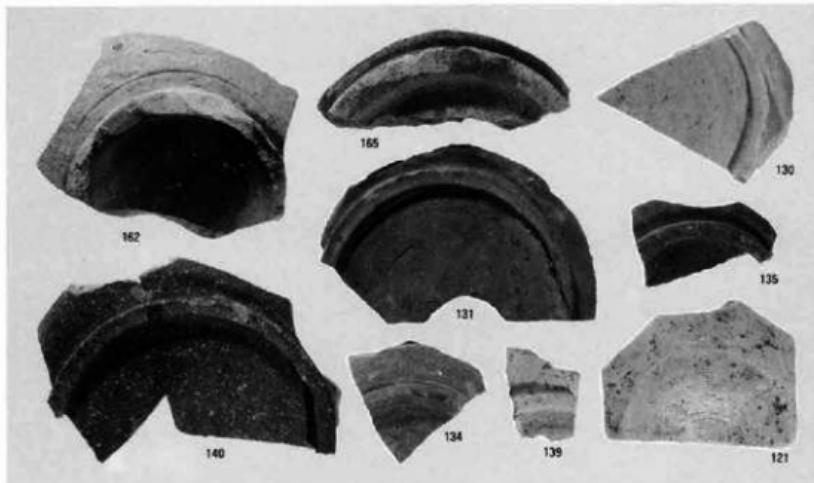
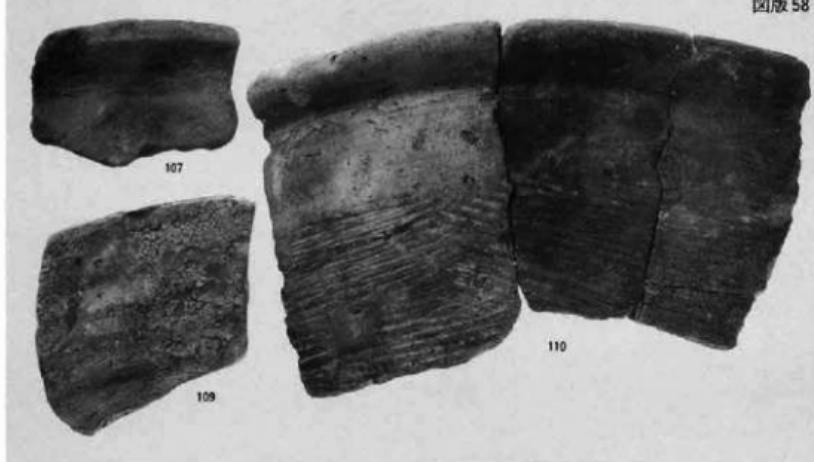
1. SK145

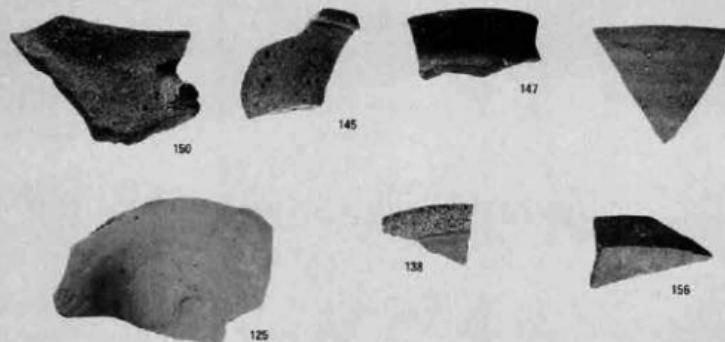


2. SD188

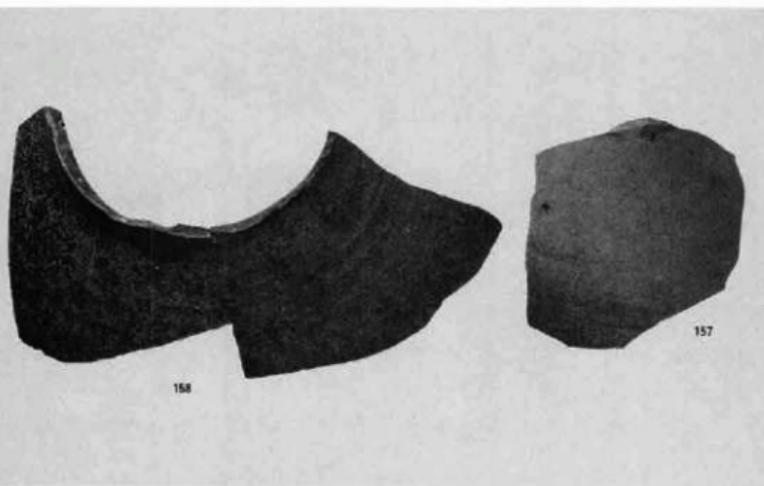


3. SD188
106-108 SK179
112 SK194 (1:2)

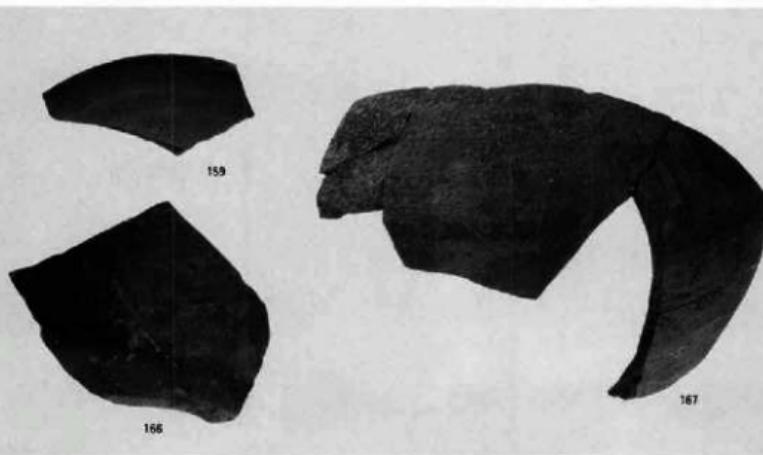




1. 漆器器

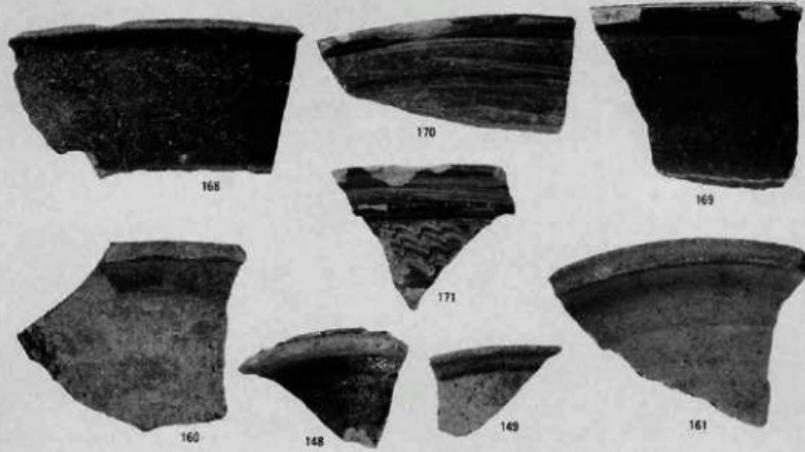


2. 漆器器

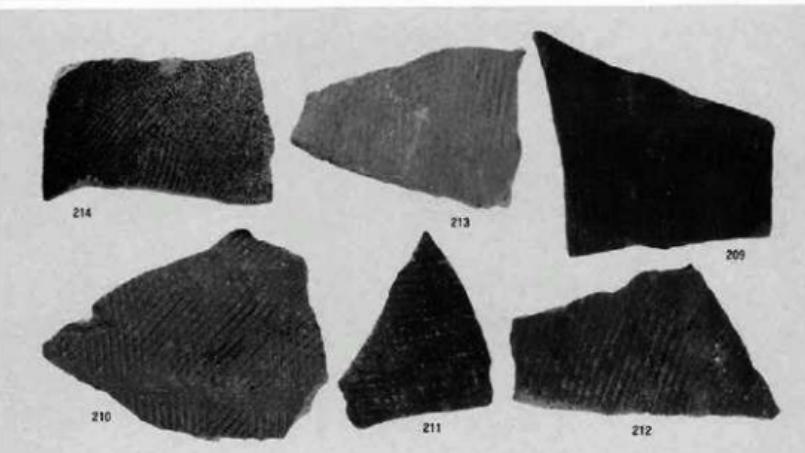
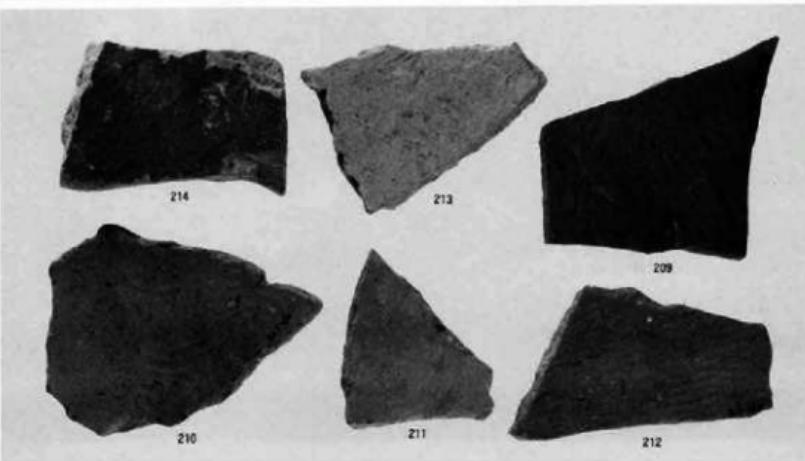


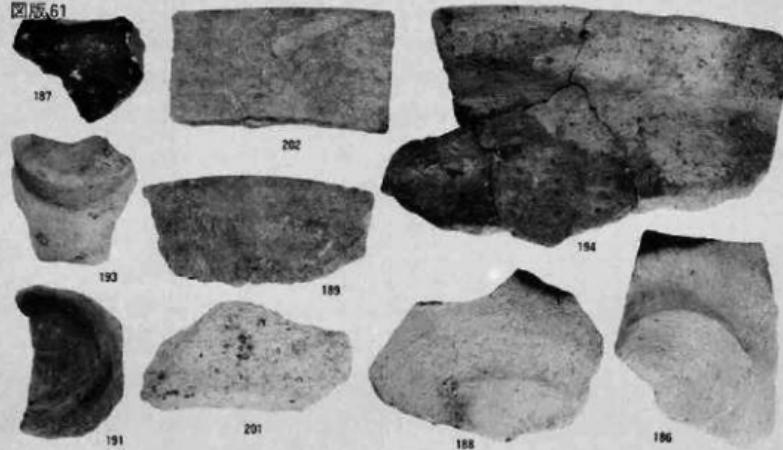
3. 漆器器

(1:2)

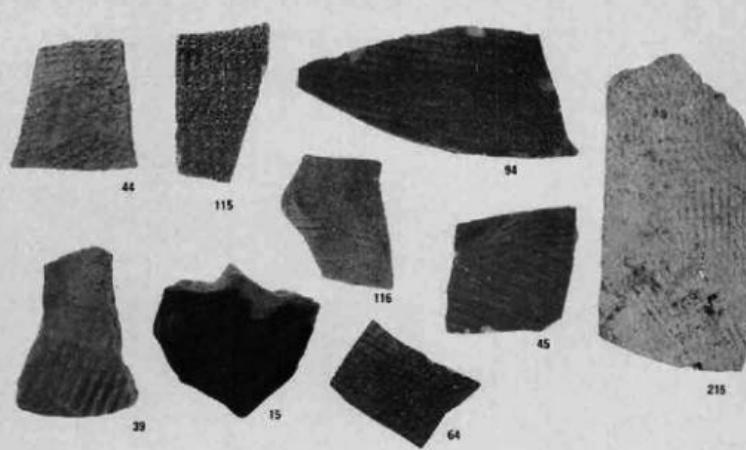


1. 頂底器

2. 頂底器
外面3. 向上
內面

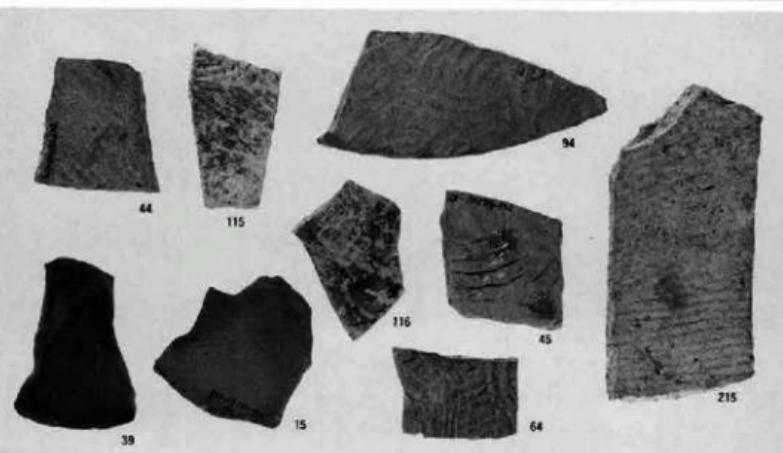


1. 土器



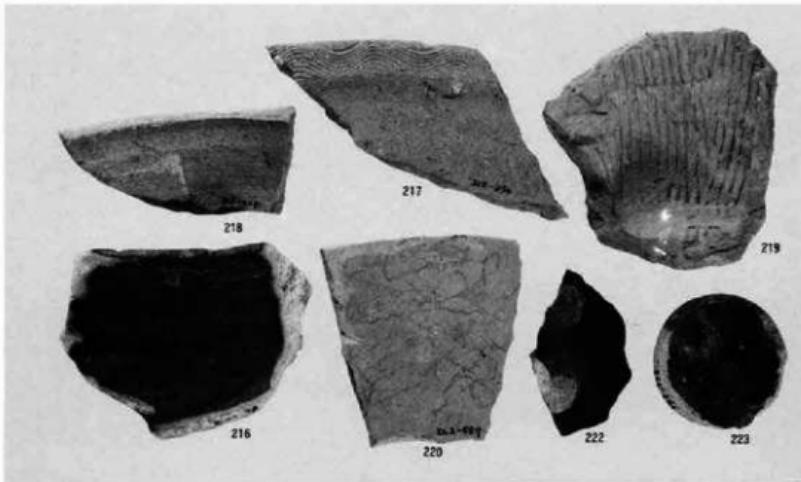
2. 外面叩き目

- 15 SE183
39 SE153
44-45 SK201
64 SK191
94 SD188
115-116 SK194

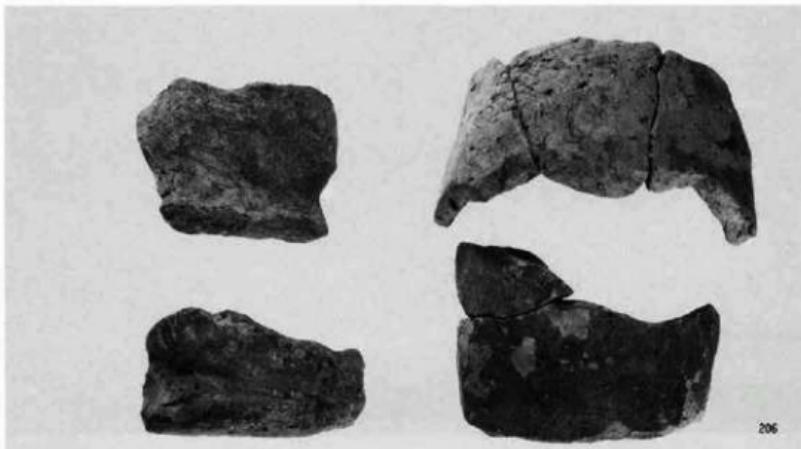
3. 内面叩き目
同上



1. 中後・近世
(外面)



2. 同上
(内面)

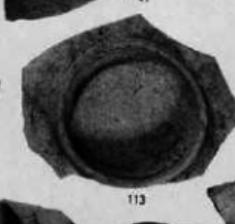


3. 土師器



206

1. 土師器



73



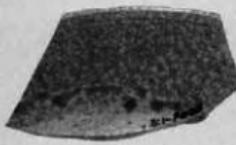
176



178

113

2. 土師陶器
41-42 SK201
73 SK145
113-114 SK194



178

73

175

176

177

178

113

3. 网上
(内面)

(1:2)



1. 残輪陶器
14 SE183
92 SD188
ほか



2. 同上
(内面)

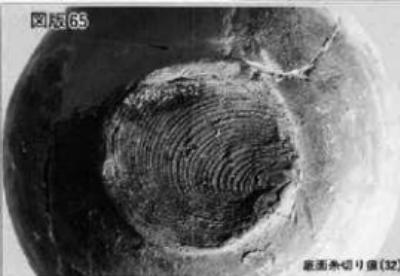


3. 鋳製品
SE116

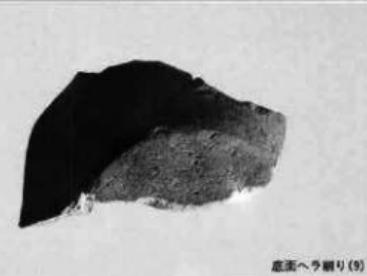


4. 石製品
羽口

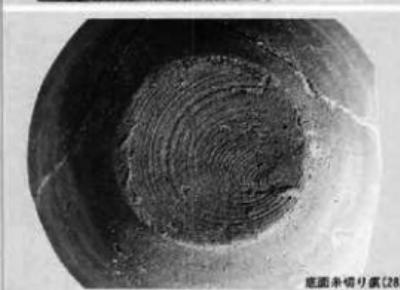
(1:2)



底面外切り痕(32)



底面ヘラ削り(3)



底面外切り痕(28)



底面ヘラ削り(52)



底面外切り痕(2)



底面内面ヘラ削り(4)



底面剥離面外切り痕(60)



スス状付着物(2)



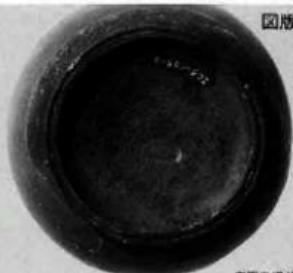
底面ロクロ削(67)



スス状付着物(22)



底面ヘラ切り痕(I23)



底面糸切り痕(I28)



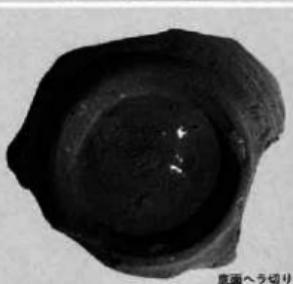
底面ヘラ切り痕(II)



底面ヘラ切り痕(I27)



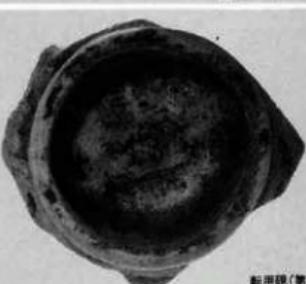
底面ヘラ切り痕(I24)



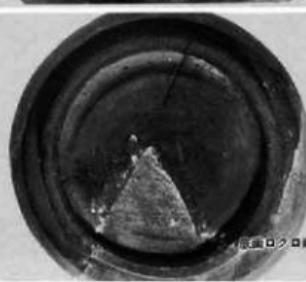
底面ヘラ切り痕(I33)



底面ヘラ跡(I41)



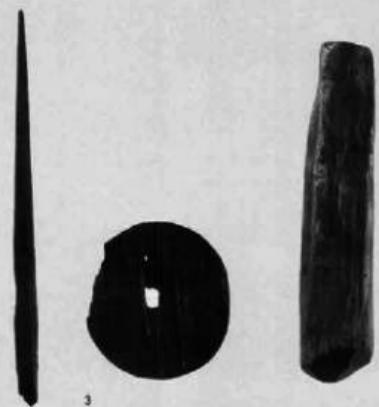
転用鏡(第15回)



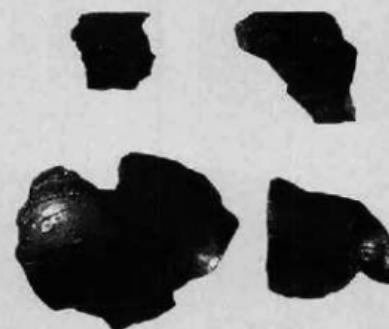
底面クロ糊り(I29)



黒土器(第15回)



1. 木製品
1-2 SE153
3-4 SE116
(1:2)



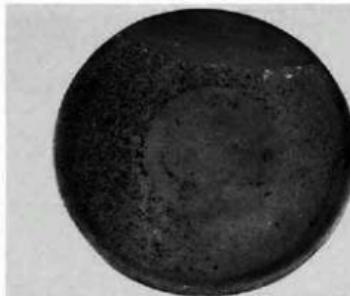
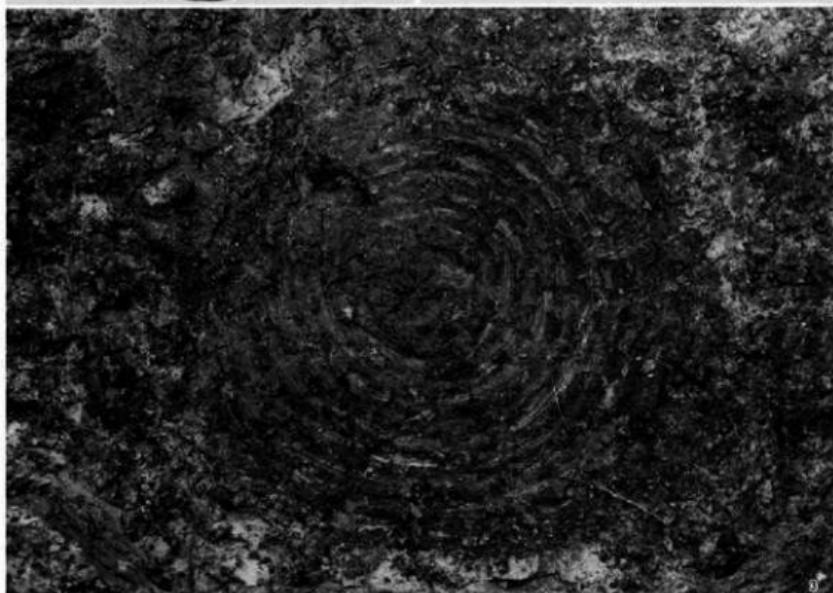
2. 木製品
5 SE117
7 SE107
(1:2)



3. 木製品
6 3区ピットI04
8 SE195
(1:3)

1. 灰釉陶器(9)

2. 土製品

3. 繩樣製品
(SE183)

4. SB151(2)柱模

5. SB185(15)柱模

6. SB185(1)柱模·模板

7. SB185(12)柱模



4



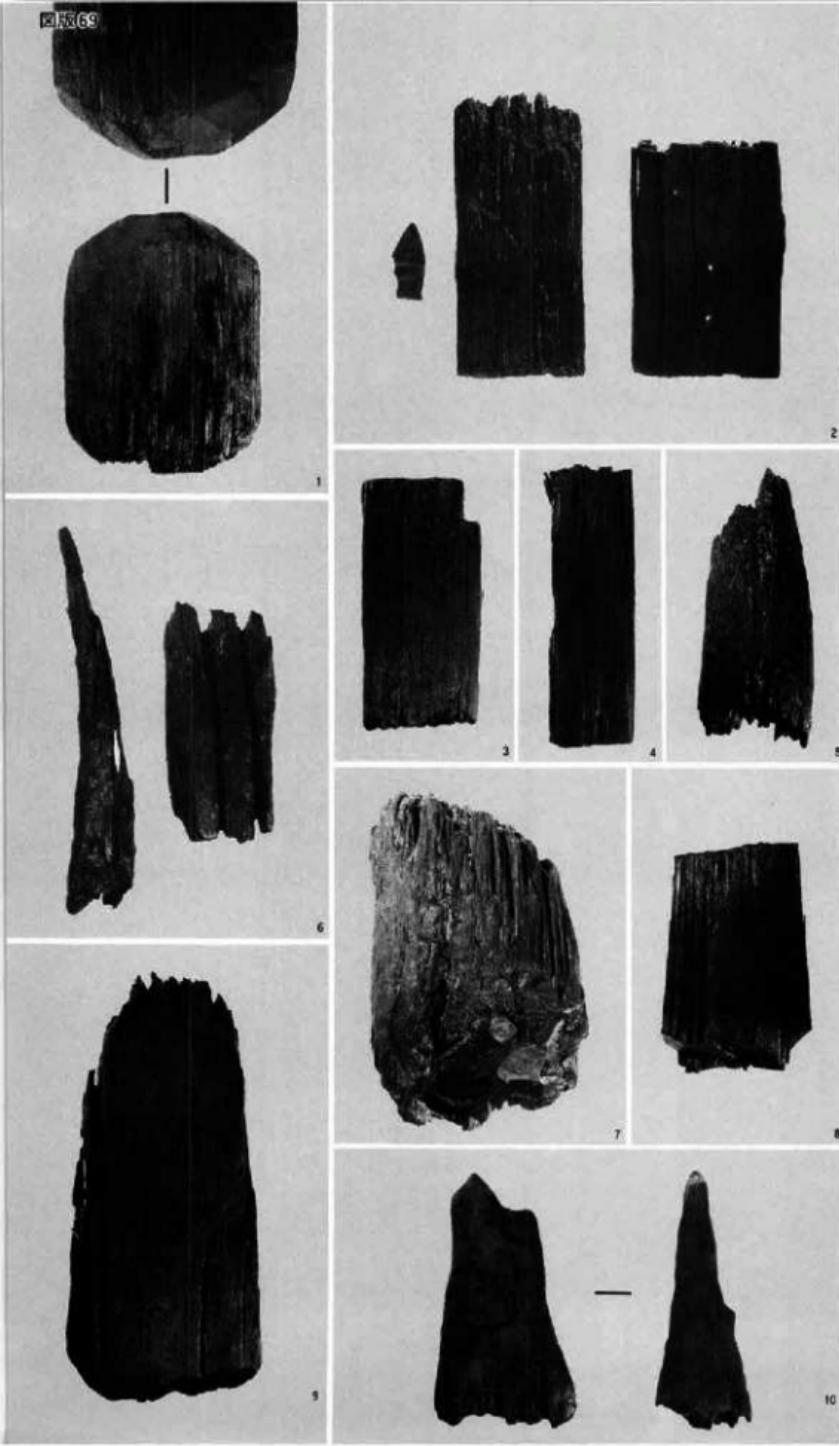
5



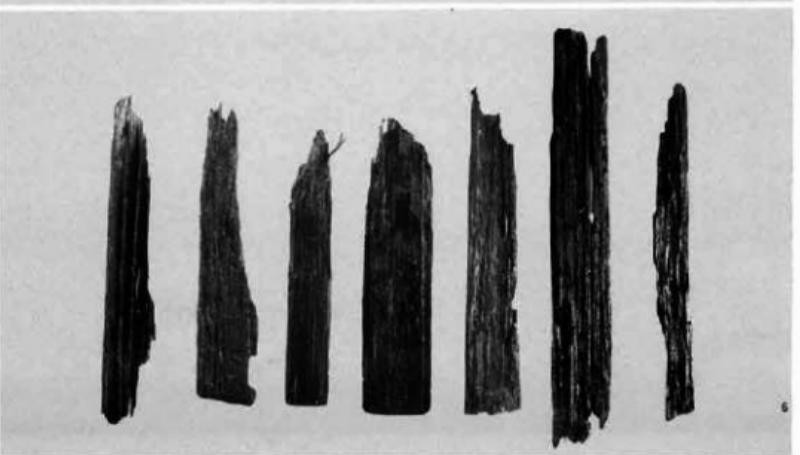
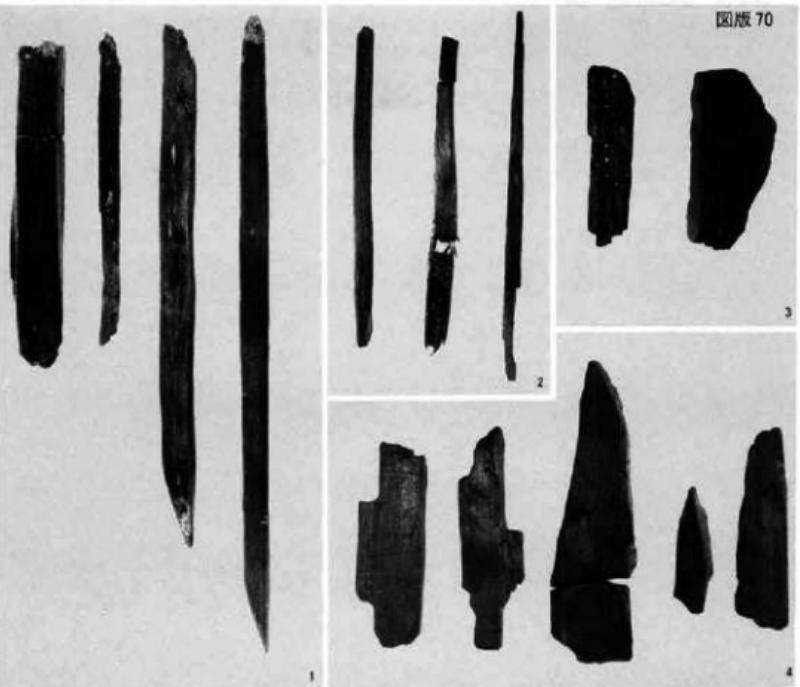
6



7



1. SB185(12) 硬板
 2. 同(3) 硬板
 3. 同(9) 硬板
 4. 同(10) 硬板
 5. 同(13) 柱模
 6. SB187(6) 柱模-硬板
 7. 同(2) 柱模
 8. 同(7) 硬板
 9. SB185(16) 硬板
 10. 2区ピット41柱模



1-4
SD104
杭籠材

5-6
SE183
井戸枠籠材

2-4-6
(1:8)
1-5
(1:10)

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第40集

北陸自動車道

上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅱ

一之口遺跡西地区

昭和61年1月25日 印刷
昭和61年1月30日 発行

発行 新潟県教育委員会
印刷 北越印刷株式会社
長岡市福生1丁目6-27
電話 (0258) 33-0306